二百號

第廿年第十一號
十一月一日發行

中央公論

THE CENTRAL REVIEW

明治三十一年一月二十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)

新刊豫告

明治闇黒史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、强者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗闘せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黒史

十二月發賣

紙數約四百頁

上巻 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を舉げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、雲井龍雄の叛あり、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、大村益次郎の襲撃を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中巻 には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件あり、熊本の神風連、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝増上寺の燒拂あり、岩倉具視の要撃あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下巻 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黒に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、築波暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

昨今東京燒拂の暴動に驚ける世人は、本書に就て、動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き變調に對して靜かに警戒と教訓とを與へつゝあり

發行所　東京本郷區西片町　反省社

文學士 上田敏先生著

海潮音

洋裝金文字入

定價金壹圓　郵稅金六錢

歐洲詩壇最近の思想と聲調とを紹介し、之を新體の國詩に移植したるもの、かの莊麗にして婉美なる詞華に、奇想幽思を歌ひいでたる象徵派詩人の作最も多し○彼邦の評界今なほ之に就いて詳細なる論議に乏しく、吾邦藝苑素より未だ之を傳唱すること無し○清新の聲に樂まむとする人よ、來りてこの集に聽け。

文學士 小原無絃君譯

西吟譯新

定價金三拾錢　郵稅金四錢

本書は西歐詩星の名吟玉詠二十有五篇を新詩型に譯せしもの。譯筆流麗にして婉美、恰も金鶯花枝を下りて清泉に嗽くの思あらしむ。才子佳人、乞ふ來つて接吻せよ

文學士 久保天隨君著

評釋 日本絕句選

蒲原有明君著　靑木繁君畫

定價金三拾錢　郵稅金四錢

春鳥集

定價金七拾錢　郵稅金六錢

上田敏君序○內海月杖君序○馬場孤蝶君跋
薄田泣菫君跋○○藤島武二君畫
與謝野鐵幹君○○與謝野晶子君　合著

毒草

上製定價金七拾錢　並製同　五十錢　郵稅各六錢

山川とみ子君○增田まさ子君○與謝野晶子君合著

戀ごろも

定價金四十錢　郵稅金四錢

大學教授 文學博士 芳賀矢一君校訂
大學助教授 文學士 藤岡作太郎君序文
文學士 佐藤芝峰若著

英獨對譯 小倉百首評釋

定價金四十錢　郵稅金四錢

文學士 尾上柴舟君著　柴崎恒信君畫

金帆

定價金四十錢　郵稅金四錢

文學士 蜷川石水　工學士 渡邊淸江　合著

滑稽笑話

三版 定價金廿五錢　郵稅四錢

文學士 越 背山著

時代笑謂 滑稽文學

定價金廿五錢　郵稅四錢

文學士 小原無絃著

ユーゴーの詩

十一月十日發行

文學士 佐藤芝峰著

美文韻文 筆のあと 附作文大要

近刻

文學士 尾上柴舟著

森の歌

近刻

文學士 小原無絃著

花の詩

近刻

發行所 東京市本鄕區東片町二十六 本鄕書院

賣捌 東京堂●上田屋●前川●東海堂●北隆館●至誠堂 大坂 古岡●杉本書店●久留米菊竹●名古屋川瀨●星野文星堂

●洋服界の一進歩と米田屋卸賣店

米田屋支店は洋服界諸種の便宜と一新面目を需用者各位に報告するの光榮を有す曩に店主世の風潮に鑑み洋服裁縫業研究の爲め歐米各國を漫遊し晩近盛に彼國にて行はるゝ高等出來合洋服の法に倣ひ品質柄行の撰擇は勿論流行は時々の通信に基き最も發達せる分業法によりて注意周到遺憾なく調製仕り從來の詭品に比して毫も遜色なきのみならず大に好評を博し一度弊店に於て御購求の御方は其裁縫の精密なると身體に能く適合するとにより續々御紹介を賜はるに至りしは實に弊店の面目とする處に候爾來益々工場を擴張し如何なる御注文にも應ずべき樣準備仕候に付何卒御用向仰付被下度尚ほ新着の珍柄多數取揃へ置候へば御好に隨ひ出來合直段に準じ廉價に新調可仕候

冬の部

定價表

フロツクコート	三ツ揃	廿二圓方	卅八圓迄
モーニングコート	三ツ揃	十七圓方	廿五圓迄
背廣	三ツ揃	十一圓方	廿三圓迄
オバコート	一枚	十圓方	二十圓迄

インバネス	一枚	九圓方	二十圓迄
ロングコート	一枚	十五圓方	廿五圓迄
トンビ	一枚	十三圓方	廿八圓迄
吾妻コート	一枚	十一圓方	十六圓迄

但し高等出來合洋服は正札付現金にて一切懸引なし

●地方より御注文の御方は洋服の種類及び大凡の價格等御通知被下候得は完全なる寸法雛形並に地質見本送呈可仕候(但し郵券十錢封入の事)

東京神田小川町通雉子町廿二番地(電話本局一七九一)

嶄新 洋服廉價裁縫店

米田屋支店

THE EAST AND WEST

ゼイースト エンド ウエスト

英米の新聞雜誌に接するの機會乏しき人に其精を選び粹を拔きて供給するは本誌なり、全紙英文より成る、別に附錄として詳密なる註釋を添ふ、最近の英文を知り、時勢の進步に伴はんと欲する人の必ず讀まざるべからざる新雜誌なり

九月十日發行**第壹號三版**　十月十日發行**第貳號再版**

第二號より寄書欄を新設し、各種の投書を掲載す、又附錄を倍加し註釋を更に詳密にしたり、これにつき一愛讀者は左の書を記者に送れり

> 記者足下、先に余は East and West 第一號を得て晩學余の如き者も記者の盡力にて稍高等なる時文を味ひ得るを喜びたり、然るに余を少し失望せしめたるは註釋のやゝ不足なる爲めに時間を要すること多きにありき、今や第二號を見るに註釋綿密殆ど字書を要せずして通讀するを得たり余の歡喜如何ばかりぞや、思ふに余と同感なるもの(殊に中學程度の學生に於て)天下に多からん、記者の勞を謝すると共に前途の大發展を祈る
>
> 淺草　望光處士

CONTENTS of No. II.

每月一回十日發行、定價一册六錢、郵税五厘、半年分六册(前金)郵税共三十六錢、一年分十二册(前金)郵税共七十錢

發賣所　東京市神田區表神保町十番地『英學生』發行所　**東西社**

法學生 語學參考叢書第壹編

早稻田實業學校講師　二木千年氏譯註

英和對照 契約法總論 Of Contract in General

一册　定價十錢　郵税二錢

『英語青年』本書を評して曰く二木千年氏が法律用英語を普及せんとの目的にて出したる法學生語學參考叢書の第一編にして原書は Thomas L. Smith 氏の作なり二木氏は英學者としても令名高く法律の研究も淺からず其の譯註正確、世の滔々たる營利的際物師の手になる杜撰なる書と類を異にす判檢事辨護士登用試驗に應ぜんとする法學生は一讀せざるべからず

THE ENGLISH STUDENT'S ESSAY CLUB

英學生作文俱樂部

天下の秀才が『英學生』に寄せたる**英作文**數百編中より**六十二篇**を選拔し、萬朝報英文記者**山縣五十雄氏の削正**を經て上梓したるはこの書なり、美文あり、論說あり、記事あり、才思橫溢筆路縱橫、以て英作文の模範とすべし

○○美本(一册)定價十五錢 一郵税二錢

第拾年 第拾壹卷

新小說

拾壹月壹日發行

▲實價貳拾五錢 郵稅貳錢▼

東京本鄉座新狂言

己が罪

菊池幽芳著

前編……富岡永洗畫
中編……坂田耕雪畫
後編……武内桂舟畫

一個可憐の少女が運命の掀飜する所となりて所謂己が罪に懊惱せるの態を描く高遠健全の思想に充ち深刻精緻の描寫には富むものこれを本編の特色とすあはれ此少女が點ぜる眼睛の火は其觸るゝ何ものをも燒盡せずんば止まざらんとす血あり涙あり讀者が腦裏の琴線に觸れて善く鏗鏘の音するものは必ず本編ならん

十三版 前編 實價四拾錢 郵稅六錢
十版 中編 實價四拾五錢 郵稅六錢
七版 後編 實價四拾錢 郵稅六錢

發兌元 東京日本橋通四丁目角 春陽堂

時代思潮

毎月一回五日發行　本號目次

◎口繪

○サタンの調伏　ラファエル筆
○ダンテ神曲　ドーレー筆
○吁三笠艦

◎紀念號

○戰後の重要問題　社論
○戰後の憲政　尾崎行雄
○戰後の國民　浮田和民
○戰後の教育　谷本富
○戰後の宗教　黑田眞洞
○講和條約と政局　横井時雄
○藝術の救世力　牧野啓吾

◎想苑

○佛弟子發心錄　姉崎正治
○騎士　雄島濱太郎
○自然兒　吉野臥城
○はなれ里　北里龍堂

◎雜纂

○文學者ゴルキー論　昇曙夢
○健剛詩人イブゼン　九皐生
○諸里訪問錄　紅塵生

◎時評

○文明の危機　志乃武
○淺薄なる時代觀　同
○戰後經營と現內閣　石井總南
○首都騷擾論　西川不去來

◎青年欄

○青年講話（美貌と才子と富貴の兒）　三宅雄次郎
○青年の寄稿數十篇

◎彙報

○海外思潮……講和條約に對する列國の批評を紹介す
○海內思潮……九月の各誌に出でたる名家の意見を紹介す
○新刊紹介……新著の批評及紹介、丁寧周密

◎毎月史

○時事大勢―列國時事―月次文壇―日誌

大日本女學會

●本會に十年來女學の通信教授に任じ本會の教を受けし者既に參萬貳千人に及べり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話に請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束脩四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田仲親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌をんな

●簡易科（學期一箇年）　月謝貳拾錢束脩貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚詞藻○質問應答○雜錄○雜報

初卷發行　簡易科十一月五日　高等科同月廿五日

東京市麹町區下二番町三七

大日本女學會

電話番町一三三〇



第二十年
第十一號
二百號

平和克復を祝す

（第一）

日露講和條約は、八月廿九日ボーツマスに於て大體議を決し、九月五日を以て兩國全權調印し、十月十四日兩國君主の批准を終り、十五日互ひに此の事を電知して即日より條約を有効ならしめたり、換言すれば平和は十月十五日より成立したる也、去年二月兩國々交の斷絶せしより茲に至て二十ヶ月とす。

右和約の全文は十月十六日を以て東京と聖彼得堡に於て公表せられたるが、我が 天皇陛下は、其の日詔勅を降し玉へり、吾人は之を捧讀して多大の感慨無きを得ず、世の新聞紙の多數は此の講和條約に反對す、甚だしきは則ち之を日本の大屈辱と做し、海陸軍の戰死者を目して犬死したりと爲すものあり、而して滔々たる俗衆之に附和し、爲めに人心を憂欝沈衰せしむると甚だし、吾人は素より此の講和條約を以て完全無缺として政府者に謳歌（寧ろ媚附）するものに非ずと雖ども、また世の滔々たる俗論と見解を異にす。

（第二）

講和の是非を決せんとせば、先づ我が戰爭を繼續するの利害如何を明白ならしめざる可らず、此の標準に照して、吾人は斷じて繼戰を非とす。抑も千八百七十年の獨佛戰爭は、七月に起りて翌年二月に終り、其の間僅かに八ヶ月のみ、而かもビスマルクは速かに和を講ぜんと欲し、百方巴里政府を慫慂したるのみならず、既に捕虜となつて佛國議會より廢位と決せられたるナポレオン三世に對してまでも和約を圖らんと欲し、甚だしきは三世妃ユーゼンを動かさんと

して、或る種の權變をすら用ゐたりき、蓋し戰爭は人生の慘事也、殊に文明の進歩したる今日、決して永續せしむ可らず、況んや露國を敗るも、我が軍を以て彼の首都若くば國の要衝を抑へて其の死命を制すると幾んど不可能なるをや、思へ、我が東郷艦隊は能く彼の艦隊を全滅し得たるも、進んでバルチック海を封鎖して、彼の帝都を威嚇するに至らざりしとを

且つ我が滿洲軍の狀態を看るに、乃木軍の前面は數里にして全く無人の境となり、川村軍の前面は則ち嶮山重疊、僅かに一二條の徑路あるのみ、唯だ奉化方面僅かに軍馬を進め得るも、此の狹隘なる地點は到底大軍を動かすに適せず、故に我れ敵を擊破し、更らに進んで長春吉林を取り、又哈爾賓を攻略せんには、此等無人の境及び嶮山小徑よりも併進する一切の準備を整へざる可らず、遠く軍需品を輸送して大軍の給養を全くする準備を爲さゞる可らず、是れ不可能事ならざるも實に至難事也、而して露軍も亦進まんと欲して進む能はざる窮境に在り、奉天役以來兩軍久しく相持したる則ち之がためならずや、之を是れ想はずして却つて滿洲軍に進攻を促がすの決議を爲したるものあり、机上空論の徒の事を解せざる亦甚だしい哉。

且つ吾人の聞く處によれば、我が軍進んで哈爾賓を取り、浦鹽斯德を包圍するまでには、少くも更らに一ヶ年の日子と三十八個師團の大兵を要するといふ、而して我が軍の既に戰線に就けるもの三十個師團乃至三十二個師團なりといへば、外に六個師團の編制を爲さゞる可らず、我が五千萬の人々を有するよりいへば、三十八個師團を作る必らずしも難事に非ざるべし、然れども之に要する適材の將校十分なりや否や、吾人軍事上の智識に乏しと雖も聊か掛念なき能はず、若し舊式敎育を受けたる老士官だも召集せば、其の數に於ては素より餘りあらん、吾人は唯だ士官として十分に軍隊の威力を發揮し得るや否やを掛念するのみ。

更らに注意すべきは、三十八個師團を以て今一ヶ年間戰ふ費用の少からざる事也、其の兵數の多きと、兵站線の長く且つ困難なるとより推すに、其の費額蓋し

十五億を下ることは非ざるべし、今日以後十五億の軍費を負擔する我が國民の力に於て斷じて不可能には非ずと雖も又實に至難事也。

若し我れ哈爾賓を取り、浦鹽斯德を包圍せば、露國果して降を乞ふべき乎、和を求めて我が支出したる軍費の總額を賠償すべき乎、彼れ若し之を賠償せば、繼戰必らずしも不可なりとす可らず、然れども是れ未必條件也、未知數也、之を恃みて戰ひを續けたる後、彼れ竟に賠償せざるが如きことあらば、其の結果如何ぞや、我れ假令百戰百勝の名譽を得、西比利亞の土地を占領するも、財力足らずして十分に新領土を經營し得ざることなきや否や、若し國家を提げて一大賭博を爲さば知らず、苟くも國事を擔當する責任者に在ては斷じて輕擧す可らざる也。

更らに吾人の聞知する處によれば、獨逸皇帝は露國皇帝に勸むるに、日本の講和條件として要求せる割地償金に應ぜんよりは、寧ろ露帝自ら出馬して戰爭を繼續すべきことを以てしたりといふ、獨逸新聞が永く繼戰するを以て、日本をして漸次に財政上より疲弊せしむる所以なることを論じたる、畢竟此の獨帝勸告の一反應なりと認むるを得べし、且つ露廷の主戰派は日本に支辯すべき償金あらば、之を以て繼戰の費用に充つるに如かずといひ、久戰に由て必らず日本を屈し得ると做し而して露帝も竟に獨帝の勸告と身邊の主戰論とに動かされたるが如く、米國大統領より再三讓歩の忠言に接したるも、頑然之を聽かざりしといへり。

果して然らば。日本讓歩せざる以上、必らず繼戰するの外あらず、繼戰若し不利なりとせば、假令多少の讓歩を爲すも必らず講和を成立せしめざる可らず。

（第三）

更らに外交方面、即ち列國關係より之を觀察するに、ポーツマスの談判若し破裂せば、米國大統領は人道平和のために仲介者たりし面目を完ふするため、更らに和約の成立に熱心斡旋する所あるべく、列國會議を開くが如き實に其の一手段ならん。

假りに列國會議の提唱ありとせよ、第一に之に贊成

するは佛國なるべし、否、獨逸皇帝の如きは米國大統領と押並びて其の發議者たるべし、而して墺伊諸國また之に異議あらざる多辯を要せず。

　茲に至らば、英國も其の歐洲政策上、假令同盟國たる日本に悅ばれざるも、忍びて列國會議に贊同せざるを得ざるべし、最も多くの場合に英國政府の意見を代表すと稱せらるゝ倫敦タイムスが、去年既に日本軍の哈爾賓を取るの不利益なるを論じたるに徵するも、英國が現狀態に於て日本をして戰局を閉鎖せしむるの希望を懷けるとは蔽ふ可らず。

　蓋し列國會議を開くも、日露兩國共に聽かずんば到底成立せざるべし、然れども露國は悅びて此の會議を迎ふべく、隨つて列國會議の開催は勢ひ避く可らざる也、抑も露國が列國會議を歡迎するは、第一英米兩國假令日本に好感情を有するも、永く日本の味方たらずと信ずれば也、少くも英國殊に米國が冷靜なる中立態度を持すべしと信ずれば也、第二佛國が自國(露國)の味方たるは勿論、獨逸皇帝が露帝に勸めて獨逸國境の警戒を解き、其の國境軍を轉じて東亞に赴援せしめたる事、並びにバルチックに於ける兩帝會合に表したる好意とに徵して、獨逸も亦必らず自國(露國)の利益を主張するものと信ずれば也、換言すれば、列國會議の結果は日本の不利にして自國(露國)の利益なりと信ずればなり。

　吾人は露國の信ずる處の假令悉く事實ならざるも其の多くの適中すべきを信ずるもの也、詳かに言へば、列國會議を開催するまでの間に、列國交渉は少からざる時日を費して、徒らに事局を遷延せしむるの不利を日本に與ふるのみならず、會議の結果の少くも今日の日露講和條約以上に出づるとなきを信ぜざる能はず、現に朝鮮の如きは、猶ほセルヴヰヤと齊しき地位に置かるゝも測る可らざる也。

　且つ日本が戰勝の極、啻だに朝鮮を其の保護下に置き、旅順口大連を領有し、南滿洲に利權を立つるに止まらず、更らに西伯利亞の一部を占有するが如きとあらば、其の膨脹の過度なる、多く列國の媢嫉を受くべ

く、滿洲西伯利亞の貿易に多くの望を寄する米國すらも、竟に惡感を撥生するなきを保せず、是れ亦外交上顧念すべき一事とす。

故に戰爭を繼續するの啻だに我が國力に於て不利なるのみならず、列國關係上また甚だ妙ならずとせば、寧ろ多少の讓步を爲すも、速かに戰局を收拾するの外なしと斷ぜざる可らず。

（第四）

假令繼戰不利なりとも、我れ開戰の目的をすら遂せず、多くの生靈を損したる戰果全く滅却せらるゝが如くんば、講和斷じて非也。

然れども看よ、日露開戰以前に、我が露國政府と協定せんとしたる主張は總て貫徹したるに非ずや、露國は韓國に於ける日本の指導保護、及び監理の特權を承認したり滿洲よりは啻だに撤兵を約し、其の土地を清國に還附するとを約したるに止まらず、滿洲に於ける一切の領土上の利益又は優先的若くば專屬的讓與を放棄したり、換言すれば滿洲に於ける露淸密約を無效ならしめ、多くの特權と利益の壟斷獨占とを放棄したり。

豈啻だ然るのみならんや、露國は其の租借せる旅順口大連等を日本に讓り、且つ長春以南の鐵道本支線及び之に附屬する一切の權利、特權、及び財產、及び同地方に於て該鐵道に屬し、又は其の利益のため經營せらるゝ一切の炭坑を日本に引渡したり、是れ露國が多年圖南の宿志を成就したるものとせる旅順の軍港、大連の不凍港を奪はれて、其の東洋に於ける最大なる策源地を顚覆せられし也、巨億の資を投じたる要塞、商港、鐵道、炭坑を失ひ、南滿洲に於ける大利益大特權を全然剝奪せられし也、露國に取ては實に千古拭ふ可らざる汚辱也、彼得大帝以來傳承の政策に一頓挫を來せる露國にして若し日本人の如く神經過敏ならば、大屈辱大汚辱を絕叫して、當さに其の帝都の秩序を蹂躙し、其の官衙敎會を燒棄し破却すべき也。

露國の屈辱する丈け、日本の勝利也、榮譽也、抑も露國が獨佛兩國を提げて日本に干涉し、强ひて遼東半島を淸國に還附せしめ、己れ勞せずして旅順口大連を

租借し、茲に堅牢無比の軍港と、雄麗壯大なる商港とを建造し、且つ蜿蜒たる鐵道を通じて其の沿道の土地を取得し、多くの利益を獨占したることは、吾人日本國民の切齒に堪えざりし處、今や海陸軍の智勇と精苦盡瘁とに由て之を回復し收得す、是れ我が精神的大成功也、大勝利也、大なる榮譽也、啻だに開戰の直接目的を達したるのみに非ず、實に十年來の我が宿志を成就したる也、吾人は深く海陸軍に感謝す、之を以て我が戰果を沒却したりといひ、海陸軍の戰死者を目して犬死したりと做すが如きは全く事實を詐はる也、忠烈なる海陸軍人を誣ゆる也。

斯の如くにして戰果を收め得たる講和條約は、吾人之を歡迎す、我が權力は韓國に確立せらるべし、我が利權は明白に南滿洲に扶殖せらるべし、而して我が國民發展の地歩茲に擴大せらる、更らに多くの壯丁を徵發し、更に十五億以上の巨資を捨て、更らに多くの生靈を慘殺して戰爭を繼續するよりは、斯の如くにして講和するの利益なる、茲に至て明々白々也。

若し其れ三十億乃至五十億の償金と、沿海洲全部を得るに非ざれば講和す可らずとし、之を得ずして講和したるを以て、千古の屈辱なりといふが如きは、詔勅に所謂勝に狃れて自ら裁抑するを知らざるもの、常度を逸すると遠し、而して滔々たる俗論多く之に雷同す、嘆ずべき哉。

然りと雖も講和條約は決して完全にして間然すべき所なきものに非ず、其の逐條審議を爲さば、指摘すべき欠點少からざるべし、我が全權の外交手段また議すべきもの甚だ多かるべし、殊に償金の要求を捨て、樺太の南部を獲たるに止めたるが如きは、吾人の不滿足と爲す所也、然れども繼戰既に不利なりとせば、此等の欠點忍耐するの外あらず、蓋し已むを得ざるのみ、吾人は斯く觀察し判斷して、更らに奮勵精苦、以て戰後の經營大發展に努むべきのみ、

單に講和條約に由て東洋の平和を確保するは素より輕卒也既に露國の東洋に於ける大野心大經營の一半を粉碎したる以上、我れは佛國に對する獨逸の地歩に立

たざる可らず、茲に於てか新たに日英同盟の擴張せらるゝあり、

新たなる日英同盟

日英同盟は八月十二日ポーツマスの談判開始中を以て新たに改訂せられ、九月二十七日公表せらる。

吾人は大體に於て之を賛す、否、既に約せられたる以上、之を善用して以て其の善果を收受するの外なきのみ。

此の同盟により日本と戰ふものは亦英國を敵とし日英兩國と戰はざる可らず。今の時に於て、世界何れの邦國も、單獨に一國のみの力を以て之と抗爭するものある可らず、少くも二大國若くば三强國の連合を以てせざれば之に當る能はざれば也。

世或は此の同盟に對抗するため、露獨佛の三國同盟を現出すべしといふものあり、獨墺伊の三國同盟既に効力を減じて、獨逸恰かも孤立に傾むかんとする時、少くも獨逸の方面に此の企畫あることは信じ得べし、然れども英國と接近し、且つマダカスカル及び安南、交趾支那等を領有する佛國は、利益上果して日英同盟の反對に立て獨露に與みすべき乎、抑もまた露國を勸めて日英と接近せしむべき乎は、實に疑問也、然り目下佛國は頻りに後者を計畫しつゝあるに似たり、吾人は未だ其の成否を判知する能はずと雖も、日英同盟の反應の甚だ大にして、歐洲國際間に大異狀あることを疑ふ能はず、思ふに日英は是より始めに世界强國の伍伴に入りて外交上有力なる地歩を占め得べき乎、吾人は之を思ふて頗ぶる愉快を感ず。

假令日英同盟に對抗すべき露獨同盟若くば露獨佛同盟成立すとも、互ひに開戰するが如きことは容易になかるべし、此の開戰は實に世界未曾有の大戰にして、其の慘禍の大なる幾んど測る可らざれば也。

何ぞ常に戰を曰はん、日英同盟の目的は平和に在り、少くも露國をして、印度方面又は東亞を侵略せざらしむるに在り、露國をして平和を攪亂せざらしめんとす

るに在り、吾人は信ず、平和の祝福の必らず日英同盟の上に在らんことを。

吾人をして更に日英同盟に對する一二の細評を試みしめよ。

第一、印度の防備は識慮あるキッチネル將軍今正に計畫しつゝあり、思ふに面目を一新すべき乎、然れども其の要衝の地に施すべき防禦工事、築壘及び軍隊集中地、其の兵站線等を撰定するに當ては、腹藏なく日本陸軍の參謀官と協議するを利ありとすべし、軍畧に深く、且つ露軍の伎倆を經驗したる日本參謀官の意見は、印度方面に於ける英國陸軍に取て決して無用の助言ならずと信ずれば也。

第二、印度方面(波斯をも含む)に於て露國と開戰する場合に、日本軍隊を此の方面に輸送することは頗ぶる難事ならざるを得ず、海上膠州灣、柴棍等を顧慮しつゝ拾萬以上の兵を遠く印度に輸送すること、何如ぞ容易ならんや、故に日本は主として西伯利亞方面より露軍を攻撃する軍略を執るを可とす、而して印度方面には、此の大兵輸送の不便を避くるため、日英協議して別種の便法を取るを要す。

第三、日本若し或る國と戰はんとせば、必らず腹藏なく英國と協議せざる可らず、此の場合に於て其の利害關係日本にのみ重き時英國は日本をして力めて開戰を避けしめんと欲し、日本を勸めて多く讓歩せざるを得ざらしむることなきや否や、吾人は之を以て專ら英國の信義に重きを措くの外なし、而して我が外交當局の手腕最も敏妙ならざる可らざる也。

之を要するに、日英同盟は、日本をして韓國に於ける保護權の確立を容易ならしむるもの也、露國既に講和條約を以て日本の韓國に於ける保護權を承認したりと雖も、單に之のみにて全しとは做す可らず、必らずや佛獨米伊の各國をして齊しく之を承認せしめざる可らず、此の場合に於て、我が背後に英國の如き同盟國あるは、事をして最も圓滑ならしむる所以也、故に吾人はまた此の點に就て日英同盟を歡迎す、彼の韓國問題を以て既成の事實なりといひ、露國をして我が保護

權を承認せしむるを以て無用の冗計と做すが如きは、殆んど國際の實地問題を視るの明なき瞶々者流のみ。

日英同盟は又日本をして露國の復仇を避くるに便ならしむ、日本は宜しく英國と熟議し、佛國と計りて以て露國との親交を敦くし、以て平和を永遠に確立するとを努むべし、是れ我が外交上の一任務ならん。

日英同盟に據り、露佛と握手せば、是れ世界の平和に大功あるもの也、吾人は能く學問、宗教、文藝、産業等に鋭意して、永く世界と共に其の慶に頼るの幸福を享受し得ん乎、一方には日露の講和條約假令不滿足なるともする、一方に日英同盟のあるあり、斯くして平和は克復せられたり吾人は實に之を祝す。

男女學生交際論

安部磯雄

男女學生の交際を出來得るだけ自由ならしむべしとは余の宿論である。世には男女學生の實際に伴ふ弊害を見て熱心之に反對せんとする人もあるが、單に一時の結果に依りて事物を判斷せんとするのは甚だ早計であると言はねばならぬ。若し男女の交際てふことが根本に於て好ましからぬことであるならば、極力之に反對するも何の不都合があらう。然れども若し男女の交際は自然の理に合し、早晩我國にも其習慣を輸入すべきものとすれば、一時の弊害は別段恐るゝに足らないのみならず、これを拒ぐの方法を講ずることも敢て難きことではない。要は男女學生の交際が果して其風教に利益を與ふるや否やを研究するにある。其自然の理に合ふや否やの如きは殆んど論ずるの必要もないと思ふ。

男女學生の交際に反對する人の言ふ所を聽くに、其重なる理由は彼等をして早熟の弊に陷らしむるといふのである。別言すれば男女の心をして修學に專一ならしむることが出來ない。即ち彼等が未だ其齡に達せざるに早くも彼等をして相思ふの念を抱かしむるといふのである。然れども余は此意見に對して全然反對せざる

を得ない。何となれば男女相思ふの念は必ずしも交際の有無に因るものでないからである。若し論者の言ふ所が眞實であらば、啻に男女の交際を杜絶するのみでなく、全く彼等をして離隔して互に相見るの機會さへも與へぬ樣にせねばならぬ。男女の交際さへなくば兩性相思ふの念を減じ得べしと考ふるのは實に皮相の見である。男女學生が互に交際するに當りては勿論相思の念を生ずることもあらう。然れども交際の途全く杜絶せらるゝ場合には、彼等は途上相見るだけにても相思の念を起すに至るかも知れぬ。交際によりて相思の念を起す場合には其情多く一の目的物に集注するに反し、一見直に相思の念を生ずる場合には其情甚だ淺薄にして且つ不定である。只相思の念を起すといふ點に於て余は二者の間に多くの差を認めないのである。

余は兩性相思の念が却つて交際の途不充分なる時に強くはないかと思ふ。若し日夕交際するの機會あらば男女は決して之を珍らしき事とは思はない。其結果一見直に相思ふが如き淺薄なる戀情に陷るとはないであらう。如何に壯大美麗なる天然の景色でも朝夕之に對すれば其新奇を感ずること少きが如く、男女相對すること屢なれば兩性相引くの力を漸次減ずるは人々の多く實驗する所である。不自然に兩性を隔離せんとすればこそ、彼等は如何なる機會をも利用して相接近せんと欲するなれ、これを自由に放任せば其害は決して人々の想像するが如きものではない。余は歐米諸國に於ける男女學生の自由交際より生ずる弊害が極めて僅少なるに反し、我國の如き保守的思想の跋扈せる所に於て却つて多くの醜聞あるを思ふ毎に、男女の交際が決して道德を腐敗せしむるものにあらざることを信ずるのである。

兩性の交際が如何に彼等に幸福を與ふるかは玆に喋々するの必要はない。若し交際の途開け女子の品性高尙なるに及べば、弊害の生ぜざるは勿論の事にて、如何なる男子も女子の前に出てゝは襟を正すといふ樣になるであらう。彼の淺薄なる戀情の如きは殆んど起る餘地がないのである。余は男女交際を以て人生の快事と

思ふのみならず、吾人は權利として請求すべきものと考へて居る。若し自由民權てふことが吾人々類として要求すべきものであらば、男女の交際も同樣ではないか。偶男女學生の醜聞あるに吃驚して彼等が交際するの不可を論ずるは恰も壯士の亂暴を憎んで自由主義を非難するのと何の異なる所があらう。余は保守論者の甚だ小膽なると其論理の不當なるとに失望せざるを得ない。

余は不幸なる結婚、紊亂せる家庭、墮落せる社會。趣味なき生涯を送りつゝある男女の學生を救ふには男女の交際を奬勵するより外なきを信ずる。余は英米諸國の學生が嬉々として愉快なる學校生活を送りつゝあるは主として兩性が自由に交際するの機會を有するに因るものと思ふて居る。若し男女交際の途宜しきを得るに至らば、我男女の青年は今少しく樂天的となり、快活となり、交際的となるであらう。無分別なる結婚もなく、家庭の苦痛もなく、交際場裡に醜業婦の助を借ることもなくなるであらう。兩性に關する諸問題の解決は全く此男女學生交際問題に懸つて居るといふても善い。

然し余は今日直に男女の交際を自由にせよと言ふのではない。是を實行するに於てはなるべく過渡時代の弊害を避くることをも勉めねばならぬ。余は實行方法の卑近なるもの一二を示し、終に根本的方法に及ぶであらう、最も卑近にして實行し易きは父母監督の下に青年男女をして交際せしむることである。家政の許す範圍に於て時々女子の友人を自宅に招き男女打混じて食事を爲さしめ若くは遊戲を爲さしむるのである。言ふまでもなく始めは父母監督の下にあらざれば自由の交際を許さぬことゝし、漸次にこれを理想に達せしむるのである。今一の方法は甲乙二人の教育家が自宅に數名の學生を預ることゝし、甲教師は全く男學生を乙教師は全く女學生を世話し、時々二教師監督の下に男女學生を會合せしめ、談話、會食は勿論、時には舞踏などを試ましむるも一興であらう。素より是は方法にして之を實行するには幾多の障害も伴ふであらうが、余

は唯其例證を示したるに過ぎないのである。根本的の方法として玆に陳べたいのは男女混合教育である。男女の交際を完全に且つ無害に實行せんとするには男女混合教育に如くものはない。余はこれを小學校に於てのみならず、中學若くば大學に於ても行はんことを主張するものである。今日の教育當局者が小學校に於てすら之を實行し得ないのは驚くべきてないか。余は男女の交際をして完全ならしむる爲には男女同等てふ思想を普及せしめねばならぬと思ふ。今日の如く男子が尙ほ幾分か女子を輕蔑し女子も亦自重の念に乏しき時に於ては到底完全なる交際を望むことは出來ぬ。偶々交際の途開くることありとも、恰も男子が藝妓に對するが如く、知らず〱女子を一の道具として取扱はんとするに至るのである。されば小學校時代に於て男女兒を一敎場に集めて教育することは此同等の觀念を吸き込むに大なる便利がある。更に進んで中學校に至り男女相竝んで勉學することゝなれば彼等は互に友人として相見るに至るであらう。女兒の中には素より男兒も及ばざる程の學才を具ふる者もあれば男兒が彼等を尊敬するの念を增すと共に彼等も亦自重の念を强くするに相違ない。余は男女學生が友人として交はり互に尊重するの念を起すに至ることは主して混合教育の結果であると思ふ。若し數年相交はる間に友情は終に戀情となり他年成業の後結婚せんとまで相思ふの男女起らば其は少しも悲むべきとてはない。これを一度の夜會に於いて或は一度の見合に於て相思の念を起したるに比すれば其差果して如何であるか。要するに我社會は男女交際に關して適當なる途を開いて居ない。而して男女學生の醜聞を耳にすれば直に男女交際の不可を唱へ、若くはこれを冷評し去らんとするものがある。不親切も實に甚しいではないか。余は今日の有樣を以つて過渡時代に於ける當然の現象と思ひ、敢て怪む所はない。男女交際は自然の要求である。之を善き道に導くは吾人の當に勉むべき所であつて、之を杜絶せんとするが如きは愚の極である。

男女學生交際論は現下教育界の一大問題也本誌は毎號大方諸大家の高論を紹介し、教育家及學生諸君の參考に資す、

二十年九號（九月發行）　竹越與三郎氏
二十年十號（十月發行）　三宅雄次郎氏

右は既に掲載せり、本號の安部氏の所論と併せ讀まば更に得る處多かるべしと信ず

戰後の教育

文學博士　上田萬年

此度の戰爭は日本の歷史に於ての一大時期を劃すべき戰爭であつて、此戰爭の結果から見れば御維新の事と云ひ、又日清戰爭と云ひ、比較的に小さなものゝやうに我々に思はれる、從て今日以後我々日本人の執るべき教育の方針に付ては在來とは非常に趣を異にしなければならぬと信ずる。

今度の戰爭に付て日本の海陸軍の天下に秀いてゝ優勝であつたといふ點は我々に能く示された、人材に富む點、鍜錬に富む點、又規律の嚴しき點などに於て、今日の陸海軍が維新後に非常な進歩を爲し、非常に成功したことは此度の戰爭が確に證明して居る、併ながら農工商の如き實業の側に於て、又外交の側に於て、學術技藝の側に於て、我我日本人が如何に進歩し、如何に成功したかといふことを考へる時分には、我々は我陸海軍が進歩し、成功した程に是等は進んでも居らず、成功しても居らぬといふことを遺憾ながら事實として認めなければならぬ、**今後の國是は詰り是等の實業及び學術技藝といふ側に於て大に我々國民の奮發すべき**ことを要する次第と考へる、此側が進歩せずに日本國が世界の一等國と爲るといふことは到底望まれないことゝ思ふ、從て今後の教育に於ては此方針を確に立てゝ進まなければ、所謂文弱の國となつて、國の文明は偏頗なものになり、從て國力は十分に發達しないことであらうと思ふ、斯ういふ側に於て我々は擧國一致を以て今日の經營をしなければならぬと思ふ、で、私は**戰爭のある當時から戰には勝たうが、戰後の經營は**戰敗國の覺悟を以てしなければならぬといふことを度

々言つて置いた、今日は戰敗國の名稱は容易に許せないかも知れぬが、併し事實は聊か此私の豫言に近いやうにも思へる、何しろ善後策を擧國一致で皆が本氣になつてするのでなければ、今後の我邦といふものは餘程困難なる地位に陷るだらうと思ふ。

戰後の教育の事に付ても言ふべきことは幾らもある、例へば露清學校を經營して、此點で露西亞、支那に關する言語、文學、歷史、政治等の有要なる知識を敎へて、他日東亞に於ての大事件の起る時分に、其上に參與して大に陸海軍人の爲めになる人物を養成するといふやうなことも一つの考であらうと思ふ、又東洋學會の如きものを起して、東洋の地理、風俗、學術技藝に關する研究會を起すといふのも一つの事業であらうと思ふ、又各學校に於ての東洋に關する學術研究を促し、又其實地應用の側を計畫するのも一つの事業であらうと思ふ、斯ういふ側から離れて純粹に學術技藝を奬勵することも必要なので、今後の西洋人は我々に容易く學術技藝の蘊奥を敎へないであらうと思ふ、我々日本人は自分で此學術技藝を開拓するのでなければ二十世紀の文明を獨り立つて進めて行くといふことは出來ないであらうと思ふ、斯う考へる時分には學術技藝に非常に金を掛けて、此側に於ての學者を造り出し、又此側に於ての研究を保護するといふことが最も必要なことであらうと思ふ、又學術技藝の側と社會との融和を圖つて、成るべく此間を離隔しないで、互に協心同力して進むといふやうにさせて行くのも一つの事業であらうと思ふ、斯ういふ側に付て考へれば幾らでも考へることがあり、又立つるべき策があると思ふ、併し爰で私の一つ申して置きたいことは豫々主張する所の國字問題である。

先づ第一に言つて置きたいことは、今日までのやうな國字で今後の日本の文明を代表することが出來るかといふ問題である、私は此點に付ては到底出來ないといふことを申して置きたい、即ち日本といふものは支那にしろ又西洋各國の人々に接して、さうして今後は進まねばならぬ、それ故日本の文字は此世界各國の言葉

といふものを現はすことの出來る資格を持つたものでなければならぬ、若しさうせずに置けば詰り世界各國の言葉を十分に吸收することは出來ない結果になるといふことを知らなければならぬ、で、日本語は漢字漢文と終始するものに非ず、成程今日までは日本の開化の性質の上から云つて、儒教なり佛教なり凡て漢字漢文といふものを以て進んだ、是等のものに依つて我々日本人は感化せられたのであつて、今までの歴史に於て漢字漢文なしに日本の開化が進むことが出來たかといふとそれは出來ないといふことを私は明かに言ふ、併ながら御維新までの日本の開化の性質がさうあつたからと云つて、御維新後の日本の開化は其性質で進むべきものでは決してない、御維新後の開化の性質は詰り西洋の開化に依つて大影響を蒙つて、其恩惠に依つて日本の今日が在るといふことを忘れてはならぬ、今度の戰ひに於て此の如き非常な好結果を得たといふのも、私は寧ろ西洋文明の開化の賜物であるといふことを公言して憚らぬのである。

で、今日の我々から見れば純粹の日本語といふものは何處までも保存する必要がある、又世界各國の言語といふものは昔の漢語に於ての如く十分に日本に吸收する必要がある、それ故に今後の日本人といふものは純粹の日本語を保存し、必要なる西洋語を吸收し、さうして又今日までに使ひ來つた所の普通の漢語を使用するといふ考で進まなければならぬ、此側から見ると私は日本語は世界的の文字で之を示せといふことを主張する、今日の世界的の文字といふのは何であるかと云へば、私は勢ひ之を羅馬字であるといふことを言はなければならぬ、英吉利であれ、亞米利加であれ、又佛蘭西であれ、伊太利であれ、總て此世界の強國の過半數以上は此羅馬字を使つて居る、此羅馬字を以て我々の日本語を書現はして、さうして此日本語を世界に弘めるといふ考を取らなければならぬと思ふ。

無論漢字漢文の知識が東洋の政策上又東洋の學術研究上必要であるといふことは私は決して否定しない、是は専門學上及び淸國の交際上特別の學科として必要で

あるといふことは、是は漢學者に劣らず私は其必要を認めるのである、併ながら一國の普通文字或は國際間の文字といふやうな側に於ては、遺憾ながら今日の日本文字の仕組は世界の中で一番劣等な文字の仕組であるといふことを認めなければならぬ、此點では現代の支那の文字の仕組よりも日本の文字の方が劣等な地位に立つといふことを知らなければならぬ、所謂日本の文字は片假名、平假名が出來て非常に便利にはなつて居るやうであるけれども、併ながら日本の漢字を見るとどうであるか、支那人が總ての漢字を今日の一定の支那音で發音すると違つて、日本人は漢字に對して漢音、呉音、唐音、宋音といふやうに各時代の色々の發音を之に附加へるのである、それに持つて行つて又日本流の訓といふものもあり、又略訓といふものもあるといふやうにして、**實に煩雜極らないものである**、又現代の支那人は字を書くのには殆ど階書の一體を以て進むにも拘はらず、日本人は階書、行書或は草書、或は其略字であるとかいふやうにして色々の體を以て進むのである、斯ういふ點に於ても日本の文字の今の仕組は現代の支那人にすら劣るといふことが明かに言へるのである、斯ういふ文字の仕組を以て我邦が二十世紀に於ての東西兩洋の文明を融和する、其文明を現はす言語を書現はさうといふことは到底無理なことゝ謂はなければならぬ、殊に今日以後は生活上の必要もあり、又益々生存競爭の劇しくなる結果、普通の人といふものは文字の如きものに多くの時日を掛けて之を練習し、又之を記臆するといふやうなことは出來なくなつて來る、農工商の如き實業界に從事する人、或は文學を除いての其他の學術技藝に從事する如き人に於ては、文字の上の知識の如きものは比較的に貴ばれないやうになるであらう、即ち極く簡便なもので容易く書かれ、廣く讀まれ、廣く行はれるものが自然と勝を制するやうになるのであらうと思ふ、斯ういふ側から見て來るとどうしても現代の文字は國力を發達させる、或は國富を増進させるといふ上に對して、餘りに古典的であつて、餘りに學者的であつて、同時に餘りに保

分納であつて、今後の文明とは伴はないものであると信ずる。

それで私は此論は決して今度の戰爭に付て始めて言ふのではない、昔から此主義を定めて發表して居るのであるが、今度の戰爭の結果を見て益々爰で國是を一定することの必要を認めるのである、陸海軍の上に於て明治政府が明治十年前後から一大方針を立てゝ、其方針に依つて着々進んだ結果は二十七八年にも三十七八年にも立派に其功を奏して居る、文學上のことはさういふやうに結果を直ちに出すといふことはむづかしいのであるけれども、併ながら一大方針を定めて、其方針に基いて仕事をして行かなければならぬといふことは、是は陸海軍と同じである、外交の如きでも同じであると思ふ、露西亞の外交の強くもあり、又成功するといふことは露西亞建國以來の大方針に基いて進むからであつて、日本の如き外交の方針を度々變へる國とは同日の話にはならない、それと同じやうに文字の上の論の如きものも此大方針を定むるのが必要であつて、其大方針が五十年掛るか、百年掛るか、或は二百年掛るか、其結果を見るまでには或程時日はあらうが、併し一國の國民の持つ方針として理想上斯うなければならぬといふだけに付ては、早く國民が考を極めて、其策を立て丶置かぬと非常な損害を受ける事であらうと思ふ、遺憾ながら明治の政府には文學に於ての元勳若くは有力なる政治家はないのである、此點に付ての主張者は所謂若い人に多くて、廟堂の諸侯に皆無であるといふことを申して宜からうと思ふ位である、此點では我々は國民として之を經營する考を持つて行かなければならぬ、て、元老若くは大臣間に其人の無いのが或は又幸であるかも知れぬ、併しマー其事はどうあるにした所で、此大方針は今度の戰爭の結末の着いた時に於て國民自ら早く定むべき問題であると思ふ、此大方針の立ち、又其施行の方法が立つて行くと同時に此上から敎育全般の上に及ほす影響は非常に多いことで、例へば小學校の義務敎育の如きもの或は農工商の實業學校の如きもの、總てさういふ所に於て國民の受け得

べき利益といふものは非常なものであると思ふ、先づ先決問題として此問題を議することが戰後教育に於ての一つの問題てあるといふことを申したいと思ふ。

尙ほ其他の事に付て申すこともありますが、それは又其場合に依つて申述べることゝしやう。（文責在記者）

暗示の社會に及ぼす影響（下）

文學士　福來友吉

一國の氣風、風俗、流行等の發達といふものも矢張り暗示の勢力に依ることが多いのてある、一個人の上から言つたならば其人の精神、氣力なるものは、若い時からの歷史が失敗に依つて滿されて居るか、成功に依つて滿たされて居るかといふことに依つて大に極るものである、犬などの例て言ふと、犬を鬪はす場合に於て甲の犬と乙の犬とが鬪つたる最初の場合に於て、甲が乙に負けたならば、其後凡ての鬪ひに於て甲は乙に負けることが多いのてある、又雞の鬪ひも其通りてある是はどういふ譯てあるかといふと、最初一旦負けたといふと、其負けたといふ覺念が頭に十分ある、さうすると其敵に對する每に常に此の觀念が浮んで、其の暗示の力によりて忍耐氣力といふものを失はしめて、竟に第二の敗北を起させる、第二の敗北があると第三の鬪ひには益々負けたといふ觀念が强く働いて敗北を招くことが早くなるのてある、それてあるからして一度負けたる敵に出逢ふことが多ければ多い程益々最初に負けたことを思出してもう勝つ瀨がなくなるのてある、是は犬や雞の話てあるが、此の如きことは精神作用の複雜なる人間には精神の簡單なる下等動物よりも少いことてあるけれども、決してないことはないのてある、例へば甲の力士と乙の力士が角力を取つて、最初二三回甲が乙に負け續けるといふと、此負けたといふ觀念が始終附いて働くのてある、其後甲の方の力士が餘程角力に熟達して、實際上の力量に於ては乙力士

に優つて居るにも拘はらず、最初數回負けたといふ觀念がいつても附いて廻る爲めに其者に打勝つといふことが隨分むづかしいものである、本當か嘘かは知らぬけれども、梅ヶ谷といふ力士がどうしても常陸山に出會ふといふと。常陸山の身體が土俵一杯に見へてどうも後れを取つてならぬ、そこで或人の勸めに依つて坐禪をやつて心を鎭めた所が其後土俵に立つても常陸山の身體が一杯に見へずして大變取り宜くなつたといふことを聞いた、嘘か本當か知らぬが私は大にさういふことはあることゝ思ふ、それであるから甲の力士が乙の力士に負けるといふことは、それは力量の點の關係するは勿論であるが、一旦負けるといふと其負けたといふ觀念が附いて廻る、其觀念の爲めに實際の力以上の力を要するといふやうなことがある、是は全く敗北したといふ觀念が暗示となつて其人の精神氣力を失はしめるのである、能く角力には苦手といふことがありますが、此苦手といふやうなことも多少斯ういふやうな關係から起ることであると思ふ。

併し右は唯一個人に付ての場合であるが、多數の人に付ても此の如き場合がある、凡て戰爭に於て其第一戰に於ける勝敗といふものは第二戰以後の勝敗に非常なる關係を持つて居るといふことは、經驗多き軍人の常に言ふ所である、是は實に然るべきことである、第一戰の勝利の觀念といふものは軍人一般の心中に堅く止つて居つて、戰ふ毎に勇氣を鼓舞し、忍耐を强める所の暗示力として働くく所のものである、之に反對して第一戰に於て敗北したならば其敗北したといふ觀念といふものがいつまでも附いて廻つて、常に敗北せしむる所の暗示力として働く現に今兵火を交へつゝある所の日本軍と露西亞軍とが其一例であると思ふ、實際上の力量に於ても日本軍が露西亞軍よりも强いてあらうけれども、兎に角日本が第一戰に於て露軍をば打破つたといふことは實に日本軍をして爾後常勝軍たらしむる上に大なる暗示力を持つて居つたものと考へるのであります、之に反對して露西亞の如く最初より幾度び戰つても敗北に敗北を重ねた場合に於ては、負けたといふ

ことの觀念が飽までも頑固に露西亞人の頭に浸み込んで居つて、戰ふ毎に彼等の勇氣を妨害する所の暗示力となる、斯ういふ譯で行つたならば爾後戰爭を幾ら繼續しても、繼續すればする程益々敗北を續けて、敗北する毎に其敗北したといふ觀念が頭に浸み渡る、頭に浸み渡れば彼は敗北を益々增大する譯であるから露西亞人としては到底戰ひ[illegible]勝つことが出來ないことになつて仕舞ふ、さうすると[illegible]終ひには敗北といふ觀念が餘り露西亞人の頭に浸込んだ極として、竟に敗北狂とでも名くべき精神病を生ずるかも知れぬ、現に今其病ひに罹り居る者がある[illegible]めのである、さうなつたならば到底露軍の運[illegible]といふものも最[illegible]くる時代が來るのである。

更に一國民が有する歷史の觀念が國民の性格上に大なる働きを有するといふことに注意を[illegible]ねばならぬのである、日本の如く二千五百有餘年獨立國として[illegible]外國の侮辱を受けたことなき歷史を有する國民といふものは、其歷史の觀念が勇氣、自尊、獨立忍耐等の氣風を養成する上に於て大なる暗示力となるといふことは、丁度一個人が從來の經歷に於て何も彼も旨く成功して居る人が、其成功の觀念に依つて自己の生活に付て大なる勇氣、自尊を得ると違つたことはない、之に反對して朝鮮人の如きは恰も失敗に失敗を重ねた人のやうなものである、人間でも或時は失敗しても其中に時として成功することがあれば隨分夫れ相當に自信も勇氣も持つて居るものであるけれども、もし三十歲になつても四十歲になつてもやること爲すこと失敗に失敗を重ねて、一として自分の計畫が旨く當つたことがないやうになると、其人の氣が腐つて仕舞ふ、事業をする毎に失敗といふことが附いて廻つて、其觀念が其人をして勇氣、耐忍といふものを失はしめる、それで[illegible]て事業を數回變へた人といふものは事業を[illegible]する癖がつきて到底一つの事業を永く守ることが出來ない、直ぐに是はいかぬと言つて變へて仕舞ふ、いかぬのではない、運命の來るまで其事業を守つて居

ることが出來なくなつたのである、是までの失敗の結果として一つの事業を守ることが出來ぬ、少し思ふやうにいかぬと直ぐに事業を變へる、變へるといふと直ぐに損失をして、失敗と云ふ惡い觀念が一つ殖える、是ではいかぬといふて又他の事業に移る、少し經つて直ぐに止める、止めるといふと又惡い觀念の暗示力が附いて來る、斯んなやうに初め失敗をした人は餘程豪傑に非ざれば終生墮落して何等の事業にも手が附かぬやうになるものである、朝鮮人の如く他國に窘められて頭を下げてばかり來た所の人民といふものは到底彼等の歷史の與ふる觀念といふものは何等の興奮劑ともならない、彼等の祖國の歷史が彼等の精神に與へる觀念といふものは、獨立、自尊、團結心、忍耐、勇氣などゝいふものを惹起すべき暗示力とならずして、多々益々彼等を導いて墮落に至らしめる一方であると考へるのである、それであるから一國民の國風を養成するには祖國の歷史の觀念程大切なるものはないと思ふ。

社會の流行、風俗などゝいふものも此の如き譯である、他人の衣服などを見て其趣味の善惡を分析的に批評して其良きものは取り、惡しきものは斥けるといふやうなことをして、自分の衣服を擇ぶなどゝいふことは、是は餘程美的批評眼の發達したる人に於て始めて見るべきことであつて、社會多數の人に於ては到底見ることの出來ないことである、社會多數の人は多少自分等よりも趣味の發達したる人の衣服を見たならば直ちに之を良しと感じ。自分も直ちに之を眞似るのである、其人の衣服の模樣が變つたならば又それを良いと思つて自分も直ちにそれを取つて眞似る、詰り彼等は衣服などに關しては自分特有の判斷力などはなくして、唯他人の衣服に暗示されて盲目的に之に從て行くのである、例へば田舍の人が東京で流行るものと云つたならば是非善惡を問はず直ちに良きものと感じて之を眞似るやうなものである、盆栽などの流行もさうである。盆栽には自ら盆栽の趣味があるものであるが、眞に其趣味を理解して居る人といふものは世間の流行に依つて漫りに其愛

好を動かすといふことはない筈である、然るに多數の人といふものはさうでない、今某々の盆栽が流行するといふと大金を投じて直ぐに買求める。一朝流行が過去つて仕舞ふといふと大金のものをば二束三文で賣拂つて仕舞ふ、數年前盆栽界を騒がしたる所の香蕕の如きは其最も好き適例である、最初何人かゞ大に之を賞賛して好いたのでありませう、さうするといふと他の人も之に倣ふて。是はどうも良いと云つて賞める。一犬吠レ形、萬犬吠レ聲とは爰である。最初賞めた人は眞に見所があつて賞めたのであらう。所が他の多數のワイワイ連は最初の人の賞めた言葉に暗示されて矢鱈に吠へるのである。サー香蕕の噂が次第〳〵に高くなつて、遂に一葉に付て何圓といふやうな驚くべき高價なものとなつて仕舞つたのである、然るに今となつては香蕕などゝいつて騒ぐ者が一向ない。一時は數百圓の名樹として床の間を飾つたやうなものも今は庭園の一隅に棄てられて一向顧みる者もない、併し今も彼の時も香蕕其物には何等の變化もないのである、それが彼の時は狂せんばかりに人が好んで今は顧みる者がないといふのは驚くべきことである、是は世人の多くが香蕕其者の趣味を知らずして他人の嗜好に依つて趣味を變動したからである、即ち他人の嗜好の暗示に依つて之を良いと感じ、又他人の嗜好の變動に依つて忽ちつまらぬものと感ずるからである。又此暗示といふものは

精神病の流行

などに隨分關係するものである、私の知つて居る婦人の話でありますが、其人が子供の時に朝寢床から起きた時に片方の眼の上の眼蓋が赤くなつて居つたのである、さうするとそれを見し御婆さんが大變吃驚りして何れ是は附き物がしたのであらう、附き物がしたのならば屹度其中に身體が慄へ出すに相違ないと斯う言つた、所が忽ち其の人の身體がブル〳〵慄へ出して、愈々附き物に相違ないと云つて、其近傍の祈禱をする者の所に行つて落して貰つたといふ話でありますが、其次の日かいつかに至つて其の人の父が歸つて其事を聞いて、そんな狐が附くなどゝいふことはないといつて

眼を能く見た所が、狐憑でも何でもない、其處に眼乞食といふ腫物が出來て赤くなつて居つたのである、是は祈禱て直ぐ直つたから宜いが、若し祈禱をしても其附き物が落ちず、いつまでも身體が煩ふやうなことがあつたならば、或は憐むべし、此婦人といふものは純粋の狐憑となつたかも知れぬ、さうして其狐憑はどういふことから起つたかといふと、御婆さんが暗示した爲めに狐憑となつたのである、だからして世の中に行はれる所の迷信などゝいふものは隨分人を精神病に導くことが多いのである、私の國にあつた話でありますが、私が幼少の頃自分の近傍に二軒の相隣り合つて居る家に二人の女が居つた、此二人の女が一日相伴ふて法華宗の法華寺といふ寺に參詣した時、其寺の和尙が狐憑の爲めに祈禱をして居る所を見たのである、二人の女は氣味惡く思ひながらも好奇心の爲めに驅られて其狐憑の怪しき行ひを見て居つた、即ち狐憑は耳を動かしたり四這ひになつて走つたり、高きものを飛越へたり、種々雜多な狐みたやうな怪しき行ひをした、兩人は之を見て非常に驚いて歸宅したまでは宜かつたが、歸宅してから其晩不思議にも此兩人が一緒に狐憑になつて仕舞つたのである、さうして其二人の行ひといふものは全く晝間寺で見たる所の狐憑の行ひと少しも違はなかつたのである。併し幸ひにして此現象は僅か一日程で消滅して仕舞つて兩人は元の人間に還つて仕舞つたのである、此現象はどうして出來たかといふと、畢竟二人の女が寺に於て見たる所の狐憑患者の行動を非常に感動して見た、それが爲めに其狐憑病者の行ひの觀念が、一時此二人の婦人の精神を占領して、此觀念に向つて三昧の狀態に這入つた爲め、此觀念が暗示となつて此の如き現象を呈したのである、勿論彼の二人の婦人といふものは此の如き行ひを眞似しやうと思つたのでない、けれども彼等は寺に於て狐憑の怪しき行動を見て非常に感動して強い觀念を受取つて來た、此受取つた所の觀念がひどく彼等の精神を支配して働いた、最初の中は彼等は常識で以て抑へて居たであらうけれども、段々其觀念が增長して竟には此の如き行動に至

つたものである、此の如き譯で狐憑者などゝいふものは畢竟周圍の暗示或は當人の迷信から來るのである、狐といふものは何も人に憑りたかつて其人の精神を左右する所の靈力を持つて居るなどゝいふことは私は信仰しない、全く暗示現象である、初め我日本に於てどういふことで狐といふものが一種の靈力を持つて居るものゝ如くに言ひ做されるやうな噂が立ち始めたのであるか、それは歷史にも載つて居らないことであらうと思ふから、それは今日取調べることは出來ないが、兎に角何かの出來事の爲めに狐が人の精神を左右するが如く見えたことかあつたであらうと思ふ、實際上狐が人の精神を左右するのではないけれども、世人をして恰も狐が人の精神を左右せしめた如く見えた事實があつたらうと思ふ、それからして狐といふものは人に附くものであるといふ迷信か行はれ、其迷信が行はれるとそれが暗示となつて其處にも此處にも狐憑が出來るに相違ない、其處にも此處にも狐憑が出來ると其噂が高くなつてどうしても、狐は人を化すものであるといふ迷信が固くなつて、さうして竟にそれが一國の風を成して狐憑者が出來るといふ譯である、是は暗示の結果であつて決して狐の魔力に歸することは出來ぬ、若し狐に此の如き魔力があるならば西洋人にも矢張り狐憑があるべき筈であるが、西洋の方には狐憑といふ病氣はないのである、即ち西洋人に狐憑のないのを見れば狐に魔力があるなどゝいふことは迷信で、此の迷信が多數の狐憑狂を出す暗示力となるのである。是と同様に

西洋人には狼が附く

どいふことがあるが、日本人に狼の附くといふことはない、是は何かの原因で恰も日本人に狐が附いたる如き現象が西洋の狼に付て生じたのであらう。そうすると是が原因となつて、狼が附くといふ迷信が出來て、それが暗示となつて狼が附くといふことが流行する樣になつたのである。日本には此の迷信がないから、狼憑がないのである、併し此の如きことは世が次第に文明になるに從つて段々なくなつて行くことであつて、

此頃は段々とさういふやうなものは少くなつたのである、併ながら現今は又現今だけの迷信があるので、物理學上の進歩の結果として電氣力といふものが大變用ひられて來たからして、世人の精神が非常に電氣といふものに對して注意を拂ふ結果であるか、此頃は隨分電氣に掛けられたといふやうな迷信を懷いて、これで始終不安の念に絶へない者がある、是は一種の電氣憑とも名くべきか、兎に角當世は當世に相當したる所の觀念刺戟の爲めに斯ういふ病ひが起る、更に此頃は催眠術が流行するものであるから、先達ても私の所に來た人がどうも私は催眠術に罹けられて居るやうな氣がして——人に接すると其催眠術を人に移すやうな氣がして困るといふやうな人があつた、此の如きは催眠憑とでも云つて宜からうと思ふ、詰り昔は狐憑が多かつたが、今は電氣憑が多くなり、更に進んで催眠憑が多くなるといふのは、客觀的に斯ういふ勢力がある爲めではない、詰り世の中に色々な說が行はれるに從つて、其說が暗示となつて人の精神に影響するのである。

是で以て大體暗示といふものが如何に世の中の人の精神に影響するかといふことをザッと御話し申した積りであるが、私はまだ此事に付て餘り深い研究はないのであるから今後益々研究する積りであるが、今現に氣の附いた所ではザット斯んなものであります。

最後に催眠術といふことに付て一言申しますが、世の中の人は催眠術といふものを以て通常の精神作用と異りたる一種特有の現象の如く思つて居る、併し是は大變誤りである、元來催眠といふものは暗示の作用から起つたものであつて、又催眠中に起る所の種々の現象といふものは此暗示の結果である、即ち催眠術は結局暗示術の一應用に過ぎぬものである、催眠の原理といふものは全く暗示の原理から出て來たものである、それであるからして催眠術が不思議なものならば暗示も不思議でなければならぬけれども、此暗示といふものは精神の當り前の作用から起つて來たもので別段不思議なものでない、從て催眠術も決して魔物でも何でもない、普通の精神作用から起つたものである、催眠術

を誤解して居る人は催眠術を施すのは非常に弊害があるからして、之を厳禁したらどうかといふ考を持つて居る。催眠術には利益もあり、弊害もある事は勿論である。併し私は催眠術といふものは到底禁止することの出來ないものと信ずる。何となれば催眠術といふものは暗示の應用から起つたものである、さうして此暗示といふものは人間が此世の中に出てから以來常に行はれて居る筈のものである、此暗示といふものを禁ずるといふことは到底人間に出來ないことである、宗教家が苦悶者を救つてやる上にも、教育家が教育する上にも、醫師が病を治する上にも、將校が兵士を指揮する上にも、僞欺師が欺僞する上にも、凡そ人の精神と精神とが相接する場合に於ては、必ず暗示が行はれて居る。暗示は精神の根本的現象である。到底之を人爲的に禁止することは出來ぬ。之を禁止せんとするのは、精神の活動法則を破らんとする樣なものである。併し暗示には善きものも、惡きものもある。暗示の力で人の生命を救ふことも出來る。又詐欺に妙を得たる人ならば、ちよつとした作用で以て人の懐ろからして知らず識らず錢を出させることも出來る。故に暗示は良く使へば人を救ふことになるし、惡く使へば人に大なる害を與ふる、それであるから暗示といふものを到底禁ずることが出來ぬ以上は、唯暗示を惡き目的に使つた時には之を罰し、善良なる目的に使つた時には天下の公益であるから默つて許して置くより外は無いと思ふ。催眠術も其通りである、催眠術といふものを如何に禁じて見てもいつても秘密で行はうと思へば行へることであるから到底禁ずることは出來ぬのである、それてあるから唯催眠術といふものを惡い目的の下に行つた場合には之を罰し、良き目的の爲めに使つたならば之を差置くといふやうにするより外之を取締る方法はないと考へるのである。

（完）

恒産と恒心

法學博士　中村進午

武士は食はねど高楊枝とは昔の諺なりき然れども是れ偽善なり若し偽善にあらずとせば只一時的耐忍力を鼓舞せしめんがための言のみ我輩と雖も素より精神的勢力の强大なることを否認するものにあらず平の將門が首斬られて而して馬より落ちず幾里の道程恙なく胴體以下にして神田明神に至るまで逃げ延びたりとは嘗て古書に於て見たる所なり其眞僞元より知るべきにあらず假に之を眞正なりとするも精神的の力は能く僅かに數里を驅けるに堪ゆるに過ぎざりしにあらずや

我國は仁義の國なり正道の國なりとして世界に聞えんと欲す然れども仁義正道等の文字は由來國際の關係に於ては殆んど全く無意義なり弱者は强者の暴横を矯めんが爲めに此種の文守を用ひ强者は弱者を壓せんが爲めに弱者に强ゆるに仁義正道の爲めに屈服し讓歩すべきことを以てす弱者多くは之を甘んずるにあらずと雖も强者の威壓に遭はんことを恐れ已むを得ずして怨を呑みて之れに　從するのみ若し夫れ强者の威壓に遭ひつゝ自ら仁義の爲めなり正道の爲めなりと稱して之を甘受するものに至りては實に汰沙の限りにして耻を知らざるの極と云はざるべからず由來國際の關係裡に於ける人道若くは正義等の文字は概ね宋襄の仁の意義に用ひらるゝなり

我國今や人道の爲めに和を媾じ人道の爲めに償金を收めず人道の爲めに防備を制限し人道の爲めに樺太の半ばを棄つと傳へらる更に進みて人道の爲めに我が財を與へ人道の爲めに樺太の下半を抛ち人道の爲めに我地を割讓せざりしは蓋し無涯の僥倖なりき日露戰爭の和約に於て償金を得ざりしことの人道に適すとせば曩に日清戰爭の和約に當りて淸國より償金を徴したるは人道に反するの行爲なりしか又償金を取らざることが人道に適せりとせば償金を請求したりしことは人道に違へるの行爲ならざりしか恬然として償金を請求し恬然として其全部を捨つ玩弄物視せられたる人道こそよき面の皮なれ夫れ人道の爲めに償金を棄つるの勇ある者人道の爲めに國を弱くし財を乏くし國威を墜とし國權を低ふするの勇あるか聞かまく欲しきの至りなり

抑も人道とは精神的の文字なり外國に對する人道獨り貴くして國民に對する人道獨り貴からざるを憂へずとなすか腹は空つても飢じからずと云ひ武士は食はねど高楊枝と云ふ此の如く食なくしてひもじからず又食なくして高楊枝なる狀態は果して幾日を支ふるに足ると信ずるか迂も亦極まれりと稱すべし衣食足りて禮節を知ると云ふ恒產ありて恒心ありと云ふ伯夷叔齊は周の粟を食はざりしも首陽山の蕨を採るに非ざれば生命を維ぐこと能はざりしにあらずや我輩決して精神的の勢力を輕侮して單に物質的の勢力にのみ謳歌するものにあらず物質的の勢力相匹敵するもの丶間に於ては精神的の勢力強きもの丶勝を制すること明けし然りと雖も徒らに精神的の勢力のみに信賴して物質の力を度外視するは豈空拳を振ひて百雷の落つるを防がんと云ふに異らんや況んや其精神的の勢力たるもの僞善的空元氣たるに於てをや赤裸々にして精銳の武器を有するの敵兵に抗せんとせば誰か疑を其の勝敗に夾むものあらんや

今回の媾和條約に償金取得の條項を缺けるを見て齒牙に介するに足らずと爲すものあり誤れるの甚しきものなりと謂つべし軍備の擴張之れが爲めに鈍く事業の經營之れが爲めに滯り敎育の發展亦之れが爲めに澁る然らば則ち償金不取得の餘勢は國家の根蒂を枯すものにして防備の制限土地の不取得に比して國家を害することと伯仲の間に在るべき大問題なるを知らずや日本は財政に豊かなるの國家にあらず償金を得ざりしが爲めの故に從來の內外兩債の償却に困しみ更に國債を募りて前債の利子を支拂ふことを敢てするの悲境に立てり噫人道と國家の根蒂と果して何れか緊要なるものぞ財力乏しくして國力の強からんことを望むは奚んぞ是れ胃腸を弱ふして筋肉の發達せんことを望むに異らんや

和戰利害

山路愛山

足下は主戰論者なりき。今度の平和條約には異論ある

べしと聞きたきものなりとは先頃より毎度友人の詰問を蒙りたる所にして中には足下は其始め主戰論者てありながら國民新聞に豐太閤と云ふ史談を掲ぐるは不都合なり早速止めたまへなどゝ申越されし向もあり。抑も僕の史談を書くは猶ほ舌耕師の軍記を語るが如し。役人にもあらず。商賣もせず。大學教授の如く御用學者にても無きものは舌耕師の張扇子(ハリアフギ)を用ちるが如く史談を書きて口を糊(ノリ)することと世に在る内は已むを得ぬことなり。固より政論に關係することに非ず。之を現政府黨の國民新聞に掲ぐるも之を政府反對黨の萬朝報に掲ぐるも何の差違なし、唯黒岩氏は僕の朋友に非ず。蘇峰君は僕の朋友なる故、僕は太閤論の講壇を國民新聞の紙上に開きたるに過ぎず。此位の區別は目のあきたる人ならでも分るべし。但し、然らば足下は平和條約に關しては德富君等と全く意見を異にする乎と問ふ人あらんに、之に答へて全く反對なりと申さば世間の氣受が善いかも知れねど、僕の良心は左樣に反對論の安賣を爲すことを許さず。大體は平和成立を贊成するものなりと答へんと欲す。僕は天下の逸民なり。讀書を以て生涯を了せんとするものなり。誰れに憚り、誰れを恐れて良心の信ずる所を枉ぐべき。輿論若し僕に敵せば、僕は輿論の敵たらん。輿論若し僕の信ずる所と同じからば僕は輿論の味方たらん。世間の評判を恐れて心にもなき强がりを云ふは僕の欲せざる所なり。抑も今度の條約は僕等の預期に反したるものなりしは申す迄もなし。割讓地は更に廣かるべく、償金も澤山取れることとなるべしとは僕も世人と同樣にしか思ひたる處なり。されど世間の政治家のやうに償金は何億圓、割讓さすべき土地は何々なりなど云ふ具體的の案は始より僕の胸中になし。左樣の事は僕などには十分の目安はつかぬことなり。知らぬことは默(ダマ)つて居るに如かずと考へ居たり。然るに愈條約調印となりたるを見れば何ぞ圖らん償金は皆無なり。土地は纔かに樺太の半部を割きたるに過ぎず。是(コ)は意外なりと思はざるには非りしかども飜て思ふに閣臣元老等が御前會議にて斯樣の大議を決したること仔細あるべし。閣臣元老を極

々つまらなき人物と見做して之を擯ずるも、彼等と雖も自分の利益は知りつらん。强がりて戰爭を續けたらんには、世間の評判も善く、自分等の地位も益す堅く、成功の曉には浮世の榮華思の儘なるべし。然るに閣臣元老却て此擧に出でず。國民の怨望を買ふべき和款を選びたること一理窟あるべし。昔しは南宋の諸豪傑多く强がりをのみ言ひて和議を非としたりし時、湯思退と云ふもの之を冷笑し、かの人々の强がりを云ふは利害、身に切ならざるを以て、大言して美名を邀ふるに過ぎず。宗社の大計は戲劇に同じからぬものぞと云ひたり。和議の張本、秦檜も亦、局外に在るものは空論を爲し易く、局中に在るものゝ事實を度外にし難きことを論じ、「諸君は爭ふて大名を取りて以て去れりと雖も檜の如きはたゞ國家の事を了せんとするのみ」と云ひたり。閣臣元老が强がりを云ひ居らば自己の榮利を圖り得べかりし時に却て其反對に出て輿論攻擊の中心となりて顧みざること、是れ其志寧ろ諒すべきものあるに似たり。されば是非とも彼等をして此に至らしめたる理由を穿鑿せざるを得ず。それを唯屈辱なり、敗北なりなど云ひて空攻にすること輿論には歎美せらるゝかは知らねども僕の窃に與せざる所なり。最も輿論の是非は問ふに及ばず。元老など云ふ政治的の姑舅(シウト)がうるさし、今の內閣は此姑舅の機嫌を取り、其威力を賴みて位地を維持するものなれば今度輿論の敵となりしこそ幸なれ。盛んに人民を煽動し、眞個(マコト)の政黨政治を立つることを計るべしと云ふ權略の論ならば是れは別問題なり。先日も或人來りて今度の和約に就ては當局者の申譯を聞かば一理窟も二理窟もあるべし。さりながら左樣の理窟を聞きて冷靜に理非を判斷するが如きは今に於ては無用の事なり。民心既に元老と閣臣とに背きたることこそ幸なれ、一擧にたゝきつぶして革新の機會を作ることこそ善けれ云々と語りたり。それも政治家としては妙法かも知らず。されど僕等の如き一書生は議論に權略を用ふべき柄にてもなければ左樣の事に頓着せず。唯正直に所信を述べんに何樣(ナニサマ)閣臣元老の筋にて今度の條約を已むを得ざるものなりとしたる

上は心を平かにして其理由をも聞き、反對論あらばそれをも十分に參考し、而る后に是非を決すべき筈なり。然る所、所謂反對論を見るに多くは感情論のみにてまとまりたる事實上の意見少し。たとへば（一）露國の輸送力は思の外増加したれば此上は彼れにまさるべき兵力を出すの見込なしと云ふ論に對しては彼此の輸送力をも比較し軍隊幹部の現狀、其教育、兵丁の數なども調査し、事實の上より其然らざることを辨ずべきに非ずや。（二）或は又日本の財政は此上の久しき戰を續くるには絶體的不可能とは云ふべからざるも隨分難儀なり。今は善い加減の潮合(シホアヒ)なれば和睦するを善しとすると云ふ論あらんも是も亦事實の上より相應の調査を爲し、其決して然らざることを論ずべき筈に非ずや。（三）或は此方の輸送力、兵力、財力の十分ならぬは申す迄もなきことなれども、其代りに敵方も又辛棒のならぬ理由ありとの事ならば、それを調査して事實の上より立派に議論を立つきべに非ずや。然るに所謂反對論なるもの多くは事實の上に於て立論せず。徒らに感情にのみ偏したるより眞(マコト)に惜むべし。（四）特に七博士とか六博士とか云ふ人の議論に至つては唯條約批准は空しき形式に非れば調印の後にも破棄し得べし等云ふ法律論一偏のものたるに過ぎず。僕は窃かに所謂輿論の眞面目ならざるを疑ふものなり。僕一個の議論にては恥かしながら續戰とも和とも一向定見がつかず。仔細は日本の政治は秘密の事多く政府筋にて十分打明けぬ以上は民間に居るものには兵力の見當もつかず。財政の見末もならねば續戰すべと云ふも從來の行掛上左樣せねば氣が濟まぬと云ふ分にて眞の利害を打算して整々堂々、根據あり、證據あり、動きの取れぬ議論を爲すの道なければ强て痛癢まぎれの硬論を吐くも氣が尤(トガ)める譯なり。さりとて今の元老閣臣は鬼神にも非ず。隨分つまらなきことをする人々なれば左樣の人のする所が一々尤なりと信ずる譯にも行かず。心中實は煩悶する計なり。僕が戰爭前に主戰論者たりし第一の理由はあの頃、日本若し默つて彼れの爲す所に從はゞ獨り日本人民が平和的活動の天地を狹くするのみに非ず。露西亞は大國なり。恐

るべし。どんな事をされても默從すべしと云ふ癖をつけては所謂此膝一たび屈せば再び伸ぶるの機會なきものなれば是非戰ふべし。勝敗は勿論兵家の常なれば或は大敗北を取ることあるべけれども、未來永劫露西亞の無理は戰はずして通すべしと云ふ癖をつけるより勝敗を度外に置きて國民の氣を吐くか善し。それに露西亞と云ふ國は其國民の品格教育。道德を見るも決して恐ろしからず。隨分五分五分の戰爭はなるべしとて立論したることにて必竟獨立國の人民たる面目の爲めに賣り掛けられたる喧嘩を買ふべしと主張したるに過ぎず。其實戰爭に關する專門的、技術的の問題は其時より參謀本部、軍令部など云ふ、それで飯を喰つて居るもの丶智識は及ぶべからざることは始めより自覺し居たる所なりき。さればこそ戰爭始まりて後も新聞紙などが判斷の材料となりたるものは大抵所謂其筋より出てたるものにて、海外の輿論までが外務着電が一番早くましても、軍機軍略の事は唯所謂其筋より漏れ聞きたる所に依りても彼此云ふに過ぎず。天下の事を議論する程のものが他人の褌にて角力を取ることさりとては見苦しきことにて、參謀本部に舌を卷かせる軍略家。外務省の役人に恐入らする外交論者が民間に少なかりしは笑止の事なれども事實なれば致方なし。然る所、今度愈世の所謂屈辱的條約を訂結せんとする際になりても一人の軍略家が猶ほ戰ふべしと云ふ成案を立てたるを聞かず。一人の外交家が小村のやり口は赤下手なり。斯々せば善かりつるものをと云ふ具體的の議論を立たるをも承らず。たゞ切りに癇癪を起すのみなり、是れは人民が馬鹿にして政府が利口なる故に非ず、必竟は今の世の中にては軍略も、外交も、民間の論者には獨立して案を立てる程の資金なく、資金なければ根氣なく。政府のみ十分の便宜を有する其一方に、政府が只管秘密を守り何事も十分に打明けざる故に、如何なる利口者にても思案が出ぬは當然の事なり。此點より考ふれば新聞記者などが空論を振廻はして大騷ぎをしたることも必竟は智慧の淵源が乾れ果て唯愛國の感情のみ昂ぶりたる結果にして其情寧ろ憫れむべし。されば今の

世の狀態にては政府の處置に團扇を上ぐべきや。それとも續戰論者の方が時宜に投じたる議論なりやを定むるは、總ての秘密も明かになりたる後を待ねばならず。畢竟は此事が歷史の乾光に照らして評論さるゝ時代にならねば元老閣臣の功罪は容易に論定し難き者なりとして。扨大體に於て今度の和局は果して如何と云ふに、僕などは善い加減にて切上る方に贊成を表するものなり。露西亞の手なみも分り、日本の武威も輝きたる當節、是れをきつかけに手を引く機會あらば今が潮合なりとは奉天戰爭頃より僕の胸中に浮びたる案なり。其譯は露西亞人と云ふ奴は長く戰爭を仕掛けるには此方に損の行く人民なり。此段はチャーレス十二世とピーター大帝の戰爭にても分りたることにて、彼方は人間が多ければ始めは敗北しても長き內には利口になり此方の手を覺え、盛返へし、盛返へし來たるべきは知れたることとなり。戰場の優劣と云ふものは一年か二年の事にて長き中には双方同樣になり。彼方の術は此方にてさとり。此方の術は彼方にてさとり、遂には五分五分のものとなるべく、其時は根の強き多勢の方が勝つなり或は其間には露西亞の內部に革命も起るべく、戰爭も從つて彼方より中止すべし。先づそれ迄は邪でも非でも强情我慢を立通すべし。遂に先方より屈すべしとの說もあらんかなれども、それはきつと當にならぬことを當にするものなり。賣られたる喧嘩は買はねばならぬ故に買ひたり。而るに幸にして勝ちたり。勝ちは勝ちたれども奉天占領までに一年かゝりたり。兵は拙速を貴ぶ、此處らで機會あらば和談を申込み暫らく息をつくが善き潮合なりとは僕の下手兵法にて竊かに信じたる所なり。世には露西亞をたゝき付けて再び極東に手出しのならぬ樣にすべし。今度の戰爭は其機會なりとの說もある樣子なれども、天下の兵力を合して大阪の孤城を攻めたる德川家すらも一旦は和を講じたり。百年の計あり。十年の計あり。一年の計あり。左樣の大事は一擧にして功を爲し難きは知れ切つたることなれば氣を長くして追々に取掛るべき筈なり。氣短かにては何事も成就せずとは僕の素論なり。されば米國大

統領の世話燒は恰も僕の豫期したる坪にはまりたるものにて日本に取りては善き和談の潮合なり。露西亞が大統領の世話燒に同意の旨を返答し和談を開くに至りたるは傲慢なる彼れも日本の手並には懲々したるものなりと見えて愉快なりき。小村のやり口。政府の處置は下手の處もありしなるべけれども、それは例の門外漢なれば何とも議論し難し。唯大體に於て切上げ時なりとは僕の窃に信ずる所なり。政治に秘密多く、人民の側に獨立の參謀部なきは今の政治の大缺典なれども是れは別問題なれば此に言はず。和戰の利害に關しては愚見大略此の如し。

軍隊歡迎に關する注意

衆議院議員　山根正次

前後兩歲に亘りて征露の大役に參せし我帝國の將士は、近く平和の克復と倶に將に本鎮に旋歸せむとす、吾徒之れに對して無限の感懐を禁ずる能はざるなり、意ふに遠征の將士が外、君國の難に當りて、海嶽を碎き風霆を驅り、百戰して國寇を掃蕩せるもの、其勞苦洵に量るべからざるなり、今や故國に凱旋の事あるに臨みて、同列の士空しく沙場に斃れ、勇名空しく存して形影伴はざるもの、蓋少なからず、戰友の情轉々愴悽に勝えさるものあらむこと、吾徒の想察する處なり、

然れども、百戰の功を負ひて、玆に本鎮に還るの將士に對して、其勳勞功績の大なるを仰ぐと同時に、之を歡迎するの念に勝えざるなり、念ふに軍隊の通過する所、將士の凱旋する處、所在の官民、之を歡迎し、之を優勞すること、向きに遠征軍を送れるの時に比して、更に一層の深切なるものあるべきを信ず、是れ實に我日本國民として、誠に止むべからざるの衷情なればなり、吾徒また滿腔の熱情を以て、凱旋諸將士を歡迎せむことを期待す、

吾徒は此の如き歡迎の全國に遍からむことを付度

し、茲に一事を提して、以て我凱旋軍隊を歡迎する同胞の注意を請はむと欲す、敢て余が全身の赤誠を捧げて爰に提言する所以のものは即、

軍隊歡迎の宴會に於て酒的飲料の使用を嚴戒せむと

是なり、

經年の外征に對する慰勞の情として、幾多宴會の催ふさるべきは必然の事なり、而かも是れに對して、酒類を侑むるは、頗ふる寒心すべき事情を有す、外征經年の將士が、其嚴厲なる軍紀の下にありて幾多の不便を節制せしの情は、蓋、此機會に際して翕然として勃發せざるを得ざるべし、而かも飲縱の欲、時に或は不測の危險を將來せむことを憂ふるなり、

飲酒の放縱、急劇に決行せらるゝの結果は、甚しき身體の不健康を來さしむると同時に、延ひて幾多の非行を發生せしめ、最も恐るべき花柳病の蔓延を出し、社會的犯罪を增加せしむるの虞、甚大なればなり、彼の飲酒の結果として一時性酒狂となり人を殺傷し遂に其光輝ある戰功を沒却するが如きものありとせば豈遺憾の極にあらずや是れ余が我全國民に對して深厚なる注意を要請する所以なり、

今や、我日本帝國は歐洲文明の首班に列せる大英帝國と相結びて、世界平和の鎭護たり、吾徒國民たるもの、眞に其平和の永世に强國ならむことを確信せさるべからず、然るが故に我外征凱旋の將士は、一變して平和の國民たると同時に、益々其身體の健康を保全し、其體力の發達を考慮し、茲に自重加餐して、以て大いに他日の資を養はさるべからざるの必要あるを認む、之を如何むぞ、一時の欵情に熱沖して、百年の貔貅を殘傷せしむべけむや、

凱旋軍隊の歡迎に對して、飲酒を嚴戒するは、是れ實に凱旋軍隊に對して最も熱誠を表する國民的注意なるが故に、我徒國民の之を力行するに勉むると同時に、所在團隊の首長は、また以て國民に對する軍隊の德操として、國民の歡迎に對する酒類の妄用を警戒し、其部屬を振肅して、自ら皇軍の精華たる品性を守持すべく注意せむことを切望す、蓋、凱旋軍隊にして自ら警戒

することなくむば、吾徒國民の歡迎するもの、遂に安全なる警戒を行ふ能はざるべければなり、

飲酒の放縱にして之を豫防するを得は、我軍隊は眞に全勝の軍隊と稱するを得べし、既に常勝軍の威名ある將士が、迭に本鎮に凱旋し、其役務を解きて故國の父老に相見るの日、顏色憔悴し、身體疲勞し、相率ひて醫師と病院とに親しむに到らしむる事ありとせば、國民の歡迎によりて我勤勞ある將士を害するの過失極めて大なりと爲さゞるべからず、余は實に遠征軍の實境に出入し、其さに其勤勞を熟視し、巡察し、其偉大なる勳業を目撃せるが故に、我外征百萬の將士に對して、最も痛切なる同情を表すると同時に、其將卒の一人を惜むこと、億弗の償金よりも切なるの感なくむばあらず、敢て茲に軍隊歡迎に關する注意を叙へて我同胞に諮ぐ、希くは帝國他日の發展を忘るゝこと勿れ、是れ余が最も關心する處なればなり、

戰後經營としての教育

法學博士　高田早苗

媾和條約が批准せられて日露の大戰役が終結すると同時に、國家の爲に働くといふ責任が軍人の肩から非軍人の双肩に移て來たのである。言ふ迄もなく今後は軍人以外の國民が戰役中に軍人たる國民の盡したる如く盡さなければならない、其成績は同じ樣に華々しくなければならぬといふ譯である、そこで戰後經營といふ問題を眞面目に研究しなければならぬのであるが、其中でも殊に大切なことは教育であると思ふ、戰爭に勝利を得たのも其原因の一部分は確に教育であるに相違ないが、今後の平和的活動に於て成功すると否とも亦此教育に由るとてある、教育と云つても教育上の設備の問題と方針の問題とに岐れるが、殊に重きを置かなければならぬのは戰後に於ける教育の方針といふことで

あらうと思ふ、敎育といふものは方針に拘らず施せば宜いといふものではない、爲さゞるに勝るといふことがあるが、方針の間違つた敎育であるならば却て爲さぬ方が增してあるといふ場合がある、現に支那の如きは過去に於て必ずしも敎育を怠つた次第ではないのであるが、所謂科擧の制なるものがあつてそれが爲めに敎育の方針を誤り、其誤つた結果は敎育の爲めに國が衰へるといふ結果を來たしたてはないか、

戰後經營の一部として敎育のことを論ずるに付ても先づ其方針に重きを置かなければならぬが、我輩が見る所に依ると、戰後に於て最も注意しなければならぬのは、第一が政治敎育、第二が實業敎育であると思ふ、戰後に於て政治敎育を一層盛にしなければならぬ、國民の間に政治敎育を一層普及せしめなければならぬといふ必要は今度の媾和談判を見ても能く分るてはないか、媾和談判に付て世間に種々の批評があるが、戰爭ては成功したが外交では失敗したといふことだけは何人も異論のないことてあると思はれる、其外交の失敗は外交官の能力の乏しいといふのが原因であるに相違なからうが、能力の乏しい全權委員を派遣して重大の局に當らしめたといふのは內閣である、即ち言ふまでもなく內閣の無能力が事をして玆に至らしめたのである、而して無能力の內閣に此重大な事件を處理せしめたといふ責任は誰が負はなければならぬかと云へば、其責は政治の監督に當る所の議會其物が負はなければならぬことてあらうと思ふ政治の監督といふ大切な任務を盡せない議會は何人が組織したと云へば、國民其者である、斯う考へて見るとポーツマスに於ける外交の失敗の責任者は國民であるといふことが言へる、國民が政治思想が乏しい政治的能力が十分に發達して居らぬ、政治敎育が行渡つて居らぬといふことが根本の原因であつて、其結果外交の失敗が起つたのである、日本に外交家が乏しいといふ人があるが、四千五百万の同胞の中に小村全權以上の外交家のない譯てもなからうと思はれる、露西亞が派遣したウヰッテと伯仲の技倆を有して樽俎折衝の間に引けを取らぬ位の人間が此

大國民の中に一人もないといふ筈はない、然るに斯かる成行になつたといふのは、平生國民の間に政治教育が乏しいが爲めに、選擧といふ極めて單純な事柄に付て責任を感ずることを知らない、其影響が議會に及ぶ、議會が政治監督の職責を全うすることが出來なくて、却て當局者に籠絡される位であるから無責任の內閣か出來る、從て適當な外務大臣を得られない、適當な全權委員を擧げることが出來ない、所謂屈辱的媾和か其結果として起つて來る、是れ即ち因果應報の道理で、少しも怪むに足らぬのである、顧ふに立憲政治といふものは良い政治には相違ないが、專制政治と違つて道具立が複雜である、複雜な道具を使ふのには多少特別の知識がなければならぬ、例へば織物機械とか糸繰機械とかふいものに例を取つて見ても分ることだか、從來日本に在る所の織物機械や糸繰機械であるならば、田舍の婆さんやかみさんにも容易く使へる、所が佛蘭西から新しく來た織物機械であるとか、英吉利で新に發明された糸繰機械であるといふことになれば、多少技師に就て修業でもしなければ田舍の婆さんやかみさんが直ぐ使ふ譯にはいかぬ、無闇に使へば打壞して仕舞ふといふことになる、是は機械が惡いのでなくて使ひ手が惡いのである、立憲政治といふ機械も矢張り同じやうな譯で、多人數で寄つてたかつて使用する機械であるのみならず、其組立が複雜して居るから下手な使ひ方をすれば打壞して仕舞ふ、之をうまく使つて行かうといふのには國民一般に政治教育といふことが必要である、即ち今度の媾和談判の事に鑑みて見ても戰後は一層政治教育を普及させなければならぬといふことは明かなことであると思はれる

戰後の教育の方針として政治教育の普及と相列んで必要なことは實業教育の普及である、戰爭で大金を使つて而も償金は一文も取れないといふ場合であるから、是から先は我も人も一生懸命に金儲けをしなければならぬ、一身の爲めのみならず國家の爲めに金持にならなければならぬといふ場合である、世界を舞臺として實業的發展を試みなければならぬといふことは今更言

ふを俟たぬことである、此事は戰爭中から一般の人が大分氣が附いて來たやうに思はれる、殊に將來の日本を脊負つて立たなければならぬといふ大責任を有する靑年達が頗る此點に着目をして來たやうに思はれるのは寔に喜ばしいことである、我輩の關係のある早稻田大學などの有樣を見ても、中學、實業學校を合せて七千以上の學生のある中て、確に半數以上は將來實業を以て世に立たう、商賣人となつて働かうといふ希望を懷いて居るのである、實業を目的としたからと云つて必ずしも其人々が殘らず成功するのみならず、金持になるといふ保證は出來ないが、兎に角商賣、實業といふことが目的であれば、大なり小なり國家の富を增すといふ方面に向つて盡すに相違ないと思はれる、それに付て一言述べて置きたいことは、世間の人々殊に先輩の實業家などが今の實業敎育に對して一種の意見を懷いて居るやうに思はれるが、それが果して誤りなきや否やといふことである、傳へ聞く所に據ると其人々の多數は實業家に爲る者は餘り餘計學問をしない方が宜しい、中學程度位の實業敎育を受ければ十分である、其以上學問をさせると却て使ひ惡くなつて困るといふやうな考を持つて居るさうであるが、是は少しく贊成が出來兼ぬるのである、人を雇つて終ひまで帳面附をさして置く、一生涯小僧仕事をさして置くといふのであるのならば別段學問もいらぬかも知れないが、小僧から中僧、中僧から番頭と段々出世をさせて、終ひには大きい仕事を扱はせるといふことであつて見ると、唯英語が少しばかり話される、簿記の附け方を知つて居るといふ位な人間では結局間に合はぬことになつて來ることは明かである、後に至つて大に其人を用ふるといふ場合になつて來ると相當な學問があつて、**腹の出來て居る人間でなければ役に立たぬのである、店に坐つて商ひをして居るばかりでなく、世界を舞臺として實業的活動を試みなければならぬ、大取引きをしなければならぬといふ必要が目前に迫つて居る今日に於て實業家に學問がいらぬといふ說の行はれるのは頗る其意を得ないと思ふ**、斯ういふ說は天保時代の商人が

「賣家と唐樣で書く三代目」といふ川柳があるから、おれの息子には學問をさせないと主張したのと五十歩百歩の考ではなからうか、二十世紀の大商人と天保時代の谿鐺頭と其說く所が同じ結論に歸着するといふのは頗るおかしな譯である、尤も此說の由つて起る所を考へて見れば、實業に從事しやうといふ學生の側にも不心得なことがあるからには相違ない、是等の學生が經濟法律といふやうなむづかしい學問を一方でするといふ、世の中に出て差向き役に立つことを打棄てゝ顧みないといふ弊がある、それ等の靑年を使つて見ると差向き役に立たぬ、議論ばかりして仕事が出來ぬといふ不便が起つて來る、其結果前のやうな說も出るのであるから、實業を目的とする學生も餘程注意をしなければならぬが、併し結局實業家となるべき者も出來得るだけ學問をする方が宜しい、中學程度の實業學校を卒業した者も必要であるが、大學程度の實業敎育を受けた者も將來澤山世の中に出なければならぬといふことは明かなことであるやうに思はれる

尙ほ一言附加へて置きたいことは、戰後の敎育は殊に實用的でなければならぬといふ一事である、敎育の目的は實用的人物を作るに在りといふのは、世界に於ける大學敎育專門敎育の方針となつて居るやうに思はれる、昔は我は學者なり故に實際を知らずと言つても濟んだか知れないが、今日及び今日以後は學者なるものゝ責任は其學問の應用を講じて實用社會の燈明臺となり、羅針盤となるといふに在ると思ふ、而して學問の應用といふことを學者の目的とするといふことになれば唯、學者として學理を講ずるといふよりも一層骨が折れて來るのである、應用といふと淺薄といふことゝ同じやうなことに解釋する人があるか知れないが、是は大なる間違ひである、先づ學理を究め、さて其學理を實際に應用する途を講ずるといふのであるから、一層深い研究を積まなければ役に立たないのである、現在の學問の仕方は陳列的である、受驗的である、是が敎育上の大弊害であるといふことは大分人が氣が附い

て來たやうである、即ち其弊害を矯めて是から先は學問を消化させる、右の耳から聽いて左の耳に拔けさせるやうな學問の仕方をしないで、咀嚼的に學問をする自ら進んで研究し、自ら之を消化して、得ただけのものを役に立てるといふ方針を取るのが極めて大切なやうに思はれる、自主的學問とでも言はうか、人から受けるといふよりも自ら求めるといふ研究方法を盛にしなければならぬと思はれる

今一つ戰後教育中の一事業として附錄的に述べて置きたいのは支那人教育の事である、日本と支那とは唇齒輔車の關係であるといふのは決して空念佛ではないのである、支那人と日本人とは同種同文であるのみならず、同利害であるといふことは日露戰爭其物が之を證據立てゝ居る、日本國民が如何に義俠だからと云つて支那の爲めに滿洲を取返してやるといふとのみで戰さをした譯ではない、露西亞の東方の經營は第一支那の國家を危ふすると同時に、日本の不利益此上もないといふ所から畢竟ずるに此戰爭も起つたのである、此同利害の國民を啓發して新文明の空氣を呼吸せしめて、永く吾人の同主義者たらしむるといふとは最も大切なことである而して其手段は支那人の教育に助力するといふことであると思ふ、支那人が日本に於て教育を受ける日本人の手に依つて教育さるゝといふことは支那人の利益であることは論を俟たない、なぜなれば同文の國民から教を受けるのは英米獨佛の如き異文の國民から教を受けるのと較べて頗る便利であるからである、それのみならず日本が西洋の文明を咀嚼して日本的即ち東洋的ならしめたものを、支那人が受取つて自分の國に植えるといふことは、直接西洋から輸入すると比して遙に便宜であり且つ利益である、他國の文明は其儘役に立つものではない、西洋の文明を其儘東洋に移す譯にはいかぬ、長を採り短を捨てるといふことをしなければならぬ、それは既に日本で段々行つてあるのを、支那が受取つて多少修正をしさへすれば宜いのであるから、其便利といふものは實に非常であると思ふ、又支那人教育に從事するといふことは固より日

本の損害にはならぬ、知識の泉は滾々として盡きないのであるから、支那人を敎へたからと云つて日本人の學問の減る理窟もない、而して日本人の手に依つて敎を受けた者は、自ら他國に對するよりもより多く日本國に對して同情を持つといふ結果は自然に現はるべき筈であるから、敎育上から觀察しても日支同利害であるといふことは確に言へることであると思ふ、即ち戰後敎育の一事業として支那人敎育に盡力することは、以上の理由から考へて見て最も大切であると思ふ

之を要するに戰後敎育の方針は立憲的國民、世界的實業家を作り出すに在ると思ふ、其手段としては敎育の方針を成べく應用的に實際的にしなければならぬのである、而して同時に力を支那人敎育に致して、國力の發展、東洋永遠の平和、即ち媾和談判で出來損なつたことを漸次に補つて行くといふのが、今後に於ける敎育家の大任務であると私かに信ずるのである（文責在記者）

露獨兩帝會合の眞相

（上）

福本誠

日露の講和に先だつこと兩月、芬蘭のブジヨルコエに於ける露獨兩帝の會合は、近來の疑問なりき。從ひて揣摩臆測紛々として出て、底止する所あらず。且つ其揣摩臆測も國に由りて同じからず。是れ唯兩帝室の親族關係たるに過ぎずといふものは、獨逸側の辯護にして、否な是れ露獨同盟の協商ならんとは、佛國側の猜疑なり。或は是れを以てカイゼルがツアールに對する內政改革の忠告ならんと爲すもあれば、又或は講和談判の助言ならんといふもあり。英國側よりは、露佛獨同盟して十年前に於ける三國干渉を日露談判上に再現せんとするものならんとまで邪推しにき。

此間吾人の一顧を惹きたるは、ノウオエ、ウレミヤの評論にして伯林の諸新聞が爭ひて轉載したりしといふ辯護に在り。其大意に謂へらく。

『兩帝の會合は英國皇帝佛國大統領最近の會合と、其性質毫も異なる所あらず。英佛元首の會合が露佛同盟に何等の危險を及ぼすこと無かりしが如く、今回兩帝の會合も亦秋毫も該同盟を危殆ならしむるものに非ず」且つ日露講和談判は世界に取りて重要の事件なり。此際露獨兩帝の友誼的關係を確むるは、世界的政策を鞏固ならしむるに、大有力なる事相なるが如し。」露獨兩國の友誼的關係の確認は、英佛協約より起りたる摩洛哥問題の平和的解決を見る可き佳兆なりと謂ふ可し。」今日は歐洲列强間に友誼的關係を維持すること殊に緊要なり。兩帝の會合は此關係を一層皇張するに與りて、大に力ある可きを疑はず』と。

是れ露獨共同の辯護として、最も辭令を得、最も巧妙を極めたるものなり。然も此間より兩帝會合の目的を略觀取することを得べし。蓋し此辯護中には四箇の闇示あるを察せざる可からず。其第一は英佛接近に對する答禮なり。抑々英佛接近たる、佛國よりいへば、如何に唯一の同盟とはいへ、露國餘りに放縱なる時は、佛國には英國といふ新朋の出來たるぞといふ示威的運動なり。英國よりいへば、カイゼル如何に英國に抗せんとするも、爾の舊敵たる佛國は我與國となりたりぞといふ牽掣的運動なり。露獨たる者之に對し、一矢を酬う所なかる可からず。即ち露國よりいへば、佛國にして露國を疎外せんとならば、露國は獨逸と握手して、爾を大陸に於いて孤立たらしむ可しとの脅迫的運動なり。獨逸よりいへば、英國にして佛國を身方にして誇るならば、獨逸は露國を擒獲して、爾の印度を脅かさしむ可しとの面當的運動なり。而して佛國は英國と接近するの故を以て、露國との同盟を絕つを欲せざるが如く、露國も亦獨逸と親邇するの故を以て、佛國と分れんとは思はず。而して英國が佛國を媒介として露國と調和し、佛露の力を假りて獨逸を窘窮せしめんと欲するが如く、獨逸も亦露國を仲裁として佛國と仲直りし、同じく露佛の同情を基礎として英國を困頓せしめんことを思へり。露獨兩帝の會合が秋毫も露佛同盟を

危殆ならしむるものに非ずといふもの此に在り。

其第二は日露戰爭の善後策なり。抑々露國をして勢力を極東に傾倒せしめ、歐洲政策を第二に置かしめたる根元の立案者は誰なりし歟。殊にツアールをして今回の戰爭を妄斷せしむるに、參預して力ありし者は誰なりし歟。知る者は夙に之を知らん。而して作家と優家との豫想は兩ながら脱れ、彼が如き大敗局を現出したる以上は、作家は同じく之が善後を手傳ふ可き德義的責任あり、且つ此敗局善後の手傳に恩を賣り、優家の心を收攬し、之を機として隱たる敵國を變じて顯たる與國と爲すには、再たび得難きの時會なり。是等の權略に遺算なき者は、是等の好機を逸過せんや。思ふに優家之を知らざるにも非じ。然も困獸は音を擇ばずといはずや。險しき時の神賴みといはずや。角力に觀るも、四十八手中尙ほ待たれ込みの一手あり。有意無意の間に在りて、持たれ込みに出て、東方の失を桑楡に收むる、敗者としては此に出づるの外あらじ。露獨兩帝の友誼的新關係は確に日露の局面上に何等かの大影響ありたるを觀る。平和を重んじ給ふカイゼルの盡力は我帝國に取り無前の光榮ある講和條約に至大の効果ありたりとは、我外務當局の一再ならざる感謝の言に由りて、吾人の牢記したる所なり。

其第三と第四との辯護は、前の第一と第二に迎へて、人々善く理解するを得ん。之を要するに此擧がカイゼルの首唱に出てたるは、世界の齊しく認むる所ならん。而してカイゼルをしてツアールとの會合を必要ならしめたる新理由は、尙ほ此他にも存在せり。請ふ吾人をして觀察に一歩を進めしめよ。

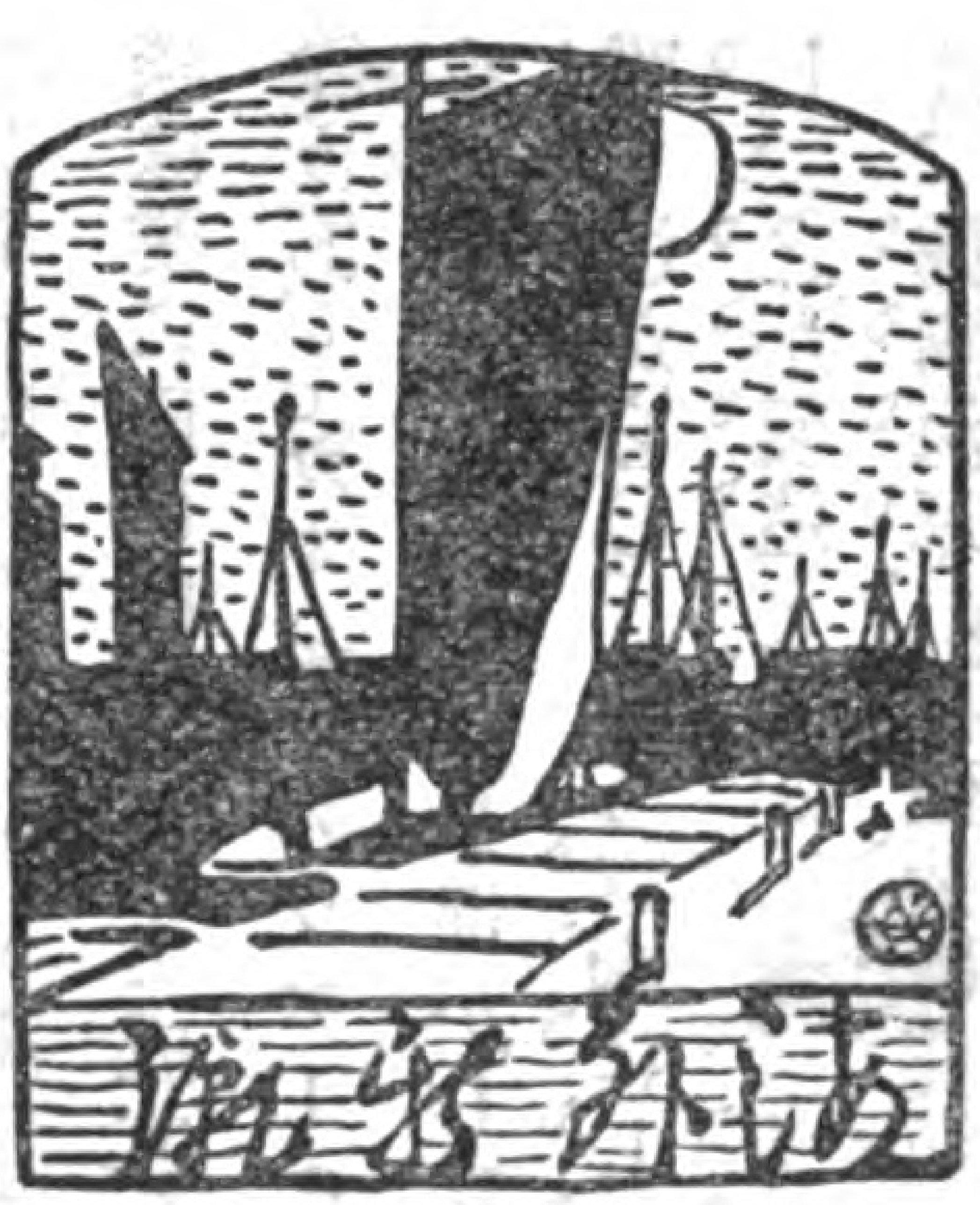
（下）

嘗て巴黎の諷刺書に千手觀音の像を現じたるカイゼルの尊相を拜したり。諦視すれば、是れ十手天魔の權化にして、一手には劍を拔き、一手には銃を擬し、一手には十字架を捧げ、一手には鐵筆を把り、一手には牙籌を彈き、一手には磁石を按じ、一手には錨を提げ、一手には鋤犁を曳き、一手には蛇を捕へ、一手には地球儀を扛げたり。蓋し帝の辣腕なる、爲さゞる所なく、

出さゞる所なきを描きしなり。思に桑も茹はず剛も吐かずとは、其れ此カイゼル、ウイルヘルム二世の謂歟。帝がブジョルコエの遊幸、ツアールとの會合は、主として帝が獨逸政策に基せる歐洲政策否な世界政策の爲なりしや、固より論なきも、彼が曾てパレスタイン及君斯丹丁堡の遊幸の如く、獨逸工業擴張の目的も亦其一に居りしが如し。何を以てか之を知る。帝とブジョルコエに會合したるツアールの左右に由りて之を知る。ツアール還駕の後ち露國の出來事に由りて之を知る。當時尼古拉二世の左右に扈從したる人々を看よ。前のアヴエランに代りたる新海軍大臣ビリレフあり。其他極東の海戰に參與し來りたるエッセン以下三將校も亦此にありて、兩帝會談の席上に陪侍したりしといふに非ずや。蓋しカイゼルはツアールと幾多の話次に、婆爾的艦隊の全滅を弔して、深く同情を表し、因りて以て說を進め、艦隊の彼が如き淺猿しき最後を見たるは、露國の從來採用したる軍艦型式の不完全に因ることを指摘し、同時に獨逸軍艦の最新最鋭にして、世界無比なるを說示し、之を採用して露國艦隊を再造するの露國に最要最利なるを說示し給ひしに似たり。而してカイゼルの此說法は深く露國君相の心を動かしたるものあるが如し。其證據は露帝の還駕せらるゝや否や、新海軍大臣ビリレフは現に數多の艦艇を注文せる國內官私の造船廠に對し、急電を發して、一切製造の停止を命じ、同時に海軍本部內に艦艇構造調査委員會を設置し、型式改正の攻究に從事せしめたり。

是より先き露のウキッテは獨逸の銀行家中に有力なるマンデルソンと會合し、獨逸公債に關し反復協議する所あり。既にして獨逸の宰相ビューロー伯はマンデルソンをノルドネイに召喚し、更に擬議を重ねたれば、兩間の內談は業に已に此時を以て成立したりしや、推知するに餘りあり。カイゼルのツアール勸誘は、此基礎上に立ちて、ツアールの批准を促がしたるものたるや、當らずと雖も遠からじ。即ち露國にして獨逸式艦艇の採用に決し、之が製造を獨逸官私の造船廠に注文するに至りなば、露國海軍の再建費は獨逸資本之に應ぜん

といふに在り。是れ取りも直さず從來佛國の引受けたる事業を奪ひ、之を獨逸の手に收むるものたるなり。是れ此消息は露國の朦朧ならざる處より出でゝ、佛國の或部分に傳はり、今更の如く佛人の洪憾を惹起せり是に由りて之を觀よ。カイゼルは一出して、露獨親近の關鍵を握り、日露講和の制裁を約し、摩洛哥問題の解決に資したる上に、獨逸工業の發展までも博したり。何時もながらカイゼルの辣腕嘆稱するに堪へたり。而して露國の君相が之に乘り、持たれ込みながら敗局の善後を策する處、亦智ならずとせざる也。之を要するに今日世界の本場處に於て、海の角手は英國にして、陸の角手は獨逸とす。即ち世界は英對獨の世界なり。是れ此二强が均しく得て已が腕内に抱込まんとするは、露國なることを記臆す可し。故に英にもあれ、獨にもあれ、露を抱込むの機會にして存せん乎、爲さゞる所なく、到らざる所なけん。若し義理と人情を此間に恃み英國は我同盟なり。獨逸は我友國なり。之に聽き且つ從はゞ、天下泰平にして、國家安全なりと嘻々然たる國あらば、大馬鹿三太郎たらざる者殆ど罕ならん。論より證據は、教訓の一端を旣に新大陸のポーツマスに於て正しく感受し來りしに非ずや。



トルストイ伯の現代文明に對する批評

「倫敦タイムス」

トルストイ伯今年七十八歳の老齢を以て意氣益々壯に、靈眼愈々明に、嶄然現代を超越して人世の批判に從ふ。世俗紛々の徒よりして之を視る、或は迂遠の譏を免るべかざららんも而かも眼のあたり永遠の光明に面する哲人の語は遂に斯くの如くならざるべからず。伯は常に心靈の燈火を献げて人世の醜惡を示し、仰て善美の境土の近きにあることを教ふ。伯は又「我懺悔」を書せると同じ心を以て人間の歴史を批判す。其眼中國家なく、帝王なく、英雄なく、いはんと欲する所をいひ、論ぜんと欲する所を論じ、進退行止悉く眞理の指導と自已の所信とに遡環するもの、伯の如き

人にあつて素より怪むに足らざるなり。其偉大なる品性、其毅然たる態度、若し伯の所說に全然反對の意見を有するものと雖も、遂に感嘆の聲を放たざること能はじ。伯や實に現代の榮冠なりといふべし。

八月三日の「倫敦タイムス」に掲載せる「一大問題」(A GREAT INQUIRY)は一面餘に亘る大論文、伯の土地問題に關する意見を吐露して極力ヘンリー、ジョールヂの說を賞讚し、土地問題を解くはあらゆる社會問題を解くの先決問題なるを論じ、伯の理想はジョールヂを去る一段の高處にあるも、而かも現在の社會制度に於ては到底ジョールヂ以上の計畫を立つること能はず、宜しくジョールヂの所說に從て土地の公有となすべきことを說けり。

次て八月二十九日及び仝三十一日の兩日に亘りて殆んと二面に餘る大論文「要する所只一物」(THE ONE THING NEEDFUL)を掲載せり。二十九日の所論を概說すれば、伯は先づ日露戰爭の悲



SAFELY LANDED.
—Thorndike in the Philadelphia *Press*.

慘なる狀態を叙し、極東の野に相戰ひ相殺するもの皆己れの本心より之を欲するにあらず、殆んど無意識的に又或は嫌惡の情を以て止むなくかゝる行動に出づるのみ、而して彼等をして止むなしと感ぜしむるものは實に國家の命令なるが故なり、然らば國家の命令とは即ち君主の意思なりやといふに必ずしも然るにあらず、今日の君主はたゞ〳〵國家組織に從てかゝる命令を發するのみ。而して所謂國家組織なるものは實に人間の無智淺見が數千の歲月を費して築き上げたる自繩自縛の法なりと叫び、歐洲各國の爲政者を論評して痛快を淋漓極め、ニコラス二世、ウヰルヘルム二世、ルーズヴエルト、チヤムバーレン等を視る

こと恰かも小兒を視るに異ならず。伯は夫れより論步を進めて日く、人間がかゝる狀態を脫する能はざるは全く人生其物の根本的意義を知らざるに基ゐし、而して人生の根本義を知らざるは敎會と科學の罪なりと罵り、僧侶は頑迷にして且つ眞の信仰なく、科學者は淺薄にして且つ誠の智識なく、多數の俗衆は溷濁する所なくして放僻邪恣なることを痛嘆したり。

次に譯したるは此論の續きにして三十一日の所論の前半なるが論ずる所主として歐洲現代の文明に對する批評なるを以て、題名を「現代文明に對する批評」となしたり。吾人未だ悉く伯の所說に服すること能はず、其國家政府の成立に關する意見、其社會人類の救濟に用ふる手段、伯の述ぶる所と大に異るありと雖も、而かも此の哲人の偉大なる誠意誠心の叫びは正さに吾人の俗情を一洗して、精神を一段の高處に向はしむるの力あることを信じ、こゝに譯出することを敢てしたる所以なり。吾人の緒言甚だ長きに失したるの恐ありと雖も、此論の先後を明かにし、且つ吾人の之に對する態度を示すは、かゝる長論文の一部を抄譯するに當りて極めて必要のことゝ信じ、こゝに數言を附記したる所以なり。

（譯者しるす）

（一）

現今吾人基督敎國の狀態如何と顧るに、極めて少數の人間のみが、大部分の土地と巨大なる資產とを掌握するの風年と共に加はり、而して此等の富は其少數者の驕奢、艷冶、及び不自然なる生活の資料に供せられつゝあり。此等の少數以外の大多數の人民は其權利を奪はれ、從て土地を自由に用ふるの資格なきが故に高き地代に困しめられ、富者に服して工場の人となり同じく不自然にして不健全なる生活をなしつゝあり。甚しきは便利なる住家なく、身にふさはしき衣服なく、體を養ふ食物なく、肉體及び精神に必要なる休息時なく、彼等をしてかゝる勞働をなすを餘儀なくせしめ、且つ勞働によつて大利を得つゝある人々を怕みつゝ此世を去るなり。

各個人は互ひに相恐怖し、機あれば即ち相抑壓し、相欺騙し、相偸盜し、相殺戮せんとす。各人活動力の大部は生產的事業に用ひられずして單に爭奪の爲めに費さる。資本家は資本家と爭ひ、勞働者は勞働者と爭ふの外又資本家と勞働者との軋轢絕えず。かるが故に器械生產の方法殆と理想的完全に達したるに拘らず、人民の貧困依然として存じ、人民の生活は依然として苦痛多く、且つ不生產的なり。而して最も痛むべきはかゝる狀態にありながら、貧民も亦富者と全じくかゝる生活の無意義なることを知り、若し貧富者共に協力し、共に勞働し、共に其生產を分たば自他互に利あるべきことを知りつゝも、而かも現在の狀態を脫却するの方法を見出し得ず、依然として相嫉惡し、相殘害しつゝ其の生活をつゞけ、以て益々惡しき方向に進つみゝあることを自覺しつゝあること是れなり。

又眼を轉じて他方を觀ずるにこゝにも亦他の不幸の横はるを見る。即ち國民は國民と相闘ぎ、國家は國家と相爭ひ、一旦の緩急に應ぜんが爲めに人間の勞力の大部を割いて軍備に鋭意す。而して戰爭の開くるや壯丁幾万之が爲めに死し、國民幾百万之がために困頓す。かるが故に人皆軍備の人生に害惡あるを悟り、軍備や陸軍や悉く人間を野性にし且國家の損失を醸すもの大たるとを知るも而かも軍備を廢棄するものなく、益〻其規模を擴張し、其力を注ぐこと益々大なり。怪む可し、人其爲すべからず願ふべからざるを知つて、而して益々其不幸を增長することを爲さんとは。かく人間が其利益と理性と願望とに反したる生活をなすことは即ち最も人間の心靈を苦しむる所以にして、多惑にして聰明なるものは自殺によりて此問題を解かんとし(かゝる人の數は漸々增加しつゝあり)他のものは理性的、自然的なる生活を求むる心靈の苦しみに堪へずして一部の自殺を——煙草、酒、ブランデイ、亞片、モルヒネ等を用ひて理性を昏醉せしめんと——計る。而して第三者は此等の昏醉劑を用ふる外、他に我心を引誘して暫らく不幸の狀態を忘却せしむることを求め、勝負事又は勉強に從ひ又は彼等が科學藝術などゝ稱する全く無用なる研究に專心す。又第四に來る多數の勞働者なるものは勞働のために身心共に疲憊し、靜かに自巳の位置を考ふるの餘裕なきも而かも彼等の生活に不平滿々、たゞ動物的要求を充さんがために其生を續くるのみ。



FRENCH Jealousy.

嗚呼人間の生活、代を趁うて斯くの如し。何が故にかゝる無意味なる生活をなしつゝあるか、斯くの如くして生活するは實に恐るべき悲慘なる誤謬にあらざるべきか、富者も貧者も共に此問題を考ふることをなさず、將た考ふるも全く悟ることなくして其生を終る。痛むべきにあらずや。

かゝる狀態や眞に痛むべし。殊にかゝる不幸なる生活をなしつゝある人も、其心中何處にか全く異りたる生活——驕奢なく、缺乏なく、死刑なく、壓抑なく、軍備なく、戰爭なく理性的にして同胞相愛する生活——をなし得べきことを感じ居るに至ては更に大に痛むべし。

（二）

然れども人間は暴力を基礎となす今日の生活に慣れたるが爲めに、政府の力なくしては人間の生活を想像し得ず、從て理性的なる、自由なる、同胞相愛するの生活も亦强制を以て——政府の力を以て——實現せんとの考を抱くに至りたり、

此誤りたる思想は過去を支配し現在を支配し、又基督教國民の將來をも支配せんとす。而して此思想の最も著明なる例は實に佛國大革命によりてあらはされたり。

大革命を遂行したる人民は明かに平等、自由、四民兄弟の理想を[illegible]し、之を以て社會の組織を一變せんとしたり。此等の主義の齎らすべき實際の結果は階級の打破、財產の平等、爵位の拋棄、土地私有の禁止、常備軍の廢止、國家と教會の分離、勞働者の報酬、及び總てに共通する理性的宗敎の建設等にありき、是等は疑もなく自由平等四海同胞の主義より割り出さるべき正しくして且つ利あるべき希望なりき。此等の主義は過去に正しきが如く現在にも亦正しきを失はさるべく、其實現せらるゝまでは永く人類の理想として存續すべし、然れども此等の理想は決して强制によりて行はるべきものにあらざるを知らざるべからず。當時の人も又之を行ふの方法として唯一の强制を採用せる程政府なるものゝ存在に慣れ、自由、平等、四海同胞等の理想は强制を基礎とする政府なるものと兩立せざるものなるを氣附かさりしなり。彼等は平等が其心髓に於て、權力服從の思想と一致せず、自由が强制の思想と矛盾し、四海同胞の思想が命令遵奉の精神と背馳することを考へさりしなり。かるが故に其結果は遂に大恐怖時代の狂暴を產出するに終りたる所以なり。

彼等の標榜したる主義は決して非難すべきにあらず。（世には主義夫自身を非難する人あれども、主義は實に正しくして永世變ることなかるべし）然れどもそを實現せんとするの方法は非難せざるべからず。佛國大革命に於て最も顯著なる此方法の誤謬は實に一般の幸福を齎らさずして却て最大の不幸を來せり、而して今日と雖も尙ほ其誤謬の方法を採用せんとし、總ての社會組織を改革するに皆全じく政府——强制によりて其目的を遂せんとせざるはなし。見よ今日最も進步したる社會主義者、革命者、又は無政府黨などゝ稱するものと雖も皆强制によつて其理想を行はんとするにあらずや。

人間が理性的にして自由なる四海同胞主義を行はんと欲するに、其方法として强制手段を用ふる以上は、よし一度びは其目的を達することありとするも忽ちにして再び或者が他の者を支配せんとするもの狀態に歸し、若し服從せざる時は殺戮をも敢てするの舊態に復すべきなり。

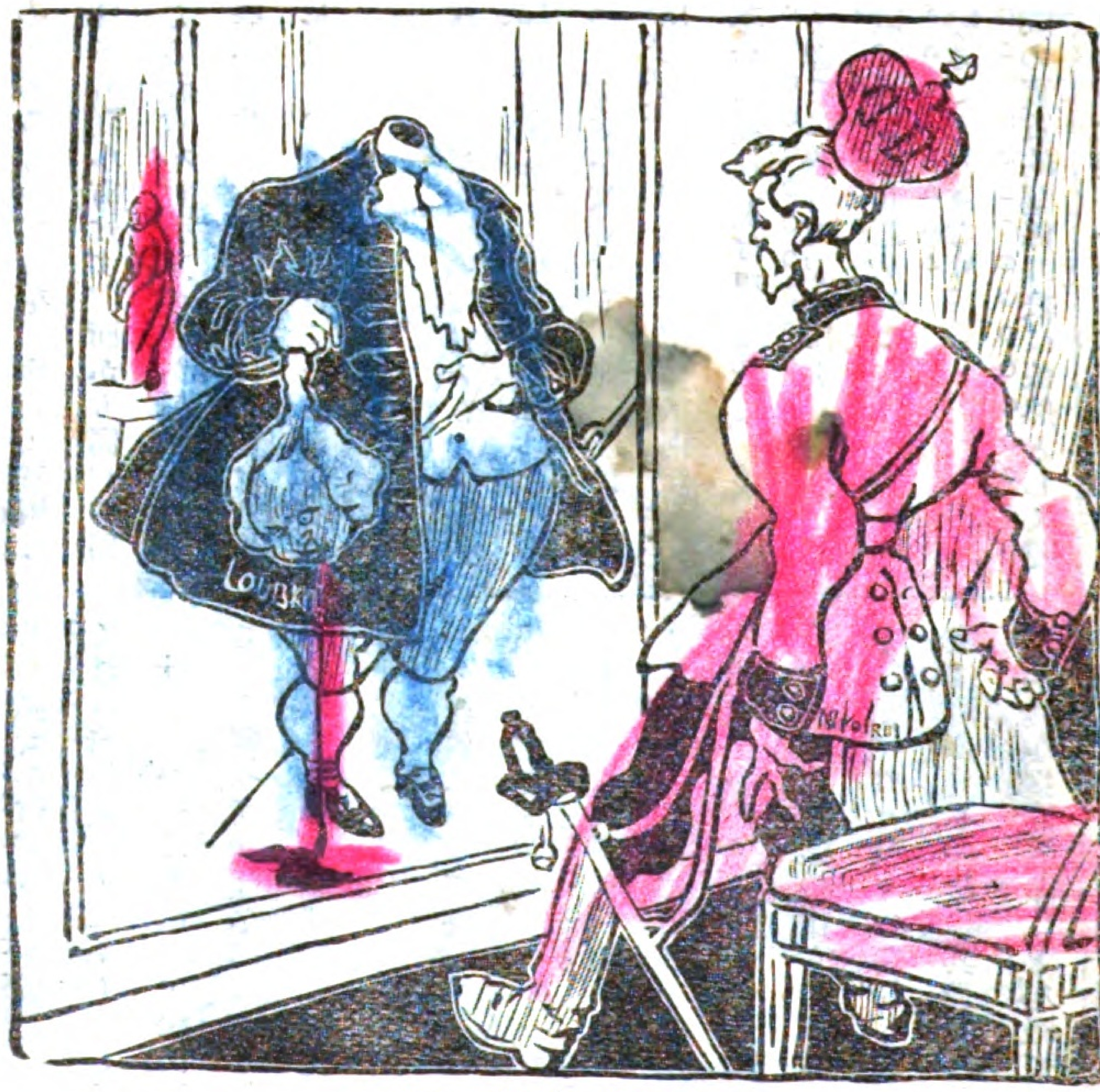
難いかな、殺戮によつて人間幸福の理想を實現せんとすること！

佛國大革命は實に恐るべき見なりき。「自由、平等、四海同胞、否らざれは死」てふ大理想も强制を以て行はんと欲すれは、實に其理想と矛盾せる悲慘なる結果を生ずべきことを示したるに過ぎざりき。

（三）

この奇異なる矛盾を來したる理由略々前述の如し。而して現代に至ても尚此謬謬によらんとするは實に訝しきの至り也、小兒は巳に大人となれり、而て依然として其舊慣を改めず、尚他人によりて養はれ、着せられ、教へられんとす、

人生の外裝は最早や人間の年齢と一致せざるなり。然れども其年齢と一致するの意識は未だ發達せざるなり。これ今日の人間が其組織を改め、其制度を改めんことを欲しつゝも、而かも尚政府の力によらんことを思ひ政府は其眞髓に於て理性的、自由なる四海同胞主義と一致せざることを悟らざる所以なり。



THE CZAR'S VISION.
—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

「若し政府にして正當に行動せば——眞政府にして惡政府に代らば——總ての事物悉く改善せらるべし、自由、平等、四海同胞の理想悉く實現せらるべし」是れ今日多數の人の考ふる所なり。又或者は考ふらく只今の政府を維持し、靜かに現存の制度を改善すべしと是れ保守黨と呼ばるゝ所なり。他のものは思へらく、今日の政府は之を打破し、人民の自由平等を保證する新たなる法律憲法を作らざるべからずと、是れ自由黨と稱せらるゝものあり。又第三のものはいへらく、現代の制度は總て不可なり、宜しく之に根本的變革——殊に經濟上の改革——を與へ、自由平等の權利を給せざるべからずと、これ革命黨と唱へらるゝものなり。總て是等の人の唱導主張する所一見甚だ異るが如くなるも而かも其心髓たる一點に於て相共通するものあり、即ち皆何れも政府の力——强制によりて社會を改革せんとすること是れなり。

今日社會の有爲の人物と稱するものは皆社會問題を口にせざるものなし(げに近來はかゝる人はいたく增加したり、予は敢ていふ所謂有爲の人民の過半は皆閑暇多きものにして、此閑暇の時を消せんがために空しく辨難し、政府の組織などを論議しつゝあるものなるを)而して貧困なる勞働者の多數はかゝる問題を論難する時間を有せず、而かも同じく同一の事を考へ、如何にして一層善良なる社會を實現すべきかを思ひ政府を廢止するよりは善良なる政府の建設を目的としつゝあるは事實なり。此點に於て富者貧者共に同一のことを思ひ、同一の方向に努力しつゝあり。

支那、土耳古、亞比斯尼亞、露西亞に於ては舊組織は古のまゝに維持せらる、而して各般の事物漸次一層の惡狀態に赴く。英吉利、亞米利加、佛蘭西に於ては憲法及び議會の力によつて社會を改善せんとす、然れども自由平等の理想古と同じく遙かの彼岸にあり。佛蘭西、西班牙、南亞米利加共和國、及び現在の露西亞は嘗て革命に逢ひ、又は現に逢ひつゝあり。而かも此等の革命や恰かも海浪の如く忽ちに來りて忽ちに去り、再び舊狀態に復らざることなし。死刑、牢獄、常備軍其他萬般の非理想的事物の社會に現存すること昔と今と毫も變ることなきなり。

形式は變化す、而かも人間相互の間の實質的關係は終に依然として變化することなし。かるが故に平等、自由の大義は一歩も其實現に近くことなきなり若し此理想の實現に近くことありとすれば實に政府の力にあらずして、却て政府の力を抑壓するの力なり。若し市街に於て盜賊の數減少したりとせばそは新たなる法律の力にあらずして市街の一層明るくなりたるが爲めなり、若し人民の餓死すること少くなりたりとすればそは法律及び政府の力にあらずして交通の便一層開けたるを以てなり。若し巫女を信ずること減じ、鼻を切り舌を絶つの迷信廢れたりとするもそは政府禁制の力にあらずして人民智識の程度進みたるが故なり。

社會の外形は人類の年齡に從て變化す、然れとも其實質は終始同一なること譬へば物體を高處より落せば其位置刻々異るも而かも其重力の中心を示す線の位置は常に變化することなきが如し。猫を高處より落下せよ、其體は廻轉し、其頭は上下何れとも決し難きも重力の中心は終始同一の線内にありて決して異ることなかるべし。政府の形體と實質との關係全く之と同じ。

若し人間は理性的生物にして其生活は理性と正義とに從ふべき者なりとすれば人間は二者其一を選擇せざるべからざる位置にあり、即ち强制的政府と一致する能はざる理性的生活の理想を拋棄するか、又强制を廢し、政府的組織を作らざるかにあり。然るに人間は二者何れをも選むことなく、たゞ種々の方法を以て其外形を變化し、或は背よりして肩に、或は肩よりして腰に其荷物を移すことをなせども、最も必要なる一物―其荷物を拋棄することを敢てするものなし。かくの如くにして現代の文明は遂に吾人の理想に到達する前途猶遼遠の境に彷徨せり。

伯はこれよりして再び宗數家と科學者の迷妄を破し、世界のあらゆる人に通ずる宗教――眞の愛――こそ人の世を永遠に救ふの

達なれと論じたり、原文已に甚だ長きが上に伯の筆は懇切を期するが爲めに往々重複する所あり、加ふに譯文粗雜讀者の嫌厭を來さんことを恐れこゝに筆を擱く。

英佛獨の關係と世界の平和

「フランシス・ド・フレッサンゼ」

千九百四年四月八日、時の佛國外相デルカッセ氏が英佛の協約を締結せるや、獨逸皇帝は非常の憤怒を作し、若しデルカッセ氏をして獨國との戰爭を避けんとするの意あらしめしならば、宜しく之を慰藉すべきを要する底の心狀に在りき。蓋し獨逸皇帝は佛國政府が二三年來溫和中庸の政策を採り勉めて列國との親交を密にするを計るを睹て胸中密かに不快の感なき能はざりしに、今ま眼たり佛國が西歐に有力なる親交國を得て其千八百七十年來陷りし孤立の地位より脫せんとするを視 に及び、其豫てビスマルクの採りし對佛政策に反するを念ふと共に一層不快の感を萌さすを禁ずる能はざりしなり。是れ故にデルカッセ氏にして若し能く此協約の眞意義を解せしならば、彼は寸刻の猶豫すること無く直ちに獨國をも亦た共同の地位に立たしむるの方策を講ずるを要したり。然るに彼は啻に此の至當の方策を講ぜざりしのみならず、却て一層獨帝を挑發忿恚せしむるの擧動に出て、現に其の親しく語る所に據れば、彼は自ら油を注ぎて火を放つの役務を演じ。以て歐羅巴全洲を猛火裡に包むの先驅たらんとしたるが如し。幸に佛國の彼を制せしに依りて此かる非行を演ずるを見るに至らずして止み、而して彼の爲さんと試みし所をして行はしめざりしが故に、佛國は烈火の如くに恚せる或る强國の前に其腰を屈するの汚辱を被らざることを得、且つ其の友國たる英國の惡感情を惹き起すに至らざるを得、かくして其の至大なる利益を保ち。至大なる本分を



THE JAPANESE DREAM OF VICTORY.
The Bear in chains supporting the conqueror, who rejoices in a huge war indemnity. —*Australian Review of Reviews* (Melbourne).

完くし、危急の日に際して能く其の危難を脫するを得たりき。

我が佛國人中、デルカッセ氏がモロッコに關する英佛協約を利用して獨國に對し挑戰的態度を執らんとせしを阻礙し、且つ該協約が決して或る脅迫又は挑戰的意味を有するものに非ざることを論說せし人々は、即ち往きに英國との親交を保維するの障碍となるべき種々の僻見及び感情を排解するに努力せし人々にして、之と同じく英國と親近なるが故に獨國との衝突を惹き起す無からんとして努めし人々は、即ち我國と英國との親交を害ふ底の協約を獨國と締結する無からんとして盡力せし人々なり。吾人は固より佛國政府をして英獨兩國と共同の地位に立ちて共同の動作を爲さしむること易事なるを言はず、我が佛國人或る者はジャンダーク及び聖ヘレナの故を以て英國を怕嫉し之を視ること仇讐啻ならず、而して其或る者は又た千八百七十一年アルサス・ローレイン喪略の故を以て獨國を怕嫉し。之を視ること仇讐も啻ならず、將た我が國人中には英國が自由國たり議院政治の母たり且つ自由工業國たるを衷心より嫌忌して獨國との間に對英國同盟を締結せんことを主張する者あれば——此の一派の人々中には所謂國民主義を抱持する者多きを占む——、又たビスマルク及び維廉の爲め本國領土の一部を强奪されたるを懸痛し英國と相携へて對獨逸同盟を形成せんことを主張する者あり——此の一派の人々は前者に比ぶれば其の數稍々少きも、而も陽はに愛國主義を標榜して世を欺く底の者に非ずとす——。則ち我が國人中には斯く英獨兩國に對して怕嫉怨恨を懷ける者多きを見たりと雖も、幸にもゾーシアリズムの漸然發達せし結果、敢て千八百七十一年に於ける獨國の領土侵略を忘れしに非ざるも、而も兩國の親交を保維するの必要缺く可らざる手段は決して殘虐且狂妄なる戰爭にも非ず、又た彼に對して或る復仇的方略を用ふるにも非ず、即ち平和の際に益〻自由と正義とを涵養し、以て民主主義の發達を輔くるに在るを知る者愈々多きを加へ、而して此等平和のチャムピオンは偏に英佛兩國間の親交と一致とを助長せんが爲めに力を盡し、時に其の奮鬪的盡力の結果を妄用して或る國際的抗爭の手段に供せんとする者あるを見るは、實に彼等の甚だしく苦痛とする所たり。

獨國は其の英國に對する怕嫉心よりして、英國と協約せる我が佛國共和政府に對し非常に激昂の態を作しつゝあり而して英國は其の我國に對する好愛心よりは寧ろ獨國に對する怕嫉心の熾んなるよりして我と提携共動せんと欲し、今日に於ける我が國狀は恰も兩々相ひ敵意を挾み且つ互に他を傷けんと腐心せる兩個の婦人中に介まれる不幸なる男子の地位と相似たり。而も吾人は決して兩國の熟れもに對して既往の敵意ある行動を再演するの愚を敢てする者に非ず、寬宏に冷靜に沈着に計畫して先見且つ强剛なる政策を採り、以て人類一般の福利を進め世界全體の利益を進めんことを主とす、即ち吾人は夫の無益にして有害なる武裝的平和をして跡を絕たしめ、依りて以て浪費多用なる陸海軍備の擴張を止め、列國を破產の境遇より脫せしめんと欲す。此事たる實に目下に於ける非常に切要なる事にして、今日は正さに十九世紀の中期以下に接踵續出せし平和の大政治家たるピール、アベルデイン、グラッドストーン、コブデ

ン及びブライト等の唱道採用せし崇高且つ功德多かりし良善の政策を復興すべきの時機にして、是れぞ眞とに一大平和同盟を形成すべき唯一の好方策なる。但だ英國に於ては千八百八十五年以來、自由黨の勢力頗る振はず、獨り保守黨の勢力のみ益々增長し、ソルスベリーズムよりしてチエムバレインズムに轉じ、更にバルフォーリズにム再轉し、是が爲めに帝國主義及び軍國主義の猛然として勃興するを見たりと雖も、英國民多數の意見が我が佛國の平和政策と一致すべきを推測するは決して忘想に非ざるべし。

英獨兩國に對し誠心實意を以て親交を竃くしつゝある間に在りて我佛國の勢力と利權とを增進するは、即ち佛國の神聖なる義務なりとす。今や十九世紀の中期より一層崇貴にして一層博愛的なる外交政策を採るべきの時機方さに熟しぬ、吾人は單に此兩强大國の一方或は他方とのみ親交を締結する如き不具なる協約を以て滿足すべきに非ず、吾人は始終吾人の眼前に更に一層崇高偉大なる目的――少く共理想を有するを要す。二十世紀の劈頭に於て百事皆新紀元の發現を告げ、あらゆる文明國人は智力上にも道德上にも經濟上にも政治上にも皆悉く然らざるなきを見るべき運命を有てるが如く、一方に於て萬國共動主義は漸然に其の頭首を擡げ、資本は此の廣大無邊なる人類團躰間に阻碍なく流通し、勞働者は全世界齊一の觀念を懷きつゝあり、國際會議は文字、電信、專賣權、外國貿易、移民等に就きて審議協量し、其他全世界に於ける財政上の利益をも交換しつゝある間に、他方に於て偉大なる世界的帝國は愈々益々其の優越權を擴展しつゝあるもの、是れ即ち見下に於ける世界の狀態たり。



THE POWERS AND JAPAN.

Before and after she became a world-power.

—*Floh* (Vienna).

今や問題は既に吾人の文明が人類の歷史的一廻轉の終りに際して再び

中軍國的中工業的なる一大帝國の現出を見るべき乎、將た吾人は竟に世界的一大合衆國の成立し、自治的社交的民主政治の泰平なる發達を遂ぐるを見るべき乎といふにあらず、問題は實に他日一大革命の起るありて世界全體を統合するの後、果して遍く其の各部に自由を與ふべき乎、將た我が佛國は彼及び黄金の一大帝國創建さるゝの後其の一小領屬と化すること恰も夫の亞歷山大王の統治の下に雅典が其自由を失ひしが如く又羅馬帝國成立の後一大威力の其全領土を掩壓したるが如くなるべき乎といふに在り。而して此の問題は啻に佛國民にのみならず、又た實に西洋大強國民の齊しく熟考すべき價値あるものなり。

歐米に於ける都市經營事業

山口孤劍

人動もすれば、バーミングハム、グラスゴー、リバープール、マンチエスターの市政の美を說き、其の市營事業なる電氣、瓦斯、水道、公園、馬車鐵道、公立浴場が宏壯偉大を讚說すれども、今や歐米に於ける市政の發達と進步はそれのみに止らざる也、バーミングハム、グラスゴー、リバープールの市營事業の善美なる成蹟を見たる各都市が其の蹤に倣はんとして、都市革新の聲が如何に火の如く雷の如く起りしよ、希くは余をして近時歐米の都市に於て成功せし都市經營の事業なるものを紹介せしめよ

（一）建築物

▲市場　マンチエスターは壯大雄麗なる市場を有し、毎年少くとも一万五千圓の利益を得、リバープール市場は年々一萬四千圓の利益あり、ブレストン、ベルフアフト、ブラツクボロン、クルウイツチ亦之れを有して毎年三千磅より五千磅の收益あり、伯林の市場に至つては其の壯大マンチエスターと比肩して、其統計に依れば市民に與ふる純益金六十四万五千弗に達すと言ふ、又巴里の公立市場も年々一千万フランの純益を得つゝあり

▲青物市場、屠獸場　エデンボローの中央には地方より持ち來れる青物や魚類を鬻賣すべき市場あり、巴里の中央亦青物市場ありて電氣、蒸氣、瓦斯、鐵道、あらゆる文明の器械を設置して顧客の便に供し、名は青物市場と雖も燦爛目を眩せしむるものあり、又他に屠牛場を學校、教會、停車場、公園などに遠ざかりたる偏僻なる地方に置て、人の感情を傷けしめざるに力め、外面は青草や野花に掩ひかくして屠殺てふ醜惡の念を起さゞらしむ、而して年々の收益一千万フランに達し、公共の衛生事業、慈善事業に消費しをれり、伯林市の屠牛獸の如きは世界に其の比を見ざる壯麗雄大なるものにして、其の資本金實に五百万圓にして年々四分の利益ありといふ、蒸氣、電氣は器械の運轉を助けて一大城郭の如く、鐵管を以て淸水を貫通して、常に淸潔を保たしめ、年俸八百圓乃至九百圓を以て雇ひたる最も獸類學に精通せる數十名の醫師を派して獸畜の檢査

を爲し、其の檢査濟の印紙の獸肉に貼付せらるゝものにあらざれば市中に販賣するを宥さずされば伯林市民は決して腐敗せる獸肉を喫ふの危險なしと云ふ、グラスゴー亦伯林屠牛場の制度を襲用して、多くの顯微鏡掛りの婦人醫師を置き、獸肉を分析して有害物の有無を檢査して後初めて市中に販賣するを許すといふ

▲**船渠**　ブリストル市は資本金一万千五百弗を以て航海業者の便利の爲めに市自身之れを受負ふ船渠を作り、リバープール市亦之れに倣へり、皆之れロンドン船渠の成績の甚だ佳良なるを見たりしに依れば也

▲**浴場**　リバープール、レミングトン、ハロゲートには市の公共浴場あり、大理石を敷きつめて、浴槽、鏡面、裝飾器の美麗なる人の驚嘆に價するものあり、其の建築法皆土耳古式なり、ノチングハムの公共浴場の如きは、浴場の周圍は欝蒼たる深林にして、青草の緑流るゝが如く、紅黄紫白の野花之れに點綴して、羊、兎、鳩、小鳥などを飼養して、宛然一個の公園の如しといふ

▲**旅館**　公共旅館を設立すべしとの絕叫は、歐洲の都市の識者間に喧しく、佛蘭西のグレノブルには已に市有料理屋さへありて、安價にて料理を調へ、市の各團隊の集會は多くは市有料理店にて催されつゝあり、グラットフォード、バーミングハム市などにては、公共旅館ありて、宿泊料の如き嚴重に一定しあれば、村落より初めて出て來りし人の安宿に連れ行かれて高價なる宿泊料を貪らるゝ如きことは全く其の迹を絕てりと紐育市のシラキュスには市設宿泊所あり、二週間以內は何人も宿泊なすことを得而して宿泊料は市內掃除をなして之を拂ふことに定りたれり

▲**學校**　ノチングハムにては市立の美術學校、歷史博物館あり、その市自ら高等學校、大學校を設置せし時の如きは、英國地方の輿論を喚起して、ノチングハムに倣はざるべからずと敎育者をして叫ばしむるに至れり、バーミングハムこれに倣ひて市立の高等學校、大學校を創め、リバープールも之れに倣ひて市立の高等學校、大學校を起し、學校の休息場の如きは、宏大なる庭園にしてあらゆる草木花卉を培養して、植物館も及ばぬ程の美觀を呈せしむるに至れり

▲**印刷所**　ボストン市長クインシー氏は、同市に市有印刷所を設置せり、一千八百九十九年七月の報告に依れば、一年間の利益一万三百六十六弗に及ぶといふバットルシー市亦印刷業を營みニューヨーク、ワシントンの兩市亦之の制度を襲用せんとしつゝあり、思ふに、市役所、市會、市敎育會、市衛生會、其他市立の各團隊が年々夥多の印刷物を市有印刷所に受負はすことの如何に迅速に便利に安價に運ぶべきか、市直接印刷所に付ずることとなれば受負人に渡す金は以て印刷職工の懷に入るを得ん

▲**病院**　如何に私立病院が患者に對し不親切にして而も暴利を貪るに力めたれるか、患者は常に醫師が營利の犧牲たらざるべからず、セッフヰールド市は肺病患者の爲め市立の病院を設け、ハリファックス市は猩紅熱患者の爲めに市立病院を作り、グラスゴーにては男女の酒徒を收容すの目的を以てアイルシャイナに土地を求め、病院的家屋を建築せり

▲**劇場**　ブライトン及びサウスボローは市有劇場を有し、カルメット市

亦市有劇場あり、年々得る此の利益甚た少なからず、インデイヤナポリスのフアクリン市にては市が嚴重に劇場を監督し、劇場より出づる利益の多部分は市の收入として公共事業に使用しつゝあり、サウスポローには市有競馬場ありて一年六千磅乃至二千磅の利益あり

▲裁縫所 リバープールには貧民窟の夫を失ひて生活に窮せる寡婦の爲め市有裁縫店を設け裁縫を課して其の收益を以て生活を助けをれり

▲質屋 シカゴ市に市設の質屋あり、巴里市にも市有の質屋あり、細民の爲め安き利子にて質を供し、而も一千八百三十一年には九割、一千八百八十六年には八割、一千八百八十七年には七割の利益あり、一千八百九十三年には一万四千フランドの利益金を以て病院を造るに至れりロンドンには私立の質屋は一百九十三軒の多きに達すれども、マドリッドには六軒、フラッシエルには七軒、巴里には十軒、伯林には十二軒にて充分なりといふ、これ亦單にて足る市營事業の特長なるべし

▲專賣店 シエフキールド市にては七万五千弗を以て專賣店を造り、之れを希望の者に供與して、その地代より市費の幾分を補ひつゝあり

▲火葬場 フル市には市設火葬場ありて、市民の葬儀は皆此處にて營み、頗る便利なるものなりといふ

▲奉公人口入所 トレドーに市長ウヨオネ氏等の盡力に依りて設立せられたる市設奉公人口入所ありて、村落より失業して都會に職を求めに來れる男女の周旋をなし、成績甚だ善美なりと、

（二）製造物

▲酒類 瑞典那威瑞西にて行はれつゝあるが如き酒類の專賣を都市の手に營まんとするの議論甚だ盛にして、ダンフエルムリンに於ては各村落に酒類の專賣を營み、千八百九十六年より七年まで各利益六百磅を下らざりき、グレショット、ハンツ、ハレプトン、ルシイ、ウアウイツクバーミングハムに於ても同一の制度を採用して利益甚だ多く、セネヴアにては酒類の製造を一手に引き受けてより一年三万三千弗の利益を得、又エレン、ラッドノリシャーにても村落組合を作り、酒類が共同製造業を營まむことを決議せり、英國各市亦嚴重なる監督を酒類製造業に行ひ、全く有毒物が混合せる惡酒をして其の跡を絶たしむるに至れり

▲廢物 英國の地方の小都會にありては廢物を利用して電氣を作りつゝあり、伊太利の各市亦塵芥の掃除を市の一手に引き受けて其の利益を以て市の事業に消費せんとしつゝあり、マンチエスターは瓦斯製造より來る廢物を利用すべく、二千名の職工を集めて石鹼、油、灰泥を製造しつゝあり

▲各種製造業 ベットルシー市は鋸木業を營み、ウエストハム市は敷石製造業を用ゐ、セッフキールド市は鉛管製造業を行ひ、ホレネマウス市は打球の製造業を執り、バロゲートム市は鐵器の製造に從ひ、トルクエー市は兎を飼ひ、コルチエスター市は牡蠣を養ひ、タンブリッヂウエルス市は牛馬を飼養すべき野草を培養し、リバープール市は日用の食

品とすべき野菜を培養しつゝあり、英國の都市にてはストーブや瓦斯裝置器や、送電計量器までも市營事業となさんとする議論喧しく、リバープールの如きは職なくして運途に泣く寡婦をして市の公園の樹木や花卉を培養せしめその孤子をして市に牛乳を賣らしめ、彼が生活を扶助しつゝあり

結論

歐米の各都會に於ける市政の發達眞に驚嘆するに値せずや、正直なる科學の靈壇にひれ伏して敬虔なる心を以て其の敎訓を聽く文明の民は多幸なる哉、都市は我等の家庭也城廓也、我等この家庭と城廓の昌榮と隆盛進歩を希はざらんや、進化の怒濤は捲て起れり、澎湃天空を涵さんとす新酒は古嚢に盛るべからず、舊布は新布を縫ひ難し、國民よ何ぞ封建の夢より覺めて文明の福音に汝の耳を傾けざる

▲豫告

戸水寛人氏
竹越與三郎氏
芳賀矢一氏

の三氏は多分次號の誌上に寄稿せらるべし



明治闇黑史（十一）

有磯逸郎

○河野廣中等の福島事件（中）

『剛情我慢の三島縣令は、「屁理屈駢べる東北の自由黨員を挫き吳れんと、前に言つたやうに、會津地方の士族原を抱き込み、滿十五歲以上、六十歲以下の男女は、猫でも杓子でも、夫役を命じ、町村聯合會の可決したのを之れ幸機と、その翌日より、附近の町村民を逐つ立て、工事の實測に取り掛つた、その遣り口が、三島式で、士族の中より、屈强の者數人を採用して道路掛を命じ、なほ郡長以下の官吏は、何れも勤務を放つて、道路に出張し、やんやの聲を揚げて、實測を進行せし

めた」

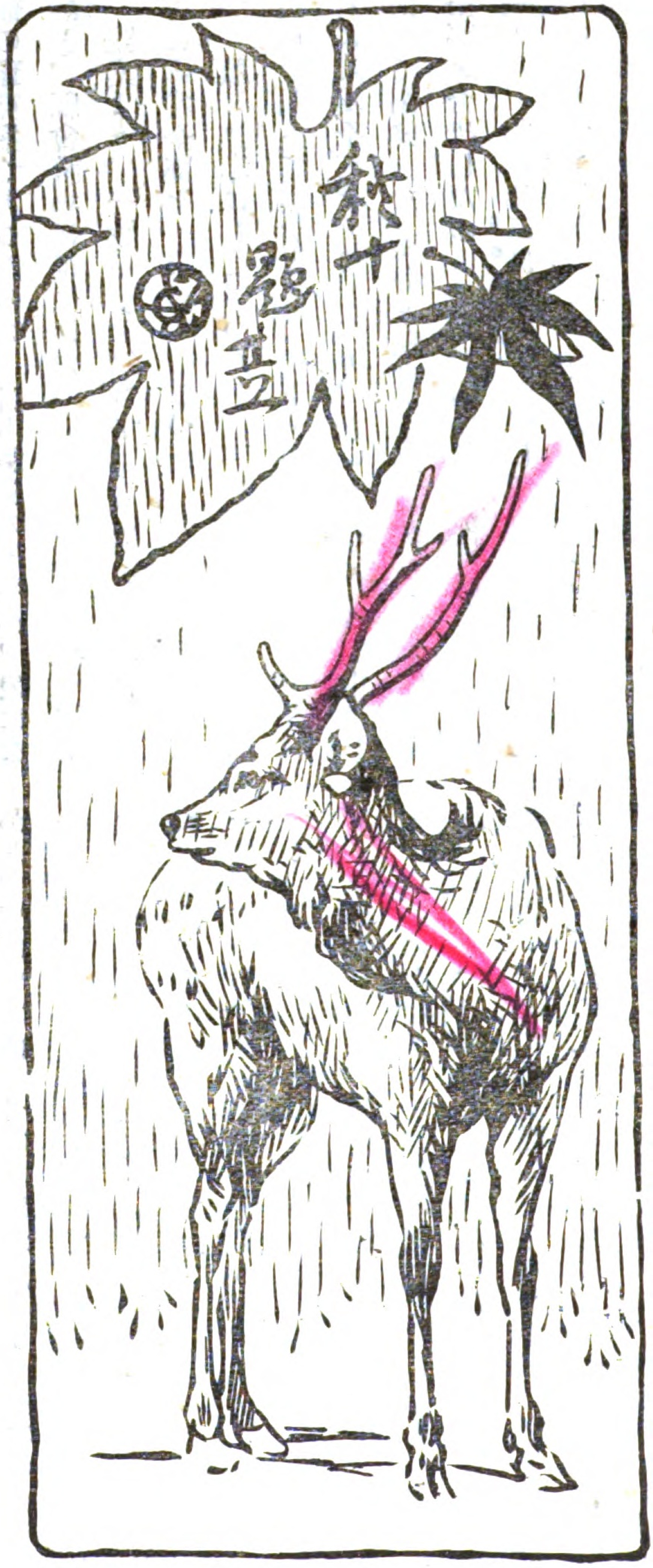
『と一ト息に言つて仕舞へば、さら〳〵さつと三島の意が通つたやうぢやが、三島自身の胸中に入つて見ると、どうして〳〵、其様手ッ取り早く、此處まで來たのではないわい。その間に慘憺たる、幾多苦肉の計畫も交つてゐたのよ。先づ、三島が第一に試みた方策ちゆのは、會津士族の窮乏を利用したのぢや。政府に出願中の士族授產金を囮に使ひ、急速下附さるゝやう盡力すべしと遣つたものぢやから、明治維新の當年には、東北に覇を稱へて、薩長に對抗した會津武士も、海月のやうにぐにや〳〵となつて、三島の前に平身低頭した。ヤ、どうも貧乏といふ奴ほど恐ろしい敵は無いわい」

『三島は、恁う蜜のやうな甘言を以て、貧乏士族をたらし込んだばかりでなく、工事附近の町村民に對すると、別に工夫を凝して、旨い口實を考へた。それは、三島の勢力を以て、國庫より二十萬圓の補助金を得て來ると吹いたのよ。二十萬圓といへば、當時は大した金高に聞いたので、聯合會議員等は、譯もたわいもなく、二十萬圓といふ呼聲に釣られて、贊成した。最も此の工事は、會津地方の利益になる、といふのも人民等の動いた原因であつたに相違ないが、數十萬圓の大工事に對して、直に贊成したといふものは、此の國庫補助といふ奴が、酷く町村民の耳に、音樂のやうに聞へたらしいのぢや。音樂といへば、三島は、妙に芝居氣のあつた男で、後に土木工事に着手した時、人夫を三十人五十人と組を作り、笛太皷の類を鳴らしてドンチャン〳〵、丸で祭禮騷ぎ、それに酒は飲み放題、附近の酒屋より菰冠を徵發して、人夫を逐ッ立てたので、茶々無茶の中に、工事が進んだと聞いてをる、ハッ〳〵、三島も隅に置けぬ男ぢや」

『なんだか談話は、岐路に入つたが、六郡聯合會が、土木工事を可決したと聞くや、福島縣の自由黨員等は、何れも三島の無法を憤り、特に其の頃は、自由の泰山北斗と崇めてゐた板垣退助の、岐阜遭難の當時であつたから、政府を惡むの念は破れんばかりなるに、相手

は三島と來てゐたから堪らない、壓制といふもの丶結晶した大惡魔が、爰に三島通庸といふ人格と爲つて現はれたやうに、三島の人物を三倍も五倍も大きく眼に描いて、地團太踏んで、三島の暴横を憤つたのぢや。「我黨は我日本國に在つて壓制政府を顚覆し眞正なる自由政體を確立するを務む」といふ彼の誓約書が、河野、田母野、花香等の間に取り換はされたのも、丁度此時であつたのよ」

『無名館を中心とせる自由黨員等が、何れも右のやうな反抗心を持つて、寄ると、觸ると、蔭口を利いてゐる其の最先に、通常縣會が開かれた。縣會に提出された豫算案を見れば、通常の經費に十萬圓も超過した多



額の豫算案であつたので、自由黨員の不平が、爰に公然と、縣會議場に現はれた。滿場、殺氣を帶びて、第一號案より、一款一項を餘さず、片ッ端から否決して、遂に議案全部を否決して仕舞つた。書記官の村上楯朝が、顏を眞赤にして爭つたが、耳を假す者なく、自由萬歲を唱へて、縣令には、管下公衆の輿望に副はざるが爲に議案全部を否決したり、といふ簡單なる開申書を出して閉會した。縣令と縣會の衝突も多かつたが、議案全部を否決したのは、此の福島縣會が權輿ぢやらう』

『ナニ、此の時三島通庸は如何してゐた？』、我輩は三島の番人でも無かつたから、能くは知らぬが、議會中は、福島に居るのが面倒と、前途を見越して、なんても飯沼の溫泉とかへ入浴に出掛けてゐたそうぢや。之が三島の奥の手ぢや、彼奴は土木工事も起こすが、溫泉に逃げるとも知つてゐるわい……三島は、溫泉て、悠々としてゐたが、縣會の開申書を見て、今更のやうに驚き、直に東京參事院に具狀して、原案執行に及んだそうぢや。怎ふ爲ると、三島も、左樣て御座るかと、河野等に負けて居られぬだらうてはないか』

『三島と河野等との衝突に就て、まだ一ッ言ひ遺こしたとが有る。それは三島は、政府の意を受けたものか、或はまた三島の一存であつたか、其處迄は我輩の知つた所でないが、福島縣に赴任すると、會津士族を語らつて、帝政黨の普及に取掛つた痕跡があつたのぢや。て、その手初めに、若松に、青年を糾合して、日新館といふものを建てゝ、擊劍の稽古を遣らせようつた。無論、費用は、三島の手から出たのぢや。言論時代に擊劍の稽古！、木に竹を繼いだやうぢやが、之は此度新發明の、三島の工夫でも何でもなく、帝政黨一般の思想を代表したもので、自由黨員には、蛇蝎の如く嫌はれたにも拘らず、會津士族等に迎へられたといふのも、一ッは此の木に竹を繼いだ三島の人物が、會津士族等と吻合した處があつたのかも知れぬ……てあるから、福島事件といふ奴を今から靜かに吟味して見ると、餘程面白いのぢや。一方には、縣令と縣會の衝突てあつたが、また一方には自由黨の或思想と、帝政黨の或

思想との衝突とも見え、更に他の一方には、舊士族と平民との衝突にも爲る。ハッ〳〵、大した議論に爲つたわい」

「議論は如何でも良いとして、議案全部を否決して、縣會が閉會したのは、十五年の五月十四日であつたが、それより僅に一ヶ月と十五日を過ぎ、六月廿九日といふ日に、三島は、傲然と、若松三線路を査定したる旨を縣民に公達した、いよ〳〵大土木工事を起こすとに定まつたのぢや!。國庫補助の交附を待つて、初めて着手せらるゝとと信じてゐた六郡聯合會議員等も、寢耳に水、國庫補助は如何爲るのか、悉皆譯らぬのに、三島はぱつぱと線路の査定を公達したものぢやから、その不信を怒つて、聯合會議員等より、先づ反對の聲を揚げた、耶麻郡下柴村議員の宇田成一といふ男は、卒先して、六郡幹事に檄を飛ばし、議員半數以上の同意を得て、臨時會開會を北會津郡長に迫まつたのよ。郡長、動ずる色なく、書面之趣難應請求候事、と來たから、六郡聯合議員の多數は、爰に縣令と郡長の横暴に對抗し初めた」

「すると、縣令の方でも、若松帝政黨を一夜に製へて、對抗した。村上楯朝は、新道起工式に列るといふのを名にして、若松に出張し、郡長等と、之れ見よかしに、例の日新館に出入して、自由黨員等の度胸を拔いた。一體、村上楯朝といふ男は、其の頃は少書記官で、大した役人でもなかつたが、小才の利いた、器用な男で、それに三島には不得手の、ちよと小理屈も拈つたから、三島も、大に調法がり、縣會などには、何時も村上を出して、お茶を濁ごしてゐた。左樣ぢや、村上は、三島の張良、陳平、今から考へると、當時の對自由黨策は、此の村上の指金から出たらしいやうにも思はれるわい……若松帝政黨なども、此の男の胸から現はれた蜃氣樓よ」

「火蓋は、帝政黨の方より切つた。聯合會の開會を發議した宇田成一が、其の頃郡長訪問の爲に、若松に出て居ると、或夜、帝政黨に屬する道路掛の者共、酒氣を帶びて、宇田の宿所を襲ふた。寢所に就いた宇田を

呼び覺まし、手當り次第、袋毆きに爲た上に、道路事業を妨害せず。といふ誓約書を、無理矢理に取つて、引き上げた。丁度田母野秀顯も、福島自由新聞の株金募集の爲に、若松に來て、宇田と同宿してゐたので、傍杖食つて、酷い目に會つたそうぢや』

『宇田遭難の報、四方に傳はると、縣下の自由黨員は、何れも帝政黨員の暴狀を憤り、之も三島の意を受けた村上の指嗾なるべし、と赤城平六、五十嵐武彥、三浦文治、乘子常五郎、山口千代作などいふ一騎當千の連中は、宇田の見舞を兼ねて、若松に集り、種々協議の結果、運動に一步を進めて、曲直を勸解裁判に爭ふべしと一決し、訴訟委員を撰びて、直に運動に着手した。や、いよ〳〵騷擾が仰山に爲つたわい』

『若松方面は、右のやうに騷いでゐたが、陰謀本部の福島は、如何てあつたかといふに、河野廣中は、參事院出頭の爲に、東京に出て留守であつたが、愛澤寧堅や、平島松尾等は、無名館に陣取つて、若松より到達する警報を受取つてゐた。ナニ、例の誓約書を書いた花香恭次郎は、此時如何してゐた？左樣さ、彼の男は、縣會否決事件を集錄して、出版したといふので、縣令誹毀罪とかに問はれて、監獄にぶち込まれてゐたやうに覺えとる……福島市街は、那處となく、わや〳〵と騷いで、縣官の繁忙、警部巡查の奔走等は、著しく人の眼につく。愛澤等も尋常ならずと見て取つたが、若松方面の模樣が、判然せぬので、鎌田直三、佐藤清の二人を撰拔して、若松に送つた』

『議案全部の否決、續いて若松地方の紛擾等、世間に傳はると、隣縣の壯士等は、續々と、福島縣に入り込んでくる。終に、軍用金調達の爲に、神田小川町で、强盜を遣つて失敗つた門奈茂次郎の如きは、イの一番に遣つて來た。群馬縣の伊賀我何人も遣つて來れば、土佐の荒尾角藏等も遣つてくる。その中に、河野廣中等も歸つて來たが、今から回想して、異彩を放つて見へたのは、三島の後を狙つた原利八と、同志を賓つて、秘密探偵と爲つた安積戰ぢや』

重ねて末松博士に質す所あり

野口米次郎

末松博士が余に答へたる一文を初めて讀んだ時は之に關しも再び筆を採らざるを雅量なる行爲と思つて等閑に附して置いたのであつた。

(確に余は大笑一番したといふを白狀するのである讀者諸君何故に余は大笑せるかと問ひ玉ふな學者、末松氏は學者といふ小天地に浮動する人間たるを恥ぢて政治家たるを喜ぶの人であらう、學者の態度として感心せざる所あると讀むで寧ろ憫然なりと思つたのであつた博士は斯くまで狹量にして事を解せざるの人なりとは思はなかつたのであつた。)

今日朝來より在宅して彼是と書物を亂讀して居たが机上にある中央公論に目を留めて再び博士の返答を讀むだ次第である、返答せられて言を發せざるは失禮である巴里の遠方より返答せられて之をアクノレッヂせざるは失禮の大なるものであると思ひ茲に再び博士に質す所ある所以である。

末松博士、再び後進生たる余に敎ふる所あらむと切望致します。

最初に於て余とても日本の學力に於ては博士が亂暴にも斷定せらるゝ如く不完全なるものにあらずと自信して居り且つ御製の意義を解し能はざる程のものにあらずといふを申上げる、御製は單純と誠實との言辭であつて百萬の日本人に容易に了解せられ得るのである容易に了解せられて初めて御製の光彩を放つて感化力を有する次第である。

元來英文英詩の上乘なるものは適當で平凡ならざる形容詞と動詞を使ふ所にあるのである形容詞は衣服の樣なもので動詞は則ち擧動である美なる衣服を纏ふて優雅なる擧動をして英詩といふ美人は活動する博士の御製英譯に於ては其點に於て注意が足らざりしか手腕が不充分なりしか余は少からず不滿足あつて博士に質す所があつたのである。

「見等は皆」の御製に於て「余は想像する」といふ不必用で薄弱なる言葉を入れられたるを非難したのであつた果して「山田守るらん」のらんの飜譯入用といふ次第ならば何にも好むで「余は想像する」などゝ入れんでも WOULD といふ字を都合好く用ゐたらば充分に立派に役に立つてはあるまいか。

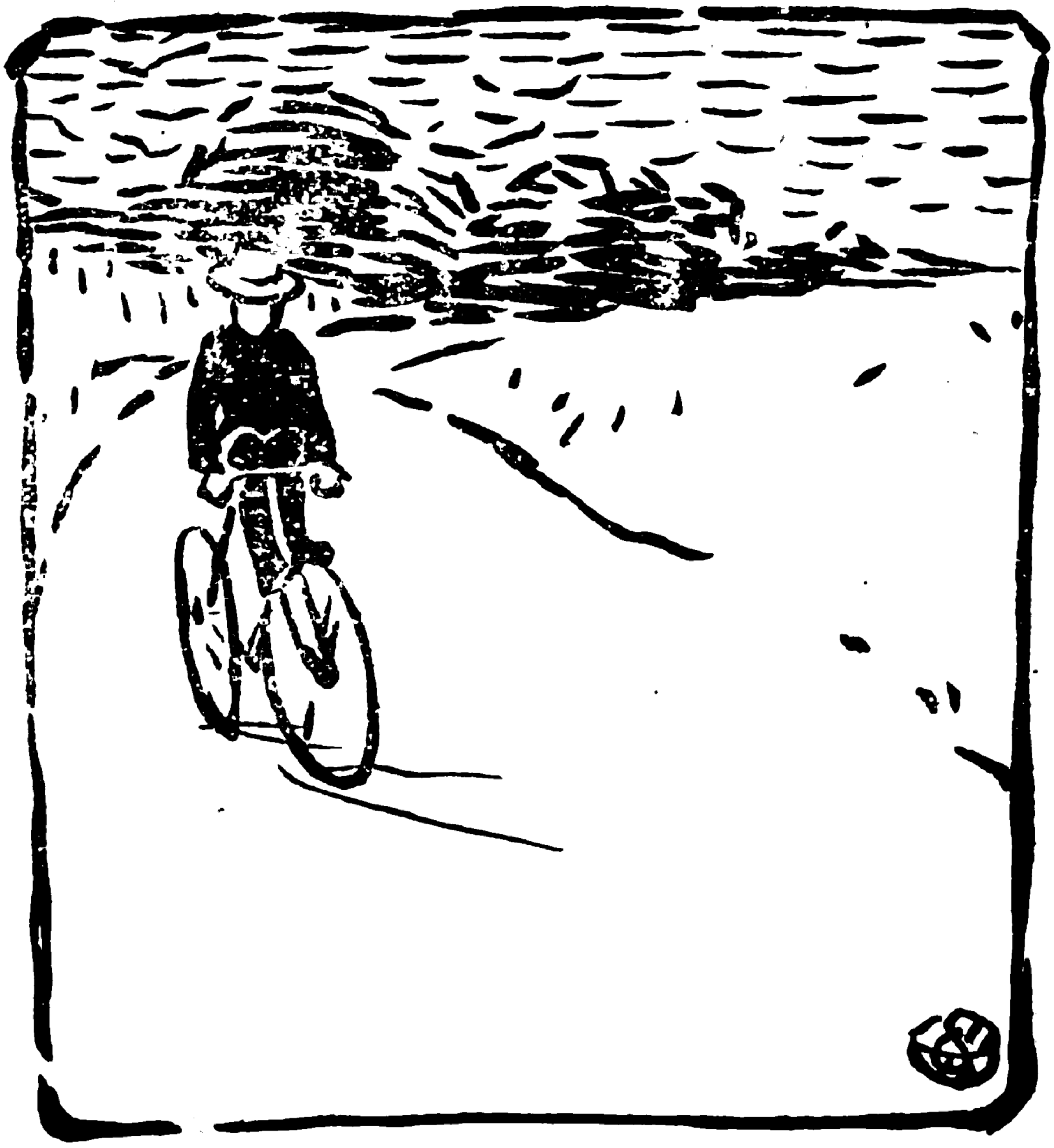
詩（日本の歌も其中にあり）は餘情あつて初めて詩たるの價値あるのである言葉を適當に巧妙に省略するの呼吸を了解して詩作の名人といふのである末松博士は家に殘りても一人にあらざるとあり老翁一人家に殘り居るといふ意故に「獨り」も「家で」も肝要なりと云はれるのである、余は御製の「獨り」といふ言葉は果して「一人」といふ意義なるやを疑ふのである必ずしも「一人」といふ數學的の言葉にあらざる可し余は「唯寂しそうに」といふ意義なる可しと斷定するのである「家で」といふ言葉、御製に無き所の不用の文字を入れて何程の美を歌の上に加へるのであるか左程詩的感念を附加せざる言葉は詩中に入れざるを善なりと思ふ次第である「唯寂しそうに」といふ ALONE といふ文字ある以上は何を苦むで「寂しき田畑」といふ寂しきといふ形容詞を入れる必用があるであらうか此御製の如きは戰爭際中での御製で斯る有つても無くても全體の上餘り關係せざる言葉は寧ろ有つて歌其物を小にすると余は斷定したのである。

to the Front を戰鬪方面と解する事も出來れどと末松博士は云へど勿論解する事が出來るの出來ぬのといふのは英語を知らざるものゝ言である戰爭中でフロントへ行く殊に御製の見等が皆フロントへ行くといへば博士が所謂「武器の下に其職を盡す爲め」に出掛けたるのである若し博士が「武器の下に其職を盡す爲め」といふ言葉無くして了解するとが出來ぬものは最初から詩歌の何物たるを了解する能はざる濟度す可からざる凡物であるのである詩は數學の説明にあらず重ねて云ふ詩は説明的たるを賤しとして言葉を省略して餘情あるを尊しとするのである又余はフロントといふ字を欲せずして Battle Field といふ文字こそ適當なりと云つ

たのである。

「夢醒めて」の御製て Each time は妙ならずと云つたけれど全然取除く可しといつたので無い然らは如何なる文字と余に問はれんが「夢醒めて先こそ思へ」といふ意義を譯するに種々あるのであるが其イーチ、タイムといふ文字が無くても否な無い方が寧ろ詩の意義を制限しないで面白いのである若し强いて其の代りの文字が入用といふとならば whenever といふ文字の方が遙に勝つて居るのである余は玆に三度重ねて云ふ詩は說明的では其價値が無いものである詩は數學の說明とは異なるのである「千早振」の御製て as I dare think も「見等は皆」の御製に於ける如く「らん」といふ文字必用なりといふとならば何を苦むで「朕は敢て然りと思ふ」などゝいふ說明的の文字を用ゐたのであるか Should といふ字を用ゐて都合よく役に立たせた方が巧であるのである余は末松博士が「らん」を譯さむとて多大なる勞を取られたるを多謝するけれど寧ろ其勢に價せざるの結果を顯はしたものと云はねばならむのを悲しむのである。

勿論嫦娥と云へば漢詩ては月の事である然れども日本の歌の中へ漢詩の嫦娥といふ文字を入れたら日本の和歌詩人は何むといふてあ



（秋十題其二）

らう余は luna といふのか月の代りに用ゐられて居るのを知らぬ程無學で無いのである然し何を苦しむで異つたトラデションとアッシエーションのある言葉を入れねばならぬかを疑ふのである尚ほ日本の歌に支那の嫦娥を入れるのを欲せざるが如くルーナを日本の歌の翻譯に入れるのを欲せないのである其れでも博士は入れたしと云はれるのであるか。

敢て博士に質す所如何　（十月十五日）

思考の惰性

文學士　片山正雄

物理學に惰性の法則が有るが、精神界にも思考の惰性（Denkträgheit）と云ふ法則が行はれて居る。元來人間と云ふものは怠惰なもので、必要の無い限は出來る丈安逸に耽らむとする傾向を有つて居る。其れのみならず、生存競爭の激しい世の中では、人は口腹を養ふに忙しい爲め、思考などする暇も少くなつて來て、一寸考へれば直ちに解る事でも、考へるのが億劫で知らず識らずの中に、善く考へた人より見れば、解り切つた理屈でも、つい知らずに過ごす事が多い。世上幾多の迷信や謬見は悉く是れに基き、精神的文明の進歩を少からず阻害して居る。

聰明な頭腦を集めた文壇にも此の法則は行はれて居る。殊に古人の金言や諺の中には、飛んでも無い嘘が書いて有る事が少くないが、古から人口に膾炙した事と、其人の「權威（オーソリテー）」と、及び修辭法の巧妙と云ふ諸種の原因から、思考の惰性を生じて、斯る嘘を眞理だと思ふに至るので有る。又或る思想を書き現はすにしても、對句等の修辭法に迷はされて、知らず識らず眞理を傷ふ事も有れば、作者自身が己れの思想は眞理でないと知りつゝ、文章が旨く出來たゝめ、之を發表して天下後世を欺く事も有る。天才ならざる詩人や、徒らに奇警な語をなして、虚名を博せむとする文學者には、此の弊が有る。人の目を眩ますやうな絢爛な文章や、人をしてアッと云はせる底の思想に對しては、宜しく

眉に唾して考一考すべきで有る。例へば「詩は有聲の畵、畵は無聲の詩」と云ふ警句が有る。これは幾世紀の間文人墨客の間に、金科玉條として引證せられたる許りで無く、今日も猶ほ考へる事の可厭な人の頭を支配して居る。所が今より凡そ百四十年前に、レシングの「ラオコーン」(湯原亢一氏譯「詩味と畵趣」)に於て、この對句が化の皮を剝がれてから、頓と行はれ無くなつた。所が化の皮を剝いだレシング其人の言論にも、今となつては中々信用の出來難い點が鮮はれて來た。當に成らぬ者は水の流と人の身の上。などとえらさうな事を云ふ拙者も、奈何な間拔を云つて居るかも知れぬ。神樣は中々の Ironiker(イロニケル) で居らつしやる。

現今文明史や文藝の批評を遣つて居る人々の中に、文藝と國民性との關係を最重視するの餘、文藝は國民精神の反映で有る、殊に大文學ダンテ、沙翁、ゲーテ、シルレル、等は、該當國民の最も適切な代表者で有る、この大文學を研究すれば、自から其國民の性格や理想を知る事が出來ると云ふやうな説が行はれてゐる。國民自身もこの説を信じて、自國民の榮譽となる可き詩人、美術家及び其著作は、自分等の精神を體現した者だといつて、斜めならず崇拜して居るので有る。

この説は果して當を得て居る者で有らうか、自分は玆に之を研究して見たいと思ふ。

抑も他人の心中を言ひ當てることは容易な業(わざ)では無いが、殊に過去の國民の精神的狀態を究める事ほど、困難な事は有るまい。現今輿論と稱せらるゝものが、果して或る社會全體、少くとも其大部分の意見を代表して居るかが疑はしいと同じく、一國民の文藝は果して、其國民の精神を代表して居るもので有らうか。獨逸でも一時俗謠の長所、即眞實敦厚な趣を重んずる餘り、俗謠は一人の手に成つたので無く、誰が作るとも無く、自然に出來上つたのだと云ふ説が行はれて居たが、所謂國民文學は國民の產物だ、國民特有の事業だと云ふ説は、此の俗謠の自然的成立を主張する説と同じ謬に陷つては居ないか。なぜと云へば、文藝上の作品は個人の手に成つた者で、多數の國民が之に關與

しては居ない。而して詩人藝術家は個性の最も發達した天才で有る、常人とは根本的に違つた精神を有し、國民の精神的地平線上嶄然頭角を現はして居る。斯る天才が果して國民及び時代の代表者と云はる可き資格を供へて居るだらうか。自分の考では國民の代表的類型は、地平線以上に出て無い平々凡々の匹夫匹婦其者て有ると思ふ。然らば文藝に於ても、國民的精神を代表し、其反響とも謂ふ可き作品は、大抵文學史家や批評家先生が、俗と罵り平凡と嘲り、僅に文學史の一隅に餘喘を保つて居る、小文學者の手に成つた者て無くては成らぬ。例へば現代の明治文學に於ても、國民的(愛國的の意味では無い)精神の代表者、國民の聲とも謂ふ可き者は、紅葉露伴の作品では無くて、寧ろ弦齋の「食道樂」て有らう。この書は實に、何等高尚なる精神的興味無く、唯口腹の慾を充たすを以て、此の上無き樂と心得、人生に於て何等の意義をも見出すことの出來無い、現代の我國民の唯物的傾向の赤裸々たる表現て有る。弦齋はこの書に依つて一方では國民の俗尙を喜ばすと同時に、他方に於ては國民の「下卑根性」を暴露して、大々的侮辱を與へて居る。武士は食はねど高揚子と云ふ貴族的思想は、唯物的明治時代に於ては、早や時世後れとなつて仕舞つた。弦齋の「食道樂」はこの時代の町人根性の勝利を表はす、好箇の象徴(シユムボール)て有る。

之に反して、高尙なる藝術的作品は、國民的性情の反響では無い。又、是れを理解し得る人は、多少の天賦と、敎育とを有する比較的少數の國民に限られて居る。斯る文學か國民の歡迎を受けむが爲めには、多少の年月を要する。且つ同じ國民の產物で有るからは、多少の民族的類似が無くては成らぬ。此の類似の點が、國民と藝術家との天賦と理想の高低を平均せしめ、其作品は國民の指導者、敎育となるので有るが、決して國民精神の代表者では無い。だから其作品が眞に偉大な感化を及ぼした場合には、國民は之が爲めに陶冶せられて、次期に於ては詩人藝術家は比較的國民的に成るので有る。但し偉大なる天才が完全に、國民の精神

を代表するに至るやは、勿論疑問て有る。併かしこの點、即ち天才の個性人格が、天才の本領を成し、永遠不朽の價値を有する所以て有る。即ち理想の天才は時間の外に超然として居るから、時代が天才を生むなどと云ふ說は、又々大間違の本て、偉人の傳記などに於て、時代に重きを置き、歷史的解釋を試みむとする場合には、牽强附會に墜ることが多い。自分の所謂偉人は、精神的文明の創造者の謂て、馬上の英雄や、政治家などては無い。

次に「正義は最後の勝利者也」と云ふ曖昧な詞て代表せられた、道德的世界秩序、即ち善人榮えて惡人滅ぶと云ふ思想が、歷史上の事實と合はぬが如く、文藝上の作品も、優れたもののみが後世に傳はる譯では無い。ホメールが幾千年の後に傳はつたのは、他の幾多の史詩中最も優勝な地位を占めて居るからて有る、沙翁が不朽な譯は、其內容が不朽の思想を有して居るからだなぞと云ふ說敎は、西洋の文學史や、明治文壇の批評家先生達から、耳に胼が出來るほど、聽かされたのだが、善く〱考へて見ると、何だか怪しい議論だ。希臘の文明史を見ても、不朽の價値ある天才や作品て、後世に傳はらぬものは幾らも有る。否傳はつたのは幾百分の一に過ぎぬかも知れぬ。其僅かな材料でもつて希臘の文明はどうだ「クラシック」とはこうだと論ぜられては、希臘こそ迷惑至極だ。况んや過去の精神狀態の如き、解釋の至難なものを、二三の修辭的辭句て云ひ現はさうなどとは大膽にも程が有る。寧ろニーチエの「音樂の精神より悲劇の誕生」や、ユリウス・ラングベーンの「敎育者としてのレムブラント」(登張竹風氏「新敎育論」)の如く、史實に拘泥せず、却つて史實を利用して、自家胸中の磊塊を吐いた方が、奈何に面白くて利益が有るか知れ無い。歷史的事實の正確は、必ずしも眞理の保證には成らぬからだ。例へば史料編纂の先生たちが、辨慶や兒島高德は虛構の人物だと證明しても、國民の精神に取つては何等の損益は無く、彼等は相變はらず不朽て有る。だから自分は前の關白太政大臣よりも、お染久松の不朽を信ずるので有る。

自分は固より歴史の價値を認めるけれども、この方面よりは寧ろ非歴史的主義を唱道したく思ふ。

グオルク、ブランデスの最近の論文集中の一文に依ると、希臘の悲劇作家の名の傳はつて居るのが、三百五十ほどあるが、著作の存して居るのは唯三人に過ぎ無い。即ちエシユロス、ソフオクレス、ユウリピデスだが、この詩人の作品でも殘つて居るのは十分の一にも足りない。叙情詩人(女)サツフオは五度ピンダルに勝つた事が有るが、其詩の傳はつて居るのは、唯つまらぬ斷片に過ぎない。羅馬の史家タチツスの著作が今迄殘つたのは、羅馬帝タチツスが史家と同名な所から、自から史家の子孫だと誤信して、公共圖書館にタチツスの著作を集め、且つ年に十部づゝ寫本をさせたからださうだ。其にも係はらず、若し第十五世紀に獨逸のエストファーレンの某精舍で、其著作の殘餘が發見せられ無かつたら、傳はつたものは未だ少なかつたかも知れぬ。十六世紀に出版せられた佛國の[illegible]劇か、千八百四十年に隣國の伯林の或る屋根裏の[illegible]發見せられ、斯う云ふ者も有つたかと氣が着いた次第。有名な「ローランの歌」すら、千八百三十七年に寫本が發見せられたので、八百年振に娑婆へ出て來た。又甚だしい例は、希臘羅馬の詩の草稿たる羊皮紙（ペルガメント）は、證文類に甚だ重寶で頑丈な所から、態々詩を摩り消して、借用證書に使つたのが有る。同樣な例は美術品にも隨分多い。かのレオナルド、ダ、ヸンチの「聖餐」の圖の如きは最も有名で有る。

斯樣な例は擧ぐれば、限も無いから玆には是だけで止めて置く。即ち文藝上の不朽と云ふことは、決して確實な者では無く、大詩人や大傑作が後世に傳はるのは、多くは偶然の結果で、必ずしも其價値には因ら無い。又之に反して、平々凡々な作品が山の如く後世に傳はつて居る場合が少く無い。

又ブランデス氏の話に依ると、多數の圖書文籍は忘[illegible]せられ無くなる許りでなく、用紙か粗惡な爲め、自然に腐朽して了う。だから屢々出版せられ無い本などは、鼠や黴を防ぐことが出來ても、自然に塵と化し

て了ふ。併しこれは人類の幸福で有る。さうで無いと吾々は紙の中に溺死するかも知れぬ。佛國の一國民圖書館に交附せられる、佛國出版の圖書は一日六十部ださうだ。但し新聞雜誌は別て有る。千八百九十四年に巴里から出た日刊紙は二千二百八十七種有つた。此等は皆近世人類の日々の糧だが、又其日〳〵に消えて行く。否、是れは餘り飛び離れた談だが、吾人の生存する地球も、吾人の生存の根源たる大陽も、限り有る生命を有つて居るに過ぎぬとすれば、不朽の事業も何も有つたものでは無い。

夫れは兎に角、現時の文壇に於て徒らに、疎枝大葉な、抽象的議論や、西洋かぶれの文明論をやつてゐる人の中には、少からぬ謬見が行はれて居るが、殊に國民、文學、天才、時代等の關係に就ては、失禮な申分ではムるが、間々小供に刄物を持たせたやうな、危險な議論が揮廻されるやうだ。何六ッケ敷い事でも、何でも無いのだが、思考の惰性の爲に痲痺せられた結果、斯う云ふ事になるので有る。猶ほ文明史、文學史、哲學史等の眞相、即ちこれ等は果して人間の「精神史」たる實を有するや否やに就ても論じて見たいと思ふが、今回は暇が無いので、これで筆を擱くことにする。

（十月十四日夕稿）

アイヌの家

理學博士　坪井正五郎

○アイヌの風俗の事はこれまで土俗雜話の一部分として記し來りましたが、此土俗雜話は第一回の初めにも述べて置いた通り、人類學教室標本説明を本として彼れ此れ書き足しを致したもので、標本が揃はぬとか事物の性質上標本が整ひ兼ねるとか云ふ樣な事項は自然現れず仕舞ひに成る譯で、風俗談としては不完全と云はなければ成りませんから以後必しも標本説明に拘泥せず、題目を更め廣く諸事項に亘つて記す事と致しました。此度はアイヌの家に付いて述べます。

○アイヌの村落は數戸から成り立つのが常で何十戸有

る杯と云ふのは余程珍しいので有ります。且つ其數戸と云ふのも決して近く隣り合つて居るのでは無く、まばらに散布して居るのですから村落の有樣は誠に淋しいもので有ります。往來は眞直に出來て居ず、樹木は多く、家根は高いので、村落に近いて先づ目に觸れるものは木の間々に突き出て居る家根の上部で有ります。

○内地の家に比較して見ると周圍の柱は不釣り合ひに短く、家屋は不釣り合ひに高く、家の上部に家根を設けたと云ふよりは寧ろ、家根の支へに其下部に柱を立てたと云ふ樣に見えます。

○アイヌの住居は「チセ」と云つて通例二室から成つて居ます。一つは大きくて此所が主な部分、一つは小さくて奥へ行く通路。甲を奥の間、乙を入り口の間と名付けて説明を致しませう。多數の例から云へば奥の間は長方形で東西に長く、其西の端に長方形或は方形の入り口の間が續いて居て、此小室の南側に外からの入り口が開いて居る。

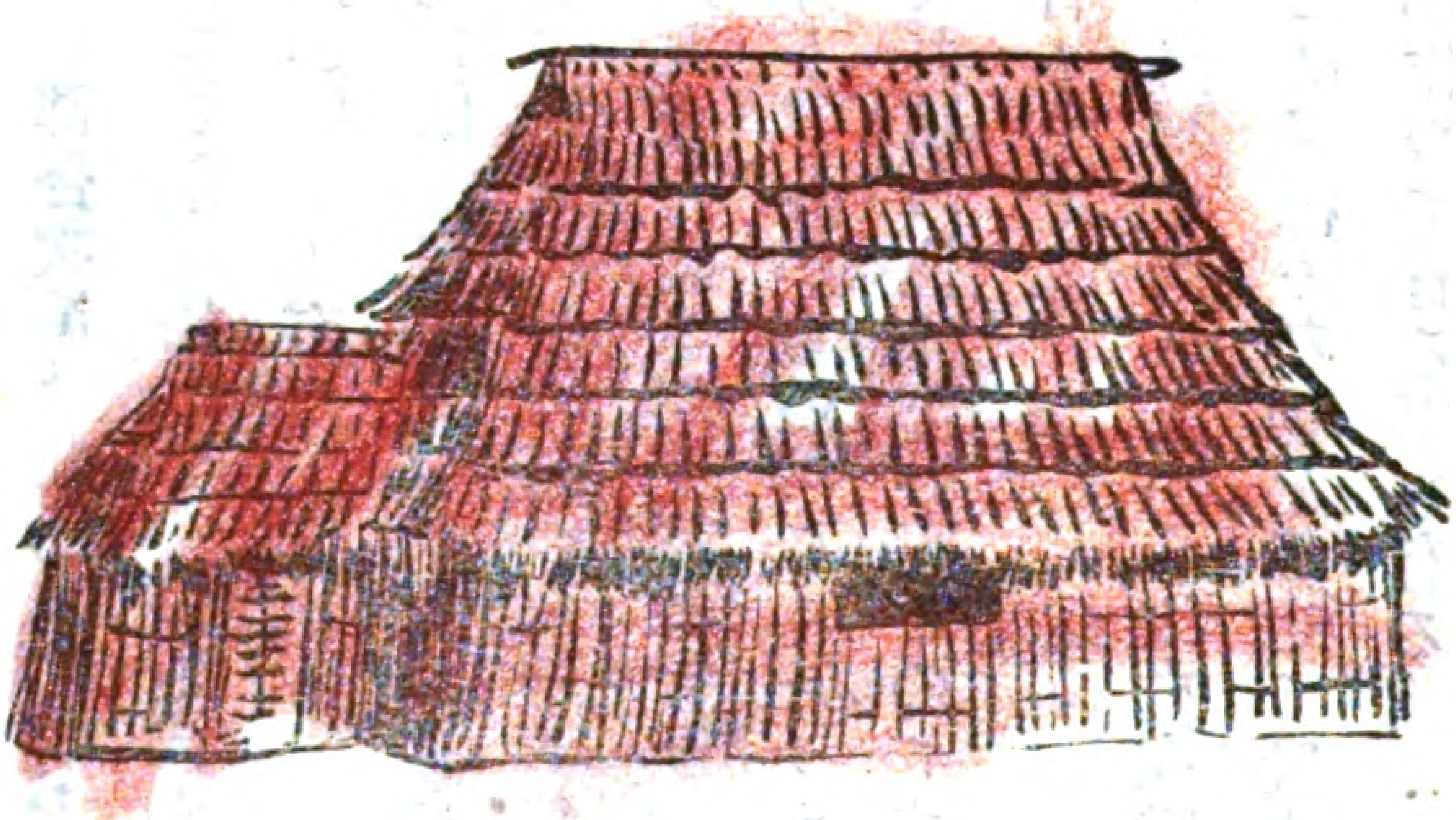
○柱は丸い儘の木を掘り立てにし何れも内部に向けて少しく傾けて有る。家根の骨組とも皆丸木の儘。奥の間の家根は四方葺き下げ、入り口の間の家根は一方大家根に接して居る爲め三方葺き下げと成つて居る。總ての構造に釘を用ゐず、木材は互に繩で結んで有る。柱の上部は横木を受けるに都合の好い樣に枝の二股が利用して有る。

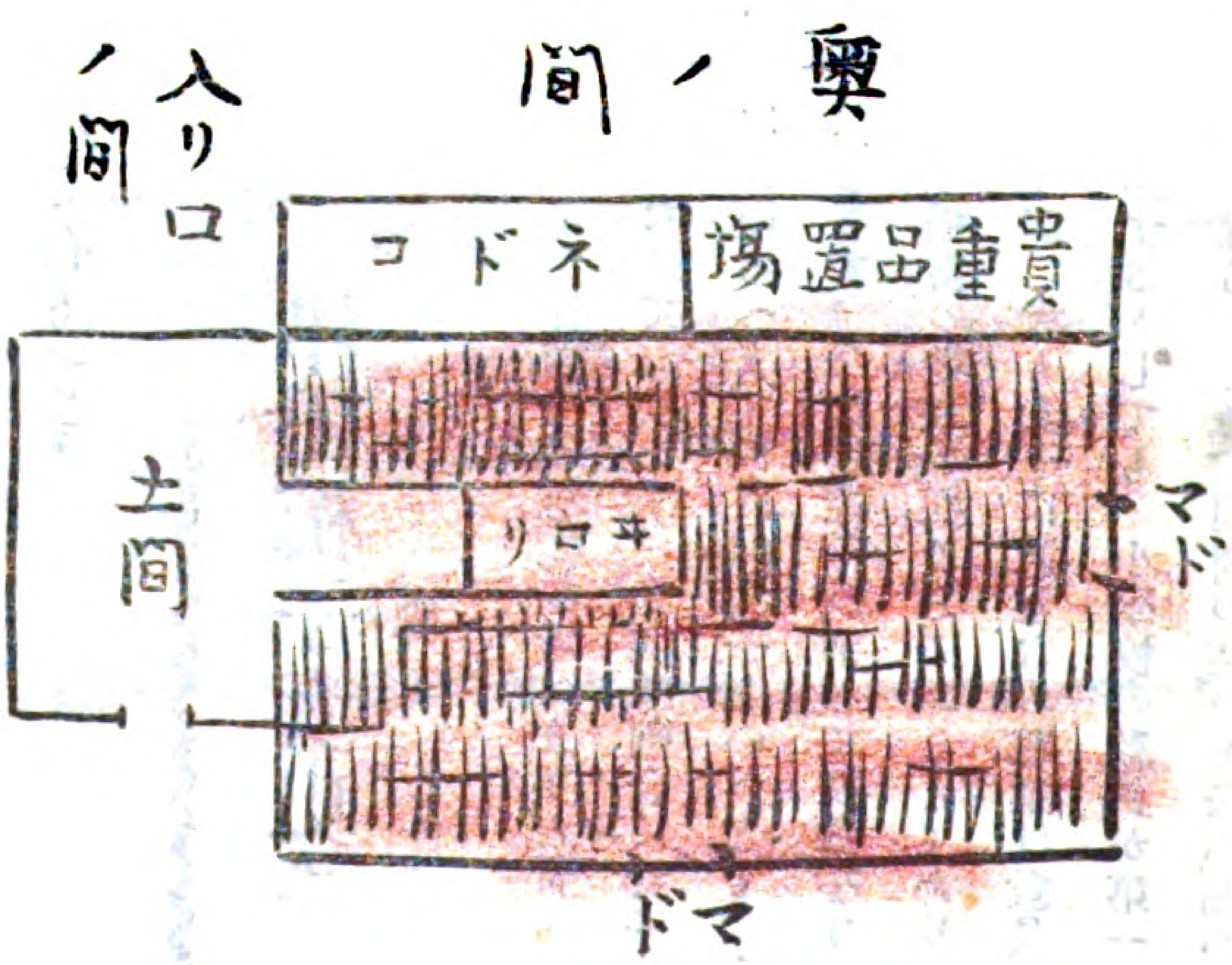
○家根裏には木の皮が並べて有つて其上にカヤが段々にして置いて有る。内地風のカヤ葺きだと傾斜面が平らに成るのですが、アイヌの家の家根は刺し身を重ねた樣な形に八段にも九段にも成つて居るのです。早く云ふと第一の家屋の上に第二の家根を載せ、第三第四と上へ上へと家屋を重ねた樣な譯で有ります。

○家根の下の端はズット延びて手が屆く位に成つて居るのですから周圍の壁に相當する部分は極底いのですが、此圍ひは悉くカヤで出來て居るので、アイヌの家は詰まり念入りに作られた葦簾張りとも云ふべきもので有ります。入り口には蒲莚の樣なものが下げて有る。

これはキナと云ふもので此他にも色々な用ゐが有りますが其事は追々に申しませう。

◎奧の間には二つの窓が有つて、入り口の間を西に在るものとして云つて見ると、一つの窓は南の方即ち入り口と同じ側に在り、一つの窓は東の方即ち奧の間の奧の突き當たりに在るのです。窓は板或は簾の樣なもので閉ぢる樣に出來て居る。窓の事をアイヌ語で「プヤラ」と云ふのですが、奧の窓は神聖なものとして有つて之を「カムイプヤラ」即ち神の窓と申します。明かり取りは僅に窓





二つですから室內は誠に暗いものです。

◎入り口の間に入つて見ると下は一體の土間で此所には食物原料雜器具等が置いて有る。臼杵類も此所に在つて穀物は屋外で搗かれる事も有るが又此所で搗かれる事も有るのです。入り口の間は其用に於て內地農家の土間と同樣で有ります。

◎奧の間は長さ五六間幅四五間位或は夫より小さく、中央で入り口の間に寄つた所に室と同じ向きに細長い圍爐裏が有り、偏つた所に貴重品の置き場と寢臺とが設けて有る。通則て云ふと、貴重品

の置き場は奥の間の奥の左の隅、寢臺は夫れと並んで入り口の間に接した所に有ると申して宜しい。

◎貴重品置き場は土間に木材を横たへて作つて有つて奥行は三四尺長さは室の都合次第。此所には神を祭る時に用ゆるイナヲと稱する削り掛けや、内地人から得た太刀や種々の漆器抔が飾つて有る。

◎寢臺は作り付けて高さは一尺五寸位、床には細い木材或は板が並べて有り、其上に前に云つたキナ莚が敷いて有る。此所は主人夫婦の寢る所で枕はキナをグル〳〵と卷いて作つて有り、外からの堺にもキナが幕の樣に下げて有る。主人夫婦の他は下へ寢るのですから寢臺は通例一つしか有りません。

◎圍爐裏の緣は丸太で出來て居り上からは自在鍵が下がつて居る。時としては又種々な物を載せて置く爲めに圍爐裏の眞上に枠が作つて有る事も有る。

◎圍爐裏と貴重品置き場と寢臺との他奥の間の土間にはカヤ簀子が敷き詰めて有つて、倘ほ其上に人の座すべき所にはキナ莚が延べて有る。キナ莚は無紋の事も有るが多くの場合に於ては黑色或は褐色の木の皮を編み込んで幾何學的模樣が現して有る。

◎以上は通常の住居の事を述べたのですが、他に倘ほこれに關聯して納屋其他に付いても云ふべき事が有るのて有ります。

津田梅子女史を訪ふ

芽原ふじ

戰爭後今日國內の有樣を考へますと靑年の男子所謂有爲の男子を多く無くした譯てあります、すれは割合に女子は多い筈てあります、夫れて私は此頃考へますには、女子といへども、大奮發すへきの時代てあらうと存します、今迄の樣に拱手して衣食をする譯には行くまいと思います、即ち相當の職業を採ると云ふことてあります、職業と申せは種々ありませうが、尤も女子に適當なる職業は敎員てあろうと存じます、敎員の職を撰ずるとしても、小學校の敎員が第一番てあろうと存じます、注意の周到なるところ、同情の深いと云ふ點から兒童を扱ふに宜かろうと存じます、此度の戰役に多く男子を無くし居る譯てすから現今の樣に男子をして小學校の敎員にする等は有益てなからうと存じます、女子に適當なる小學校の敎員をさせる等は不得策てあろうと存じます、此の多事多端

の際ですもの、男子にて男子に相當なる職業をして貰ひ隨分に働いて頂き、女子は女子に適當な職業に充分働いて貰ひ、男女相待つて、國の發達進歩を計り、世界强國と比肩して行くたけの面目を保ち度いのか私の希望て御坐います。

一般の女子を見ますと、或意味からは實に憫然なものです、今日の日本は昔日の日本てはありません、世界强國の一つてあります、何に依つて此の名を得たかと申しますと、學術でもなく實業てもなく、美術でもありません、實に尙武の爲めに得た名て御坐います、皆軍人のたまものなのです、此名聲嘖々たる日本の内情を知り得たならば、其名聲と、實力と相伴ないところに驚くてあろうと存します、全國の一半を組織します女子は何てあろうかと申しますと、赤面の外はありません、權利の主張も實に耻ち入ります、ま



秋十題 其三

たく女子か權利の主張を稱へますには早いと思ふのです、實際實力がありますれば、權利の主張を稱へませんても自然に權利を得ることが出來るてあろうと存します、歐洲諸國ては、男子が女子に對して何てあるとか、やれ同情かあるとか、夫婦の關係は何たとか、能く人か申します、夫れは能いこともありますが、夫等は實に些事なのです、殊には其國風かあるのですから致し方はありません、私は夫等の事を兎や角と心配するよりも女子自身が一大奮發して實力を養ふことに注意したら善かろうと存します、すれば權利の主張を稱へませんても、自然に人は尊敬を拂ふ様になります。そこて女子を教育しますにも、此事

の虚説を説くよりも、今迄の島國的根性を排除することに務めて、世界的の教育をしたら善かろうと思ふのです、此度心も廣くなるであろうと存じます、左様なりますと自己の主義のために飽まで働くと云ふ高尚な理想を持つ所の婦人も出て來るでせう、左云ふ女子か小學校の教員となつて兒童を教導したならば、實に幸福だろうと存じます、然し女子には大局を見ると云ふ様なことや、又統一すると云ふことは不適當であります故に、校長などは熱心な經驗に富むで居る人を戴くが好都合であろうと思ひます、斯う云ふ女教師を養成するには、無論學力も必要ではありますが、第一には人物の養成が目下の急務であろうと存じます、中等の教育が確實であれば、夫等の卒業生が小學校に教鞭を採る様になりますれば、其結果は自然に好結果か得られる道理であります、故に小學校の教師には、學力の深いと云ふよりも、精神の確實なものか欲しいと思ひます、實に小學時代の教育は、總ての基礎となるものですから、其良不良は引いて中等教育にも影響がある譯であります。

地方雜觀

丁字樓

會を言へば大會と云ひ、勢を言へば大勢と云ふ、此大會に出席する有志の輩、自から稱して大勢を知る者となし、地方の事に付て曾て與り知るをなく、唯口饒舌、徒らに天下を論じ、漫りに國家を議ず、未だ其力あらずして大なるものを計る、故に成らず、未だ其意あらずして小なるものを視る、いづくんぞ正しきを得ん、今や我國情は、大に成らず小に敗れ、百孔千瘡、殆んど救治し難き者あり、就中地方政治は尤も多く其弊に困しむ、自治の全うし難き、豈にたゞに之を行ふの年淺きが故のみならんや、感ずる所ありて「地方雜觀」を作る。

（一）牧民心鑑

明の朱逢吉、牧民心鑑を著はし

謹始、初政、正家、涖事、宣化、聽訟、徵科、營繕、事上、馭下、交人、備荒、善絡、

の綱を設け、更に目を分ちて、細かに牧民官の心得を説く、之を今に施して悖らざる可き者、十に八九あり、嗚呼有不忍人之心、斯有不忍人之政矣、牧民官にして之を讀まば、庶幾はくば此に得る所あらん。

（二）中央と地方

官吏の中央に在る者と、地方に在る者とは、自から其風を異にす、而して吏臭の多きは寧ろ地方に在り、蓋し官尊民卑の風猶存するありて、周圍の監視亦太だ嚴

ならざればなり、故に吏人地方に入れば、驕泰の念を生じ易く、腐敗こゝに因す、而も徒らに下に傲るの心ありて、上に抗するの意に乏しく、盲從附隨、一に命を中央に聽き、たゞ制を上司に仰ぐ、牧民官中まことに斯種の俗物多きを見る、彼輩豈に縣宰として、能く其重きに任ずるの志操あらんや。

(三)聊か碌々の徒と異る

近者出てゝ山梨に知事となりし武田千代三郎氏は、知事中の少壯者なり、往年山口に知事たるや、賞を懸けて縣治の方法を徵したることあり、民意を容るゝに於て、聊か他の碌々の徒と異る者あるは、吾等の喜ぶ所、氏山梨に於て、果して什麽の經畫をかなせる。

(四)知事と新事業

凡そ知事として地方に來る者、何等か新事業を經畫して、以て己の功績を遺さんとす、故に往て勸業知事、敎育知事等の稱あり、各々其好む所を實際に試みて、「木に竹を接ぐ」の怪事あるも、敢て顧みざる者多し、吾等を以て之を觀るに、知事たる者は、須らく地方の事情を査察すべくして、又別に前任者の事業を繼承し、之が大成を期するの覺悟あるを要す、是れ牧民官たる者の德義なり、義務なり、かの民財を糜すこと幾萬なる、前任者が苦心經營の事業も、之を修補し大成して、其效果を顯著ならしめざるが如きは、吾等の忍びざる所なり、新知事若し之を捨てゝ、他の新事業を擇ばんか、縣民寧ろ其煩に堪へず、廣島市の南關たる宇品港の如きは、吾等をして毎に尤も感慨多からしむる所なり。

(五)宇品港を看よ

宇品港の築設は、明治十九年、時の知事千田貞曉氏の成遂げたる所なり、氏が此大土工を起すや、四方八方より攻擊せられ、後には私財を抛つて、之に投ずるの悲境に陥りたるなり、然れども氏去りて後、此良港は久しく大用せられず、二十七八年戰役に至り、漸く大軍輸送の發動點となりて、其効用を天下に知らしめたり、斯の如きの良港、己に其南關に當る、廣島市が工業市として、將た商業市として、大いに發達するの道、必らずしも之なきに非ず、しかも廣島市は、如何によ

く之を利用せし乎、吾等は明治二十四年、はじめて宇品港に上陸したる時に於て、大寂寞を感じたる如く、明治二十八年以降の戰後に於ても、また大寂寞を感じたりき、「如何にして宇品港を繁榮ならしむ可き乎」、是れ屢々吾等の鈍腦を壓したる大問題なり、廣島に知事たる者、曾て此に想ひ到らざるの理なし、然れども東西二遊廓を建設せし、廣島市の大恩人鍋島幹其人さへも、之を爲す代りに、彼を爲さんとは試みざりしが如し、吾等は後の知事に對しても、また憾なき能はず、吾等は此良港を修補し大成して、益々利用の道を廣からしめんことを望む、心ある者は、先づ戰役中の宇品を觀、更に戰後の宇品を看よ、必らずや其盛衰榮枯の甚しきに驚かん。

(六)これは唯一例

これは唯一例を示すに過ぎず、日本狹きが如きも三府一道四十三縣あり、若し斯の如き實例を全國に求めんか、其多きに勝へざる可し、吾等は地方官の、こゝに思ひを費すあらんことを切望す。

(七)議政場は市場の如し

然れども、地方有志の輩が、地方官に要求する所は、不幸にして、吾等の要求する所とは、全く異れり、吾等は唯一誠あらんことを要求す、而も有志の輩は、寧ろ其根本的觀念あらんことを要求せず、巧慧便佞、能く權謀術數を用ゐる底の人物を要求す、故に「縣會の掛引」なるものあり、「交換問題」なるものあり、議政場は時として市場と其觀を同じうす、斯の如くにして、誰か人に忍びざるの心あるを得可き、いづくにか又人に忍びざるの政あるを得可き、願はざる可けんや。

本號に寄稿せらるべき約ありし上田敏、内田魯庵、三上參次の諸氏は止むなき差支ありて、本號〆切迄に脱稿せざりしよし、されば次號及び來春一號はこれらの諸氏が文によって飾らるべし、讀者諒焉



信仰と布教

桑木嚴翼

【宗教界】

宗教は人々の必要上自然に生じたるものでありて或る人々の云ふが如く、何等かの方便の爲めに、例へば、政治家が國家を治めると云ふよーに、即ち本來生じたものではないと云ふことは、今日敢へて深く辨ずるを要せざる所である。人々がある程度の發達を遂ぐると同時に是非とも宗敎的要求を感じて來るのである、即ち自己の生命が、天地自然の間に起ちて如何にも脆きものである、物質的に考へても生者必滅の理は始終逃れることは出來ず、精神的に見ても常常に欠點斗りあつて絶えず罪惡を犯しつゝあると云ふような事を、或はゴク低き程度に、或は又稍高き程度に於て、種々感じ來ると共に、何等か依賴すべきものを求め、之に依て、救濟を得んとするのであつて、從つて宗教が自然に發達して來るのである。故に宗教は之れを要せざるものにとりては、全く無意味のものである。一体世中に押賣と云ふことは、如何なる場合にも、餘り賞めたことではないが、信仰の押賣即ち勸誘程無意義なものはないわけである。それて宗教の本質から云へば、ドーしても人々は、自分自ら宗教を造り、自己の信仰を樹立しなければならぬわけである。けれども問題丈けは誰れでも提出することが出來るが、解答の方に至つては誰人も出來ると云ふわけには行かないから、そこで宗教を要求するものに對しては、宗教を供給する宗教家なるものが必要に成つて來る。然し此の場合にも宗教家たるものは、自分の宗教を強いて他に敎へると云ふわけではなく、他の自ら來るのを待つ方法よりほかにないのであつて、自分は只獨りあくまでも修行を爲し、悟道の途に入るを勉めなければならぬものである。既に信仰の性質が個人的なる以上は、ドーしても以上述べたよーな個人的性質を有たなければならぬ次第である。

乍然、宗教は又一方から考へて見ると、社會の一事實であるから、其點より見ると又社會の一方面として存在しなければならぬ。で、宗教の本質は各個人別々に存在して居るものであるが、然し又大同小異の所で以て團結して或る宗派を形ち作ると云ふことが自然の勢ひであつて、是れは宗教が既に證明して居る所で、殊更に今論ずるを要せぬ。既に宗派が出來ると、成る可く其宗派を盛ならしめやう、即ち盛んにすると云ふことが自然に起つて、所謂布教なるものが發ころわけである。即ち一方には

出來得る丈け澤山な信者を作り、他方には自己の教義が他に對して、其勢力を擴張しよーと云ふのである。即ちソコデ各宗派の間に一種の戰爭があるのであつて、布教者は一種の征服者の狀態を爲して居るのである。如是くなれば宗派は個人と一致し難き態ちを起すものであるが。此の問題は今如何にして解釋すべきものなるか。則ち布教せねば宗教が潰れるのであるが、然し所謂布教事業なるものは、眞の信仰とは余程趣きの異なるよーに考へられる。

如何なる布教でも性質上信仰と一致し難き點があるよーだが、殊に一種の或る方法の如きは非常に信仰と背違するよーに考へられる。其れは昔盛んであつたが今でも決して滅せぬ方法で、善く云へば政治家、軍人等の事業を補助するもので、惡く云へば此等の手段に依つて自己の宗派を盛んならしめよーと云ふ方法である。只徒らに他に對して補助を爲すものはなく、補助を受けるものは、時としては相當の手傳をする場合がある。故に或る時は政治家等の手先きとして遣はれるかも知れぬ。如是き布教の方法は或は便利ではあろーが然し遣り方に於ては、殆んど宗教の特質を失ひはせぬかと思ふ。今一つは之も古來高僧知識の中にも行つたとてあろーが、即ち未開人の布教に迷信などを利用する場合である。即ち當時醫術の幼稚なる所に多少の醫學的知識を應用して、其人民の尊敬を引き起こさせると云ふが如き、或は其他の科學的知識を應用して種々魔法的の所業を爲し、以て自然に人民を感化させると云ふ方法もある。是等は最も簡便なる方法であろーし、又多少目的の爲め、特別の手段を用ゐるのであつて、一概にそれを咎めることが出來ない點もあるが、然し成る可くならば目的と手段とは、一致することを要するのであるから、布教をする場合にも出來る丈け、惡い手段を以てやるは避けたいものと思ふ。ソーして見ると、ドーしても布教をするには信仰と矛盾しない方法をとる必要があるのであるが此れは多少宗教家の考察を要する所であらうと思ふ。然し乍ら、自分は此點に關して別に考へたわけではないが、大ひに專門家の顧考を望む所である、而して今只此程一寸考へた點丈けを述べて置うと思ふ。

其れは宗教を弘める即ち自己の宗派を他に知らしめる、即布教するに就ては、政治とか何とか他のものに賴らずして、即ち人々の感情に訴へて個人自ら宗教に傾かせると云ふことである、と、云ふと頗ふる明白なことを云ふよーだが、此に云ふ感情と云ふのは、宗教的感情と云ふ意味ではなく、宗教とか何とか云ふことは今しばらく措いて、只自然に感情上、人の心が自ら宇宙の大なることを感じ神佛の尊さを覺ゆると云ふよーにさせて行く方法である。然らば其手段とは先づ最も結果の著じきは音樂で、次ぎに其他美術のものである。今信者が集りて讃美歌を唱ふ、其歌の意味はわからないけれども、其れが何となく自分の本來持つてゐる宗教的要求の琴線に觸れて自ら宗教がわき出ると云ふよーな所に所謂眞正なる意味の布教があるのではないか、是れは只一例を擧げたまでゝ、詳しく云へば美術其他種々あるのは、敢へて珍らしきことではない。今佛教でも昔から和讚等其他種々の方法もあるが、是等は今日の青年者流には甚だ

以て不向きの方法であるから、今後は其適當なる方法をとる必要があるわけて、そこには新らしき音樂美術等に依つて、其成效を見ればならぬ。如此んば又教育ある人々も之れに依つて感化し、未開なる人々も之れに依るとが出來るとなる譯で、ソコデ初めて眞の布教策を成立するとが出來るのではあるまいか、たゞ是丈ては分り切つた事のやうてあるが、たま〳〵或る一派の布教法を見、又教會堂の讃美歌を聞いて、特に其感を深くし、聊か此の問題に干して一言したわけてある。

日露戰爭の教訓

『太陽』

文學博士　井上哲次郎



秋十題其四

日露戰爭の結果として得られたる一大教訓があります、それは何てあるかと云ふと、利己主義の挫折であります、初め露國は、太平洋方面に一の不凍港を得たいと云ふ野心を懷いて、さうして段々と朝鮮支那等に蠶食を企てゝ來たのであります、それが初めてあります、成程太平洋方面に一の不凍港を得ると云ふとは、露國の爲めに大なる利益でありませう、併ながら太平洋方面には、朝鮮があり、支那があり、日本がある、それに自分の國の爲めに一の不凍港を得るとが利益であるからと云つて、毫も其隣國たる朝鮮、支那、日本等の利益如何を顧みないで、段々と侵害して來たと云ふとは、是は利己主義の實行と言はなければならぬ、若し斯る利己主義が世界に跋扈しましたならば、世界の

文明は逆戻をしなければならぬ、人文の發展抔と云ふ事は出來やう筈がない、道徳も宗教もあつたものでない、神樣抔と云ふものも、如何なる意味に於ても認容は出來ないことになるのであります、若し進化と云ふ事が、到底人力を以て抑壓すべからざる世界の大勢力であるならば、人文の發展を覆沒するやうな利己主義が、最後まで勢力を得て來やう筈はないのであります、それで、其結果は如何であつたかと云ふ事を見なければならぬ、露國が利己主義の實行を敢てし來つた際に、日本が蹶然として、劍を執つて立つたのであります、正義人道に違はない所の精神を以て、整々堂々と戰を交へて來たのであります、我々は此正義人道の精神を主として考へた所からして、どうしても最後の勝利は、我に歸するであらうと云ふ確信を持て居りました、それは戰爭前にも既に『太陽』に發表して置きました、所が丁度其樣に最後の勝利は我日本に歸して、露國の利己主義の鼻は全く挫かれてしまつたのであります、それで日露戰爭の結果は、明かに斯う云ふ事を示して居ります、正義人道の勝利であつて、利己主義の挫折、斯う云ふ事が其結果として分明に世界の眼前に現れて來たのであります、どうか、名教に志ある人は、此邊に注意をして貰ひたいのであります。

華族は韓國に移民すべし

『日本人』

如何に韓國に移民すべきやは大に考慮を要すへき所、取締りの嚴にして移住に不便なりといふは事實なれど、之を緩にして無頼漢の移るを許すは、多く國人を移すの點に於て利益あらんも、警察の行屆かざる今日、利の害を償はざるも知るべからず。移民會社の移住を周旋するも不可なけれど、移民會社の弊は既往に徴して推すべし。之を外にして方法一ならざるも、最も効力あるべきは御思召に依りて舊大名華族に人を移さしむる事なり。華族は皇室の藩屛たるも、實際何事を爲しつゝあるやを觀れば、殆んど言ふに足らず、現戰役の起りしより數々公債の募集に應せしは、固より國益たらざるに非らざるも、應募の報酬として少からざる利子を收む、特に義捐せし所の如き、幾何もある無し、恤兵部への獻金も少額に過ぎず。其の國家の爲め損失を忍ばんことは轍く望むべからざるも、政府に金を貸すの外一の爲す所なきは餘りに甚だし、今少しく國難に臨みて盡力するの覺悟なかるべからず。

然れども其の盡力すると盡力せざるとは各自の自由に屬し、我に我が丁簡ありとして應ぜざれば事此に止まる、政府に於て強て盡力せしむるの權利なし。唯だ帝室より御思召を以て華族相當の職分を盡さしむるの一事あるのみとす明治の初め勅諭を下だし『今我國舊制を更革して列國と幷馳せんと欲す、國民一致勤勉の力を盡すに非れば何を以て之を致すことを得んや、特に華族は國民中貴重の地位に居り衆庶の屬目する所なれば、其履行固より標準となり、一層勤勉の力を致し、率先して之を鼓舞せざるべけんや、其責たるや亦重し』とありて、華族をして海外留學若くは週遊觀光せしめ、特に妻女姉妹を携帶同行せしめられたり。其の

封建時代の陋習を打破するに幾分の効ありしは世に知らるゝ所、若し當時に要せし二三倍の費用を以て韓國への移民を事とせば、幾分の功勞たるべきや疑ひを容れず。伊達男は夙に北海道に移住して開拓の功を擧げ、頃日岡部子韓國に赴きて爲す所あらんとす。舊藩主皆な大に韓國に力を用ゐずとも、假りに平均十人を移民するとせば、約三千人に上るべし。三千人の移住せんには、此と伴ひて必需品の供給者も往來すべく、國人の往復も亦た隨ひて容易と爲り、彼の不充分なる農事を變じて收穫多からしむること期して待つべし。

舊藩主たる者義として韓國に土地を購ひ若干の舊藩臣を移さゞるべからず。單に公債の募集に應じて利子を貯蓄するを能事とする、華族は究竟一種の金貸に過ぎず、何の優遇する所なくして可なり。帝室の恩恵に狃れ、無爲に歳月を送ること、彼等自ら愧づるの色なきにせよ、世は決して之を　さず、其の無用の長物たるの愈ゝ益ゝ明かなる後、遂に有害の贅物として目せらるべし。彼等舊藩主自ら奮ふこと能はずんば、帝室に於て移民の奬勵あらせらるゝこそ、僅かに其の面目を維持する所以の道とすべけれ。

『活動の日本』

地方青年と職業

高等工業學校長　手島精一

試みに地方の青年に向つて其志望を尋ねんか、彼等の答ふる處は、曰く軍人、曰く法律家、曰く政治家と、此三者以外に出づるものは甚だ稀なのである。成程軍人法律家政治家孰何れも國家の存立上必需缺ぐべからざるもので、無用の長物視すべきものではないが、斯く青年の大部分を擧げて、これに身を投ぜしむる程の必要がないことは明らかな事實であらふと考へられる。

これによつて見れば、

地方青年の志望

は兎角不生産的の方面にのみに向ひ、却つて商工農の如き生産的の業を厭忌する風習が旺んであるらしい。けれども此風習たるや、偶然に青年者の思想が或る方面に傾向したものでなく、實は周圍の事物が知らずしらずの間に青年を誘導したものと言はねばならぬ。

其一例を擧げれば第一軍人などに至つては、目下戰捷國の民たる以上は、一般の思想が軍人崇拜と云ふ傾きになると共に、青年の志望もまたそれに向ふのは自然の道理であつて、併かも學資の豐富ならざる者に取つては、少なからぬ便宜を得らるゝのみか、卒業後に於いて職業を需むる等の心配もないから、志望者の多い筈なのだ。また法律家政治家などとなると、多數の人材を吸收して居るので、一世の名望を揚げるのも決して少なからぬのだ。

故に斯の如くにして地方青年者の眼に映じて、もつて其功名心を奮起せしむべき事項は澤山ある。これに反して彼等の眼に映ずる處の**商工農の業は奈何**と言ふに、日常目撃してある處の商業と云へば、俗に云ふ三文商ひの類のみであつて未だ嘗つて商業の眞價を知るべき機會に接し得ないのである。然れども彼等は唯だ自己の知り得たるものを標準として商業は斯の如きものと速斷し、或は姑息なりとし、或は卑賤なるものとなすことは、獨り商業のみならず、農業工業に對しても、また此類の推測によつて律するのである。

由來偏見は**地方人の通幣**とも云ふべきもので、これによつて觀察を誤り、事業上の失敗を招くことは其實例が澤山ある、また青年に在つても動もすれば此弊に陷つて、未だ其事業の性質をも了解せずして、徒らに動機の爲めに左右せられ、果して自己の天品に適するものなるや否やを討究する暇もなく、勇往邁進其方向に發展の運を啓かんとするのである、其進取の鋭氣は誠に嘉すべきであるけれども、若し不得意とする方面に向つて進まんとすれば、勞多くして功少きことは自然の道理なのだ。



秋十題其五

吾人は必ずしも軍人たり法律家たり政治家たることは否認するものでないが、望むらくは今少し生産的事業に注目して貰つて、そして青年自身は能々其天品の材と、事業の性質とを考察して、而して始めて志望を立てるやうにするが、最も必要なることだと考へられる。

小説

新體詩



（禁轉載）

付焼刃

幸田露伴

其一

「それだつてお前‥‥」

と恨めしさうに細君の傳子の面を見た主人の溫間淀雄は、傳子と眼を見合せた瞬間に忽ち我から眼を轉じて仕舞つて、力無く我が膝の邊を無意味に視た。色の小白い、のつぺりとした、面長の、しかし下豐の、貧相で無い、おつとりとした人の好さゝうな三十前の男で、敷居一つを間にして茶の室に馴んでゐる六疊の室に、郵便の二ツ三ツ挿まつた煙草盆を前にして、下手へ向きながら座つて居る。

「知つて居りますよ、ハイ今日は大祭日でございますよ。ですから國旗はちやあんと門口に出させてご

ざいます。」

つんとした氣振りの横顏を亭主の方に見せて、委細關はず、せつせと纖細に出來て居る品格の好い火鉢の未だ新しいのを拭いて居る傳子は、二十を三つ四つも越したであらうが、銘仙の衣服に同じ羽織、頭髮は少し癖のある毛を庇髮にして居るといふ宛然女學生同樣の風て、當世の家庭には珍らしくも何とも無いが、古風者の老婆などから云はせれば、ちつとも奥樣らしくも無い若い奥樣だ。女振は取立てゝ云ふほどでもないが、色の白いのに七難を隱して居るので、先づ好い方であらう、眼つきに一寸賢さうな樣子が見えて而して又其邊に何處とも無く愛嬌がある。

「イヽエ、國旗の事を聞くのぢやあ無いよ。今日は其の通り大祭日ぢやあ無いか、だからお前私だつて遊びに出る位の事を仕ても宜いぢや無いかといふのだよ。」

「ですから其あ毫も御止め申しも何も致しは仕ません、御勝手に何處へでもいらしつて遊んで御いでになるが宜いぢやあ有りませんか。」

ぐい〳〵と火鉢の銅のオトシを拭いて居る。オトシはお蔭て銅割金のやうに光り輝やく。

「左樣云つたつてお前、小遣錢も何も無しぢやあ外へは出られや仕無いから、何樣か仕て呉れなくつちやあ矢張吾家に居ることになる。」

「だから御小遣錢を遣せと仰あるのてすか。」

「實は氣の毒だけれども何樣か其樣願ひたいのて。」

「いけませんよ。其なら一層吾家に寢ていらつしやい。定額だけ進げて置いた上はもう進げられません。而してまだ御無くなりなさる時分ぢやあ無いぢや有りませんか、今日御遊びに御出になる位は有つて御出てしやう。」

大藏大臣は弗箱見たやうに四角張つて堅い。

「ところがもう僅々三十五錢しか在りや仕無い、今しがた調べて見たのだから虛言でも何でも無い。」

さも哀憐を乞ふやうに主人は訴へた、朝鮮人といふものは斯樣なものでも有らうかといふやうな顏付をして。

「何故其樣無考に御費ひなさるのでしやうネエ。まだ月初ぢやあ有りませんか。」

彼の訴へるが如きに反して此は全て叱るが如くだ。

「だつて僅々七圓ばかりだもの、煙草屋に借になつて居たのを拂つて、電車の回數劵を買つて、書管箋だの狀袋だのを買つて、其の次手に田舍へ行つて居るお蝶(姪)が手紙の度にせがむて遣すから送つてやらうとおもつて繪端書を少し買つて、それから世古戸に往來て逢つたので、度々饗應になりつ放しなので氣になつて居たところでは有り、丁度時分時だつたので一緒に飯を食つたら、此節は然程でも無い家でも大層取るやうになつて居るので、虛言本當に驚かされたよ、一遍に取られて仕舞つて、其からといふものは何にも使はないのだけれども今云つた通りなものさ。しかも其時女中の祝儀は世古戸が先へ出して吳れたので宜かつたが、然樣でも無かつたら足らなかつた位だつた。」

「何ですネエ、しみつたれた！　男子の癖に御茶屋の勘定に驚かされたなんて、外聞が惡いぢや有りませんか。ですから女中に祝儀をやらなくつちや極りの惡いやうな其樣な家へさへ生意氣にいらつしやらなければ宜いのですのに。吾家へ御招びになるが宜いぢや有りませんか。」

「成程ネ。しかし其は濟んで仕舞つた事だから仕方が無い。今後は屹度お前の云ふやうに仕ましやう。だが其樣云つた譯で實際出行くには懷中が餘り悲しいのだから‥‥。それに實は旣朋友と約束してあるのだから。」

「御朋友は誰樣です。」

「世古戸と」

「何處へ入つしやるつて。」

「鴻の臺から眞間邊を、紅葉が有つても無くても宜いからぶら／＼行きをして、小岩柴又あたりへかゝり、兩國からの汽車で行つて上野への汽車で歸つて來やうといふ談なのだよ。澤山は要らないから何樣か適宜に‥‥」

「いけませんよ、癖になりますから。」

「ぢやあ來月の分の前借といふことにして、」

「いけませんよ、其樣な事を仰あつては。よく御考へなすつてごらんなさい。經濟が紊亂して頽返しが付かないと仰やつたところから貴下と二人して相談した上に、可厭てしたけれども妾が實家へ行つて頑

頑固な父を說き伏せて大切に仕て居る公債を手離させて、其金でもつて彼の高利貸の慾野の手を切つて仕舞つて、漸く何樣にか斯樣にか前途は樂になつて行かうといふ見當の付くやうになつたのは終此頃ぢやあ有りませんか。利息こそ公債並て、無いも同然のものにはしろ、まだ負債を背負つて居るのですもの、氣樂を仰あつては困ります。七圓ばかりと不足らしく仰あつても、最初を考へて御覽なすつたら何樣です、實にもう弱りきつた、何も彼もお前に任せるから宜しく行つて呉れ、家政整理の全權を委ねるから、と仰あつた時には、妾が種々に考へて豫算を組んで、それぢやあ貴下の御小遣は少うございますけれども此の苦しい瀨を越える迄は月に五圓と仕て頂きたいと申しましたら、いや一體の收入が百圓にもならない中から、頭て大く拔けて仕舞ふ負債の償却金はあり、そこへ屋賃や、食費や、被服や何や彼やの生活の雜費を持込むのだから中々樂ではあるまい、乃公が五圓小遣を取ればお前にも五圓小遣を遣りたいが、考へて見ると何樣も其樣は出來ないから乃公も三圓お前も三圓と仕やうと仰あつたてはありませんか。でも男は外へ御出なさるのですから左樣は出來ますまい、妾は兎に角、貴下は何樣に仕ても五圓は要りましやう、と妾が申して、それで貴下が五圓、妾が三圓と極めたのぢやあ御座いませんか。」

「いゝよ、いゝよ、古い事を復習しなくてもいゝぢやあ無いかえ。お三が臺所で聞いて居やうぢや無いか。」

「宜うございますとも、お三に聞かれたつて羞しいことはございません。吾家ばかりぢやあ無し、何處の家庭にだつて家政の委曲を申せば皆有る事でございますもの。それから段々と月日の立つ中に、三圓

て宜いと仰あつたのを五圓にしてあげて其で足らず、何樣も苦しくつてならないから定額を改正して呉れと仰あるので、他は切詰めきつてあるので仕方が有りませんから、妾の小遣の三圓のを壹圓にして、而して貴下のを七圓にして進げてあるのぢやあ有りませんか。」

「いゝよ、分つて居ますよ、それは其の通りですよ。だが今日のところだけ何樣か特別の御慈悲をもつてネ…。もう約束した時間が直に來るのだから。九時に兩國の停車場で會ふ筈にしてあるので。」

「いけませんよ、因業のやうですが癖になりますから。何の彼のと仰あつては、近來では定額以上のお金を毎月のやうに御使ひなさるのですもの。」

「そんな毎月のやうになんて、其は甚過ぎる。」

「いゝエ、虛言ぢやあございません、みんな帳面に着いて居ります、御目に掛ましやうか。」

「何、見せて呉れなくてもだ。ぢやあ此からは決してもう無理を云ふまいから、今日だけのところを何樣か許して呉れ。」

「何樣もいけませんよ、考へて御覽なすつて下さい、家の爲を思つて妾と貴郞とで整然と極めた規則や豫算を、貴郞が先頭へ立つて維持しやうとはなさらないで、貴郞が妾を強ひて破毀させやうとなさるなんて、其樣な分らない理屈が何處にあります。最初に妾に何と仰いました、苦難も偕にする代りには歡樂も必ず偕にしやう、乃公が花見納涼に出る時にはお前にも乾度花見納涼をさせやう、乃公が新しい衣服を拵へる時には汝にも必ず拵へて遣らう、其代り何樣か苦しからうけれども、獨身の時代の借金が

付いて廻つて遣り切れない此の貧乏世帯を遣り繰つて呉れ。其中には何樣か仕て樂な思をさせやうから
と仰あつたのを御忘れなさりやあ仕ますまい。それだのに何樣てしやう、まあ、何だ彼だと云つて貴郎
は遊んで御行きなさいますけれども、何時の日曜に妾を貴郎は一緒に連れて御出なすつたことが有りま
す、此家へ參りたては上野へ一度、龜井戸へ一度、それはまだ貴郎が家計の内幕を妾に御明かしなさら
ないて、借金で表面ばかり塗りくり散らしていらしつた時分に連れて行つて下すつたほかには、植物園
へ一度團子坂へ一度も連れて行つて下すつたことも無いぢやあ有りませんか。今日は大祭日だと仰あり
ますけれども、貴郎が御一人て御遊びなすつた大祭日は幾日もあります、妾を連れて出て下すつた大祭
日は一日も有りません。第一世古戸さんと今日遊ぶといふ御約束をなすつたといふ其が氣に入りません。
貴郎は御自分の御懷中に御小遣錢が無い筈だといふことを知り切つて在らつしやりながら、何樣かなる
だらうと高を括つて御約束なすつたのに違ありませんが、其は貴下が餘りといふものでございます。」
「イヤ、高を括つたといふと大に惡く聞えるが、全く私は其樣な氣ぢやあ無かつたのて。今度の大祭日
は久しぶりて一緒に遊ばうぢや無いかと世古戸が誘つたのを、厭だといふことが出來無かつたものだか
ら、終約束を仕て仕舞つたのだ。だが既約束を仕て仕舞つたのだから、可否を今云つたところて仕方が
無い、今日だけのところを忍耐して呉れたまへ。」
吹殼を唾壺へ穩和しくフッフッと吹きながら云ふと、
「いゝえ、いけません。今日ばかりぢやあ有りません、もう二度も三度もの事てすから、貴下の仰ある

ことを唯々と云つて居る譯には行きません。停車場へ行つて世古戸さんに御會ひなすつて、何とでも宜うございますから、宜いやうに云つて斷つて御出なさいまし。斯樣いふ冗費を節するのが家政の第一義で、其の爲に貴下の御承認を得て整然と豫算を組んであるのですから。」

と、例の銅のオトシを復ぐいと拭く。オトシは拭かれて又一段と光る。

「其樣口を尖らせて漢語を使ひ出して、女學生だつた面目を發揮して頑固に拒絶されては困ります。たまの大祭日だから遊んでも宜いでは無いか。」

一服吸つて緩々と氣を長く云ふ。

「ハイ、其は左樣です。ですから御遊びなさるなら妾を連れて日比谷へでも上野へでも御出なさいまし、そして吾家へ歸つて御酒でも何でも御飮りなさいまし。經濟的で而して道德的でございます。第一歡樂は必ず共に仕やうといふ御約束が有るぢやあございませんか。貴下が好い御天氣の日に外へ出て御遊びなさりたければ、妾だつて矢張外へ出て遊びたうございます。默つて居ても今日あたりは何處か氣の晴れるところへ連れて行つて下すつて宜い筈です。家の中にばかり居てくさ〳〵して仕舞つてならないのです、ほんとに三つ越の店や白木の店に何樣な人形が出て居るかも知らずに、古衣の煮たり燒いたりばかりに氣を屈して苦しんで居るのなんぞは、何も妾だつて些も好ぢやあございません。」

口惜しさうに今度は火鉢の緣を拭き出した。

「謝罪つたよ、一々道理だよ。しかし今日のところは世古戸に濟まんから……。」

いよ〳〵折れて優しく低く出る。

「世古戸さんに濟まぬと仰あつて妾には濟まぬとは御思ひにならないのですか。其様に世古戸さんを御大切になすつたら、世古戸さんが定めし面倒臭い小遣帳を預かつて、而して貧乏世帯の遣り繰りを仕て下さるてしやう。」

いよ〳〵高く強く出て一歩も下らない。

流石に男兒だ。これを聞くと主人もむら〳〵としたと見えて、さつと顏色は變つた。火を探つて居た煙管の頭はぶる〳〵ッと顫へて、火入の灰を埒無くほだてた。

「コレ」

と思はず知らず激した調子になつて主人が叱らうとすると、二の句を續がせる間も無く、

「てござゝます貴郎は、其様な顏をなすつて。妾は決して理の通らないことは申しません。暴威を加へやうとなすつても其はいけません、何處までも御諫め申すことは御諫め申します。」

と、何様して〳〵明治の婦人だから學校ずれに摺れ切つて居て、舌戰を仕たこともあれば喧嘩を爲たこともあるので、中々自分が正理と信ずるところに據つて居ながら屈するやうなことは無い、猫板を執つて膝に突立てゝ、扱くやうに右の手で其をぐいと扱き下しながら、昂然として達者に疊み掛けた。主人は其の理の強みと勢の強みとに壓されたのか、ぐなりとして仕舞つて、竹刀を振り冠りながら御胴を打たれて仕舞つたやうに妙に氣の拔けた樣子になつた。

「それぢやあ何様しても今日は‥‥」
と絶望の悲哀に陥つた聲で、尋ねるとも無く云ふと、
「いけません、癖になりますから。」
と言語は明晰で宣告は嚴峻だ。が流石は女で、
「因業のやうですが如是で無くつちやあ吾家が成立ちませんから。それ過般貴下が御讀みなすつて感心して道理だと許して在らしつた彼の『成業雑誌』の『鐵石心』といふ論文の教訓を無にしますまいと思ひまして今日は妾も一寸も自分を枉げない積りで居りましたのです。」
と、まさか愛嬌の積りでもあるまいが附加へた。
「何だエ、鐵石心で亭主に小遣錢を呉れないと御言ひのかエ。アーアッ。大變なものを讀んで聞かせたナアッ。」
と、驚いて呆れてパタリと煙管を落すと、無暗に吸はれて終つて居た吹殻の、たゞもう紅い火ばかりになつて居た奴がころ／＼と疊の上に轉がり出して、默々で疊を燒いて居る。主人は一向それにも氣が付かない。忙然と仕て庭の方を的も無く見て居ると、其と知つて細君は飛んで來て手に持つた布巾で拂ひながら、
「何てすねエ、放心なすつて、不經濟な。家屋は他人のでも疊替は此方持ちやあ有りませんか。」

其 二

「温間、温間。此室だ、此室だ。」

今發するばかりの瀛車の二等室から首を出して喚んだのは、鼠無地の脊廣に、同帛で特に仕立てたフツク帽子といふ、少し生意氣の打扮の、是も三十前の怜悧さうな男で、喚ばれた温間は其と見て嬉し悦んで驅け込んだ。切符の色が異ふので何か驛員と温間と世古戸と三人で物を云つて居たが、其も直と濟んで終つて、一車室に丁度二人しか居ない其の二人が仲好く並んで腰を下した時、瀛車はごと〳〵と動き出した。

温間は茶つぽい脊廣の衣嚢から手巾を取り出して、此も世古戸のやうに服と同じ布て出來て居る帽子を脱ぎかけて額の汗を拭つた。

「もう少しで後れるところだつたネ。」

「左樣さ、何樣も氣の長いのと人の好いのとは君の專賣なのだが、餘り氣の長いのも他迷惑だぜ、僕なんぞは性急だから早くから來て居て隨分長い間ノツソリとして待草臥れたよ。」

「失敬々々。つい遲くなつて仕舞つた。しかしまあ好い天氣で何よりだネ。」

「ウン、郊外を行かうなんといふのには、天氣が外れだつた日には哀れなものだが、今日の樣ならばマア何が無くつても好い心持だ、紅葉が早くつても遲くつても關つたことは無いネ。何樣だい今日はお互

に學生時代へ戻つて、野外で晝飯は喫らかすといふことに仕やうと思つてサンドウイッチの別誂といふのを持つて來たが、」

「其あ妙々。面白いネ。」

「それ市川で晝飯を食ふと市野屋といふ事になるだらう。彼家は好いが、何樣かして鴻臺の人達が多く來て居る日には風來者は仕方の無いめに逢ふし、第一彼家で晝を食つて、あれから川上へぶらついて、川甚で復一杯といつた日には、同じやうな鯉や何ぞばかりで鼻を突く譯だからネ。」

「成程。」

「川甚も端艇の遠航を爲る時分に行つた限りで全然其後知らんが、彼の時分はお互に勇氣壯んで何を食つても旨かつたナア。」

學生時代を經過して紳士時代に入つたので、今は普通の物なら旣旨いとは思はぬやうになつて居ると暗に誇り氣味だ。

「僕は端艇連へは加はらなかつたから其家も知らんが、なあに今でも僕は大概の物なら旨いと思つて食ふよ。」

これは正直で飾りつ氣が無い。蓋し實に賢妻君の經濟的晩餐よりも大抵の店食物は旨いに違ひあるまい。

「ハヽヽ、君のところの令夫人は實に賢婦人には相違無いが。食物調理は餘り御上手ぢやあ無いからナ。何日のアブカン汁などは實に驚いたぜ。」

「エッ。亞富汗汁？ そんなものは食つたおぼえが無いが、何樣なものだつたネ其は。」
何程親しい間でも云ひ過ぎたと思つたが、眞面目に聞かれるので胡魔化すことも出來ず、ユ、、云つて遣つたところて大して怒りもすまいと口髯を拈り〳〵、
「亞富汗汁じや無い、アブカン汁だよ。可いかえソラ青い渦の線の入つて居る觀世數といふ奴があるだらう、彼奴に油揚の細引いた奴を取り合せた汁なのだ。其も鰹節でも利いて居れば好いのだがネ、君のところの賢夫人のはイの二三町手前を電車で驅けましたといふやうな鰹節の取り方て拵へ玉ふのだから降參したネ。」
「ハ、、、君は隨分惡口は偉いナア。ア、、せめて其達者な口辯の半分も僕に饒舌ることが出來ると、何ぼ何でも負けや仕ないのだけれども。」
「エ、」
「なあに何でも無いよ。君何樣だい一つ取りたまへナ。」
「ヤア、、斯樣な驕つた葉卷を始終喫して居るのか。」
「何左樣ぢやあ無いが君と二人て野道を喫さうと思つて、來掛に態々取つて來たのだよ。」
「ヤ、其りやあ有難い。アブカン汁だなんて失敬な事を云つた。氣に障つたらば勘忍して呉れたまへ。」
「何、僕の妻の事なんか幾干惡く云つたつて構はんよ。實際何も彼もアブカン式て、僕も弱らせられて居るのだからネ。」

「ハヽ、御挨拶で恐縮だ。夫に惚れて儉約になるといふ句があるから、女房の儉約なのは愛情の濃かな證據で、妻君がアブカン式になればなるほど、其の愛情の保護によつて君の前途は好い譯になるのだ。僕のやうな獨身極樂蜻蛉主義も餘り宜くは無いものだからネ。」
「前途は何樣か知らないが、現在は好く無いよ。それて‥‥ぢやあ無い、そこて其は然樣と、君に今一寸斷つて置くがネ、僕は實は今日嚢中を‥‥。」
「何樣かしたのか、異しな顏をして!。盜られたのかい?。」
路究して意外の渡船が蘆の間から出て來たやうな譯だ。
「ウ、、先あ左樣だネエ。」
「先あ左樣だネエだエ?、何だか變だネ。何處て盜られたのだえ?。」
「ウ、、あの、その、‥‥」
「是はあやまつた!。何處て盜られたと覺えて居て盜られるものも無い筈のものだつたのを愚な事を聞いた。澤山入つて居たのか?。」
「ナアに微少」
「何の位」
「極微少さ」
「極微少つて?」

「無いも同然さ。」
「其ならまだしもだつたが忌々しいことを仕たネ。」
「そこで今日は君に何から何まで世話にならなきやあならないのだが
「あゝ可いともサ、知れた事なのだもの！。」
「アヽ、やつと安心した。ヤ何様も今日は暖かい。」
溫間は復手巾を取り出して額の汗を拭つた。世古戸はマッチをツと摺つて葉巻を吸ひ出した。やがて一室の中は良い香が滿ちた。

其三

天氣が明日明後日に變るのでゞもあらう、今時分には稀らしい南風が晝から吹いて居るので、上船は悅んで皆帆を張つて溯る。五艘七艘四艘三艘、或は絕え或は續いて、片流れの水の淸潔な江戸川を廻燈籠の繪の動くやうに進んで行く。對岸は霜枯時ながら猶ほ少しは綠色を留めて居て、汀渚の蘆荻は末枯れ果てゝ居るが堤の雜草などは猶地を飾つて居る。帝釋詣の來る庚申では無し、端艇の來る土曜日曜では無し、水に臨んで居る川甚の座敷は、たゞ其の一番好い一室が世古戸と溫間とに占められて居るばかりだ。實際時節違ひの南風が吹く位だから溫暖な日には相違無いが、其でも水邊の初冬である、ヤゝもすれば婢が好意から障子を閉めて呉れやうとするのを、念に懸けてカラリと明け放して、而して二人は

醉を噴いて居る。

「兵〻間山の石段から門をかけて、下から仰いで見たところも一寸好いし、上から見たのも好いが、此地の矢切の渡のところの景色も唯無造作に田舍びて好いネ。」

「好いネ、是といふところも無いけれども。僕は初めて此邊を見たから猶の事好く思ふか知らないが、同じ川でも隅田川なんぞとは違つて何樣しても阪東太郎の支流だけに滔〻として居るやうで嬉しい。しかし草臥たところへ飲つたので大變に醉つた。此家も居心が惡くない好い家だネ。」

「これで料理方さへ最少し臻つて吳れると好いのだが、…… イヤ何樣も年齡の邁かない中の方が何でも旨く思へる。」

「僕はアブカン式で一月中濟ませて居る故か知らんが、此でも別に不足には思はないよ。」

「またアブカン式といふことを云ひ出したネ。僕が惡かつた、勘忍して吳れたまへといふのに。」

「ナニ、君に中てゝ云ふのぢやあ無いよ。些譯があつてアブカン式が忌々しくつてならないものだから、つい口に出て來るのなのだ。」

「醉つたネ君は。先刻からアブカン式が忌々しくつてといふことを既四五度云つたよ。」

といふ御當人の世古戶も大分廻つたと見えて、杉箸を逆にしたのも知らずに何か啄いて居る。其位だから、まして温間の調子は大に變つて居る。

温間は冷くなつて苦かりさうな酒を呑み乾して、其盃を今さら鹿爪らしく盃洗で洗いて世古戶に擬し、

薄鈍く舌嘗めずりをして、

「今日の江戸川堤の散策は實に面白かつた。御蔭でもつて大に欝結を散じた。實は君他人には云はれない不快の煩悶が有つてネ、何とも云へない可厭な氣が仕て居たところを、君の快活な談話と野外の長閑な景色との爲に半日は忘れて終つたよ。嗚呼君は實に僕の親友だ、莫逆の友だ、たゞに同窓の友といふばかりぢやあ無い、刎頸の友だ、と僕は思つて居る。考へて見ると學生時分から隨分君には世話になつて居る。」

口ばかりでは無い、何かに感じて、全く心底から感謝して居るのは、眼つき顔色に歴然と現れて居る。仔細は何だか更に分らないが、斯様云はれて見ると世古戸も兄になつたやうな氣が仕て知らん顔も仕ては居られない。元來温間は温厚過ぎて稍遲鈍なので數々同輩から調戯はれたり嬲られたりしたことも少くない、其度は何時も世古戸は擁護者の地位に立つて侮りを防いで遣つて、此のやうな好人物を嘲笑したりなんぞするといふことが有るものかと、却つて他の者を叱責する氣味に爭つたことが再々だつた。しかし世古戸もまた、温間が餘り不快斷で、煮え切らない男で、陰辨慶で、面と向ふと言氣地無して、執着心が非常に缺けて居るのが、自分の性質と大變に懸隔して異つて居るため、何様かした機會には齒痒さ餘つて、時には嘲弄罵詈したことも無いのでは無かつた。けれども相性とでも云ふのだらう、世古戸は罵る、温間は恨むといふやうなことが有つても、復直に二人の間は融和して終つて、オイ君、ウン何だといふ調子に戻るのであつた。で、今平素餘り不平らしいことを言はぬ平靜の氣性の温間が、實は

人には云ばれぬ煩悶が有つて云々と云ふのを聞いては、何だかフン然樣かと聞捨にするのが自分の良心に濟まぬやうな氣が仕て、世古戸は溫間を捉へて何で煩悶することが有るのかと根掘り葉掘り聞き出した。最初は自分でも女々しいと思つたかして明白々には話し兼ねるやうの氣味だつたが、實際堪へ餘つて居たので、少しづゝ〱家庭の狀態を話して、終には、平生自分の妻の威權が強くつて自分を壓抑し、兎角自分の思ふやうには仕て吳れないといふことを、雄辯で無い、明白で無い、半呑半吐の調子で、くど〱と、兒童が自分に優しい人に對して何か訴へるやうに、不得要領に述べ立てた。聞いて居た世古戸が醉つて居なければだつたが、たゞさへ氣の疾い、激し易い、自分から云へば義俠心に富んで居る、他から云へば干涉家で向ふ不見の男が、七分の酒氣を帶びて居て聞いたのだから堪らない、聞いて居る中からムツムツして、眉間に八字を寄せたり、眼を瞋らしたり、小鼻に力を入れたり、口をムグムグしたり、肘を張つたりして居たが、頓て溫間の話の途切れるのを待兼ねて、

「怪しからん話だ、實に怪しからん話だ。ぢやあ平生君に對して盡く不遜だといふのだネ。そして又今日も君の出遊を甚だしく沮んだといふのだネ。」

と怒り顏になつて念を推して糺した。

大變な勢で世古戸が自分に同情して吳れるのを見て、溫間も少しいきり出して來た。

「然樣なのだよ、實に憎い奴ぢやあ無いか、平素から僕を蔑視して居るんだからネ。」

「ナニ所主を蔑視して居る。飛んでも無い女だ、引叱るが宜いぢや無いか。」

「ところが引叱る位て驚くやうな奴ぢや無いのだからネ、何樣して僕が一寸一ト言云はうもんなら十言位滔々と口返答をするのだもの。そして加之に、是あ羞かしくつて他人には云へないことだけれど君だから云ふがネ、實は僕の小遣錢まで制限してアテガヒにして渡す外には何程歎願したつて哀訴したつて一厘も呉れないのだから、實に僕も苦しくつて遣り切れない時があるよ。」
「何だい、亭主の小遣錢を當飼扶持的に極める?。や、甚い悍婆だナ、君が入聟でゝも有りやあ仕まいし。君も亦君だ。何程人が好いと云つたつて女房に當飼扶持を頂戴して居る奴も無いものぢや無いか。そして歎願だの哀訴だのつて、馬鹿馬鹿しい。亭主たるものが女に向つて、何樣か來月の分を前借といふことにして、澤山は要りませんが少々ばかり御貸し下すつて、なんぞと、其樣な下らないことを頭を下げて云はれるものかい、面白くもない。」
「ム、まさか僕だつて……、僕だつて男兒だから左樣も云はないがネ。」
とは云つたが實は今朝もう其通りに云つたのだ。
「しかし兎に角歎願的に談話を仕ても振向きも爲ないと云ふのだネ。」
「其樣だよ、君の云ふ通り振向きも仕無いでネ、……」
「ン、そして、」
「火鉢の銅のオトシを厭に力を入れてグイと拭いてゐるのだよ。」
「憎いナア。」

「ア、憎いとも！　ほんとに！。」

「ン、そして、」

「何程大人しい僕だつて交際といふこともあるから、義理づくといふのぢや無いまでも休日や何ぞには朋友と一緒に遊ばうといふことも有るはネ。ところが其様な時でも何でも些も頓著は無くつて、何を云つても矢張グイッグイッだから弱る！。」

「何だエ、其のグイッグイッといふのは。」

「銅のオトシを力を入れて拭いてゐるのだよ。だからもう恐ろしく奇麗に光つて居る。」

「何を云つてゐるのだい、下らない。だつて君だつて口といふものが有るのだから譯を話したら無教育の婦人ぢやあ無し、合點が行きさうなものぢやないか。」

「ところが譯を云つても先方の勢の方が強いから敵はない、朋友と一緒に御遊びなさる位なら妾を連れて日比谷へでも上野へでも御出なさいましといふのだから。」

「そんな分らない事は無い。朋友に義理が缺けると云やあ可いのに。」

「イヤ、其も々樣云はないでは無い。譬へば君なら君に濟まないからと云ふと、世古戸さんに濟まないと仰あつて妾には濟まないとは御思ひにならないのですか、其様に世古戸さんを御大切になすつたら、世古戸さんが定めし女房役を仕て、面倒臭い小遣帳を預つて貧乏世帯を遣り繰つて下さるてしやう、と斯様云つた調子に僕を遣り籠めるのだから敵はない。」

「度し難き婦人だナ。」

「實に度し難い奴だよ。何だつて鐵意思といふことを振廻して、鐵意思でもつて亭主が要求する小遣錢なんぞは一厘も與るまいといふことを理想に仕て居るのだからネ。」

「怪しからん怪しからん。東坡を戰かせて河東の獅子吼と云はれた位恐ろしい女だつた陳季常の女房だつて、彼は嫉妬からなのだから恕すべきところもある。品行方正で朋友間でも好人だの君子だのと云はれて居る君に對して、何でも無いのに鐵石心だなどゝいふ下らないものを振廻して頑强に楯を築くとは途方も無い事だ、婉順 靜淑 は婦人の美徳ぢやあ無いか、高が小遣錢といふ名が付く位の些細の阿堵物を惜んで夫に言葉を返すなんぞといふのは言語道斷だ。」

「ウン、然樣だ、然樣だ。其通りだ。」

「何の、高が小遣錢なんぞ、云はゞ目糞金鼻糞金だ、那方へ何樣なつたつて宜い譯ぢやあ無いか。」

「ウン、然樣だ、然樣だ。其通りに違ひない。」

「又場合に依りやあ女房の指輪や釵兒や衣服なんぞは亭主の小遣に仕たつて差支は無い筈の 位のものだ。」

「ウン然樣だ、然樣だ。其通りだ。」

「まして朋友への義理交際なんぞのためとあるなら、何を犧牲にしたつても然るべき譯で、些細の物を惜むなんといふのは以の外の事だ。明智の女房は自己が髮をさへ亭主の交際費のための犧牲にしたぢや

無いか。」

「ウン、然様だ、然様だ、大に然りだ。引證適切だ、もう負けるもんか。」

「負けるもんかツて、何を云つて居るのだい？。一體誰に負けないのだい、僕と論ずるつもりなのか。」

「ナアニ、今度は妻と論じたつて負けないつて云ふことなのだよ、明智の妻や何ぞを僕の味方に引出すからネ。」

「何を詰らないことを云つて居るのだい、だから君は下らんよ、論ずるも何も要りやあ仕ない、其樣な度し難い悍婆は放逐して終ひたまへ。」

猪口を濕間に擬したが、婢は疾の先刻から居ない。世古戸が注いで與ると德利底がタラ〳〵と四五滴切りだつた。橘吉先生癇癪氣味てハタ〳〵と手を拍くと、もう大抵御銚子だらうと婢は賢く一本持つて來て、早速に濕間に一つ注いだが、談話の樣子が何だか何樣せ自分には構つても吳れさうでは無いと見たので、すいと立つて去つて仕舞つた。

世古戸は自分の猪口へ濕間に注いて貰つたのをぐつと飮んで勢威愈壯んだ。

「出しつちまひ玉へ、其樣な悍婆は君の爲にならん。實際悍婆だネ、其樣な鐵意思だなんといふものを振廻すのは。婦女は意思のものぢや無い、情のもので無くつちやならない筈ぢや無いか。好人だ君子だと云はれて居る君が其樣な間違ひ切つた悍婆を妻にして居るのは不釣合千萬だ、放逐して仕舞ひたまへ、放逐して仕舞ひたまへ。」

これには、流石にウン然樣しやうとも溫間は言ひ兼ねた。何樣して、是非彼女で無くつちや、無くつちや、無くつちやと、甘い母親を口說いて、而して母親の非常の盡力でもつて辛と持つた妻なのだもの、何程刎頸の友の言だからといつて、まさかに直其に同意は仕さうも無い理屈だ。

「ウー、ウー、あの、ウー、」

「ウーウーウーッて、何を云つて居るのだい、豚が中氣にでもなりや仕まいし。彼樣な悍婆は放逐して仕舞ひたまへといふのに。ハヽア君は妻君に包められて居るので、惡くは云つたものゝ放逐なんぞは迚も出來ないのだネ。」

「ナニ出來無い事は無いのだが。……あの……その、」

「あのその何だい、焦つたい人だナ。あのその?」

「あの何樣も差當つて好い辭柄が無いからネ。」

「辭柄?。辭柄なんぞは何程でも有るぢや無いか。汝は悍婆で不可から出す、不柔順で不可から出す、面付が氣に入ら無くなつたから出す、餘りアブカンで不可から出す、といへば何だつて立派な條件になる。一體前から氣に入らん婦人だつた。彼樣な婦人を妻にして居ると君の不利益になる。其の證據には彼女が君のところへ來てからは滅切りと君のところへ人が來なくなつたらう。君の母堂と君とで居た時分と那方が人が餘計來る?。朋友が行くと內心ぢやあ餘計な奴が來たといふやうな顏をして居るのだもの。實に君の人望を墜すこと一ト通りぢやあ無いネ。さらけ出して仕舞ひたまへ、跡釜は自然又好のが

幾千でも有らう、古い草を引抜きやあ乾度新しい草が生える。」

復手酌で仰いで其の猪口を擬しもせず。復自ら注いで、而して酒臭い氣を吹いて語り續けた。

「僕ばかりぢやあ無い誰でも是とするよ、恐らく君が彼女を出したからつて非とするものは有るまい。第一彼女が來てから君の母堂は君の弟の靜雄君と一緒に別になるやうになつたぢや無いか、其が怪しからん事だ。君の母堂は眞の賢婦人だから彼女の人となりを看破して、何にも云はず語らずにするりと別居して仕舞はれたが、僕は靜雄君のところへ遊びに行つて、君の母堂も彼女に對して不滿を抱いて居られるに違ひないと思ふことを確に認めて居る。考へても分るぢや無いか、惣領の妻たるものが母の傍に居て朝夕の世話をせぬといふことが何處にあるものか。厭なればこそ母堂も傍へ退いて居られるのだ。」

虛實は何樣か知らぬが、此樣云はれて見ると思ひ當ることが滿更無いでも無いので、親孝行の温間は大に動いた。

「ほんとに左樣だらうか。」

「當然さ、誰だつて夫たるものを壓するやうな婦人を悦ぶものがあるものか。他人の妻君の事だから惡いと思つたので誰でも默つて居る。併し僕は今の君の話を聞いたので憤激に堪へないから口へ出したのだ。刎頸の友を以て目されて居ながら、君が其樣な馬鹿な目に逢つて居るのを默つて見て居ることは出來ない。他人の事でも腹が立つてならないよ、女の分際として男の言ふことを聞かぬなんぞといふのは。

當世其樣な女が至るところに多い、怪しからんことだ。逐拂つちまひたまへ。逐拂つちまひ玉へ。御心好しも大抵に仕て貰はなくつちやあ。度が過ぎて君見たやうになると朋友の面汚しになる。意氣地の無いにも程が有るものだ、早速と逐ひ出しちまひ玉へ。」

逐ひ出すと云は無ければ喧嘩でも吹懸げさうな顔つきだ。法界悋氣といつて自分に關係の無い事にも無暗に悋氣を爲る人があるが、世古戸のは法界腹立とでも云ふのだらう、無暗に怒つてゐる。濡間も朝の不滿は有り、酒の氣は有り、其處へ色々の事を云はれて段々と世古戸の勢に釣り込まれて終つて、特に傳子が此場に居無いので持前の陰辨慶をはじめ出した。

「違ひ無い、實に君の云ふ通りだ。女の分際として失敬千萬な、人の言ふことを遮つて止めるなんといふのは出過切つた話だ。ナアニ僕だつて陰忍して居る間は穏和しいが勘忍袋の緒を斷つて終へば其代り容赦は無いのサ。成程考へて見れば彼の儘は措けない。人を馬鹿にして居る。憎い奴だ。怪しからん。オトシのグイ〳〵が餘り人を侮辱して居る。妾は決して理の通らないことは申しませんなんぞと云つたが、默つて聞いて居て遣れば宜いかと思つて付上つた奴だ。今に見ろ、叩き出して終うから、其時になつて泣かないが宜い。」

「然樣だ、確乎として出しつちまふが宜い。辭柄もへつたくれも要つたものぢやあ無い。」

「ウン、對者が鐵意思なら此方も鐵意思だ、出すと云つたら屹度出して仕舞ふ。」

「偉い！、其てこそ男だ。一盃與らう。」

溫間は偉さうに張肘をして受けて、磊落らしく飮んだが、併し生醉本性違はずて、家へ歸つたら何樣爲やうと思ふと、何樣したら可いのだかさつぱり分らない。て

「何樣しやう先づ、」

と思はず獨語つと、

「何を？」

と世古戸は敏捷に反問した。渡りに舟なので、

「イヤ家へ歸つたら何樣談話の緒を取り出さうかといふことさ。腹は旣悉皆確然と定めて仕舞つたのだけれども、僕は談話の才が乏しいのが何樣して宜いか分らないから。」

と云ふと、世古戸は旣切齒を仕て齒痒がつて、丁度今何か挾んで口へ入れた杉箸の尖頭をギリ〳〵と咬んで碎いて捨てた。

「仕樣が無い男だナ君は。ぢやあ談話次手だから、下らないが敎へて與らう。宜いかヱ、先づ君が吾家へ歸るのに歩いてなんぞ歸つちやあ不可ね。歸つてから僕と別れるや否や、成るべく威勢の好い人力車に乘つて、ガラ〳〵ッと吾家へ大した景氣で着けさせるのだ、而して冒頭に車賃を遣れと高飛車に命じて、君は其儘で座敷へ踏反返つて寐るのだよ。何樣だ出來るかヱ。」

「出來無くつてさ。それから。」

「平生と態度が違ふからアブカン先生も氣を吞まれて驚くだらうが、車夫賃を濟ませて終ふと、ソラ乾

厲詰責調子でもつて、何處で其樣に過飮していらしつた、と賢婦臭く出て來るだらう。」
「ウン、其あもう屹度左樣だ。そしたら川甚て大に君の馳走になつて細君論を仕たといふかネ。」
「馬鹿ッ。それだから嚊左衞門に遣付けられて仕舞ふのだ、其樣正直ぢやあ不可、斯樣いふやうに云ふのだ。」
「むづかしいネエ。何樣いふやうに。」
「何處で飮んだつて大に御世話だい。懷中に小遣が無くつたつて一個の紳士だ、マサカお傳燗酒の飮逃も仕て來ないから安心するが宜い。と斯樣一つ衝てゝ遣るのだネ。」
「ン、ナアール程。君は毒言は巧いネー。好い氣味ゝゝゝ。彼女も流石にギクリとするだらう。」
「そこで、オヤ是は機嫌が惡いナ、と思ひながらも、他所で喧嘩か何ぞ爲て來たせゐだらうと考へて優しく君を待遇ふよ。」
「困るネ、優しくされちやあ。怒ることが出來なくなつて仕舞ふから。」
「何困ることは有りや仕無い。優しくされても大の字で寐て居るのだ。すると、貴郎其ぢやあ宜けませんからとか何とか云つて婢と二人て、床の中かなんかへ舁込にかゝるネ。」
「ア、其處て兒童の時石地藏をするといつて行つたやうに突張返つて重くして困らせて遣るのかい?。」
「下らないナア、石地藏なんぞ仕たつて何樣なるものかネ。左樣ぢやあ無い、其時君が脚でもつて、彼女が傍へ寄つて來たところを邪見に蹴るのだよ。」

「無法だネ。」
「無法だつて關ふものかい。そして其處でもつて、エ、打棄つて置いて呉れ、好い心持に醉つて居るのだ、汝が飲ませた酒の醉ぢやあ無いと思つて粗略にする勿い。何處へ醉ひ倒れて寐込まうと乃公の家で乃公の勝手だ、構つて貰ひたく無い、指を付けられるのも厭だ。乃公にやあー構はずとも澤山火鉢のオトシでも拭いてゐるが宜い、と復食はせるのだネ。」
「ン、ナアール程。毒言々々。ありがたい、實に好い氣味だ、悉皆敵が討てる。しかし、定めし厭な顔を仕て食つて掛つて來るだらう。」
「勿論サ。其の咬つて掛つて來るところを待つ爲の前藝なのだから。そこで悍婆先生恨みつぽく悍り立つて來て。何か御氣に要らないことが有つて御腹立なら御腹立て判然と云つて頂きましやう、さあ何事が御氣に入らないで其樣に當言を仰あつたり亂暴をなさつたりなさるのです、さあ其事を伺ひましやう、と乾度責め寄せて來るネ。」
「其樣なると困つちまふよ、僕は辯が惡いから。」
「馬鹿なことを云ひ玉へ、困る奴が有るものか。サア其樣なつたところで君が男兒的勇威を振つてネ、」
「ム、男兒的勇威を振つて、」
「ハ、、何も今其樣に身體に力を入れて變に武者振ひなんぞを仕なくても宜い。」
「つい一生懸念になつたものだから。さうして。」

「そこて君が起直つて一ト沈着沈着いて、コレ、何事が氣に入らないか其が聞きたい!?、フン、氣に入つた事でも有るやうなことを云つて居る!。些曹達でゝも精神を洗つて自惚を落して來い、一から十迄十から百迄悉皆氣に入らないは。今日といふ今日ふつ〱飽きて、お氣の毒だが跡釜まで旣定めて來た。さあ斯樣云ひ出したからには合せものは離れものだ、何を云つても御取上は無い、一寸斷つて置くが鐵意志だからネ、と言葉の遣ひやうは少しをかしくつても關ふことは無い、其から後は何を云はれても、鐵意思だよ、鐵意思だよと云ひ通しさへすれば宜いのだ。」

「ン、ナアール程。弱るだらうナ。流石の彼女でも屹度閉口して仕舞ふに違ひない。有り難い。サア來い、悉皆敎はつたから、もう負けるものか。鐵意思だぞ。鐵意思だぞ。」

「ハ、、、そこて威張つたつて仕方が無い。ぢやあ其の失敬なアプカン先生を退治して仕舞ひたまへ。明日の朝は君も僕と同樣に一人者となる譯だから、何か食物の手土産でも持つて訪問れて遣らう。何樣も惡女房なんぞ無い同士の方が朋友の情は深くなつて種々な面白いことが出來るよ。」

「左樣だ〱。ぢやあ先あ今夜兎に角叩き出して仕舞はう。」

「出來るだらうネ。」

「出來なくつてサ。だが何なら君一緒に僕の所へ來て呉れると宜いナ。」

「ハ、、、何處の國に女房を出すのに後見を賴む奴があるものか。」

「でも何だか少し…。」

温間は冷えきつた酒をグッと仰ぐと、酒は口の端から散つて膝にだらし無くこぼれた。

其四

「もう御歸りになりさうなものですが大層御遲うございますネ。」婆やと云はれさうな年皴の婢が、見苦しくない置洋燈の下で編物を仕て居て温間の妻君に斯様いふと、

「あゝ大層遲いこととネ、御朋友のところで話し込んで居らつしやると見える。」と妻君は別に苦にする樣子も無く答へた。

「旦那樣の御襟飾になるのでございますか。」橄欖色と白との絲で何だか奇麗な細長いものを編んで居るのを見て婢が尋ねる、

「然樣なの、今仕て御在なさる襟飾も、既大分汚れたやうだからネ。」と答へながらも編棒の手は休めない。

「ほんとに何樣も御器用でもつて旦那樣思ひていらつしやること!。大抵當世の方は旦那樣の絽の羽織や上布の御衣は丸めて戸棚へ突込んで置いても本郷座へでも行つて見やうといふやうな肌合の御方が多いやうでございますのに。」

「ホヽヽ、妾あまた、女學生あがりは意氣地が無い意氣地が無いといふ噂を能く人の爲るのを聞いて、口惜くつてならないから、一生懸命になつて吾家の爲を思つて、何でも母樣に褒めて頂かうと心掛けて

斯るばかりなのよ。それで漸く此頃になつちやあ母樣も妾を悉皆信用ひて下すつて、淀雄は人が良過ぎて宜けないから汝能く氣を付けてネ、なんぞと云つて下さるやうになつたので猶の事骨を折つて、少しでも疾く家の樂になるやうにとばかり氣を張つて居るのなの。だが其だものだから終夢中になつて旦那樣にも負けちやあ居ないやうになつて仕舞ふの。此樣なに御歸りが遲くなつたからつて、眞逆旦那樣が怒つて在らしつて其爲にとも思ひは仕ないけれども、今朝なんぞは學校で論爭でも仕て居るやうな氣になつて仕舞つたので、少し云ひ過ぎたよ。」

がら〱といふ車の音家の前に止ると頓て、主人は大醉して跟蹌と玄關にかゝつた。

「車賃を遣れ。」

生醉の寢惚聲が異しく大きく響いた。

車夫は賃を得て歸る、婢と二人がゝりで靴を脱がせると、溫間は復跟蹌と茶の間へ通つたが其儘顛倒返つてしまつた。

「何處てまあ此樣に過飮していらしつたのです？。」

果して稍詰責調子に案の定の問だ。

「占たッ。」

と淀雄は莞爾としながら、

「何處て飮んだつて大に御世話だい。懐中に小遣が無くつたつて一個の紳士だ。マサカおでん燗酒の飮

遁も仕て來ないから安心するが宜い。」

細君はぎつくりと驚いて、眼を丸くして主人の顏を見ながら、思はず知らず恐れ怯えて後へ身を退いた、

温間先生其の樣子を見ると嬉しくつて堪らない。腹の最底の妙なところから、「何樣だ一番降參したらう、」といふ得意極まつた滿足の笑が頭を擡上げて來て、戀人から色好い返事でも得た時のやうに莞爾莞爾とせずには居られなかつた。が、一生懸命になつて其笑は蔽した。

「大層な御元氣ですことネエ、眞赤になつて在らつしやいますよ、咽喉は御渇きなさらなくつて？、御冷水をあげましやうか。」

復果して豫定の通り優しく待遇はれたので、「それ見ろ、何樣だ、此方の圖つた通りだらう、」といふ得意の笑が復込上げて來た。併し教へられた通り、優しくされても大の字で寢て居たが、たゞ困つたのは咽喉が恰好眞に渇いて居たので、そこへ御冷水をあげましやうかと言はれたので馬鹿に水が飮みたくなつたのだ。けれども此處で折れて仕舞つては無得だと思つて忍耐して水を呉れとも云はずに居ると、飮めないと思ふので餘計喉咽が乾涸びてならない。クックッと唾液を呑んで生れて初めて餓鬼道の苦みを仕て居ると、氣を利かして婢は早玻璃碗へ水を盛つて來たやうな樣子だ。眼を塞いで知らん顏を仕て居ると、婢の持つて來た洋盞を受取つて、而して自分の口の端へ妻が持つて來て呉れた。片手を徐と頸の下へ入れて、赤子にでも觸るやうに柔らかに親切に聊か頭を抱き起して、餘程爛醉して懶くなつて居るものと思つたか洋盞を口の端へ差し付けて呉れた。

「さあ御冷水を少し御飮りなすつたら可いでしやう。」

飮みたくつて飮みたくつて、咽喉はクックと仕て來た、冷やかな洋盞は乾き切つて干割れさうな下脣に觸れた。我知らず上脣はムッと動き出したが、嗚呼馬鹿々々しいと思ひながら淀雄はドッコイと忍耐した。

「水なんぞ要らない、火なら食つて遣る。」

自暴になつて邪見に叫び出したが我なから餘り無茶苦茶な言葉て、水なんぞ要らないは分つて居るが、火なら食つて遣るといふのは、自分が火食ひ鳥てでもあるやうで實に馬鹿々々しいと我ながら慚ぢた。

「大變に御醉ひになつていらつしやるのだから、お前御床を展べてネ。お床が敷けたら妾と二人で舁き込むことにしましやう。」

猶吾が頭を支へながら妻君の斯樣言ふのを聞いて、ソラ來た、愈々思ふ通りに事が運んで行くぞ、圖星大中りだ、今見ろ蹴飛ばして驚かして遣るから、と思ふと復得意の笑が込み上げて來て何樣もならない。其中に床は敷けた樣子で婢の來た跫音が爲た。いよ〳〵だナと思ふと生憎妻は頭の方を持つ、婢は足の方を持つた。頭を持つて居るものを蹴ることは出來ないと思つて居る間に旣宙に擧げられたので、無暗に足を動かし首を振ると女の事だもの二人とも持つて居兼ねた。豕でも轉げたやうに溫間は疊に落ちた。生憎の敷居でもつて頭は十分にゴッツリ。

ア痛いと思ふと、丁度其が怒る張合になつて甚く調子好く物が言へた。

「エ、打棄つて置いて呉れ、宜い心持に醉つて居るんだ。汝が飲ませた酒の醉ぢや無いと思つて廉くする勿い。構つて貰ひたくない、指を付けられるのも厭だ。乃公にやあ構はずとも澤山オトシでも拭いてるが好いや。」

知れないやうに薄眼を開けて見て居ると、傳子はまた愕然とした樣子だ。白い顏は可哀相に少し靑くなつて來て、眼はたしかに驚き訝りながら何かの考へを辿つて居る。好い氣味、好い氣味、此方の箭殼に入るとも知らないで、今それ理屈らしいことを云つて嚙つて掛つて來るだらうと待設けて居ると、果して我が思ふ通りに敵は出ておいてなすつた。

「醉つて居らつしやると思つて默つて居りますると、何だか妙に御當てすりなさるのネ。何か御腹立なら御腹立て判然と云つて頂きたうございます。さあ妾の何樣致しましたのが惡うございましてゞす、其を伺ひたうございます。」

少し意氣込んで責め寄せて來た其の樣子は中々侮ることは出來ない。併しお氣の毒だが此方の思ふ壺へ嵌つたのだとも知らなくつてと思ふと可笑くつて仕方が無い。一ト泡も二タ泡も噴かせて遣るから今見ろといふ氣て、淀雄は起直つて異に澄ました。

「コレ、何事が氣に入らないか其事が聞きたい?!。フン、一から十迄悉皆氣に」

と云ひかけて一寸女房を見ると、凝然と此方を見つめた顏の、眼からは今次の言葉次第で火でも噴きさうな恐ろしい樣子を仕て居る。一から十迄悉皆氣に、入らないとても云つたが最期食ひ付かれ兼ねない

ので、思はず氣が萎へて再度
「一から十まで」
と云ひかけたが何樣も最後が云へない。
「一から十まで、ウ、、十から百まで、‥‥」
また止まつて終つて、また後が云へない。
「一から十まで、ウ、十から百まで、百から又千まで‥‥」
矢張後が云へないで、下らないことを云つてまご〳〵して居ると、
「一から十まで、さあ何樣しました?。氣に入らないとても云つて御覽なさい、たゞ置きませんから。」
と恐ろしい威勢の金切聲できめつけられて、溫間は動顚して仕舞つた。
「ウ、一から十まで、エ、仕方が無い!、悉皆氣に入つて仕舞つて居るは。」
「そんなら何も下らなく當てつこすりなんぞを御云ひなさら無くつても好いぢやあ有りませんか、」
「だから何も當てこすりなんぞを云ひは仕は爲ない。」
「ぢやあ矢張オトシを磨けと仰あつたのは本當に磨けと仰あつたので?」
「然樣だよ、別にあてつけて云つた譯ではないので。」
「左樣。それでは今後も矢張磨きますよ。」
「あゝ、好いとも〳〵、」

「懷中に小遣が無くつてと仰あつたのも當つけぢやあ無かつたので？。」

「然樣とも然樣とも、當付ぢやあ無かつたのだよ。」

「ぢやあ矢張今後も定額のほかは一厘だつて懷中へ小遣を入れてあげませんから。」

「あゝ可いとも可いとも。」

「一體先刻からをかしな事を仰あつたのは何樣なすつたのです！、」

「實はあれは世古戸が‥‥。」

何も彼ももう落城して仕舞つた。

世古戸は翌朝食品を手土産に溫間を訪うて、そして其の禮謝は今朝は居らぬ筈の傳子の口より聞かされた。

（をはり）





女客

泉　鏡花

第一

「謹さん、お手紙、」

と階子段から聲をかけて、二階の六疊へ上り切らず、欄干に白やかな手をかけて、顏を斜に覗きながら、背後向きに机に寄つた、當家の主人に一枚を齎らした。

「憚り、」

と身を横に、蔽ふた燈を離れたので、玉ぼやを透かした薄あかりに、くつきりと描き出された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳見るやう、髮も容もすつきりした中年增。

これはあるじの國許から、五ッになる男の兒を伴ふて、今度上京、しばらく爰に逗留して居る、お民

といつて纏綿き、一蒔繪師の女房である。
下階で添乳をして居たらしい、色はくすんだが艶のある、藍と紺、縦縞の南部の袷、黒繻子の襟のなり、ふつくりした乳房の線、幅細く寛いて、晝夜帯の暗いのに、緩くまとふた縮緬の扱帶に蒼味のかゝつたは、月の影のさしたやう。
燈火に對して、瞳淸う、鼻筋がすつと通り、口元の締つた、痩せぎすな、眉のきりゝとした風采に、しどけないなりも、目に立たず、繕はぬのが美い。
「これは憚り、お使ひ柄恐入ります。」
と主人は此方に手を伸ばすと、見得もなく、婦人は胸を、はらんばひになるまでに、づッと出して差置くのを、疊をづらして受取つて、火鉢の上で一寸見たが、端書の用は直ぐに濟むだ。
机の上へ差置いて、
「眞個に御苦勞様でした。」
「はい〳〵、これはまあ、御丁寧な御挨拶痛み入りますこと。お勝手から此方まで、隨分遠方でござんすからねえ。
些とも憚り様なことはありはしません。謹さん、」
「何ね、」
「貴下、其の(憚り様ね、)を、端書を讀む、つなぎにいつてるのね、ほゝゝゝ。」

謹さんも莞爾して、
「お話しなさい。」
「難有う、」
「さあ、此方へ。」
「はい誠にどうも難有う存じます、いゝえ、どうぞもう、どうぞ、もう、……
「早速だ、おや〳〵。」
「大分叮嚀でございませう。」
「そんな皮肉をいはないで、坊やは？」
「寝ました。」
「母は？」
「行火で、」
といつて、肱を曲げた、雪なす二の腕、擔いだやうに寝て見せる。
「貴女にあまへて居るんでせう、どうして、元氣な人ですからね、今時行火をしたり、霄の内から轉寝をするやうな人ぢやないの。鐵は居ませんか。」
「女中さんは買物に、お汁の實を仕入れるのですつて、それから私がお道樂、翌日は田舍料理を達引かうと思つて、序に其の分も、」

「ぢや下階は寂いや、お話しなさい。」

お民は其まゝ、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引つかけの端をぎうと撫て、輕く衣紋を合はせながら、後姿の襟淸く、振返つて入つたあと、欄干の前なる障子を閉めた。

「此處が開いて居ちや寒いてしやう。」

「何だかぞく／＼するやうね、惡い陽氣だ。」

と火鉢を前へ。

「開ッ放して置くからさ。」

「てもお民さん、貴女が居るのに、其處を閉めて置くのは氣になります。」

時に燈に近う來た。瞼に颯と薄紅。

第二

坐ると炭取を引寄せて、火箸を取つて俯向いたが、

「お禮に繼いで上げませうね。」

「どうぞ願ひます。」

「まあ、人樣のもので、義理をするんだよ、こんな呑氣ッちやありやしない。串戲はよして、謹さん、東京は炭が高いんですつてね。」

主人は大胡坐て、落着濟まし、

「吝なことをおいひなさんな、お民さん、阿母は行火だといふのに、押入には葛籠へ入つて、未だ蚊帳があるといふ騒ぎだ。」

「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか、又いつかのやうに、夏中蚊帳がなくつては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか沒落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。

何しろ、家の焼けた年でせう、あの焼あとゝいふものは、何ういふわけだか、恐しく蚊が酷い。未だ其の騒ぎのない内、當地て、本郷のね、春木町の裏長屋を借りて、夥間と自炊をしたことがありましたつけが、其の時も前の年火事があつたといつて、何年にもない、大變な蚊でしたよ。

けれども、それは何、少いもの同志だから、萌黄威の鎧はなくても、夜一夜、戸外を歩行いて居たつて、それて事は濟みました。

内ぢや、年よりを抱へて居ませう、夜があけても、的はないのに、夜中一時二時までも、友達の許へ、苦い時の相談の手紙なんか書きながら、わきて寢返りをなさるから、阿母さん、蚊が居ますかつて聞くんてす。

自分の手にや五ッ六ッたかつて居るのに、」

主人は火鉢にかざしながら、

「居ますかもないもんだ。

あゝ、些と居るやうだの、と何でもないやうに、いはれるだけれども、何為阿母には居るだらうと、口惜いくらゐでね、今に工面して遣るから可い、蚊の畜生覺えて居ろ、と無念骨髓てしたよ。未だそれよりか、毒虫のぶん〳〵矢を射るやうな烈い中に、疲れて、すや〳〵、傍に私の居るのが嬉しさうに、快さうに眠られる時は、猶堪らなくつて泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐しさうな言であつた。

「まさか、蚊に喰殺されたといふ話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧でしたな、」

「然うだつてねえ、今じや笑ひばなしになつたけれど、」

「餘り然うでもありません、しかしまあ、お庇樣、どうにか蚊帳もありますから、」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹さん、貴下、」と優い顔。

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました、伯母さんは又自分の身がかせになつて、貴下が肩が抜けないし、然うかといつて、修業中で、どう工面のならうわけはないのに、一ッ賣り二ッ賣り、一日だてに、段々煙は細くなるし、最う二人が消えるばかりだから、世間體さい構はないなら、身體一ッないものにして、貴下を自由にしてあげたい、と初中然う思つて居らしつたつてね、お互に今聞いても、身ぶるいが出るぢやあ

りませんか。」

と顔を上げて目を合はせる、兩人の手は左右から思はず火鉢を壓へたのである。

「私は又私で、何です、なまじ薄髯の生へた意氣地のない兄哥がついて居るから起つて、相應にどうにか遣繰つて行かれるだらう、と思ふから、食物の足りぬ阿母を、世間でも默つて見て居る。

一層悴がないものと極つたら、たよる處も何にもない、六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだらう。

やつ了はうかと、日に幾度考えたかね。

民さんも知つて居ませう、あの年は、城の濠で、大層身投者がありました。」

同一年の、あいやけは、姉さんのやうな頷き方。

「あゝ、」

第三

「確か六七人にもあつたでせう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤を彈くやうに、指を反らして、

「謹さん、もつとですよ、八月十日の新聞までに、八人だつたわ。」

と仰いて目を細うしていつた、幼い時から記憶の鋭い婦人である。

「ぢや、九人になる處だつた。貴下の内へ遊びに行くと、何時も歸りが遲くなつて、日が暮れちや、あ

の濠端を通つたんですがね、石垣が蒼く光つて、眞黑な水の上から、むら〱と白い煙が、此方に這ひかゝつて來るやうに見えるぢやありませんか。

引込まれては大變だと、早足に歩行き出すと、何だかうしろから追ひ驅けるやうだから、一心に遁げ出してさ、坂の上で振皈ると、凄いやうな月で。

あゝ、春の末でした。

あとについて來たものは、自分の影法師ばかりなんです。

自分の影を、死神と間違えるんだもの、御覽なさい生きて居る瀨はなかつたんですよ。」

「心細いぢやありませんか、ねえ。」

と寂しさうに打傾く、面に映つて、頸をかけ、黑繻子の襟に障子の影、薄ら蒼く見えるまで、戸外は月の冴えたる氣勢。カラ〱と小刻に、女の通る下駄の音、屋敷町に響いたが、女中は未だ歸つて來ない。

「心細いのが通り越して、氣が變になつて居たんです。

ぢや、そんな、氣味の惡い、物凄い、死神のさそうやうな、厭な濠端を、何の、お民さん。

通らずともの事だけれど、何故か又故とにも、其處を歩行いて、行過ぎて了つてから、未だ死なゝいで居るつて事を、自分で確めて見たくてならんのでしたよ。

危險千萬。

だつて今だから話すんだけれど、其の蚊帳なして、蚊が居るッていふ始末でせう。ないものは活計の代

といふ譯て。

内て熱として居たんぢや、たとひ曳くにしろ、車も曳けない理屈てすから、何がなし、戸外へ出て、足駄穿きて驅け歩行くしだらだけれど、さて出やうとすると、氣になるから、上り框へ腰をかけて、片足穿物にぶら下げながら、母さん、お米は？ッて聞くんてす。」

「お米は？ッてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのてある。あるじは敢て莞爾やかに、

「恐いもんだ、其の癖兩に何升どこは、此の節却つて覺えました。其頃は、眞個てす、無い事は無いにしろ、幾許するか知らなかつた。

皆、親のお庇だね。

其の阿母か、然うやつて、お米は？ッて尋ねると、晩まてあるよ、とおいひなさる。

翌日のがないといはれるより、どんなに辛かつたか知れません。お民さん、」

と呼びかけて、固より答を待つにあらず。

「もう、其の度にね、私はね、腰かけた足も足駄の上て、何だつて、恁う背が高いだらう、と土間へ、たく／＼と座りたかつた。」

「まあ、貴下、大低ぢやなかつたわねえ。」

フト其の時、火鉢のふちて指が觸れた、右の腕はつけ元まて、二人は、はつと熱かつたが、思はずいひ

合はせたかの如く、鐵瓶に當つて見た、左の手は、ひやりとした。
「謹さん、沸しませうかね、」と輕くいふ。
「すつかり忘れて居た、お庇さまで火もよく起つたのに。」
「お湯があるか知ら、」
と引つ立てゝ、蓋を取つて、洋燈の方に傾けながら、
「貴下。一寸、其の水指を。お道具は揃つたけれど、何だか此の二階の工合が下宿のやうぢやありませんか。」

第四

「それてもね、」
とあるじは若々しいものいひて、
「お民さんが來てから、何となく勝手が違つて、一寸他所から歸つて來ても、何だか自分の内のやうぢやないんてすよ。」
「あら、」
とて凊い目を睜り、鐵瓶の下に兩手を揃へて眞直に當りながら、
「そんな事をいふもんぢやありません。外へといつては、それこそ田舍の芝居一つ、めつたに見に出た事もないのに、はる〴〵一人旅で逢ひに來たんぢやありませんか、酷いよ、謹さんは、」

と美しく打怨ずる。
「飛んだ事を、はゝゝ、」
とあるじも火に翳して、
「そんな氣ていつた、內らしくないてはない、其の下宿屋らしくないといつたんてすよ。」
「てすからね、早くおもらひなさいまし、惡いことはいひません。どんなに氣がついても、しんせつても、女中ぢや推切つて、何か、することごとが出來ませんからね、どうしても手が屆かないがちになるんてす。伯母さんも、もう今ぢや蚊帳よりお嫁が欲いんてすよ。」
あるじは、屹と頭を掉つた。
「否、よします。」
「何爲てすね、謹さん、」と見上げた目に、敢て疑の色はなく、別に心あつて映つたのてあつた。
「何爲といふと議論になります、唯ね、私は欲くないんてす。恁うといへば、理屈もつけやう、又どう恁うといふけれどね、年よりのためにも他人の交らない方が氣樂て可いかも知れません。お民さん、貴女が恁うやつて遊びに來て呉れたつて、知らない婦人が居やうより、阿母と私ばかりの方が、御馳走は屆かないにした處で、水入らずて氣が置けなくつて可いぢやありませんか。」
「だつて、謹さん、私が恁うして居いゝために一生貴下、奥さんを持たないて居られますか。

それも、五年と十年と、此のまゝて居たいたつて、此方に居られます身體ぢやなし、最う二週間の上になつたつて、五日目ぐらゐから、やい〳〵皈れつて、いつて來て、三度めに來た手紙なんぞの樣子ぢや、良人の方の親類が、あゝの、恁うのつて、面倒だから、それにつけても早々皈れぢやありませんか。また貴下を置いて、他に私の身についた緣者といつてはないんですからね。どうせ皈れば近所近邊、一門一類が寄つて集つて、」

と婀娜に唇の端を上げると、顰めた眉を掠めて落ちた、鬢の毛を、自劣つたさうに、背へ投げて搔上げつゝ、

「此の髪を挘りたくなるやうな思ひをさせられるに極つてるけれど、東京へ來たら、生意氣らしい、氣が大きくなつた上、二寸切られるつもりになつて、度胸を極めて、伯母さんには内證ですがね、これでも自分で呆れるほど、了見が据つて居ますけれど、だつて然うは御厄介になつても居られませんもの。」

「何時までも居て下さいよ、最う、私は、女房なんぞ持たうより、貴女に遊んで居て貰ふ方が、どんなに可いか知れやしない、」

と我儘らしく熱心にいつた。

お民は言を途切らしつ、鐵瓶はやゝ音に出づる。

「謹さん、」

「えゝ、」

お民は唾をのみ、

「眞個ですか、」

「眞個ですとも、眞個ですよ。」

「眞個に、謹さん。」

「お民さんは、嘘だと思つて、」

「ぢやもう一層、」

と烈しく火箸を灰について、

「皈らないで置きませうか。」

第五

我を忘れてお民は一氣に、思ひ切つていひかけた、言の下に、あはれ水ならぬ灰にさへ、かず書くよりも果敢げに、悄乎肩を落したが、急に寂い笑顔を上げた。

「ほゝゝほゝ、其の氣で澤山御馳走をして下さいまし。お茶ばかりぢや私は厭、」

といふ内涙さしぐみぬ。

「謹さん、」

といふも曇り聲に、

「も、貴下、どうして、そんなに、優しくいつて下さるんですよ、恁うした私ぢやありませんか。」

「貴女でなくッて、お民さん、貴女は大恩人なんだもの。」

「えゝ？恩人ですつて、私が、」

「貴女が、」

「まあ！誰方のねえ？」

「私のですとも。」

「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで見持になつたんですもの。碌に小袖一つ仕立つて上げた事はなく、貴下が一生の大切だつた、其のお米のなかつた時も、煙草も買つてあげないでさ。

あとで聞いて口惜くつて、今でも怨んで居るけれど、内證の苦しい事つたら、些とも伯母さんは聞かして下さらないし、あなたの御容子でも分りさうなものだつたのに、私が氣がつかないからでせうけれど、何時お目にかゝつても、元氣よく、いき／＼してねえ、眞個ですよ、今なんぞより、窶れてないで、もつと顔色も可かつたもの…………」

「それです、それですよ、お民さん。其の顔色の可かつたのも、元氣よく活々して居たのだつて、貴女貴女の傍に居る時の他に然うした事を見た事はありますまい。

私は最う、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢へば、元氣が出て、心が活々したんです。それだから貴女はつひぞ、さふいだ、陰氣な、私の屈托顔を見た事はないんです。

ねえ。
前刻もいふ通り、私の死んで了つた方が阿母のために都合よく人が世話をしやうと思つたほどで、又それに違ひはなかつたんですもの。
實際私は、貴女のために活きて居たんだ。
而して、お民さん、」
あるじが落着いて靜にいふのを、お民は激しく聞くのであらう、潔白なる其顏に、湧上る如き血汐の色。
「切迫詰つて、いざ、と首の坐に押直る時には。たとひ場所が離れて居ても、屹と貴女の姿が來て、私を助けて呉れるッて事を、堅くね、心の底に、確に信仰して居たんだね。
まあ、お民さん許て夜更しして、ぢや、おやすみつてお宅を出る。遲い時は寢衣のなりで、寒いのも厭はないで、貴女が自分で送つて下さる。
門を出ると、あの曲角あたりまで、貴女其の寢衣のまゝで、暗の中でも見送つて呉れたでせう。
小兒が奧て泣いてる時でも、雨が降つて居る時も、ヅッと背中まで外へ出して。
私は又、曲り角で屹と、密と立停まつて、しばらく經つて、カタリと樞のおりるのを聞いたんです。
其の、歸り途に、壕端を通るんです。樞は下りて、貴女の寢た事は知りながら、今にも壕へ、飛込まうとして、此の片足が崖をはづれる、背後を緊乎と引留めて、何をするの、謹さん、と貴女が屹といふと確に思つた。

ですから、死なうと思ひ、助かりたい、と考へながら、そんな、厭な、恐ろしい壕端を通つたのも、偏をおろして寢なすつた、貴女が必ず助けて呉れると、それを力にしたんです。お庇で活きて居るんですもの。恩人てなくッてさ、貴女は命の親なんですよ。」

と唯懷しげに嬉しさうにいふ顏を、熟と見る〳〵、ものをもいはず、お民ははら〳〵と薄曇る、燈の前に唯落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり齒をカチリと、堰きあへぬ涙を噛み留めつゝ、

「口についていふやうてをかしいんですが、私も矢張。貴下は、もう、今ぢやこんなにおなりてすから、私は要らなくなつたてせうが、私は今も、今だつて、其の時分から、何てすよ、同じなんです、謹さん。慾にも、我慢にも、厭で〳〵、厭で〳〵死にたくなる時がありますとね、然うすると、貴下が來て、お留めなさると思つてね、それを便りにして居ますよ。

まあ、同じやうて不思議だから、これから別れて歸りましたら、私も又、月夜にお壕端を歩行きませう、面して、貴下、謹さんのお姿が、其處へ出るのを見ませうよ、」と

差俯向いた肩が震へた。

あるじは、思はず、火鉢なりに擦り寄つて、

「飛んだ事を、串戯ぢやありません、そ、そ、そんな事をいつて、譲(小兒の名)さんを何うします。」

「だつて、だつて、貴下が、其の年、其の思ひをして居るのに、私はあの兒を拵えました、そんな、そんな兒を構ふものか、」

とすねたやうに鋭くいつたが、露を湛へた花片を、湯氣やなぶると、笑を湛へ、

「ようござんすよ。私はお濠を樂みにしますから。でも、こんなぢや、私の影ぢや、凄く死神なら可けれど、大方鼬にでも見えるでせう。」

と投げたやうに、片身を疊に、褄も亂れて崩折れた。

あるじは、ひたと寄せて、押へるやうに、棄てた女の手を取つて、

「お民さん、」

「…………」

「國へ、國へ歸しやしないから、」

「あれ、お待ちなさい伯母さんが、」

「どうした、どうしたよ。」

といふ母の聲、下に聞こえて、わつと、ばかり、其の譲といふ兒が。

「煩いねえ！一寸、見て來ますからね、譲さん、」

とはたりと立つた脛白き、敷居際の立姿。やがてトントントンと下階へ下りたが、泣き留まぬのを横抱きに、

しばらくして品のいゝ、母親の優い形で座に返つた。燈火の陰に胸の色雪の如く清らかに、譲はちゆう／＼ちゆうと乳を吸つて、片手で縋つて泣いじやくる。

あるじは、きちんと座り直つて、

「どうしたの、酷く怯えたやうだつけ。」

「夢を見たかい、坊や、どうしたのだねえ、」

と頬に顔をかさぬれば、乳を含みつゝ、愛らしい、大きな目をくる／＼とやつて、

「鼬が、阿母さん、」

「えゝ、」

二人は顔を見合はせた。

あるじは、居寄つて顔を覗き、故らに打笑ひ、

「何、内へ鼬なんぞ出るものか、坊や、鼠の音を聞いたんだらう。」

小児はなほ含んだまゝ、いたいけに捻向いて、

「うゝむ、内ぢやないの、お濠ン許て、長い尻尾て、あの、目が光つて、私、私を睨んで、恐かつたの。」

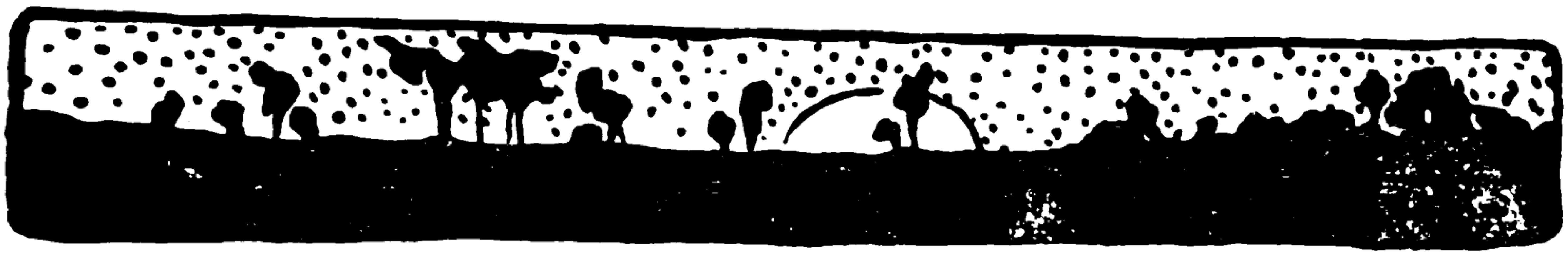
とくるりと向いて、ひつたり、母親の其の柔かな胸に額を埋めた。

又顔を見合はせたが、今は其の色も變らなかつた。

「おゝ、然うかい、夢なんですよ。」

「恐かつたな、恐かつたな、坊や、」
「恐かつたね。」
からくと格子が開いて、
「どうも、おそなはりました、」と勝手でいつて、女中が歸る。
「さあ、御馳走だよ、」
「謹さん、」
と衝と立つたが、早急だつたのと、抱いた重量で、娶を前へ、よろくと、お民は、よろけながら壇段子。
「…………」
「翌朝のお米は？」
と艶麗に莞爾して、
「早く、奥さんを持つて下さいよ。あゝ、女中さん御苦勞でした、」
と下を向いて高くいつた。
其時襖の開く音して、
「おそなはりました、御新造樣。」
お民は答へず、ほと吐息、閏髷艶やかに二三段、片頬を見せて、差覗いて。
「此處は閉めないで行きますよ。」（完）

（本篇第二までは本年六月の本誌に掲載せしものなれど休載の時日長きに亘りしを以つて讀者の便を計り全篇を掲ぐることゝせり（編者））



岸の灯

中村春雨

（上）

昔の傳導師、今の〇〇會社員　黒崎辰雄が、十年連れ添ふた最愛の妻妙子を肺病で喪つたのは先月の中旬、殘暑のまだなか〳〵に嚴しい頃であつた、妙子は熱心な、美以派の信者で、夫の墮落(妙子は然かく思ひ込んでゐる)を泣きつ、怨みつして、諫め立てしたけれども、釋迦に說法、基督に福音だと辰雄が笑冷つて受附もしないので、一時は自分から暇を取つて、夫の罪を償ふ爲に、福音女の聖職に一身を委んかとも、けなげな決心もしたのであるが、小い娘秀子の顏を見ると、一徹に思切つた所置も成り難く、神に對する信仰は失せたにしても、自分に對する愛情に變りのない夫を振り棄る事もならず、ついそのまゝ、會社員の奥樣となつて、昨日の木綿衣物の舊さを脫ぎ捨て、絹布の新らしさを着くる、世間並に云へば、結構な身分に出世したが、妙子は些とも浮いた顏色を見せず、「今に罰が當る」を何時も何時も口癖にしてゐる中、つい風邪を引いたのが原目になつて、怪しい咳が出る、痰が出る、盜汗をかく、終了には略血して、津田の海水浴場へ轉地養療を試みる事となつたが、兎角捗々しく行かないので、又

家へ引取ると、その夕、したゝか美しい血を吐いて、急に重體に陷つた、醫者ももうとてもいけないといふ、妙子も覺悟して氣も落さず、瀕死の病人が姿勢正しく、神の前に跪いて、只管、夫の悔改めん事を祈り、最後にその手を確と握つて『貴方、それでは私は御先へ參つて天國で待つてゐますから、貴方も何卒神の前に悔改めなすつて、私の居る處へお出下さいまし、屹度ですよ、私は待つてゐますよ……秀子さん、貴方とも又天國で逢ひませう、大人しくなさい、左樣なら!』と、小い手首にも接吻して、そのまゝ眠るが如く息を引取つたのである。

妙子は死に至るまで堅い、堅い大盤石のやうな信仰を持つて、毛筋程も疑ひを挿む隙を許さなかつた、墓の下が、天國の門に續いてゐると、信じ切つて、死ぬのを隣家へ行く樣に思ひ、再會期し得べしと、確く極めてゐたのだ、

辰雄も唯涙に暮れて『何んと美はしい信仰だらう!』と、光り輝くやうな妻の死顏の打仰がるゝ思ひがした、が、葬儀も濟まし、次第と日數が經つに連れ、『妻のやうな美しい迷信を抱いて死ぬのは幸福だ』と獨語くのであつた。

この二三日、辰雄は體も勝れないし、亡妻の事がしきりと思出されてならないので、明日の日曜日を幸ひ今年八歲の秀子を連れて、高津川を莚帆かけた船で下り、川口から傳馬船に乘りかへて、津田を目當に、高津沖へと漕ぎ出させた、妻の療養した土地に、ありし昔を偲んで、せめてもの思ひを遣らんとするのだ。

「お父さん、お母さんはもうゐらつしやらない事？」と、秀子は、八分は合點しながら、まだ二分は、母が居てくれゝば善いがと思ふてるやうに、黒眼勝の眼をぱつちり瞬つて問ふので

『アヽ、お母さんはもう亡くなつたんだから津田にはゐらつしやらない、秀さんお葬式の時、御見送りしたでせう』

『アヽ‥‥』と頷いて、悲しさうな眼色をしたが『けども、お母さんは、待つてるから私にもお來なさいつて、‥‥又逢はれるからつて、然う仰やつてよ、ね、お父さん、‥‥眞實に又逢はれるの？』

『逢はれるですとも‥‥』と辰雄は何心なく云つた。

『逢はれるんだね、ね、お父さん、お母さんと又逢はれるんだわね、お父さんもお母さんも嘘は仰やらない』としきりと頷いて、小い心に堅く信じてゐるやう。

辰雄は、ホッと太息を吐いて『婦人と子供は幸福だ』と、胸て呟くのてあつた

熱した鐵の丸のやうな夕陽は、暫し水と空との際會を花やかに彩つて明るく流れて、やがて見る〳〵地平線下に沒して了つたが、する中此處は川と海との潮境で、濁つた藍のやうな水と、紺碧の潮と相打ち、相鬪つて、一際白い波はしきりと船側を搖り始めた、秀子は鬼胎を抱いて、父の膝に堅く、しがみ附く

『恐くはない‥‥恐はくはない』と辰雄は兩手に力を入れて、小い脊を押へてゐる

つる〳〵滑りさうな藥罐頭を皺と一緒に豆絞の手拭て括し上げた、黒子のやうな大きな眼の老船頭は、

櫓を押しながら、振返つてほく〳〵笑『嬢ちやん、善えお子さんだ、泣いちやいけねえだ、今に海酸漿流れて來るだから、拾つて上げべえよハヽヽ』

水明りて、海の上はまだ暮れ切りはしないが、手元は却つてほの暗い艫の方に、赤い一點の火が、明るくなつたり、消えたりしてゐる、波の音はすさまじく、船側に鳴つて、波頭が高く膨れ上つては、青く光つて頽づれてゆく

『婆樣ア、聲もしねえやうだが、怖え込んでゐるだかね、……可哀さうに、孫めも家で待つてやがるだらう』

『さ、灯が見え出した、灯が……』と、舳の方で漕いでゐる若者が頓狂聲で叫んだ、

『ウム、氣狂婆め、善う根氣を腐らさねえ事だ、それでも彌七のお庇て、此方等は大助かりだのう』と、烟管を船端でポンとはたく

辰雄の時に、秀子はすや〳〵と眠つて、微かな鼾聲を立てゝゐる、先刻は、あんなに海を怖つたものが、今は父の膝を、錨を卸した大船よりも安全な者と頼んで、安らかに夢を結んでゐる、『信ずる者は幸福であると』思つて、辰雄は何んとなく考に沈んでゐたが、偶と船頭の話し聲に氣が附いて、顏を上げると、彼方の、黒くなつた磯端の山の鼻に、一點の燈明が見える

『もう津田へ着くのかい？』と問ふ

『あの、灯の點つてる鼻を廻り込むと津田てごぜへやす』云つて、烟草の火を明るくしたり、消したり

してゐる、黒い波が時折、白く光つて、船はしきりと焔を喰つてゐる、秀子の眠は愈熟して、耳を澄ますと小い、鼾聲が善く聞えるのである

「あの灯は、何岬といふんだね？」

「別に岬云ふてもありましねぇが、春日様の御宮があつて、そこの常夜燈を彌七婆つて、氣狂婆が毎日毎晩點けに來てるのでござへます、私共の若い時分からの事たから、何んでもハア、彼是四十年の餘にもなりますべえ」

「エ」と、辰雄は聞耳を聳て丶、『氣狂婆が、そんなに長の星霜、灯を點けに來てるつて、何か仔細がありさうな事だな？』

「大ありでござへますよハ丶丶丶」と老船頭は得意げに笑つて「矢つ張、その若氣の誤過て、情事から起つて、氣狂になりましたゞ」

「フム…　それは可愛さうな話だが、一體何ういふ次第だね？」と膝を乘り出さうとすると、頭の重に氣が附いて、輕く掌で觸つて見る、秀子はムニャ〳〵と云つたが、醒めはしないで、又鼾聲を立てる

「何と云ひましただか、本名は忘れて了ひまして、今は皆、彌七婆ァ〳〵つて、その男の名で呼んで居りますだが、十七八の頃は、別嬪でごずへましたよ、そりやなか〳〵こ丶ら邊の七浦探しても別には見當ねえ容貌美してござへましたが、彌七といふ男にとう〳〵口說き落されまして、夫婦約束までして、新世帯持つ金でも稼ぎ出さうと思つたゞが、彌七は膃肭臍獵に樺太の方へ行つたまでは善かつたが、それ

限り、一向歸つて來ませぬ、難船したに違ひねえいふ話だが、それをあの婆は、彌七が堅く『歸つて來たら直ぐと祝言して、公然に夫婦になるから、汝は私の歸るまで、毎晩缺かさず、岬の春日様へ御灯上げて待つてゐろ』と約束したといふので、十八娘が、皺くた婆になる今日日まで、人の勸めも、親の云ふ事も聞かないで、獨身で通して、まだに灯を上げて待つてるのでごぜへます……』何んだか、聲が鼻にかゝつて掠れて聲えた

辰雄は、すつと鼻息を吐いたが『ぢやア、氣狂婆つて云つても、別に氣が狂つてるのでもあるまいね？』

『兎に角、氣が狂つてねえぢやア、そんな眞似なりませんだ、馬鹿な奴でごぜへます、あの時、己の云ふ事聞いて、嬶になつてくれましたら、あんな憂目を見ずに濟んだんでごぜへますよハヽヽヽ』と笑つたが『悴あんな事、家へ歸つて云ふてねえぞ』

若い者は、暗の中でクス〳〵笑つてゐる、櫓の音は、ギユツ〳〵と聞えて、空には星が冴えた、水沫が散り込む

春日の灯は、最早右方に見え出して來た、

黒い岸に火が花やかに、點つてゐるのは津田の海水浴場である

（中）

海に面した、二階の八疊の室、潮風が心地よく吹込んで、呼吸すると胸の擴がる思である、昨夜の夢

には、妻の俤だも見えなかつたが、二三ヶ月の間を、彼女が保養に費してたのは、此室である、床の掛軸の、土佐派の畵もその當時の儘で、眉間の畵額も、襖の模様も、疊の焦げた痕までも、昔ながらに變つた者はない、靑い浪は崖下に白く碎けて、高島の影は、ぼんやり冲合に霞んで見える、妙子の疳高な聲は何うして聞えないのであらう？妙子の、透通るやうに色白く、憔悴に目立つ、ぱつちりと冴えた大きな眼の淋しい、笑を含んで、欄干に凭りかゝつてゐた姿は、何うして再び眼前に現れてくれないのか？

それからそれと、一々に昔が思ひ出されて懷かしさ、悲しさ、果敢なさに堪えられずなつたが、忽ち「貴方、私は御先へ行つて待つてゐますよ……屹度ですよ」といふ、妻の臨終の言葉が耳根を貫くやうに聞えて來る、あり〳〵と、その死顏が目に見える、辰雄は瞑目して、何となく思に沈んで了つた、

「お父さん、簪買つて頂戴な」と、秀子は、バタ〳〵と駈けて來て、父の肩を搖り動かす。

「何うしたんだ？」と笑顏を作つた、

「あの婆さんが、いろんな物を持つて來たの、……簪だの、玩具だの、奇麗な貝殼なんか澤山……」

「へイ、今日は……」と、閾の外へ、白髮頭に花簪を挿した、色艶の善い老婆さんが、海老のやうに腰を曲げて丁寧に低頭をしたが、底の淺い箱を、疊の上へ並べ立て

「旦那様、孃ちやんへ何か買うて上げて下せい、簪でも、玩具でも何んでもありますだから、何卒まア御覧じて下せいまし」

秀子に引張られて、箱の傍へ寄つて見ると、あまり手際善くはないが、貝細工で、一寸とした物が出來てゐる、簪を一つ手に取つて、偶と婆さんの顔を見ると、白髪と、花簪とが、非常に不調和で、滑稽に思はせるので、つい噴飯さうとして、漸く制へ

「婆さんは幾歳だね？」

「アラ、旦那樣も婆さんだつてお云ひなさるね、私は自分の年齢を忘れたとが、慥か十九位だと思ひますよ」

莞爾ともせす、眞面目に云ふのが、更に可笑くなつて

「十九歳は十九歳だが、六十九歳か、七十九歳かだろう」云つて、秀子の顔を笑つた眼て見ると、秀子も無意味に笑つてゐる

「旦那樣、可愛さうな事を云ふものではありましねえ、私は人が何と云ふても、十九歳だと思ふとりますだ」頑固に云つて、兩袖を擠げて、帶をトンと叩く、氣が附いて見ると、脇明から緋の繻絆の袖がちらと見え、帶裏にも、若々しさうな色合の絎口がほのかに目に附くのである

然うだ、妻が療養してゐた頃、自分が日曜などに見舞に來て、時折、濱邊や、街中に、派手な紫繻子の蝙蝠傘を翳して、荷物を脊負つて行く老婆を見かけた事があつたが、彼の婆だつたかと、辰雄は獨り頷いたが、少し氣狂染みてるので、聊か薄氣味惡くも思ひながら、

「婆さんは獨身者かね？　悴も何もないのかねべ？」

『へゝゝゝ』と笑ひながら『獨身者ぢやアありましねえ、花嫁でごせへますだよ』

愈、變だと思つて『花婿さんは幾歳だね？』と半は茶化す氣味

『然うでごせへます』と仔細らしく指を折つて、『彌七さアが、私と三歳違でごぜへまするて、廿二歳になりますだ』

辰雄は膝を拍つた『ぢやア汝が、彌七婆さんつていふんだね』

可笑な眼附で見てゐたが『人が皆、然う云ひますだが、婆さんぢやねえ、彌七の花嫁でごぜへます、』

何んとなく可憐しく思つて『汝は、あの春日さんに灯を上げて、隨分長の星霜、その彌七さんとやらを待つてゐるといふ話だが、今時珍らしい堅人だね』

『長の星霜と云ふても、旦那樣、私はまだ去年か、一昨年かと思ふとりますだ、彌七さアは薄情な人でねえから、約束違へるやうな事はねえ、乾度歸つて來ますだよ、難船したべえいふて、私を欺くらかして女房になれいふ男も、何人かありましたゞが、春日樣に私、一生懸命訴願こめて居りますだから、彌七さアが難船するやうな事はありましねえ、夢見る度に、今に歸る、歸る云ひますだから私、毎晩、灯上げて、待つて居りますだ』

『善く辛棒が續く事つたね』

『彌七さア、私を欺す人でねえから、他が何云ふても、私は構ひましねえだ』瞳に若やかな光が躍るやうである、

辰雄は一種、驚嘆の眼を放つて、老婆の顔を打瞶るのであつたが
「お婆さん、若しその彌七さアが、歸つて來なかつたら…もし亡なりか何うかして、歸つて來なかつたら、何うするんだね」
怪訝さうに、辰雄の眼を見入つたが
「歸りますだ、彌七さア歸りますだとも、永くも三年經つたら歸るいふ堅い約束しましただから、三年目には歸りますだ」
歳月の勘定も知らないのか、イヤ、その勘定さへ忘れたのであらう、辰雄はこの上、追窮するの勇氣がない
「この貝細工の賣上が、あの春日樣の灯代となる譯かね、それぢやア私も一奮發して、澤山買つて上やうよ」
「旦那樣、何卒よろしくお願しますする、お安くしときますだからね」
余念もなく、箱の中をいぢくつてゐた秀子は、青貝玉の、簪一つ取り上げて
「お父さん、これ綺麗ね」
「ウム、それは大人の挿す分だ」
「お母さんが生きてらつしやれば善い事に…」と、小い太息を吐く。
「嬢ちやんのお母樣は、亡くならつしやツたとね、ヤレヤア、お可哀さうに」と婆は顔中皺にする

『だけども……だけども、お母さんは待てゝよ、死ぬ時、然う仰つたの、待つてるから又逢はれるんだつて、ねえ、お父さん』と振り仰いて見る

只、微かに頷いてゐる、

『お母樣が然う仰つたどね』と、婆は、笑顏になつて『ぢやア、屹度又逢はれまするだ、未來で逢ふ事出來まするだ、彌七さアは、死んだ人でねえから、死んだ人にせへ又逢はれるだなら、生きた人ア猶更逢はれる筈だアね、彌七さア、屹度無事な顏見せてくれるだね』と、獨、ほくほく喜んでゐる。

『ねえ、お父さん……』と秀子も、少し笑顏になつて、父を見返つてゐる、

辰雄は、腕叉をして、考に沈んで了つた

婆は、今海の果を希望に輝く眼で恍乎と見入つて身動もしなくなつた。

白い海鳥がしきりと、崖を掠　て飛び交つてゐる沖には白帆の影も見える

（下）

辰雄は再び小舟に乘つて、津田を後に海上へと漕ぎ出させた、船頭は廿歳前後の血氣盛り、聲張り上げて船唄を唄ひ交はしながら、キユツ〳〵と櫓拍子揃へて、波も水沫も苦にせぬのである

西の空に、羽箒て刷き殘したやうに、金色の雲の一片か夕陽の名殘を見せて低く波の上に映つてゐたが、それが搔き消すやうに褪せて行くと海は遠くから鉛色に暮れかゝつて、陸の方は早くも黃昏れて來る

秀子は絹の手巾を解いて、拾ひ集めた貝殻を船の形や、鳥居の形などに並べて見たり、貝細工の簪や、硯や、小い手籠など弄つて餘念もなく遊んでゐる

辰雄は、次第に暗になり行く岸の方を眺めてゐたが、忽ち、兩眼を閉ぢて了つた、胸の中は、何んだか眞暗な洞穴のやうな氣持がする、

『ヤア、灯が點いた？』と、若い船頭が頓狂聲で叫んだ

『ウム、點けた、點けた、彌七爺が今夜でも歸つて來たら面白かんべえな』

『幽靈にでもなつて歸つて來るかも知んねえよ、婆、もう一心だからな』

『ウム、婆が最つと若けりや、己が彌七になつて、歸つてやるんだがなハヽヽヽ』と高笑ひ。

『違ひねえ、その時や己だつて彌七になつてやらアハヽヽヽても婆は十九だとか云つてるぜ』

『顔に歳取つても、心にや歳取らねえかも知んねえ』

『違ひねえ』云ひ〳〵漕いで行くのである、

辰雄は、ぱつと眼を瞬つた、秀子は何時しか、膝の上に、小い頭を押附けて、うと〳〵と眠りかけてゐる、船が今、春日の宮の鼻を曲る處で、淡い靄の中に、灯影が大きく燃えてゐる

一心に見詰めてゐると、瞼が自づと霑んで來て、岸の灯は、何んだか、眞赤な心臓の燃ゆるやうに見えた、

次の一瞬には、依然として一點の灯影、次の一瞬には又、眞赤な心臓の燃ゆる形

辰雄は再び眼を瞑ると、自分の胸は更に、更に夜よりも暗黒である、

膝には、秀子が心安げな鼾の聲、艫と舳には船頭の氣勢ふて唄ふ船唄の聲、船側には眞黒な、海のすさまじく鳴る響！

岸の灯は次第に、小さく遠ざかつて行く。

（完）

一雜誌のうちに四大家の小說を掲載するといふことは純文藝雜誌たらぬ雜誌では空前の事である、而も揃ひも揃つて近時文壇まれに見る傑作であるといふに至つては純文藝の雜誌でもこんな事はないのである

其代り作者も苦心され、編者も大方苦心をした、露伴氏の如きは〆切の時が迫つて一晩徹夜されるまでに書かれ、鏡花氏は病を逗子に養はれし折柄でも、强いて筆をとられたといふ、春雨氏は親戚に不幸あつて漸く歸京されたばかりの多忙の時間を割いて特に熱心に書いて與へられた、又漱石氏に至つては大方ならぬ苦心をされて、一七日間客を絕つて苦吟されたと聞いて居る。其間編者は毎日のやうに馳け歩いて、そして漸く出來上つたのが此二百號である、編者は偏に作者諸先生に感謝すると同時に讀者をして如何に此雜誌の凡てが苦心の餘になつたかを知らしたいのである。



薤露行

夏目漱石

世に傳ふるマロリーのアーサー物語は簡淨素樸と云ふ點に於て珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小說として見ると散漫の譏は免がれぬ。況して材を其一局部に取つて纏つたものを書かうとすると到底萬事原著による譯には行かぬ。從つて此篇の如きも作者の隨意に事實を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりして可成小說に近いものに改めて仕舞ふた。主意は、こんな事が面白いから書いて見様といふので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しやうと云ふのではない。其積りで讀まれん事を希望する。

實を云ふとマロリーの寫したランスロットは或る點に於て車夫の如く、ギニヸアは車夫の情婦の樣な感じがある。此一點丈でも書き直す必要は充分あると思ふ。テニソンのアイヂルスは優麗都雅の點に於て古今の雄篇たるのみならず性格の描寫に於ても十九世紀の人間を古代の舞臺に躍らせる樣なかきぶりであるから、かゝる短篇を草するには大に參考すべき長詩であるは云ふ迄もない。元來なら記憶を新たにする爲め一應讀み返す筈であるが、讀むと冥々のうちに眞似がしたくなるからやめた。

(一) 夢

百、二百、簇がる騎士は數をつくして北の方なる試合へと急げば、石に古りたるカメロットの館には、只王妃ギニヸアの長く牽く衣の裾の響のみ殘る。

薄紅の一枚をむざと許りに肩より投げ懸けて、白き二の腕さへ明らさまなるに、裳のみは輕く捌く珠の履をつゝみて、猶餘りあるを後ろざまに石階の二級に垂れて登る。登り詰めたる階の正面に

は大いなる花を鈍色の奥に織り込める戸帳が、人なきをかこち顔なる樣にてそよとも動かぬ。ギニヺアは幕の前に耳押し付けて一重向ふに何事をか聽く。聽き了りたる横顔を又眞向に反へして石段の下を鋭どき眼にて窺ふ。濃やかに斑を流したる大理石の上は、こゝかしこに白き薔薇が暗きを洩れて和かき香りを放つ。君見よと宵に贈れる花輪のいつ摧けたる名殘か。しばらくは吾が足に纏はる絹の音にさへ心置ける人の、何の思案か、屹と立ち直りて、繊き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩ゆき光り矢の如く向ひ側なる室の中よりギニヺアの頭に戴ける冠を照らす。輝けるは眉間に中る金剛石ぞ。

「ランスロット」と幕押し分けたる儘にて云ふ。天を憚かり、地を憚かる中に、身も世も入らぬ迄力の籠りたる聲である。戀に敵なければ、わが戴ける冠を畏れず。

「ギニヺア！」と應へたるは室の中なる人の聲とも思はれぬ程優しい。廣き額を半ば埋めて又捲き返る髮の黑さを誇る許り亂れたるに、頰の色は釣り合はず蒼白い。

女は幕をひく手をつと放して内に入る。裂目を洩れて斜めに大理石の階段を横切りたる日の光は、一度に消えて、薄暗がりの中に戸帳の模樣のみ際立ちて見える。左右に開く廻廊には圓柱の影の重なりて落ちかゝれども、影なれば音もせず。生きたるは室の中なる二人のみと思はる。

「北の方なる試合にも參り合せず。亂れたるは額にかゝる髮のみならじ」と女は心ありげに問ふ。晴れかゝりたる眉に晴れがたき雲の蟠まりて、弱き笑の強いて憂の裏より洩れ來る。

「贈りまつれる薔薇の香に醉ひて」とのみにて男は高き窓より表の方を見やる。折からの五月である。

館を繞りて緩く逝く江に千本の柳が明かに影を蘸して、空に崩るゝ雲の峯さへ水の底に流れ込む。動くとも見えぬ白帆に、人あらば節面白き舟歌も興がらう。河を隔てゝ木の間隠れに白く拖く筋の一縷の、糸となつて烟に入るは、立ち上る朝日影に蹄の塵を揚げて、けさアーサーが圓卓の騎士と共に北の方へと飛ばせたる本道である。

「うれしきものに罪を思へば、罪長かれと祈る憂き身ぞ。君一人館に殘る今日を忍びて、今日のみの縁とならばうからまし」と女は安からぬ心の程を口元に見せて、珊瑚の唇をぴり／＼と動かす。

「今日のみの縁とは？墓に堰かるゝあの世迄も渝らじ」と男は黒き瞳を返して女の顔を眤と見る。

「左ればこそ」と女は右の手を高く擧げて廣げたる掌を竪にランスロットに向ける手頸を纏ふ黄金の腕輪がきらりと輝くときランスロットの瞳は吾知らず動いた。「左ればこそ！」と女は繰り返す。「薔薇の香に醉へる病を、病と許せるは我等二人のみ。このカメロットに集まる騎士は、五本の指を五十度繰り返へすとも數へ難きに、一人として北に行かぬランスロットの病を疑はぬはなし。束の間に危うきを貪りて、長き逢ふ瀬の淵と變らば……」と云ひながら擧げたる手をはたと落す。かの腕輪は再びきらめいて、玉と玉と撃てる音か、戞然と瞬時の響を起す。

「命は長き賜物ぞ。戀は命よりも長き賜物ぞ。心安かれ」と男は流石に大膽である。

女は兩手を延ばして、戴ける冠を左右より抑へて「此冠よ、此冠よ。わが額の燒ける事は」と云ふ。願ふ事の叶はば此黄金、此珠玉の飾りを脱いて窓より下に投げ付けて見ばやといへる樣である。白き腕の

すらりと絹をすべりて、高く頭の上に捧げたる冠の光りの下には、渦を卷く髮の毛の、珠の輪には抑へ難くて、頰のあたりに靡きつゝ洩れかゝる。肩にあつまる薄紅の衣の袖は、胸を過ぎてより豐かなる襞を描がいて、裾は強けれども剛からざる線を三筋程床の上迄引く。ランスロットは只窈窕として眺めて居る。前後を截斷して、過去未來を失念したる間に只ギニヴアの形のみがあり／＼と見える。

機微の邃きを照らす鏡は、女の有てる凡てのうちにて、尤も明かなるものと云ふ。苦しきに堪へかねて、われとわが頭を抑へたるギニヴアを打ち守る人の心は、飛ぶ鳥の影の疾きが如くに女の胸にひらめき渡る。苦しみは拂ひ落す蜘蛛の巣と消えて剩すは嬉しき人の情ばかりである。「かくてあらば」と女は危うき間に際どく擦り込む石火の樂みを、長へに續づけかしと念じて兩頰に笑を滴らす。

「かくてあらん」と男は始めより思ひ極めた態である。

「されど」と少時して女は又口を開く。「かくてあらん爲め―北の方なる試合に行き給へ。けさ立てる人々の跡の痕を追ひ懸けて病癒えぬと申し給へ。此頃の蔭口、二人をつゝむ疑の雲を晴し給へ。」

「左程に人が怖くて戀がなろか」と男は亂るゝ髮を廣き額に拂つて、わざと乍らから／＼と笑ふ。高き室の靜かなる中に、常ならず快からぬ響が傳はる。笑へるははたと已めて「此帳の風なきに動くさうな」と室の入口迄歩を移してことさらに厚き幕を搖り動かして見る。あやしき響は收まつて寂寞の故に歸る。

「宵見し夢の―夢の中なる響の名殘か」と女の顏には忽ち紅落ちて、冠の星はきら／＼と震ふ。男も何事か心躁ぐ樣にて、ゆふべ見しと云ふ夢を、女に物語らする。

「薇薔咲く日なり。白き薔薇と、赤き薇薔と、黄なる薔薇の間に臥したるは君とわれのみ。樂しき日は落ちて、樂しき夕暮の薄明りの、盡くる限りはあらじと思ふ。その時に戴けるは此冠なり」と指を擧げて眉間をさす。冠の底を二重にめぐる一疋の蛇は黃金の鱗を細かに身に刻んて、擡げたる頭には青玉の眼を嵌めてある。

「わが冠の肉に喰ひ入る許り燒けて、頭の上に衣擦る如き音を聞くとき、此黃金の蛇はわが髮を繞りて動き出す。頭は君の方へ、尾はわが胸のあたりに。波の如くに延びるよと見る間に、君とわれは腥さき繩にて、斷つべくもあらぬ迄に纒はるゝ。中四尺を隔てゝ近寄るに力なく、離るゝに術なし。たとひ忌はしき絆なりとも、此繩の切れて二人離れ／＼に居らんよりはとは、其時苦しきわが胸の奧なる心遣りなりき。嚙まるゝとも螫さるゝとも、口繩の朽ち果つる迄斯くてあらんと思ひ定めたるに、あら悲し。薔薇の花の紅なるが、めら／＼と燃え出して、繫げる蛇を燒かんとす。しばらくして君とわれの間にあまれる一尋餘りは、眞中より靑き烟を吐いて金の鱗の色變り行くと思へば、あやしき臭いを立てゝふすと切れたり。身も魂もこれ限り消えて失せよと念ずる耳元に、何者かから／＼と笑ふ聲して夢は醒めたり。醒めたるあとにも猶耳を襲ふ聲はありて、今聞ける君が笑も、宵の名殘かと骨を撼かす」と落ち付かぬ眼を長き睫の裏に隱してランスロットの氣色を窺ふ。七十五度の鬪技に、馬の脊を滑るは無論、鐙さへはづせる事なき勇士も、此夢を奇しとのみは思はず。快からぬ眉根は自ら逼りて、結べる口の奧には齒さへ喰ひ締ばるならん。

「さらば行かう。後れ馳せに北の方へ行かう」と拱いだる手を振りほどいて、六尺二寸の軀をゆらりと起す。

「行くか？」とはギニヸアの半ば疑へる言葉である。疑へる中には、今更ながら別れの惜まるゝ心地さへほのめいて居る。

「行く」と云ひ放つて、つか〳〵と戸口にかゝる幕を半ば掲げたが、やがてするりと踵を回らして、女の前に、白き手を執りて、發熱かと怪しまるゝ程のあつき唇を、冷やかなる柔らかき甲の上につけた。曉の露しげき白合の花瓣をひたふるに吸へる心地である。ランスロットは後をも見ずして石階を馳け降りる。

やがて三たび馬の嘶く音がして中庭の石の上に堅き蹄が鳴るとき、ギニヸアは高殿を下りて、騎士の出づべき門の眞上なる窓に倚りて、かの人の出るを遲しと待つ。黒き馬の鼻面が下に見ゆるとき、身を半ば投げだして、行く人の爲めに白き絹の尺ばかりなるを振る。頭に戴ける金冠の、美しき髮を滑りてか、からりと馬の鼻を掠めて碎くる許りに石の上に落つる。

槍の穗先に冠をかけて、窻近く差し出したる時、ランスロットとギニヸアの視線がはたと行き合ふ。「忌まいしき冠よ」と女は受けとり乍ら云ふ。「さらば」と男は馬の太腹をける。白き兜の挿毛のさと靡くあとに、殘るは漠々たる塵のみ。

(二)　鏡

有の儘なる浮世を見ず、鏡に寫る浮世のみを見るシャロットの女は高き臺(うてな)の中に只一人住む。活ける世を鏡の裡にのみ知る者に、面を合はす友のあるべき由なし。

春戀し、春戀しと囀づる鳥の數々に、耳側てゝ木の葉隠れの翼の色を見んと思へば、窓に向はずして壁に切り込む鏡に向ふ。鮮やかに寫る羽の色に日の色さへも其儘である。

シャロットの野に麥刈る男、麥打つ女の歌にやあらん、谷を渡り水を渡りて、幽かなる音の高き臺に他界の聲の細き糸と響く時、シャロットの女は傾けたる耳を掩ふて又鏡に向ふ。河のあなたに烟る柳の、果ては空とも野とも覚束なき間より洩れ出づる悲しき調[illegible]へずなるべし。

シャロットの路行く人も亦悉くシャロットの女の鏡に寫る。あるときは赤き帽の首打ち振りて馬追ふさまも見ゆる。あるときは白き髯の寛き衣を纏ひて、長き杖の先に小さき瓢を括しつけながら行く巡禮の姿も見える。又あるときは頭より只一枚と思はるゝ眞白の上衣被りて、眼口も手足も確と分ちかねたるが、けたゝましげに鈴打ち鳴らして過ぎるも見ゆる。是は癩をやむ人の前世の業を自ら世に告ぐる、むごき仕打ちなりとシャロットの女は知るすべもあらぬ。

旅商人の脊に負へる包の中には赤きリボンのあるか、白き下着のあるか、珊瑚、瑪瑙、水晶、眞珠のあるか、包める中を照らさねば、中にあるものは鏡には寫らず。寫らねばシャロットの女の眸には映ぜぬ。

古き幾世を照らして、今の世のシャロットにありとある物を照らす。悉く照らして擇ぶ所なければシ

ャロットの女の眼に映るものも亦限りなく多い。只影なれば寫りては消え、消えては寫る。鏡のうちに永く停まる事は天に懸る日と雖も難い。活ける世の影なれば斯く果敢なきか、あるひは活ける世が影なるかとシャロットの女は折々疑ふ事がある。明らさまに見ぬ世なれば影ともまこととも斷じ難い。影なれば果敢なき姿を鏡にのみ見て不足はなからう。影ならずば？——時にはむら〳〵と起る一念に窓際に馳けよりて思ふさま鏡の外なる世を見んと思ひ立つ事もある。シャロットの女の窓より眼を放つときはシャロットの女に呪ひのかゝる時である。シャロットの女は鏡の限る天地のうちに跼蹐せねばならぬ。一重隔て、二重隔てゝ、廣き世界を四角に切るとも、自滅の期を寸時も早めてはならぬ。

去れど有の儘なる世は罪に濁ると聞く。住み倦めば山に遯るゝ心安さもあるべし。鏡の裏なる狹き宇宙の小さければとて、憂き事の降りかゝる十字の街に立ちて、行き交ふ人に氣を配る辛らさはあらず。何者か因果の波を一たび起してより、萬頃の亂れは永劫を極めて盡きざるを、渦捲く中に頭をも、手をも、足をも攫はれて、行く吾の果は知らず。かゝる人を賢しと云はゞ、高き臺に一人を住み古りて、しろかねの白き光りの、表とも裏とも分ち難きあたりに、幻の世を尺に縮めて、あらん命を土さへ踏まで過すは阿呆の極みであらう。わが見るは動く世ならず、動く世を動かぬ物の助にて、餘所ながら窺ふ世なり。活殺生死の乾坤を定裏に拈出して、五彩の色相を靜中に描く世なり。かく觀ずればこの女の運命もあながちに嘆くべきにあらぬを、シャロットの女は何に心を躁がして窓の外なる下界を見んとする。

鏡の長さは五尺に足らぬ。黑鐵の黑きを磨いて本來の白きに歸すマーリンの術になるとか。魔法に名

を得し彼の云ふ。――鏡の表に霧こめて、秋の日の上れども晴れぬ心地なるは不吉の兆なり。曇る鑑の露を含みて、芙蓉に滴たる音を聴くとき、對へる人の身の上に危うき事あり。砉然と故なきに響を起して、白き筋の横縦に鏡に浮くとき、其人末期の覺悟せよ。――シャロットの女が幾年月の久しき間此鏡に向へるかは知らぬ。朝に向ひ夕に向ひ、日に向ひ月に向ひて、厭くてふ事のあるをさへ忘れたるシャロットの女の眼には、霧立つ事も、露置く事もあらざれば、況して裂けんとする虞ありとは夢にだも知らず。湛然として音なき秋の水に臨むが如く、瑩朗たる面を過ぐる森羅の影の、繽紛として去るあとは、太古の色なき境をまのあたりに現はす。無限上に徹する大空を鑄固めて、打てば音ある五尺の裏に壓し集めたるを――シャロットの女は夜毎日毎に見る。

夜毎日毎に鏡に向へる女は、夜毎日毎に鏡の傍に坐りて、夜毎日毎の繒を織る。ある時は明るき繒を織り、ある時は暗き繒を織る。

シャロットの女の投ぐる梭の音を聴く者は、淋しき阜の上に立つ、高き臺の窓を恐る／＼見上げぬ事はない。親も逝き子も逝きて、新しき代に只一人取り殘されて、命長き吾を恨み顔なる年寄の如く見ゆるが、岡の上なるシャロットの女の住居である。蔦鎖す古き窓より洩るゝ梭の音の、絶間なき振子の如く、日を刻み月を刻むに急なる樣なれど、其音はあの世の音なり。靜なるシャロットには、空氣さへ重たげにて、常ならば動くべしとも思はれぬを、只此梭の音のみにそゝのかされて、幽かにも震ふか。淋しさは音なき時の淋しさにも勝る。恐る／＼高き臺を見上げたる行人は耳を掩ふて走る。

シャロットの女の織るは不斷の繪である。草むらの萠草の厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める様を織るときは、花の影のいつ浮くべしとも見えぬ程の濃き色である。うな原のうねりの中に、雪と散る浪の花を浮かすときは、底知れぬ深さを一枚の薄さに疊む。あるときは黒き地に、燃ゆる焔の色にて十字架を描く。濁世にはびこる罪障の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織れる經緯の目にも入ると覺しく、焔のみは繪を離れて飛ばんとす。――薄暗き女の部屋は焚け落つるかと怪しまれて明るい。戀の糸と誠の糸を横縱に梭くぐらせば、手を肩に組み合せて天を仰げるマリヤの姿となる。狂ひを經に怒りを緯に、霰ふる木枯の夜を織り明せば、荒野の中に白き髯飛ぶリアの面影が出る。耻づかしき紅と恨めしき鐵色をより合せては、逢ふて絶えたる人の心を讀むべく、溫和しき黃と思ひ上がなる紫を交る〱に疊めば、魔に誘はれし乙女の、我は顏に高ぶれる態を寫す。長き袂に雲の如くにまつはるは人に言へぬ願の糸の亂れなるべし。

シャロットの女は眼深く顏廣く、唇さへも女には似で薄からず。夏の日の上りてより、刻を盛る砂時計の九たび落ち盡したれば、今ははや午過ぎなるべし。窓を射る日の眩ゆき迄明かなるに、室のうちは夏知らぬ洞窟の如くに暗い。輝けるは五尺に餘る鐵の鏡と、肩に漂ふ長き髮のみ。右手より投げたる梭を左手に受けて、女は不圖鏡の裡を見る。研ぎ澄したる劍よりも寒き光の、例ながらうぶ毛の末をも照すよと思ふうちに――底事ぞ！音なくて颯と曇るは霧か、鏡の面は巨人の息をまともに浴びたる如く光を失ふ。今迄見えたシャロットの岸に連なる柳も隱れる。柳の中を流るゝシャロットの河も消える。河

に沿ふて往きつ來りつする人影は無論さゝぬ。――梭の音ははたと已んで、女の瞼は黑き睫と共に微かに顫へた。「凶事か」と叫んで鏡の前に寄るとき、曇は一刷に晴れて、河も柳も人影も元の如くに見はれる。梭は再び動き出す。

女はやがて世にあるまじき悲しき聲にて歌ふ。

うつせみの世を、
うつゝに住めば、
住みうからまし、
むかしも今も。」
うつくしき戀、
うつす鏡に、
色やうつろふ、
朝な夕なに。」

鏡の中なる遠柳の枝が風に靡いて動く間に、忽ち銀（しろかね）の光がさして、熱き埃りを薄く揚げ出す。銀の光りは南より北に向つて眞一文字にシヤロットに近付いてくる。女は小羊を覘ふ鷲の如くに、影とは知りながら瞬きもせず鏡の裏を見詰る。十丁にして盡きた柳の木立を風の如くに駈け拔けたものを見ると、鍛へ上げた鋼の鎧に滿身の日光を浴びて、同じ兜の鉢金よりは尺に餘る白き毛を、飛び散れとのみ毿々

と鏖かして居る。栗毛の駒の逞しきを、頭も胸も革に裹みて飾れる鋲の數は篩ひ落せし秋の夜の星宿を一度に集めたるが如き心地である。女は息を凝らして眼を据ゑる。

曲がれる堤に沿ふて、馬の首を少し左へ向け直すと、今迄は横にのみ見えた姿が、眞正面に鏡にむかつて進んてくる。太き槍をレストに收めて、左の肩に盾を懸けたり。女は頸を延ばして盾に描ける模樣を確と見分け樣とする體てあつたが、かの騎士は何の會釋もなく此鐵鏡を突き破つて通り拔ける勢で、愈目の前に近づいた時、女は思はず梭を抛げて、鏡に向つて高くランスロットと叫んだ。ランスロットは兜の廂の下より耀く眼を放つて、シャロットの高き臺を見上げる。爛々たる騎士の眼と、針を束ねたる如き女の鋭どき眼とは鏡の裡にてはたと出合つた。此時シャロットの女は再び「サー、ランスロット」と叫んて、忽ち窓の傍に馳け寄つて蒼き顔を半ば世の中に突き出す。人と馬とは、高き臺の下を、遠きに　る地震の如くに馳け拔ける。

ぴちりと音がして皓々たる鏡は忽ち眞二つに割れる。割れたる面は再びぴち〳〵と氷を碎くが如く粉微塵になつて室の中に飛ぶ。七卷八卷織りかけたる布帛はふつ〳〵と切れて風なきに鐵片と共に舞ひ上る。紅の糸、綠の糸、黄の糸、紫の糸はほつれ、千切れ、解け、もつれて土蜘蛛の張る網の如くにシャロットの女の顔に、手に、袖に、長き髪毛にまつはる。「シャロットの女を殺すものはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロットの女。わが末期の呪を負ふて北の方へ走れ」と女は兩手を高く天に擧げて、朽ちたる木の野分を受けたる如く、五色の糸と氷を欺く碎片の亂るゝ中に輕と仆れる。

(三) 袖

可憐なるエレーンは人知らぬ菫の如くアストラットの古城を照らして、ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を經たり。訪ふ人は固よりあらず。共に住むは二人の兄と眉さへ白き父親のみ。

「騎士はいづれに去る人ぞ」と老人は穩かなる聲にて問ふ。

「北の方なる仕合に參らんと、是迄は鞭つて追懸けたれ。夏の日の永きにも似ず、いつしか暮れて、暗がりに路さへ岐れたるを。――乘り捨てし馬も恩に嘶かん。一夜の宿の情け深きに、酬ひまつるものなきを耻づ」と答へたるは、具足を脫いで、黃なる袍に姿を改めたる騎士なり。シャロットを馳せる時何事とは知らず、岩の凹みの秋の水を浴びたる心地して、かりの宿りを求め得たる今に至る迄、頰の蒼きが特更の如く目に立つ。

エレーンは父の後ろに少さき身を隱して、此アステロットに、如何なる風の誘ひてか、かく凛々しき壯夫を吹き寄せたると、折々は鶴と瘠せたる老人の肩をすかして、耻かしの睫の下よりランスロットを見る。菜の花、豆の花ならば戲るゝ術もあらう。偃蹇として澗底に嘯く松が枝には舞ひ寄る路のとてもなければ、白き胡蝶は薄き翼を收めて身動きもせぬ。

「無心ながら宿貸す人に申す」と稍ありてランスロットが云ふ。「明日と定まる仕合の催しに、後れて乘り込む我の、何の誰よと人に知らるゝは興なし。新しきを嫌はず、古きを辭せず、人の見知らぬ盾あらば貸し玉へ」

老人ははたと手を拍つ。「望める盾を貸し申さう。――長男チアーは去ぬる騎士の闘技に足を痛めて今猶蓐を離れず。其時彼が持ちたるは白地に赤く十字架を染めたる盾なり。只の一度の仕合に傷きて、其創口はまだ癒えざれば、赤き血架は空しく壁に古りたり。是を翳して思ふ如く人々を驚かし給へ」

ランスロットは腕を扼して「夫こそは」と云ふ。老人は猶言葉を繼ぐ。

「次男ラヴエンは健氣に見ゆる若者にてあるを、アーサー王の催にかゝる晴の仕合に參り合はせずば、騎士の身の口惜しかるべし。只君が栗毛の蹄のあとに倶し連れよ。翌日を急げと彼に申し聞かせん程に」

ランスロットは何の思案もなく「心得たり」と心安げに云ふ。老人の頬に疊める皺のうちには、嬉しき波がしばらく動く。女ならずばわれも行かんと思へるはエレーンである。

木に倚るは蔦、まつはりて幾世を離れず。宵に逢ひて朝に分るゝ君と我の、われにはまつはるべき月日もあらず。纖き身の寄り添はゞ、幹吹く嵐に、根なしかづらと倒れもやせん。寄り添はずば、人知らずひそかに括る戀の糸、振り切つて君は去るべし。愛溶けて瞼に餘る、露の底なる光りを見ずや。わが住める館こそ古るけれ、春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲るは、鎖せる雲の自ら晴れて、麗かなる日影の大地を渡るに異ならず。野をうづめ谷を埋めて千里の外に暖かき光りをひく。明かなる君が眉目にはたと行き逢へる今の思は、坑を出でゝ天下の春風に吹かれたるが如きを――言葉さへ交はさず、あすの別れとはつれなし。

燭盡きて更を惜めども、更盡きて客は寢ねたり。寢ねたるあとにエレーンは、合はぬ瞼の間より男の

姿の無理に瞳の奥に押し入らんとするを、幾たびか拂ひ落さんと力めたれど詮なし。强いて合はぬ目を合せて、此影を追はんとすれば、いつの間にか其人の姿は旣に瞼の裏に潜む。苦しき夢に襲はれて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂消える物の怪の話におのゝきて、眠らぬ耳に鷄の聲をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願ふ心の反響に過ぎず。われと云ふ可愛き者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟りを据えての恐と苦しみである。今宵の惱みは其等にはあらず。我と云ふ個體の消え失せて、求むれども遂に得難きを、驚きて迷ひて、果ては情なくて斯くは亂るゝなり。いつの間に我はランスロットと變りて常の心はいづこへか喪へる。エレーンと吾名を呼ぶに、應ふるはエレーンならず、中庭に馬乘り捨てゝ、廂深き兜の奥より、高き櫓を見上げたるランスロットである。再びエレーンと呼ぶにエレーンはランスロットぢやと答へる。エレーンは已せてかと問へば在りと云ふ。いづこにと聞けば知らぬと云ふ。エレーンは微かなる毛孔の末に潜みて、いつか昔しの樣に歸らん。エレーンに八萬四千の毛孔ありて、エレーンが八萬四千壺の香油を注いで、日に其膚を滑かにするとも、潜めるエレーンは遂に出現し來る期はなからう。

やがてわが部屋の戶帳を開きて、エレーンは壁に釣る長き衣を取り出す。燭にすかせば燃ゆる眞紅の色なり。室にはびこる夜を呑んで、一枚の衣に眞晝の日影を集めたる如く鮮かである。エレーンは衣の領を右手につるして、暫らくは眩ゆきものと眺めたるが、やがて左に握る短刀を鞘ながら二三度振る。

から〳〵と床に音さして、すはと云ふ間に閃きは目を掠めて紅深きうちに隠れる。見れば美しき衣の片袖は惜氣もなく、斷たれて殘るは鞘の上にふわりと落ちる。途端に裸ながらの手燭は、颪に打たれて颯と消えた。外は片破月の空に更けたり。

右手に捧ぐる袖の光をしるべに、暗きをすりぬけてエレーンはわが部屋を出る。右に折れると兄の住居、左を突き當れば今宵の客の寢所である。夢の如くなよやかなる女の姿は、地を踏まざるに歩めるか、影よりも靜かにランスロットの室の前にとまる。――ランスロットの夢は成らず。

聞くならくアーサー大王のギニヸアを娶らんとして、心惑へる折、座ながらに世の成行を知るマーリンは、首を掉りて慶事を肯んぜず。此女後に思はぬ人を慕ふ事あり、娶る君に悔あらん。と只管に諫めしとぞ。聞きたる時の我に罪なければ思はぬ人の誰なるかは知るべくもなく打ち過ぎぬ。思はぬ人の誰なるかを知りたる時、天が下に數多く生れたるものゝうちにて、この悲しき命に廻り合せたる我を恨み、このうれしき幸を享けたる己れを悦びて、樂みと苦みの綯りたる縄を斷たんともせず、此年月を經たり。心疚ましきは願はず。疚ましき中に蜜あるはうれし。疚ましければこそ蜜をも釀せと思ふ折さへあれば、卓を共にする騎士の我を疑ふ此日に至る迄王妃を棄てず。只疑の積もりて證據と凝らん時――ギニヸアの捕はれて杭に燒かるゝ時――此時を思へばランスロットの夢は未だ成らず。

眠られぬ戸に何物かちよと障つた氣合である。枕を離るゝ頭の、音する方に、しばらくは振り向けるが、又元の如く落ち付いて、あとは古城の亡骸に脉も通はず。靜である。

再び障つた音は、殆んど敲いたと云ふべくも高い。慥かに人ありと思ひ極めたるランスロツトは、やをら身を臥床に起して、「たぞ」と云ひつゝ戸を半ば引く。差しつくる蠟燭の火のふき込められしが、取り直して今度は戸口に立てる乙女の方にまたゝく。乙女の顔は翳せる赤き袖の影に隠れて居る。面はゆきは灯火のみならず。

「此深き夜を……迷へるか」と男は驚きの舌を途切れ々々に動かす。

「知らぬ路にこそ迷へ。年古るく住みなせる家のうちを——鼠だに迷はじ」と女は微かなる聲ながら、思ひ切つて答へる。

男は只怪しとのみ女の顔を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹の衝立に、花よりも美くしき顔をかくす。常に勝る豊頬の色は、湧く血潮の疾く流るゝか、あだやかなる絹のたすけか。たゞ隠しかねたる鬢の毛の肩に亂れて、頭には白き薔薇を輪に貫ぬきて三輪挿したり。

白き香りの鼻を撲つて、絹の影なる花の數さへ見分けたる時、ランスロツトの胸には忽ちギニヰアの夢の話が湧き返る。何故とは知らず、悉く身は痿へて、手に持つ燭を取り落せるかと驚ろきて我に歸る。乙女はわが前に立てる人の心を讀む由もあらず。

「紅に人のまことはあれ。耻づかしの片袖を、乞はれぬに參らする。兜に捲いて勝負せよとの願なり」とかの袖を押し遣る如く前に出す。男は容易に答へぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴ふるが如くに下よりランスロツトの顔を覗く。

覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んて、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたる儘、當惑の眉を思案に刻む。やゝありて云ふ。「戰に臨む事は大小六十餘度、鬪技の場に登つて槍を交へたる事は其數を知らず。未だ婦人の贈り物を、身に帶びたる試しなし。情あるあるじの子の、情深き賜物を辭むは禮なけれど……」

「禮とも云へ、禮なしとも云ひてやみね。禮の爲めに、夜を冒して參りたるにはあらず。思の籠る此片袖を、天が下の勇士に贈らん爲に參りたり。切に受けさせ給へ」とてゝ迄踏み込みたる上は、かよわき乙女の、却つて一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑ふ。

カメロットに集まる騎士は、弱きと強きを通じてわが盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。又わが腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あすの試合に後るゝは、始めより出づる筈ならぬを、半途より思ひ返しての仕業故てある。鬪技の埒に馬乘り入れてランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳はるゝ丈ならば其迄の浮名てある。去れど後れたるは病のため、後れながらも參りたるはまことの病にあらざる證據(あかし)よと云はゞ何と答へん。今幸に知らざる人の盾を借りて、知らざる人の袖を纏ひ、二十三十の騎士を斃す迄深くわが面を包まば、ランスロットと名乘りをあげて人驚かす夕暮に、――誰彼共にわざと後れたる我を肯はん。病と臥せる我の作略を面白しと感ずる者さへあらう。

――ランスロットは漸くに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具てある。鎧の胴に立て懸けたるわが盾を輕々と片手に提げて、女の前に

置きたるランスロットは云ふ。
「嬉しき人の眞心を兜にまくは騎士の譽れ。難有し」とかの袖を女より受取る。
「うけてか」と片頬に笑める樣は、谷間の姫百合に朝日影さして、しげき露の痕なく晞けるが如し。
「あすの勝負に用なき盾を、逢ふ迄の形身と殘す。試合果てゝ再びこゝを過ぎる迄守り給へ」
「守らでやは」と女は跪いて兩手に盾を抱く。ランスロットは長き袖を眉のあたりに揭げて「赤し、赤し」と云ふ。
此時櫓の上を烏鳴き過ぎて、夜はほの〴〵と明け渡る。

（四）罪

アーサーを嫌ふにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニギアの己れにのみ語る胸のうちである。北の方なる試合果てゝ、行けるものは皆館に歸れるを、ランスロットのみは影さへ見えず。歸れかしと念ずる人の便りは絕えて、思はぬものゝ鑣を連ねてカメロットに入るは、見るも益なし。一日には二日を數へ、二日には三日を數へ、遂に兩手の指を悉く折り盡して十日に至る今日迄猶歸るべしとの願を掛けたり
「遲き人のいづこに繫がれたる」とアーサーは左迄に心を惱ませる氣色もなく云ふ。
高き室の正面に、石にて築く段は二級、半ばは厚き毛氈にて蔽ふ。段の上なる、大なる椅子に豐かに倚るがアーサーである。

「繋ぐ日も、繋ぐ月もなきに」とギニヸアは答ふるが如く答へざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、床几の上に、纖き指を組み合せて、膝より下は長き裳にかくれて履の在りかさへ定かならず。よそ／＼しくは答へたれ、心は其人の名を聞きてさへ躍るを。話しの種の思ふ坪に生へたるを、寒き息にて吹き枯らすは口惜し。ギニヸアは又口を開く。

「後れて行くものは後れて歸る掟か」と云ひ添へて片頰に笑ふ。女の笑ふときは危うい。

「後れたるは掟ならぬ戀の掟なるべし」とアーサーも穩かに笑ふ。アーサーの笑にも特別の意味がある。戀といふ字の耳に響くとき、ギニヸアの胸は、錐に刺されし痛を受けて、すはやと躍り上る。耳の裏には颯と音して熱き血を注す。アーサーは知らぬ顏である。

「あの袖の主こそ美しからん。……　……」

「あの袖とは？袖の主とは？美しからんとは？」とギニヸアの呼吸ははづんで居る。

「白き挿毛に、赤き鉢卷ぞ。去る人の贈り物とは見たれ。繋がるゝも道理ぢや」とアーサーは又からからと笑ふ。

「主の名は？」

「名は知らぬ。只美しき故に美しき少女と云ふと聞く。過ぐる十日を繋がれて、殘る幾日を繋がるゝ身は果報なり。カメロットに足は向くまじ」

「美しき少女！美しき少女！」と續け樣に叫んてギニヸアは薄き履に三たび石の床を踏みならす。肩に

負ふ髪の時ならぬ波を描いて、二尺餘りを一筋毎に末迄渡る。

夫に二心なきを神の道との教は古るし。神の道に從ふの心易きも知らずと云はじ。心易きを自ら捨てゝ、捨てたる後の苦しみを嬉しと見しも君が爲なり。春風に心なく、花自ら開く。花に罪ありとは下れる世の言の葉に過ぎず。戀を寫す鏡の明なるは鏡の德なり。かく觀ずる裡に、人にも世にも振り棄てられたる時の慰藉はあるべし。かく觀ぜんと思ひ詰めたる今頃を、わが乘れる足臺は覆へされて、踵を支ふるに一塵だになし。引き付けられたる鐵と磁石の、自然に引き付けられたれば咎も恐れず、世を憚りの關一重あなたへ越せば、生涯の落ち付はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吸はれし鐵は無限の空裏を冥府へ隕つる。わが座はる床几の底抜けて、わが乘る壇の床崩れて、わが踏む大地の殼裂けて、已れを支ふる者は悉く消えたるに等し。ギニギアは組める手を胸の前に合せたる儘、右左より骨も摧けよと壓す。片手に餘る力を、片手に拔いて、苦しき胸の悶を人知れぬ方へ洩らさんとするり

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答へたるは、アーサーを欺けるにもあらず、又己を誣ひたるにもあらず。知らざるを知らずと云へるのみ。まことはわが口にせる言葉すら知らぬ間に咽を轉び出でたり。

ひく浪の返す時は、引く折の氣色を忘れて、逆しまに岸を嚙む勢の、前よりは凄じきを、浪自らさへ驚くかと疑ふ。はからざる便りの胸を打ちて、度を失へるギニギアの、己れを忘るゝ迄われに遠ざかれ

る後には、油然として常よりも切なき吾に復る。何事も解せぬ風情に、驚ろきの眉をわが額の上にあつめたるアーサーを、わが夫と悟れる時のギニヸアの眼には、アーサーは少らく前のアーサーにあらず。人を傷けたるわが罪を悔ゆるとき、傷負へる人の傷ありと心付かぬ時程悔の甚しきはあらず。聖徒に向つて鞭を加へたる非の恐しきは、鞭てるもの丶身に跳ね返る罰なきに、自らと其非を悔いたればなり。吾を疑ふアーサーの前に耻づる心は、疑はぬアーサーの前に、わが罪を心のうちに鳴らすが如く痛からず。ギニヸアは悚然として骨に徹する寒さを知る。

「人の身の上はわが上とこそ思へ。人戀はぬ昔は知らず、嫁ぎてより幾夜か經たる。赤き袖の主のランスロットを思ふ事は、御身のわれを思ふ如くなるべし。贈り物あらば、吾も十日を、二十日を、歸るを、忘るべきに、罵しるは卑しと」アーサーは王妃の方を見て不審の顔付である。

「美しき少女！」とギニヸアは三たびエレーンの名を繰り返す。このたびは鋭どき聲にあらず。去りとては憐を寄せたりとも　えず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回らして云ふ。「御身とわれと始めて逢へる昔を知るか。丈に餘る石の十字を深く地に埋めたるに、蔦這ひかゝる春の頃なり。路に迷ひて御堂にしばし憩はんと入れば、銀に鏤ばむ祭壇の前に、空色の衣を肩より流して、黄金の髪に雲を起せるは誰ぞ」

女はふるへる聲にて「あゝ」とのみ云ふ。床しからぬにもあらぬ昔の、今は忘るゝをのみ心易しと念じたる矢先に、忽然と容赦もなく描き出だされたるを堪へ難く思ふ。

「安からぬ胸に、捨てゝ行ける人の歸るを待つと、凋れたる聲にてわれに語る御身の聲をきく迄は、天つ下れるマリヤの此寺の神壇に立てりとのみ思へり」

逝ける日は追へども歸らざるに、逝ける事は長しへに暗きに葬むる能はず。思ふまじと誓へる心に發矢と中る古き火花もあり。

「伴ひて館に歸し參らせんと云へば、黃金の髮を動かして何處へともとうなづく……」と途中に句を切つたアーサーは、身を起して、兩手にギニヸアの頰を抑へながら上より妃の顏を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、一しきり打ち返したのであらう。――王妃の頰は屍を抱くが如く冷たい。アーサーは覺えず抑へたる手を放す。折から廻廊を遠く人の踏む音がして、罵る如き幾多の聲は次第にアーサーの室に逼る。

入口に掛けたる厚き幕は總に絞らず、長く垂れて床をかくす。かの足音の戶に近く少らくとまる時、垂れたる幕を二つに裂ひて、髮多く丈高き一人の男があらはれり。モードレッドである。

モードレッドは會釋もなく室の正面迄つか〳〵と進んで、王の立てる壇の下にとゞまる。續いて入るはアグラヸン、逞ましき腕の、寬き袖を洩れて、赭き頸の、かたく衣の襟に括られて、色さへ變る程肉づける男である。二人の後には物色する遑なきに、どや〳〵と、我勝ちに亂れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと並ぶ。數は凡てにて十二人。何事かなくては叶はぬ。

モードレッドは、王に向つて會釋せる頭を擡げて、そこ力のある聲にて云ふ。「罪あるを罰するは王者

の事か」

「問はずもあれ」と答へたアーサーは今更と云ふ面持てある。

「罪あるは高きをも辭せざるか」とモードレッドは再び王に向つて問ふ。

アーサーは我とわが胸を敲いて「黄金の冠は邪の頭に戴かず。天子の衣は惡を隱さず」と壇上に延び上る。肩に括る緋の衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓はば、君が傍に座せる女をも許さじ」とモードレッドは臆する氣色もなく、一指を擧げてギニギアの眉間を指す。ギニギアは屹と立ち上る。

茫然たるアーサーは雷火に打たれたる啞の如く、わが前に立てる人―地を抽き出てし巖とばかり立てる人を見守る。口を開けるはギニギアである。

「罪ありと我を誣ひるか。何をあかしに、何の罪を數へんとはする。詐りは天も照覽あれ」と繊き手を拔け出てよと空高く擧げる。

「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹の眼を後ろに投ぐれば、並びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつゝ、「神も知る、罪は逃れず」と口々に云ふ。

ギニギアは倒れんとる身を、危く壁掛に扶けて「ランスロット!」と幽に叫ぶ。王は迷ふ。肩に纏はる緋の衣の裏を半ば返して、右手の掌を十三人の騎士に向けたる儘にて迷ふ。

此時館(やかた)の中に「黒し、黒し」と叫ぶ聲が石蝶に響を反して、窈然と遠く鳴る木枯の如く傳はる。やが

て河に臨む水門を、天にひびけと、錆びたる鐵鎖に軋らせて開く音がする。室の中なる人々は顔と顔を見合はす。只事てはない。

（五）舟

「鋻に卷ける絹の色に、槍突き合はす敵の目も覺むべし。ランスロットは其日の試合に、二十余人の騎士を仆して、引き擧ぐる間際に始めて吾名をなのる。驚く人の醒めぬ間を、ラヱンと共に埒を出でたり。行く末は勿論アストラットぢや」と三日過ぎてアストレットに歸れるラヱンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉を張る。女は「あな」とのみ髪に插す花の色を顫はす。

「二十余人の敵と渡り合へるうち、何者の槍を受け損じてか、鎧の胴を二寸下りて、左の股に創を負ふ……………」

「深き創か」と女は片唾を呑んて、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪へぬ程にはあらず。夏の日の暮れ難きに暮れて、蒼き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。……　……二人は一言も交はさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、われは晝の試合のまたあるまじき派出やかさを偲ぶ。風渡る梢もなければ馬の沓の地を鳴らす音のみ高し。……路は分れて二筋となる」

「左へ切ればこゝ迄十哩ぢや」と老人が物知り顔に云ふ。

「ランスロットは馬の頭を右へ立て直す」

「右？右はシャロットへの本街道、十五哩は確かにあらう」是も老人の説明である。

「其シャロットの方へ―後より呼ぶ吾を顧みもせで轡を鳴らして去る。已むなくて吾も従ふ。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶ける事なり。嘶く聲の果知らぬ夏野に、末廣に消えて、馬の足掻の常の如く、わが手綱の思ふ儘に運びし時は、ランスロットの影は、夜と共に微かなる奥に消えたり。――われは鞍を敲いて追ふ」

「追ひ付いてか」と父と妹は聲を揃へて問ふ。

「追ひ付ける時は既に遲くあつた。乘る馬の息の暗押し分けて白く立ち上るを、いやがうへに鞭つて長き路を一散に馳け通す。黒きもの丶夫かとも見ゆる影が、二丁許り先に現はれたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黒きものは聞かざる眞似して行く。幽かに聞えたるは轡の音か。怪しきは差して急げる樣もなきに容易くは追ひ付かれず。漸くの事間一丁程に逼りたる時、黒きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合點行かぬわれは益追ふ。シャロットの入口に渡したる石橋に、蹄も砕けよと乘り懸けしと思へば、馬は何物にか躓きて前足を折る。騎るわれは鬣をさかに扱いて前にのめる。戞と打つは石の上と心得しに、われより先に斃れたる人の鎧の袖なり」。

「あぶない！」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

「あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロットの事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消ゆる程の聲に、椅子の端を握る。椅子の足は折れたるにあら

ず。

「橋の袂の柳の裏に、人住むとしも見えぬ庵室あるを、試みに敲けば、世を逃れたる陰士の居なり。幸ひと冷たき人を擔き入るゝ。兜を脫げば眼さへ氷りて……」

「藥を堀り、草を煮るは隱士の常なり。ランスロットを蘇してか」と父は話し半ばに我句を投げ入るゝ。

「よみ返しはしたれ。よみに在る人と擇ぶ所はあらず。吾に歸りたるランスロットはまことの吾に歸りたるにあらず。魔に襲はれて夢に物云ふ人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪〳〵と叫び、あるときは王妃ーギニギアーーシャロットと云ふ。隱士が心を込むる草の香りも、煮えたる頭には一點の涼氣を吹かず。……」

「枕邊にわれあらば」と少女は思ふ。

「一夜の後たぎりたる腦の漸く平らぎて、靜かなる昔の影のちら〳〵と心に映る頃、ランスロットはわれに去れと云ふ。心許さぬ隱士は去るなと云ふ。兎角して二日を經たり。三日目の朝、われと隱士の眠覺めて、病む人の顏色の、今朝如何あらんと臥床を窺へばーー在らず。劍の先にて古壁に刻み殘せる句には罪は吾を追ひ、吾は罪を追ふとある」。

「逃れしか」と父は聞き、「いづこへ」と妹はきく。

「いづこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々と吹く夏野の風の限りは知らず。西東日の通ふ境は極めがたければ、獨り歸り來ぬ。ーー隱士は云ふ、病怠らで去るかの人の身は危うし。狂ひて走る方はカメロッ

トなるべしと。うつゝのうちに口走れる言葉にてそれと察せしと見ゆれど、われは確と、さは思はず」と語り終つて盃に盛る苦き酒を一息に飲み干して虹の如き氣を吹く。妹は立つてわが室に入る。

花に戯むるゝ蝶のひるがへるを見れば、春に憂ありとは天下を擧げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月さへ闇に隱るゝ宵を思へ。――ふる露のしげきを思へ。――薄き翼のいかばかり薄きかを思へ。――廣き野の草の陰に、琴の爪程小さきものゝ潜むを思へ。――畳む羽に置く露の重きに過ぎて、夢さへ苦しかるべし。果知らぬ原の底に、あるに甲斐なき身を縮めて、誘ふ風にも碎くる危うきを恐るゝは淋しからう。エレーンは長くは持たぬ。

エレーンは盾を眺めて居る。ランスロットの預けた盾を眺め暮して居る。其盾には丈高き女の前に、一人の騎士が跪づいて、愛と信とを誓へる模樣が描かれて居る。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地は黒に近き紺を敷く。赤き女のギニヰアなりとは憐れなるエレーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を己れと見立てゝ、跪まづけるをランスロットと思ふ折さへある。斯くあれと念ずる思ひの、いつか心の裏を抜け出てゝ、斯くの通りと盾の表にあらはれるのであらう。斯くありて後と、あらぬ礎を一度び築ける上には、そら事を重ねて、其そら事の未來さへも想像せねば已まぬ。

重ね上げたる空想は、又崩れる。見戯に積む小石の塔を蹴返す時の如くに崩れる。崩れたるあとの吾に歸りて見れば、ランスロットは在らぬ。氣を狂ひてカメロットの遠きに走れる人の、吾が傍にあるべき所謂はなし。離るゝとも、誓さへ渝らずば、千里を繋ぐ牽き綱もあらう。ランスロットとわれは何を

誓へる？エレーンの眼には涙が溢る。

涙の中に又思ひ返す。ランスロットこそ誓はざれ。一人誓へる吾の渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とは云はじ。これとわが心にちぎるも誓には洩れず。此誓だに破らずばと思ひ詰める。エレーンの頰の色は褪せる。

死ぬ事の恐しきにあらず、死したる後にランスロットに逢ひ難きを恐るゝ。去れど此世にての逢ひ難きに比ぶれば、未來に逢ふの却つて易きかとも思ふ。罌粟散るを憂しとのみ眺むべからず、散ればこそ又咲く夏もあり。エレーンは食を斷つた。

衰へば春野燒く火と小さき胸を侵かして、愁は衣に堪へぬ玉骨を寸々に削る。今迄は長き命とのみ思へり。よしやいつ迄もと貪る願はなくとも、死ぬと云ふ事は夢にさへ見したためしあらず。束の間の春と思ひあたれる今日となりて、つら〳〵世を觀ずれば、日に開く蕾の中にも恨はあり。圓く照る明月のあすをと問はゞ淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人である。

今は是迄の命と思ひ詰めたるとき、エレーンは父と兄とを枕邊に招きて「わが爲めにランスロットへの文かきて玉はれ」と云ふ。父は筆と紙を取り出でゝ、死なんとする人の言の葉を一々に書き付ける。

「天が下に慕へる人は君ひとりなり。君一人の爲めに死ぬるわれを憐れと思へ。陽炎燃ゆる黒髮の、長き亂れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星變る後の世迄も消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水の因果を受くる理なしと思へば。睫に宿る露の珠に、寫ると見れば碎けたる、君の面影の脆

くもあるかな。わが命もしかく脆きを、涙あらば濺げ。基督も知る、死ぬる迄清き乙女なり」

書き終りたる文字は怪しげに亂れて定かならず。年寄の手の顫へたるは、老の爲とも悲の爲とも知れず。

女又云ふ。「息絶えて、身の暖かなるうち、右の手に此文を握らせ給へ。手も足も冷え盡したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ。隙間なく黒き布しき詰めたる小船の中にわれを載せ給へ。山に野に白き薔薇、白き百合を採り盡して舟に投げ入れ給へ。――舟は流し給へ」

かくしてエレーンは眼を眠る。眠りたる眼は開く期なし。父と兄とは唯々として遺言の如く、憐れなる少女の亡骸を舟に運ぶ。

古き江に漣さへ死して、風吹く事を知らぬ顔に平かである。舟は今緑り籠むる陰を離れて中流に漕ぎ出づる。櫂操るは只一人、白き髮の白き髯の翁と見ゆ。ゆるく搔く水は、物憂げに動いて、一櫂ごとに鉛の如き光りを放つ。舟は波に浮ぶ睡蓮の睡れる中に、音もせず乘り入りては乘り越して行く。蕚傾けて舟を通したるあとには、輕く曳く波足と共にしばらく搖れて花の姿は常の靜さに歸る。押し分けられた葉の再び浮き上る表には、時ならぬ露が珠を走らす。

舟は杳然として何處ともなく去る。美しき亡骸と、美しき衣と、美しき花と、人とも見えぬ一個の翁とを載せて去る。翁は物をも云はぬ。只靜かなる波の中に長き櫂をくゞらせては、くゞらす。木に彫る人を鞭つて起たしめたるか、櫂を動かす腕の外には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、收めたる翼に、波を裂いて王者の如く悠然と水を練り行く。長き頸の高く伸したるに、氣高き姿はあたりを拂つて、恐るゝものゝありとしも見えず。うねる流を傍目もふらず、舳に立つて舟を導く。舟はいづく迄もと、鳥の羽に裂けたる波の合ぬるを隨ふ。兩岸の柳は青い。

　シャロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき聲が、左の岸より古き水の寂寞を破つて、動かぬ波の上に響く。「うつせみの世を、……うつ、……に住めば……」絶えたる音はあとを引いて、引きたるは又しばらくに絶えんとす。聞くものは死せるエレーンと、艫に座る翁のみ。翁は耳さへ借さぬ。只長き櫂をくゞらせてはくゞらする。思ふに聾なるべし。

　空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挾む左右の柳は、一本毎に綠りをこめて朦々と烟る。娑婆と冥府の界に立ちて迷へる人のあらば、其人の靈を並べたるが此氣色である。畫に似たる少女の、舟に乘りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあらう。

　舟はカメロットの水門に横付けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙てる樓閣の黒く水に映るのが物凄い。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニギアを前に、城中の男女が悉く集まる。

　エレーンの屍は凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき顔を、雲と亂るゝ黄金の髮に埋めて、笑へる如く横はる。肉に付着するあらゆる肉の不淨を拭ひ去つて、靈其物の面影を口鼻の間に示せるは朗かにも又極めて淸い。苦しみも、憂ひも、恨みも、憤りも――世に忌はしきものゝ痕なければ土に歸る人と

は見えず。

王は嚴かなる聲にて「何者ぞ」と問ふ。櫂の手を休めたる老人は啞の如く口を開かぬ。ギニヸアはつと石階を下りて、亂るゝ白合の花の中より、エレーンの右の手に握る文を取り上げて何事と封を切る。

悲しき聲は又水を渡りて、「うつくしき……戀色や……うつらう」と細き糸ふつて波うたせたる時の如くに人々の耳を貫く。

讀み終りたるギニヸアは、腰をのして舟の中なるエレーンの額――透き徹るエレーンの額に、顫へたる唇をつけつゝ「美くしき少女！」と云ふ。同時に一滴の熱き涙はエレーンの冷たき頰の上に落つる。

十三人の騎士は目と目を見合せた。

（完）

寄稿せられたる諸先生に謝す

編者玆に餘白を以つて謹んで諸先生が深厚なる同情を寄せられ約を違はず玉稿を寄せられたるを感謝す、絢爛花の如く優麗虹の如く、我二百號の輝けるもの、雑誌の數多しと雖もまた他に其比を見ず、之れ實に諸先生がたまもの也、編者の醜を知らざる、債鬼の如き面付して度々玉稿の催促に罷出てしが如き、罪死に當る、偏に高恕を仰ぐ。

バイロン

土井晩翠

シムーンの烈風吹き絶えし
砂漠を照す眞晝の光、
頭上に燃え立つ怒の焰、
渾身さながら瀑なす汗に
重き荷苦む可憐の旅客、
足なへ手なへて倒るとき
はからず認むる遠のみどり、
あへぎたどれば波とそよぐ
椰子のしげみの十丈高き、
下に湧きづる玉なす泉
滾々みなぎる生命の水、

せわしく兩手に掬みとる如く――
青春きのふのあけぼのは
堪へがたかりし知識の渇。

學び悟れる今何ぞや。

弦月斜に露寒き
墓門の夜半に泣く如く
青燐焰のさむる時、
朽ちし古棺の上にたちて
幽冥の客に問ひし幾たび、

劫灰重る宇宙の死滅、
殘骸骨は丘と積みて
青山とこしへに春ならず、
いづれか秋に逢はざらむ
花のなごりを尋ぬれば、
濃霧の海にわけ入りて
あらしにかこつ枯落葉。

學び悟れる今なぞや。

陰雲雨を含みさりて
頭上を翔くる魔の姿、
追へば人なき夕の岸、
神秘下界に探るべく
彗星の魂降りきて
九仞の淵わけし跡、

今も怒濤の山さけて
あざむか脆き人の世を。

太虚を廻る千萬の球
(内に無數の靈宿る、)
勇みて光の途行くいづれ
喘ぎて亡びに歸るはいづれ、
いづれか驚き逃げはしる
いづれか喜び躍り行く、
宇宙の合調ききしはたそや、
それはた更におほいなる
非─合調の一ふしか。

彩虹一たび橋絶えて
天上ながく音づれをやめ、
夕ぐれ朱の雲の粧、

たゞ人界のあこがれの
惱を無窮に誘ふよすが、
悟の異名　薄命の
わが手空しく虚を握み
わが脚土を離れ得ず、
知識の渇をとゞむべき
甘露夜光の盃を
觸れしは夢か、めさむれば
またとこしへに乾く唇。

死と疑の子となりて
惑の惱むしばめる
心さながら巣か、蜂の、
救をでゝと誤りし
戀はたにがき底の澱、
見よ明眸の閃に

燃ゆるは情焰何の恨、
冥府の底の暗深く
光を内に吸とりて
うづく魔軍の影たゞ示す
硫黄の池の波の色、
金髮亂れてかざしの薔薇
落ちて碎けてちりあくた、
碎くるいまはの花の吐息
樂土の榮のとこしへを
ねたび思に亡びぬと。

迷の暗ははや足りぬ、
あえぎぬ伏しぬ血を吐きぬ
山河姿を整へて
天地清淨の身に返り
自然の讚美ひゞく時、

煩悶理性の爭に
人運命のもてあそび、
新の救いつこぞや。

千尋まくらき波の下
蒼海さながら陰府の姿、
潜ればあらしに燕の如く
かすけき光てらし射る
尾鰭を振ふ百千の魚群、
時に鯨鯢潮を亂し、
海草今また刺ある四肢に
纏はん苦、凌ぎ行き
底なる眞珠を求むるごとく、
かくまた人生悲哀の海に
靈魂くゞりて光を探る、
拾はむ其玉名は「行爲」と。

紅焔黒煙空を突くと
見しもわれから、燃えたちし
名殘火はなほ亡びじを、
殘れる焰さは持ち行かむ、
綠を染むる春草の
望かへりて死せる灰
再び熱き自由の郷に。

颶風の翼しばるはたそや、
瀑布の流とむるはたそや、
磁石の北向く拒むはたそや、
自由の大靈血ある胸に、
焰を燃すを消さんはたそや。

ユーラの連山なだれおとして

アルペン首峰の答ふる如く、
曉銀河の水掬みて
粧ふ女神、(名は月か)、
胸はやさしく脈うちて
大地の靈をしたふ時、
大わだつみの波ゆらぎ
あらしを笑ふ鋼鐵の
十萬の艦率ゐ來て
冲より湖の寄する如く、
聞きしやわがよぶ自由の歌に
全歐ことごとくよどみしを。
盛衰ひとり神たゞ避けむ

葡萄の房の紫の
空やセイヌの春の水、

花を流して行く水の
はては大海、あけの汐
漲ぎる音か、凱歌は
自由の讃美、黄金の
世を今と見しまぼろしよ。

詩人夜半の露にさめ
古壘の月に嘯きて、
玉樓の昔夜の宴
笑を含みて君王の
おもて光りしいにしへを。
榮華の夢を呼ぶ如く、
巴里の花のうつろひを
あゝ其自由の喪失を
我歌はんに何の琴。

春また遠しオリンピヤ、
智慧は緑酔
戀は紅頬、
たくみの、榮の、よろこびの
春いや遠し二千年、
アクロポリスに月清く
レスボスそうびにほへども、
秋ならざるに愁の狭霧、
神殿空しく破壁をとめて
サーモピリイの山ひとり泣く。
裂かれてしかも飄へり
あらしに叫ぶ自由の旗、
山河の姿移らざる
故郷に再び飛ぶは何時、
成らんかサラミス波名をよばむ

否かさはモレア野は血に染めん、
光榮二ッの途に俱、
さらば鼓動の胸の血を
湧かしてたてたてあゝわが友、
風清うして空高き
秋におごれる岩鷹の
翼とゞめん境なく
翔けん雲海限りあらじを、
行雲もろともあらしに呼んて
いざや天涯遠くたゝむ、
「ルックス、エクス、オーリエンテ」
あゝ見よ東方光あなたに。

(こはバイロンの伊太利漂泊以後の事蹟に基きて其末路を歌んはとする篇稿の一節なり)

詩歌二章

薄田泣菫

磯邊の黒百合

一

汐の氣は曇る八百あひに、
鷗はひるがへる離れ島、
水無月午さがり日ぞ熱る
荒磯の岸に黒百合咲いた。

二

花の香焚きくゆる巖が根に、
沖その女波、また片男波、
呼びかふあり聲をはれやかな
戯れや、高わらひ、いきどほり。

三

男浪は、『姫か、やれ、小百合花、
薄鈍藤ごろも着やろより、
浪間に潜きやれ、海の宮
しら玉、血珠とる手のまゝを。』

四

小百合は、『さかしらや喞かし、

よざまに言やるかの、海の波、
吾こそは島姫が齋き女の、——
黒衣は誇り、またへりくだり。』

五

『聖のそら音や、』と片男波、
『法衣の誇り、——よし何はあれ、
見やらば齋精進日のをはり、
靡きよか、水がくれの藻葉にも。』と。

六

『知らるる弱げさの身おやまでに
されば、』と小百合葉はほほゑみて、
『それとも、侍きの靜こころ、
わが世の齋ひ火は朽ちよかの。』

七

男波の身がくれに、海の宮
嗄ごゑどよめきて波の穂の
千五百の腕揚や、荒磯岩
手もろに搖ぶれ、また壞ゑおつる。

八

入日は老しらむ夕ながめ、
高浪逆羽うつなぎさべに、
小百合は、——齋き女の一の座や、——
ゑまひの立すがた、目も花に。

夕ごゑ

一

日は入りぬ、野の面低に
霧はくゆるたゆげさの、
齋精進、悔のひと夜、
思ひよわる魂かとも。

二

夕ばれの黄金みちに。
かへる鳥の遠がくれ、
胸のしみひとつ消えて、
今はた二のうするかに。

三

葉ずくなの並木なかに、
靜ごころの浮歩み、
くしみ魂胸に蒸して、
われかの世や、——草片葉。

四

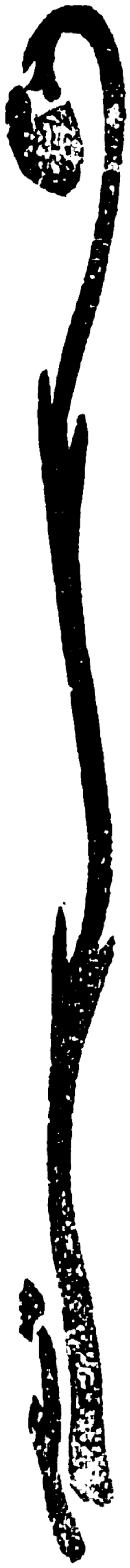
いの雲の夕くれなゐ、
天照る日のおほ殿に、
をんな樂かへり聲の
ほのにわたる夢うつつ。

五

日は老いて日は朽つとも、
わが心の火うつりに、
後の音の思ひあがり、
花と燃えむ日ぞあらめ。

ある夜

兒玉花外



深き帷の星を消して
夜の女神よ、戀に來れ、
雲髮、垂れて露に濡るも
梟の如く、骨の枝へ
花なく、暗く、森の胸ぞ。

夜に生芽ぐむ惡運なれば
うれひ、おそれの歳と結ぶ、
夢を與へね、天地の大母、
よるの歌こそ魔ともめづれ。
月はのぼるや、靈は沈み、
燃ゆる髓肉觸るゝ時ぞ、
されば夜の神、淸き腕に
頸、捲かずや、つよくかたく
吾を死にまで——冥獄も共に。

歌

尾上柴舟選

○

濃き霧の草に漂ふ朝山や籠作ら摘む白百合の花

長谷白眠

○

夕月は舟に森見る人すべり汀にしろき花藻におちぬ

高瀬淡嶺

あたゝかき君がみ夢の籠ろやと野よりもて來て菊咲かせけり

石段の石にはひたる枯蔦をひいて露見ろ夕月夜かな

○

秋田華溪

ひけばまたひかるゝ儘によりそひてほゝ笑むらしきのうぜんかづら

草の實を木鳥ついばむ響してつまどつめたき秋の風かな

○

芝野花

白駒に黃金くつわをはませつゝ國内かけらばよき妻を得んか

秋風にいはゆる駒の轡とり太刀の緒長う行くは誰が子ぞ

○

大林鶯郎

松枯れて三百年の塹壁を名殘の榮と蔦紅葉する

さかしうも小猫より來ぬ轉び來ぬやせたる人の小春の椽に

○

佐久間霧江

君は東われは西へのわかれ路を倚るにつめたき石地藏かな

手をとらむ母はゐまさずゐまさずも天の花野は神導かめ。(四才の秋を身まかりし稚兒子に)

○

中澤鼎介

白雲迷ふ幾名の山の影くれて木枯さむしちはら萱原

雞の午時つぐる羽のはゞたきに木犀香る僧房の椽

○

植松壽樹

目路遠き秋一片の浮雲にふとまぎれたるわがおもひかな

我れに似て運命を蛇の殼にみて秋の夕を鐘樓に泣きぬ

○
舟は寒く歸るにはをしき秋の月夜磯をとろ行く我影ながき　持田賢士

○
芋の葉の露ころがして句を思ふ翁の鬢に秋の風吹く　鷲見美雲

○
たのしみは宵なる霎時星守る墫の鳥のうまいの夢や　鈴木靜

○
濱の日の暮靜かなる洲の崎や目白なくなり地引の舟に
瑠璃飛んで朝寒しろき小母が宿竹を切るなり二十の人は　西宮白菊

○
秋近う蟲なく頃をいつとなくやまひにやせてねられぞなりぬ
しかはあれどかなしき秋のむすぼれを露によせてはなくみとゆるせ　小谷寒鴉

○
白鳥の行方(ゆくへ)見おくる濱の晝(ひる)を小蟹(こがに)はしる流れ藻のかけ
霎ちりて水たえ〴〵の里川や小石まばらに鶺鴒(みそさゞい)なく　三枝泊浦

○
花の香のみなぎり靈(く)しき朝の杜うたの宮居を守るか白鳩
人のせて金流(こんる)横ぎる三ツの船のいづれの帆にか歌はまかゞむ
自百合のにほひみなぎる朝の宛まぎれし夢を追ふか美(よ)き人
若葉風伽藍をふきて鹿をふきて奈良の少女が鬢みだすかな
白鳩は瑠璃宮めぐり人めぐり靈光(ひかり)みなぎる臨へと消えぬ　村田愛美

苔にふりし五輪の塔や石の銘やおぼろに讀みぬ敦盛の墓
やぶれたる戀のうらみを息にこめて夕べ孤雲に笛ひゞかしむ

今回は應募和歌非常に多く名吟佳句亦尠からざりしも紙面の都合により之を割愛し又今回に限り凡て六號活字にて組みたり紙數の都合實に止むを得ざりし也投吟者之を諒せよ(記者)

百舌鳥

漱石選

百舌鳥啼くや切り透したる楢林　初聲
百舌鳥なくや沼干あがれる秋旱　同
夕照や百舌鳥が高啼く向ふ山　同
百舌鳥なくや拍手遠き宮の森　句舟
鵙の聲小鳥網張るまだきかな　四緑
木の下に寫生の人や鵙來啼く　圭愛
朝霧やいつもの枝へ鵙落し　圓外
百舌鳥をきく山裾道や遠ざかる　英子
鵙なくや雷に打たれし樅高き　浦亭
樫大樹鵙啼いて去り來り啼く　黄村

鵙なくや明日晴らしき雲の色　七三
鵙來なく庵の秋となりにけり　苦風
百舌鳥なくや暮の太鼓の遠く鳴る　信一
百舌の聲雀の聲に黄昏るる　木兆子
百舌鳥なくや野中に高き杉一木　之子
よべばれの東照宮や鵙の聲　菱涯
鵙なくや柿の茶店に馬車をまつ　五習
百舌鳥ないてあたり閑なり無住寺　三登
生業の囮の鵙を勞りぬ　葩人
鵙なくや且つ散る崖の柿紅葉　零史
百舌鳥なくや裏の笹山日のあたる　石羊生
古沼の暮れ行く空や百舌鳥の聲　霞翠
はら〱と木の葉散ちけり鵙の聲　同
鵙なくや八ッ手枯れたる庵の庭　美雲子
秋晴や藪道行けば鵙のなく　同
鵙なくや五平悉にして甘藷堀る　六角
百舌鳥なくや二軒並んで峠茶屋　同
鳴子ひけば餘所の畑に鵙の啼く　青龍
椐村に馬の糶あり鵙の聲　同
鵙なくや松の隙から稻見ゆる　春坡
松杉に山中さむし百舌鳥をきく　同
百舌鳥啼いて一山鳥の聲空し　五遷
凶作や入日小寒く鵙のなく　同
山畑や豆はぢけとぶ鵙日和　碧子

選者吟

鵙ないて燕雀聲を潜めけり(詠史)　同
鵙落し鳴き行く鵙を惜みけり
鵙啼くや墓に乏しき墓地の森
百舌鳥の聲着干しの合羽乾きけり

十二月分課題　煤拂　十一月十八日限
正月分課題　福引　十二月十五日限

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事

▲歌募集　東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛のヿ

平民社の解散

自から日本社會主義者の中央機關と標榜し、敢然として日露の開戰に反對したる平民社は終に解散したり、此の事實を視て、吾人は我が國に於ける社會主義の消長に少からざる興趣を感せざる能はず

吾人は未だ我が國に於ける社會主義の發達傳統を詳知するに至らず、唯だ矢野文雄氏が此の主義を以て一の著述を公けにしてより、總ての同主義者が一時翕然として氏の四邊に集中したるを知る、然れども矢野氏の信念甚だ篤からざる乎、抑もまた主義の人ならざる乎、將た其の議論の非を悟れる乎、忽ちにして一種の文場に隱匿して僅かに閑文字を弄するのみ、社會主義の如き藐として殆んど忘れたるが如し

矢野氏と前後して起れるを片山潜氏とす、氏は一時社會主義の書籍雜誌を刊行して、身自から四方を遊歴して其の主義の宣傳に力めたるも、其の熱心の割合に多くの歸依者を得ざりしが如く、却つて同主義を口にして衣食を求むるもの丶多數に其の資金を吸集せられ、終に自から支ゆる能はず、萬國社會主義大會に出席したるを機として、今や北米テキサス附近の或るレストラントにセクレタリー然に事務を執りつ丶ありといふ、而して氏の事業として殘れるもの僅かに渡米協會と其の機關雜誌とあるのみ

片山氏に代つて起れるは即ち平民社なり、吾人の聞く處によれば、平民社を起せるは主として幸德傳次郎、堺利彦の兩氏にして、山根吾一氏其補助たりしが、山根氏去つて片山氏の渡米協會を主理し、而して片山氏と運動を共にせし西川光二郎氏平民社に入れり、此の

三氏の外、尚ほ石川某氏あり。木下尚江氏其の客員の如く、安部磯雄氏また準客員の地位に在りたりといふ

斯くして平民社は、社會主義のため自から勇戰し奮鬪したり。日露戰爭は彼等に取て一打撃なりしも、能く孤壘を守りて多く勢力を失墜せざりき。曾て平民社が毎週刊行せる機關雜誌は、三千乃至四千部宛發行せられ、其の書籍販賣の利益また相當にありしが如きも、其の收益は終に能く同人の食ふに耐えざりき、況んや警察の壓迫のため、屢々罰金を課せらるゝの損失ありしをや

此の時に方りて顰蹙すべき事實は平民社の内部に起れり、吾人は今多くこれを語らざるべし、而して平民社の客員準客員乃至其の顧問相談役たる人々は此の事實を苦々しく思ひ、幸德氏が出獄以來病に罹りて獨力其の經營に耐えざるを以て、終に戒嚴令によりて機關雜誌が發行を停止せられたるを口實として解散に決したるなりといふ、茲に至て最後に社會主義のため多く氣を吐きたる平民社は創立以來僅かに二年にして解散し、我國の社會主義者の運動は茲に一頓挫を來したり、然り、戰役正に畢りて社會主義起るべくんば則ち起らんとする時に方りて、平民社は端なくも解散したり

山路彌吉氏、斯波貞吉氏等の名を以て國家社會黨の組織は成れり、然れども此の國家萬能を旨とする國家社會主義は、純然たる社會主義と目す可らざるのみならず、該黨は今や殆んど有名無實のものゝ如し

現存の我が國社會主義中最も學殖あるは安部磯雄氏なるべし、氏は溫乎たる君子人にして、學者紳士の典型たる人也、其の社會主義に於ける態度も亦講壇的なり、飽まで學者的なり、批判的なり、將來若し社會主義の盛なることあらば、氏恐らくは其の泰斗たらん歟、然れども主義のために勇戰する熱烈を欠く、此の熱烈あるは幸德傳次郎氏なり。氏は平民社中に在て最も無疵なりき、若し詢に主義に殉するの篤信あらば、氏は其の主義のため必らず一方の雄鎭たるべし

社會主義は一種の經濟學說として研究の價あるもの

也、但し社會をオルガニゼーションとして視るに、社會主義者の分配說は、果して社會の全分子を健全にして、社會全體を强健ならしめ得るや否や、抑も又社會人生の問題を解決すること、單に分配說のみに據りて危險なきや否や、換言すれば善良なる宗敎に由て道德を普遍ならしめ、向上せしめずして、果して公平なる分配行はれ得べきや否や、英國に社會主義の多く蔓延せざるは何ぞ、米國の勞働組合の盛にして而して社會主義の割合に振はざる理由は那邊にありや、獨逸にのみ社會主義の聲高き由緣は如何、社會主義を硏究するもの併せて此等の事情を明知せざる可らず。未だカールマルクスの資本論をも通讀せずして、早く旣に社會主義者と自稱し、現制度を破壞し資本家を攻擊せんとするが如きは、寧ろ輕佻の極なり、彼等豈久しきを得可けんや

公會に於ける藝妓

近時各處に催ふされし同盟國艦隊の歡迎會に於て、吾人は奇異なる一現象を目擊したり、曾て藝妓を賣春者として公けの場所より隱蔽すべしと唱へたる諸新聞紙が、今や同盟國艦隊の歡迎に藝妓を出して、士官水兵の間に周旋して酒杯を侑めしめざるを以て、歡迎の手段を盡さずと稱するは是れ也

吾人は敢て博識なる諸新聞紙の記者諸君に問はんとす、抑も歐米到る處に春を賣り色を鬻ぐ婦人は多し、然れども之を公けの場所。殊に與國の軍人を迎ふる晴れの場所に此の類の婦人を出すと、歐米孰れに其の例ありや。吾人は先づ記者諸君に之を質さんと欲す

且つ英國海軍の士官水兵が此等の藝妓を見て悅び興ずるは事實也、然れども彼等は其の歐米に於てレチイを視るが如く藝妓を視しか、假令レチイを視るが如く敬意を以て視ざりしとするも、反對に侮蔑の眼を以て之を視ざりしや否や、恰かも顏好き玩弄物に對すると

齊しき心を以て之を迎へざりしや否や、彼等が歐米の俗としては公けの場處に於て尊敬するを例とせる婦人に對して、少くも尊敬の意を寸分だも有せざりし其の結果は、延きて主人側なる日本人に對する敬意を減ずるが如き虞なきや否や、此の一事も吾人の併せて記者諸君に問はんと欲する所也

米友協會が紅葉館に於て米國の名士ブライアン氏を歡迎するや、協會々頭金子男は、ブライアン氏に呼きて曰く『彼の舞踏せる少女（紅葉館の女中）の內、君は孰れを最も麗はしと見るや』ブ氏曰く『我が目には總て綺麗に見ゆ』金子男曰く『彼の最も端なる少女最も美はし』と、吾人は此の席に於て斯く客に語る金子男の人格の、動もすれば世人に尊敬せられざる理由の一を始めて了解し得たり。同盟國の軍人を歡迎せる東京市の公會の第一日に於て藝妓なかりしとを攻擊したる新聞記者諸君以て如何と爲すや（以上二件ＹＺ生）

千山萬水樓主人に與ふ

（社會主義に對する私見）

楞陰生

▲千山萬水樓主人足下。足下が讀賣紙上に掲げつゝある「社會主義評論」は實に近時評壇の一偉觀なり。たゞそれ足下の評論を讀まんがために讀賣を購讀するもの、余の友人のみにて已に六七人に及ぶ。讀賣が近來著しく其發行部數を增加し、廣告料の如き亦少からぬ値上げをなせりと傳ふるもの、是れ疑もなく足下の評論の力なり。足下の得意亦憶ふべし。

▲千山萬水樓主人足下。足下が何人の覆面なるやについては世に多くの疑あり。或人は足下を河上雞氏ならんといひ、或人は福田德三氏ならんといふ。然れども是れ皆當らず。竊かに足下の評論を見るに、其日く時事問題を面白く讀ましむる用意と、好奇心を促すに專らなる筆致と、又余輩の調子何となく記者的なるとより推して、余は足下の必らず新聞界の泥水（？）を飲みたる人なるべきを信じたりき。果然日頃長耳を以て鳴れる余の一知人は報じて曰く、「社會主義評論」の受信者と發信者とは元と是れ全一の人てふ世にも奇怪なる發見をなせりと」。然れども余は今之について何事をも斷ぜざるべし、又何事をも論ぜざるべし。たゞ徐ろに時日をして事の眞僞を列せしめんのみ。故に余は此書に於て、足下を呼ぶに常に千山萬水樓主人の名を以てせん

と欲す。

▲千山萬水樓主人足下。人間はこれ生物中の最も進步し、最も賢明なるものと稱す。然れども一段の高處に立て冷靜に之を批判す。彼は尙全く無智と、偏見との支配を脫する能はざるなり。悲しむべきかな。あらゆる人間に向て充分の供給をなし得べき實力は、已に收めて彼の手中に在り。見よ、鐵と鋼鐵の筋骨、電氣と蒸氣の膂力、汽船と汽車の血管、電信と電話の神經系を有する「文明の巨人」は、俛首して來て人間の奴隷となり、貨物の生產額をして已に古へに數十倍ならしめたり。若し用ふるに其宜しきを得ば、此巨人の力は優に今日に數十倍、數百倍するの働をなすに足れり。或經濟學者の調査によるに、總ての成人にして勞働せば、一日僅かに三時間にして今日の富を產するに足ると。然らば卽ち各人一日四五時間の勞働をなさば、衆と共に鼓腹擊壤の樂をなす、決して難しとせざるべし。然るに一方には勞働者なるものあり、一日十一二時間の勞働をなして而かも尙其生活を維持するに足らず、甚しきは勞働すべき職業さへ與へられずして凍餒の苦みに迫らる。他方には資本家なるものあり。何等の才德なく、何等の功績なきも、而かもよく優游閑坐し、營養過多と稱して病なきに强て病を作る。貧者過勞に病み、富者過逸に倦み、貧者貧なるが故に墮落し、富者富めるが故に腐敗す。嗚呼今日の如き自由競爭の組織や、私有財產の制度や、他人を困め、己を困め、自他共に千仞の奈落に沈まずんば止まざらんとす。若し今日に於て之が救濟の策を講ぜずんば、人間の幸福は遂に吾人と永遠に其袂を分つべし。彼の社會主義と稱するもの、實に此問題を解決せんとして起りたる捷徑の救濟法にあらずや。余は常に此意味に於て社會主義を見んと欲するものなり。

▲千山萬水樓主人足下。今日に於て若し社會主義の何たるを知らざるものあらば、そは實に智識上の一大懈怠といはざるべからず。若し又知て而して口にせざるものあらば、そは實に人生を憂ふる至誠なき無情漢といはざるべからず。而して余は實に近來まで其懈怠者の一人たりしことを恥づ。今徐ろに此主義の研究に從って智識上の懈怠を免れんことを期しつゝあり。若し夫れ人生を憂ふるの至情に至つては余不肖と雖も決して人後に落ちざるものたるを確信す。他日其研究の結果を公けにして大方の士に問ふ所あらんとす。然れども今日尙淺薄なる智識を以て輕忽に此大問題を論議す、些か謙讓の德を害するあらんを恐る。故に余は之を足下の如き博識の人に委ね、只此主義を駁撃する人に向て、裏面より此主義を辯護する體に擬して余の感懷を述べ、以て足下の批判を仰がんとす。

▲千山萬水樓主人足下。世或は自由競爭の効能を說き、私有財產の功德を述べ、是れ實に人世の進步發達を促がす唯一の方法なりといふものあり。然れども斯くの如きは全然愚論のみ。夫れ襁褓は孩兒に必要なり。老婆は時に小童の教師なり。されど若し成人にも襁褓を着せ、大人をも老婆に學はしめんとせば如何。自由競爭の組織や、私有財產の制度や、人世の進步發達を促がすの動機となりしことあるは吾人も亦之を認む、

是れ過去の歴史の證明する事實なればなり。然れども今日の如き大仕掛の生産事業發達し、あらゆる富と權力とは極めて少數の人の掌握に歸せんとする時に當りて、尙此危險にして有害なる組織制度に戀々たるは、彼の襁褓を以て成人に强ひ、老婆を以て大人を說かしむるの愚と些も擇ぶ所なし。凡そ世に過激なる急進主義の怖るべきを說くもの極めて多きも、固陋頑强なる保守主義の害毒更に一層恐るべきを知るもの少きは實に慨嘆に餘りあり。彼のヘンリー、ジョールヂが今の世の文明を以て帆前船に一等蒸汽機關を据ゑ附けたるに比し、若し船の構造を變更せざれば船は終に破碎すべしとの論、誠に余の意を得たり。聞け、機關の運轉次第に烈しくなりまさり、船體漸く其壓力に堪へず、次第々々に破碎を生じつゝある響、何處よりともなく鼓膜を掠め去るが如きものあるを。

▲千山萬水樓主人足下。世或は社會主義を以て一切の競爭を杜絕するものとなし、斯の如きは人性の自然に反し、從て到底行はるべからざるものなりと斷ずるものあり。然れどもこれ誤解なり。人生は或一面より觀る、殆んど競爭の生活なり。此人生に於て一切の競爭を杜絕せんとするは固より不可能ならん。社會主義は決してかゝる無法なることを企つるものにあらず。社會主義の目的とする所は惡競爭、慘競爭、陋競爭を廢して、高貴なる善美なる目的に向て更に大に競爭せしむるにあり。虎狼互に角鬪するが如きは惡競爭なり。猛禽の小鳥を追ふが如きは慘競爭なり。食を與ふれば兩犬牙をあらはすが如きは陋競爭なり。願はくは人間の競爭心をしてオリムプの競技會の時の如くならしめよ、願はくば人間の競爭心をして彼の虎狼の如く猛禽の如く、犬の如くならしむる勿れ。これ恐らくは社會主義の念ずる所たるべきか。

▲千山萬水樓主人足下。世或は社會主義を以て最早や完成したるものと思惟し、種々なる些細なる問題を捉へて頻りに質問の矢を放ち、此事件は如何、此設備は如何といひ、若し一の答ふる能はざるあらば乘じて以て社會主義夫自身を否定せんとするものあり。何ぞ夫れ徑々術々たるや。此質問を譬ふれば、家を建てんとする人に向て、足下は床の間に幾冊の書物を列ぶる積りなるや、戸棚には幾個の皿を收むる計畫なりやなどいふに全じ。社會主義は事物の進化を信ず。先づ大體の組織を定め、些細の點は其必要に應じて之を考へんのみ。猶ほ家の基礎、構成、牆壁、戸牖にして已に成らば、內部の装飾必ずしも難事にあらざるが如し。苟も人類永遠の幸福の爲めに闘ふ、多少の暢氣と多少の餘裕となくして可ならんや。

▲千山萬水樓主人足下。世には又近眼淺慮の人少からず、我五尺の身の位置さへも考ふる能はずとは扨々氣の毒の次第ならずや。かゝる人のいふ所を聞くに、人間は己れ一身のことさへ考ふればよし。自分の身の仕末さへ出來ずして他人の世話、社會の改革など計るは僭越の至りなりと。この論は單なる自己主義の立論より見るも淺薄にして且つ誤謬たるを免れず。何となれば古の野蠻人は獨立して生活し得たるも、今の文明人は却て社會の力を藉らざれば生存する能はざること例へば下等生物は體を分斷せられて尙生存し得るも、高等動物は一肢體を失ふも死を免れ

ざるが如く、世の文明に進むに從て社會全體一有機體の形をなし、各個人は殆んど一機關の姿となりて、他の機關皆健全ならざれば已れ獨り健全の發達をなすこと能はざるに至りたればなり。胃弱き人は全身皆衰へ、脳惡き人は万事皆捗らざるが如く、社會に善良ならざる個人あれば社會は發達進歩せず、社會にして發達進歩せざれば、已れ亦完全なる利益を享くる能はざるなり。此理極めて明々、殆んど架說するを須ゐず。然れども一事の最も解し易きを取りて例示せんか。今の社會にあつては惡戯(いたづら)好きなる發電所の職工は意に從て十万の人家を暗黑にするの力を有し、惡意ある鐵道工夫は千百の人命を谷底又は河中に投ずるの力を有し、亂暴なる砲兵工廠の人夫は東京全市を震動せしむるの力を有し、獰惡なる水道給水場の官吏は數十万の市民を鏖殺するの力を有せり。單に此一事をおもふも社會全體の善良なくして吾人の生の安からざるを知るに足れり。且つ夫れ吾人の着る所、食ふ所、住む所、悉くこれ社會の供給、社會其物の發達なくして如何ぞ吾人獨り自ら利福を得らるべき、かるが故に若し自己的立場より之を觀するも社會全體の改善は即ち自己の改善なり。況んや人間には自己以外、利欲以外、更に社會的感情、愛他的感情の強くして且つ大なるものあるに於てをや。

▲千山萬水樓主人足下。余は未だ社會主義に於ては一小學生徒のみ。從て余の描く所は恐らくは白日夢(ひるのゆめ)に類するあらん。然れどもあらゆる人間の思想は殆んど白日夢の裡より發達せざるなし。余は今日に於て必ずしも之を恥づべき理由を認めざるなり。即ち足下に開陳するを敢てしたる所以なり。

▲千山萬水樓主人足下。余はただ余の夢を說くに急にして、足下の所論に對し、何等の論評を加ふる所なかりき。これ今日未た足下の評論を論評すべきときにあらざるを信ずればなり。足下回を重ぬること十五、而かも未だ本論の門を入りたるに過ぎず、今日輕忽に之を是非す、却て禮を失せんことを恐る、故に敢てせざるのみ。

▲千山萬水樓主人足下。然れども忌憚なくいへば余は足下の評論に於て幾多の慊らざる點あり。例へば餘りに迂餘曲折の道を辿りて、其論旨の明瞭ならざる、ただ〳〵其日〳〵を面白く讀ましめんとするに專らにして前後を通讀せば比較的興味の索然たる、世間の注意的人物のみを捉へて輕々に論斷したる態度の眞摯ならざる、これ皆余の慊らずとする足下の短所なり。然れども又一面より之を視る。足下のこの短所はやがて足下の長所なり。今の社會に於て、殊に新聞紙に於て世間多數の人に其說を讀ましめんとす、或は足下の如くせざれば到底世の注目を惹くに由なかるべし。世間をして問題に趣味を感ぜしむるは確かに一大事業なり。此點よりして足下の評論を見る、足下は確かに純粹の學者又は社會主義者以上のことをなしたりといふも過褒にあらず。時當さに日露の大戰其局を終りて、世は漸く戰爭以外の事に向て注意を拂はんとする秋。社會主義てふ大問題、緊要問題を提へ來りて一世の注意を促す。足下の慧眼、足下の功績共に余の偉とする所なり。希くは世の紛々に動かさるゝことなく、眞摯熱誠足下の眞主張を吐露せよ。余亦足下の論の了はるを待て多少ハ論評を試むることあるべきか。(十月十八日)



東西同調

登張竹風

近頃の文壇には、實に〱、怪しからぬ議論が多い。二十年前ならいざ知らず、この與國の隆運に際して、やれ、日本の文學は西洋に居つて見ると發達が悲しいほど遲いの、やれイブセンが出ないの、マアテルリンクが出ないからだめだの、やれ日本の芝居は飜案ばかりして天才を愚弄してるのと、それは〱泣き言ばかり言つてる手合が多いのは、如何したものだ。かやうな泣き虫どもは、どうかこの國を見棄てゝ、おなつかしい北歐南歐の天地へ逃げて往つて貰ひたいものだ、と吾輩は思ふ。

就中最も噴飯に堪へないのは、時代思潮の學南先生の泣き言だ。島村抱月が「西洋に居て日本の文壇を觀察すると、日本は實に驚くべき豪い國だ、」と言つたのに對して、「抱月は何の爲に洋行したのであらう、日本は實に情ないほど發達の遲々たる國だのに、」と涙をぽろ〱こぼしての御述懷。いやはやあきれたものだ。

申すまでもなく、吾輩は未だ西洋と申すところへ參つたことは無い、參つたことは無いが、吾輩は不敏ながら天眼通といふ者を持つて居るのだ。西洋に居て、始めて日本を觀るのが都合が宜ければ、日本に居て西洋を觀るのは猶更都合が宜い筈ではないか。

九月の「デル・テュルメル」といふ雜誌に、獨逸の批評家リエンハルトが、「文學上の心配」と題して、獨逸の文壇の消息を鏡にかけて見るやうに、書いて居るから、一つ吾輩の天眼通で、之を觀破つて、讀者諸君のお目に懸けて、西洋通がり外道等が、いかに大法螺を吹いて居るか、いかに眼を閉つて、西洋を遊んで來たかを、證して見たい。

リエンハルトの意見に據ると、獨逸の芝居は昨今漸く娛樂一天張りの道具になつた、といふのだ。立派な戯曲を以てするか、拙い脚本を以てするかは、劇場の關するところではない、唯々滿場といふのがその究竟の目的なのだから、戯曲詩人は、どうしても劇場に生命を持つて居るところからして、舞臺に成功するといふのがその本務となつて了つて、また詩としての巧拙如何を論じて居る遑はない。近代戯曲なんぞと、表には仰山な金看板をぶら下げて居るが、樂屋を伺ふとこんなものだわい。……

どうです諸君。この一言は直ちに日本の批評と見ても差支ないではないか、幸田露伴の隨筆(日本新聞)に、「日本の芝居は俳優の芝居にも非ず、詩人の芝居にも非ず、實に興行主の芝居だ、」といふ意味のが在つたと思ふが、彼と此と、實に符節を合したやうだ。西洋の芝居は神聖で純潔で、天才優遇で、……と、日本の芝居を豚小屋同然にけなす連中等は、宜しく、西洋劇場の若い衆にでもなつたが宜からう、いや西洋の芝居には若い衆は無いのでしたか知らん。

リエンハルト、また曰く、自然主義の思想は、その取材の偏狹にして一面的なるよりして、今や全く汲み盡されて涸れ果てた趣がある。思想が盡きたばかりでなく、製作力も涸れて了つたやうだ。昨今の冬からかけて舞臺に登つた脚本は、多くはクラシッシュの者であつたのを見ても分るではないか。固より年々歳々、多少の成功喝采を以て迎へられた品物も無いではないが、國民精神の一部を飾るべき藝術としては、半文の價値も無いものばかりだ、云々。

これも日本の劇界に向て放たれた言かと思はるゝばかりに能く當つて居る。一時舊演劇を壓倒せんばかりに盛大であつた新演劇が、昨今全く同じものばかり舞臺に上せて、不如歸や巳が罪で、觀客を胡魔化して居るところなんぞは、立派な脚本家が出ないと、いふ所もあらうが、自然主義の取材が一面的である故かも知れない。新舊俳優合同といふ氣樂な劇界刷新術も、いつしか、うたかたの夢と消えて、二派は依然として相對

峙せるばかりでなく、自然派に反對の理想演劇‥‥一種の夢幻劇がまた候頭をもたげて、千本櫻だの大森彦七だのが見物の喜ぶところとなつて居るのなんぞは、あながち、團洲追善といふ意味ばかりで盛んなのでは無いやうだ。吾輩の見るところでは、所作事交りの歌舞伎風は今後いよ〳〵盛になるだらうと思ふ。あれも善し、これも宜して、何もオペラが日本に無いからと云つて、腹を立てることは無い。獨逸も日本も質の上からは變りはないのだ。

所で、さう世の中が平板凡庸では困つたものだが、一體如何なる仔細で、豪い詩人や、立派な戯曲が出ないのだらうとは、獨逸でもチラホラ議論があると見えて、ゴルドマンといふ人の意見が面白い

「戯曲詩人に對する崇拜は遂に詩人をして向上發達の念なからしむるものだから、不可ないのだ。一寸戯曲を書く、舞臺に上る、喝采をされる、御當人、好い氣になつて、詩人がる、世間は過分の尊敬を拂ふ。一躍大詩人となつた積りで、鼻高々と威張出す、滿足をする、勉强をしない、發達をしない、平凡となる、凡庸となる、とまあ云ふ道行きだ。近代戯曲詩人の一人が初舞臺で稍々成功すると、數千のペンは忽ちその令名を賞めて、擔ぎ上げるのだから堪らない、賞められた當人は、もうすぐさま滿足をして了つて、やがて、凡骨と成り下がるまでの事だ、要するに戯曲の振はないのは、世間が餘りに過分の尊敬崇拜を脚本家に拂ふからだ」

と、かういふのだが、日本では、少し事情が違ふやうだ。併しながら多少似通うた點が無いでもない。小說家などが、餘り妙でもない自作物が、戯曲と化けて、本鄕座、東京座あたりの舞臺に出ると、忽ち有頂天となるのは、如何なものであらうか。と云つて過分の尊敬を脚本家に拂ふやうな世間ではないのだから、「尊敬しないから、豪い詩人が出る」といふ反對の論理は成り立たないまでも、まだ過大の弊害に陥らないだけ、追々發達の見込があつて、清新の空氣はこれから吹いて來さうな有望な時代であるだけ、日本の方が好いの

かも知れない。

リエンハルトは、ゴルドマンの説を諒とし、猶ほ一説を加えた。

「ゴルドマンの云ふところは、頗る肯綮に當つて居るが、氏は一の大問題を忘れて居る。芝居の弊は即ち日刊の弊だ。今日の精神的文明は全く、日刊月刊の新聞雑誌が、眼が廻るほどの早業をやつて、文學詩歌の代理をしたり、または之を傳へたりするものだから、一般公衆の喜んで迎へるやうな均一的凡骨的文藝が行はれるのだ。新聞の社長は購讀者の多いのを好み、芝居の興行者は見物の多いのを好む。彼等に多少の理想はあるにしても、理想通りに行ふことは固より出來ないのみならず、少は終に多に負けて、十中八九は讀者見物に意を逢迎するやうになるものだから、理想の命ずるところと見物の要求するところとの間をぶらついて、譯の分らぬものが出來るのは已むを得ない。といつて、見物の種の善いのを撰ぶと云ふ事は到底時と力との許さゞるところだから、夫れも出來ない。」云々

近頃の者が批評界に、往々、日本の小説家などを罵つて、衣食の爲に書くから不都合だの、新聞小説に筆を取つてその日〳〵を書いて往くのだから、立派な小説が出來る筈がない、併し外國では獨逸では、なんぞと高慢痴氣な大言を弄する人が多いが、このリエンハルトの言を以て見ると、御崇拜の外國だつて、餘り結構では無いではないか。固より日本の小説家を戒しめるのは、宜しい。外國では〳〵といふ氣障な毛唐崇拜は、眞平御免蒙りたきものに候。

さて獨逸でも、文壇劇界等の事情が此の如き有樣であるところから、憂國の士は色々の策を出して、文壇革新の必要を説いたものゝ中に、アドルフ・バーテルスの建策が二つあるので。その一策に曰く、

一、獨逸の「シルレル會」の如きものを擴張して、佛蘭西のアカデミーの如きものとし、文藝を中心として言語の改良をも司り、社寺學校等が國家監督の下に立つて居るやうに、國家保護の下に詩人學堂を作ることとて、會員は第一流の詩人四十名と詩人以外十

名即ち五十名を以て組織するので、詩人以外とは第一流の文豪、歴史家、哲學者等より成るものだ。而してその職とするところは大約三ヶ條に分れて、その一條は文藝作品の批評觀察、その二條は言語問題に對して解決を與ふること、

その三條は文壇爭論に對して最終審判を與ふること、

等である。會の費用は國家の負擔で、毎年約貳拾萬マルクを議會の協賛を經て支出し、役員の俸給としては終身給の格で、三四千マルクを與ふること。

バーテルスの第二策は、

二、毎年の夏休暇を利用して、獨逸の高等學校の上級生に、ワイマールの宮庭劇場を見せる、

といふのだ。

第二策は隨分突飛な策だから、リエンハルトも絶對に反對をして居る。いかさま、これは然るべき話で、ゲーテ、シルレルの藝術市に多勢の學生が、どや／＼と入つて來て、縁日的見物をした所が、將來の獨逸の文藝が勃興しやうとは受け取り難い。

第一策は、要するところ、實行がむつかしいだけて、愈々實行の曉に至つて、バーテルスの希望通り、公平無私な評論、解決、鼓舞奬勵が出來るとすれば、隨分面白い事になるであらう。文壇は由來無政府である。何人でも無沙汰で横槍を突き出す、辯護をする、反對をする、なぐり附ける、裏切りをする、背負ひ投げを食はせる。勝手氣儘な振舞をしても、左程の刑罰を蒙るでもなければ、百年かゝつても勝負は極らない程の呑氣角力であるから、腕力の乏しい天才などが、張り手を食らつて、その儘に倒れて了ふのは、氣の毒ではあるが、珍らしくは無いことだ。であるからバーテルスの注文通りの組織が出來上れば、精神上の心配は兎も角、詩人等の物質上の心配困難は大に減ぜらるゝであらう。眞の天才は名馬槽櫪の間に伏すといふやうな、みじめな目に遭うことは無くなつて、臥龍忽ち天に昇る壯觀を呈するやうになるであらう。とまあ思はれないこともないが、然し能く／＼考へて見ると、此奴も

随分、難物は難物だ。第一、詩人が全く國家の保護の下に立つといふのが氣に食はないし、斯様な役員めいた職務に從事すると、得て官吏風を吹かして、實を失ふといふのが、古今の歴史の證するところだから、名ばかり豪くて、實を失うた人々の審判には、審判を受けた當人が難有がらない事にもなるし、終には無用の長物となる憂はないか。よしんば、また、當局者には不都合が無いにしても、かゝる人々に撰拔さるゝまでには、詩人の精力は大抵盡きて了つて、名譽の冠を戴いたといふのが、始でまた終であるが如き悲惨な事實を見ることが多い。

そこで、リエンハルトの言ふには、文藝の革新といふやうな者は決して外から出來るものでなくて、内から爲なければならない。バーテルスの建策の如きは、畢竟餘りに外部に重きを置いたのが缺點だ。苦心經營の在る所は何處までも、お察し申すが、直ちに双手を擧げて歡迎する譯に参らないのは即ちこの故だ。と評して、自分の策を述べて居る。

リエンハルトの策は、即ちまたゲーテ、シルトレルが、そのむかし、ワイマールで行つた策で、文藝の天才は決して國家の力を假りて育てられるものではない。唯獨りで靜かに發達するものだ、といふ根據の上に立つて居るのである。即ち、世間の平板なる亞流と相伍しないで、徐ろに文藝の發達を期する有志の人々が、靜かに大成を熱望して、一歩々々理想の郷に進む爲に、同志相結ぶといふのが、其本領だ。エマーソンの行つた所も亦之に外ならない。

リエンハルトの策は一見全く無策に似て、その實文藝の精神を洞觀したものと云つて宜しい。文藝は所詮個人的事業で、物質的困難は或は國家の力で救はれるかも知れないが、精神上の困難即ち文藝に遊ぶ天才の勃興等は、どうしても個人々々の奮勵、修養、勉強等に俟たざるを得ない。

之を要するに、現今の世は、西も東も同調である。何も日本の文藝が、さほど馬鹿で、西洋の文藝が、さほど豪い理屈はない。バーテルスやゴルドマンなどが、

兎や角云ふのも、畢竟獨逸の文藝の今日が、餘り目出度くない所から出る觀察や建策だ。之を日本の事情に照して見て、日本が大馬鹿であるとは、何うしても思はれないではないか。日本文藝の特色長點等に附いては、吾輩別に大に說があるが、それは他日に讓るとして、玆では無暗に西洋通を振り廻して、自國を忘れる浮浪漢同樣な人々に、卽日筆を絕つて貰ふことをお願ひする。餘り悧巧でも無いお隣の餓鬼大將をむやみやたらに賞めそやして、「お前は何故お隣の坊つちやんの眞似をしない馬鹿奴」と自分の子を叱る親があつたら、いかな息子でも憤らずには、居られない筈だ。親が子を叱るのは、まだ宜い。乳臭い黃口兒輩が、西洋の皮相を觀て來て、露伴はつまらない、柳浪は恐なり、紅葉は修辭家のみなぞと口幅つたい事を言ふ位、見つともない事は、日本の時代が時代だけ、またとあるものではない。チト嗜んだが好からう。

秋風錄

美中天

▲何か時文を書かうと思つたが、今月は無茶苦茶に材料が多くて豫定の紙數を超すとの事であるから、お蔭で大に樂が出來た、併し面出しだけも爲ぬと濟まないから雜報でも書かう

▲九月の帝國文學で齋藤野の人が現代の翻譯界に警告すといふ長いものを書いた、登張竹風が之を讀賣で反駁した、其議論の梗槪は餘りに長いから擧げぬが、野の人の論理の矛盾を捉へて竹風が之に痛棒を與へたので、いづれ野の人も遠からず之に答ふる處があるであらう、僕は竹風と同じく野の人が論理の矛盾を認めるが、又竹風の所論にも絕對に贊成し得られぬ處がある、僕は今之れに橫槍を入れて見たいが、紙面が許さぬから次號に云ふ、只近時評壇の寂寞を破つた頗る注目すべきものとして之を世に紹介するに止める、

▲抱月が歸朝して日々に入ると、天地前にあり竹風こゝに立てりと云つて讀賣に竹風が入つた、由來文壇の淋しいのは文壇に喧嘩がないからである、樗牛が美論を唱へ、竹風がニーチエを唱送した時分は中々面白かつた、面白かつたのは八方に喧嘩があつたからである、今や竹風立つて大に氣焔を吐くと共に、そろ〳〵八方に向つて喧嘩を吹きかけて居る、賣り言葉に買言葉、喧嘩を仕かけられては逃げることも出來まい、それには色々な花が咲く、今後の評壇は定めし見ものであらう、願はくば抱

月も喧嘩をせよ、宙外も更らに昔日の勇を回復して其仲間に入れ

▲喧嘩て思ひ出したのは紅葉館に於ける抱月歡迎會の序上で柳浪と天外との摑み合つた話てある、世間てはいろ〳〵に取沙汰をするが事實は皆な間違つて居る、僕が其眞を話さう、柳浪が曾て某雜誌に寫實派を攻擊した口吻のある談話をした、別に天外にあてつけたといふ譯てはないが、天外は之を見て大に憤つた、それがそも〳〵事の起因てある、處て紅葉館で圖らず二人が同序した、酒盃の重なると共に天外日頃の鬱憤が抑へ切れず、「おい廣津ッ」といふをきつかけに、「貴樣は實に惡黨だな」とやつ付けた、「惡黨とは何だ、人を廣津と呼捨にするのは何だ」と柳浪はどもりながら「貴樣は初め己れの處へ小說は如何して書いたら可いでせうと云つて聞きに來たではないか、今日多少書けるやうになつたといつて廣津と呼捨てにするのは何だ、」といふと「何を失敬な」と天外が飛び懸る、此時「天外の野郎ひつぱたいて了へ」と怒鳴つて飛び出した者がある、それは國木田獨步てあつた、何故に獨步出たかといふに、此日初めて獨步は天外と面會した、名刺を出して以後お心易く願ひますと云ふと、「國木田獨步々々々々々、はゝ新體詩をお書きになる?」とさも鷹揚に天外は答へた、之が少からず獨步の癪に障つた、獨步とは多少文壇ては名を成して居る、新體詩ばかりぢやない、小說も書いた、論文も書く、何だ此へツポコメがと腹の中て大に憤つた、それが此騷ぎに乘じて天外をひつぱたけとなつたのてある、其場の事情あら〳〵此の如し、無邪氣な喧嘩て實に面白い、摑み合をする程の勇氣があればこそ小說も書けるのだと居合はした某氏は呟いた



京都の閨秀畫家

長田偶得

其四　六人部暉峯女史

◎京都から大阪行の汽車に乘込んで、暫時進行すると、向町といふ小さな停車場がある。女史は其向町神社の境內に生れたのである。

◎女史の祖父は、六人部是香といつて、平田篤胤門下の秀才で、人に知られた國學者。繪畫の趣味もあつて、澤山の紛本類を藏して居たが、女史の姉も、櫻井玉緒に就いて畫を學んだことがある。

◎夫等の遺傳でもあつたのか、女史は幼い時から、非常に畫が好きで、小學校でも鉛筆畫だけは、何時も滿點で、受持教員の舌を捲かしてゐた。で、一層の事、專門に繪畫を修めようと、京都に出て來たが、さて自分は、如何な畫風に適して居るのか、また先生は、誰がよいのか、一向分らず。親戚の誰彼か勸めるまゝ、當時の流行兒であつた竹内棲鳳の門に入つたのである。

◎其頃の相弟子といふのが六七人、いづれも男子ばかりであつたが、一週間ばかり經つて、土田蕎園女史が入門して來たので、大層力にもなり勵みにもなつた。やがて郷里から老婆を呼んで一戸を構へ、棲鳳の處へ通つて居たが、何にせよ妙齢のことであるから、男の相弟子などが、經師屋を極め込んで、五月蠅く遊びに來る。これでは仕方がないと思つてる矢先に、母が病氣で、養生かた〳〵京都に來たので、早速夷川に引移り、親子二人、水いらずの生活をすることになつた。

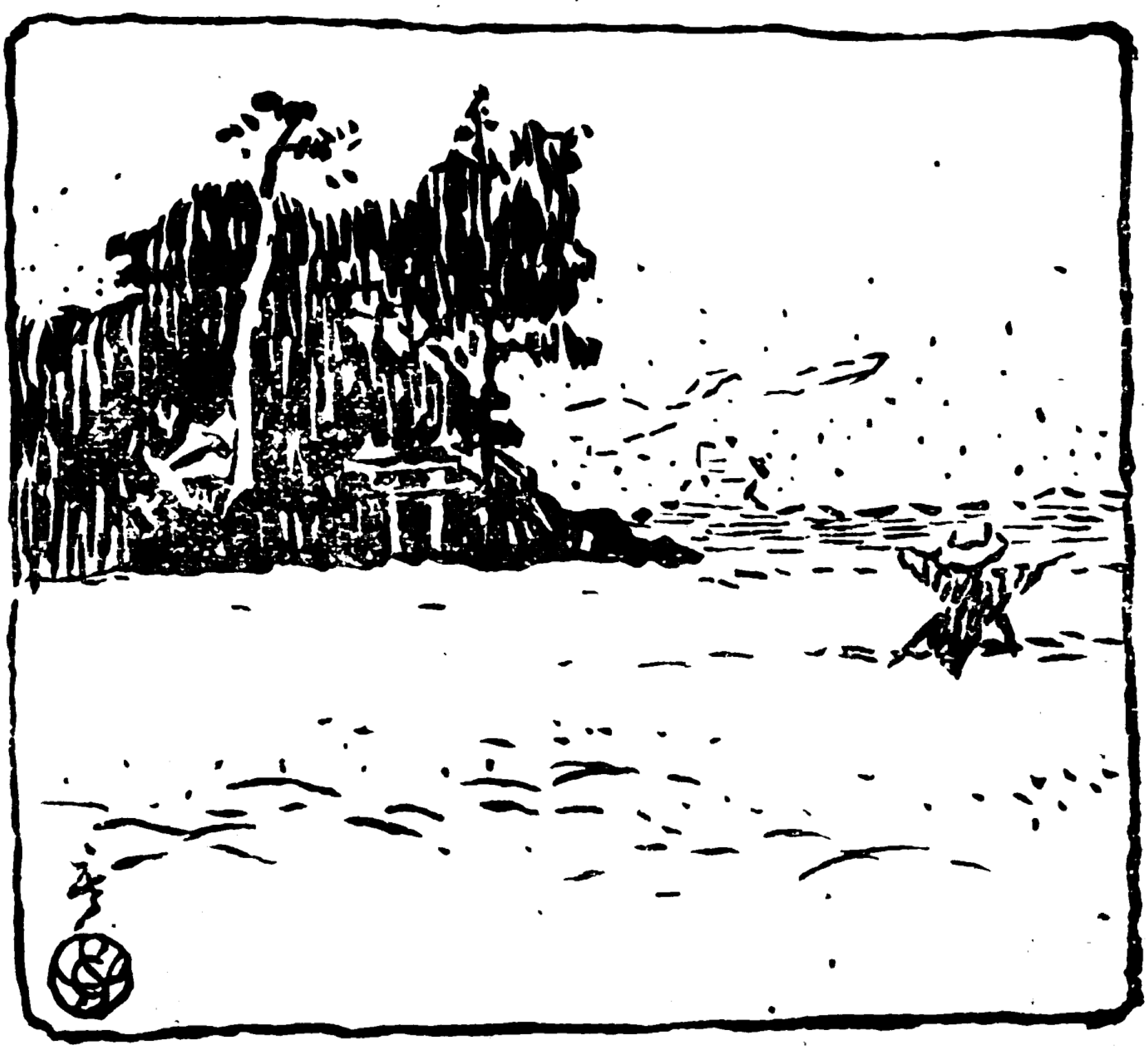
◎女史が初めて金屏風に揮毫したのは、十五歳の頃で、社中の者は、それを浦山しがり、冷笑半分『六人部さんは、モー先生におなりなさつた』などゝ、揶揄つて居たが、其實、先生になるだけの兆候が、此時分から發露れかけたのである。

◎第四回勸業博覽會の時には、始め靜御前を描く積であつた處が、師の棲鳳から、それは中々故實を調べなければならぬ。寧そ他の容易いものにした方がよからう、と言はれた、同じ社中の松園女史や何かには、勝手に好きなものを描かして置いて、自分にばかり、その樣なことを言はれたので、女史は非常に憤慨したものと見え、妾だとて、人の描く位のもの描けぬことがあるまいと、一念凝つて鐵より堅く、一ヶ月餘りかゝつて、北野縁起の繪卷を臨模し、苦心に苦心を重ねて、やう〳〵製作を卒へ、其まゝ郷里の向町に歸つた。

◎さて歸宅はしたものゝ、審査の結果、如何なつたか、それが氣になつて〳〵仕方が無い。或る日のこと、散歩かた〳〵長岡神社に詣で、茶店に休んでゐると、其下を二三人の社中が通るので、上から聲を掛けると、

先方では挨拶もなく『六人部さん、あなたのは陳列になりましたよ』と言つた。これを聞いた時には、本統に涙が出る程嬉しかつたと、女史は私に話した、それも道理か、當時棲鳳の社中は、三四十人もあつたが、其中で審査の結果、美術館に陳列されたのは、僅か五六名であつたのである。

◎其後のこと、審査員の前田健次郎と岸光景とが、棲鳳を千本通りの旅館に招き、四方八方話の序で『君の社中から出品された中に、六人部暉峯の作といふのがある。年齢などは、役場の奥印まで捺



秋十題其

してあるから、眞逆に誤りは無からうが、彼の年齢で、あんな製作をやるとは、チト受取れぬ點がある』と言はれた。けれども何處に佳く出來てゐようとも、女史の筆に成つたことは、一毛掛直のないので、審査の結果、褒狀を獲たが、これは僅か十七歳の時であつた。

◎女史は、他の閨秀畫家と違ひ、專門の繪畫を研究する外に、三田淵某に就いて和歌を學び、また岩本善治氏の父に就いて漢籍を修め、一通りの文學趣味を解して居る。

◎誰でも女史を訪れた人は、よく知つて居るであらう。

其書室には、晴雲閣、八十有一晃親王、明治二十九年七月十四日、と記された扁額がある。これは女史が、畏くも親王殿下の御召に預り、席上揮毫をしたとき、下賜せられた親筆なるのである。

道聴途説

道聴生

▲某新聞記者、或日山座政務局長を其の私宅に訪ふ、座に數人の來客あり、山氏座の中央に胡座をかき數葉の新聞紙を前に置き、澄み切たる物得の大聲にて談笑自若、オイ烟草盆を持て來い、婢唯々として烟草盆を棒け來る、こんな多勢のお客さんに一ッじやいかん、二ッ三ッ持て來い、序でに茶も持て來い、大きな土瓶も持て來て置け、座に客あるを知らさるものゝ如く、意氣昂然、毫も屈辱講和を訂結せる全權隨員の風なし、其の云ふ處を聞け、曰く、誰が往たッてあれ以上の條約が出來るもんかと、意色平然たり、記者先生謂て曰く、講和て失策じつたので朝鮮に脫奔するさうなが、山氏哄笑して曰く、新聞屋さんが、そんな噂さをたてるんサ、歸朝以來毎日役所に出勤するかネ、するとも、月給を貰つてるからナー、ポーッ、マスて憤慨の餘り慟哭したと云ふ噂さが有るか?、馬鹿云へ、四十面下げてベソ〳〵啼て溜るもんか、女郎じやあるまいし、記者先生曰く、朝鮮はナカ〳〵エー、確かに物になる、山氏制して曰く、オイ君、君、朝鮮の惡口を謂ふな、此の人は朝鮮人だよ、物になるなんて云ふと、取て喰ひさうに聞へて外聞が惡い、所謂其の朝鮮人は苦い顔して微笑す、記者先生澄して曰く、ナーニ惡口じやない、前途發達の見込があると云ふ意サ、一座皆笑ふ、山氏磊落豪放、酒を好む多量、毫も邊幅を飾らず、玄關に懸けある山氏常用のシルク、ハットが泥塗みれになり居るを見ても其の平生を推知すべし。

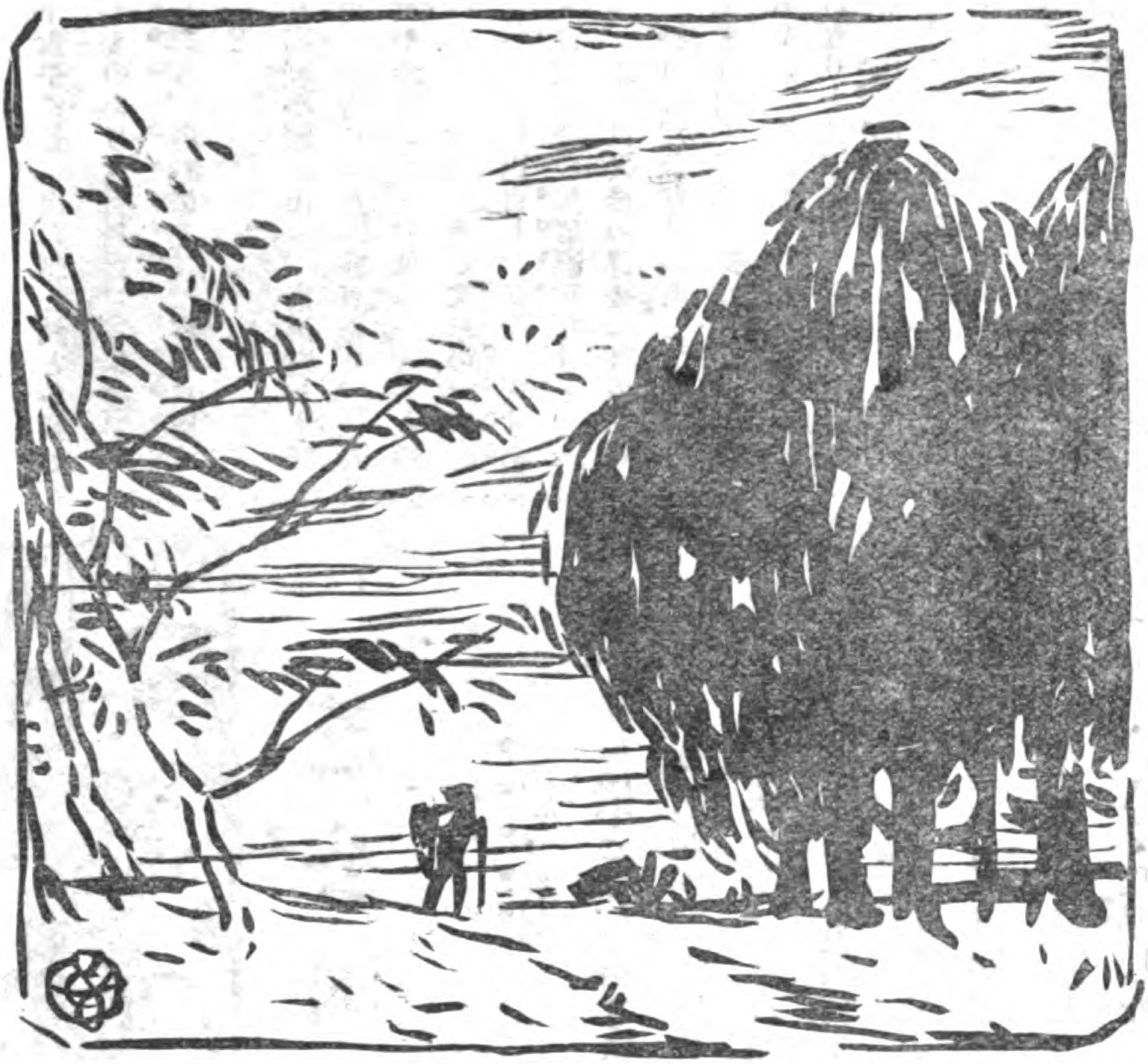
▲本年の外交官採用試檢に於て試檢委員珍田次官應試者に語るに、東京市の騷擾談を以てす、娓々數千言、次第あり、秩序あり、騷擾の模樣歷々目睹するが如し、次官更に咳一咳して謂て曰く、應試者諸君、諸君若し外國より來て東京に駐在する公使と假定し、東京市の騷擾を各本國に打電すと假定し、而して其の電文を二十字とし、作り見よと、山座圓次郎聽て笑て曰く、馬鹿だナー、そんな試檢問題を出すヤッが何處に在る、而して此の珍田氏の試問に及第せしもの僅かに二人のみ。

▲海軍造船總監工學博士佐雙佐仲氏、食道癌に罹り、藥石効無く終に逝去したり、我が海軍の造船に就て偉大の勳功ある氏の如き、名士の逝ける洵に邦家の爲に惜しむべしと爲す、氏の初めて病むや、長與病院に在りて治療す、病ひ癒へざる也、去て大學第一醫院に入て手術を施せしも良好の結果を見さりし也、氏病める時、主治醫に謂て曰く、吾か病ひ癌なりや、若し癌なれば之れ致命症なり、藥石効無き我れ善く之を知る、須らく自盡すへきのみと、醫斷て決して癌ならさるを云ふ、故に氏は死

に就くまで其の何病たりしやを知らさりしと云ふ、以て其の爲人性行を知るべし、

▲政友會總裁西園寺陶庵侯、近來元氣頗る善く、如何にかして現内閣を破壞し、取て代らんの野心滿々として、日夕無心苦慮す、而して政友會に一手に籠斷せんには、其の役者の不揃なるに窮し居れり、若し時機到來、止むを得ずんば伊東晨亭を起さんかとの志ありと、或人聞て嘆じて曰く、政友會に席を列するものにして、やゝ宰相の器有るもの總裁一人のみ、目を擧げて彼の黨を見よ、人材に乏しき落莫たる寂莫の野のみ、難い哉西園寺内閣やと

▲中村不折畫を學ぶが爲に佛國に留學すること三年、日々喰ふ處、パンとオムレツ一品のみ、硬志猛行、凡百の誘惑、毫も不折に累せず、等しく巴里に留學するもの、不折のシミッタレを嘲笑して止まず、不折傲然として曰く、燕雀の輩安んぞ鴻鵠の志を知らんやと、而して業成りて歸朝す、或人曰ふ、不折歸朝して揮灑する所洋行前の飄逸奇警の筆鋒全く脱して人目を驚動せしむるに足るもの無し、彼の『太陽』の口繪を見よ、何ぞ夫れ平俗なる、彼の『日本』の挿畫を見よ何ぞ夫れ生硬なるやと、通がゝりは辯護して曰く、其の浴眼に飄逸なる如く思はるゝは未だ垢抜けせざるなり、今日の不折既に神境に入れり、『日本』の挿畫の只眞ッ黒に塗沫したるが如き素徒の企及すべからざる所と、又ある物識り顏の男は曰く、不折は巴里に於て其の教師に鼾頭を挫かれたり、挫かれて負けぬ氣の不折一生懸命となりて研究せり、而して其の結果は以前の毫放の氣失せて眞面目となれり、之れ彼に進境ある所



（秋十題其七）

以なり、是を以て今日の不折を論ずるは非なりと。

▲戒嚴令布かれて劍付き鐵砲の兵士、儼然として街衢を衞る、東京市に一の美觀を添ふの觀あり、然れども天下太平にして復た劍と銃とを要せず、佐久間總督に戒嚴令解除の議を云ふものあり、總督儼然として曰く、戒嚴令は容易く公布すべき性質のものに非ず、既に公布す、容易に解くべきものに非すと、言者唯々として退く。

▲二十年前、二人の青年あり、大阪より高履を踏み出し、東海道五十三驛を濶歩し東京に入る、途中伊勢の某所に路傍に清水の井戸あり、一人の青年傍らの樹皮を削り書して曰く、此の水毒ありと、他の一人書き添へて曰く、飲めば百年の後ち必ず死すべしと、當時の或る文章の大家聽て嘆して曰く、飲めば百年の後ち必ず死すとは面白し、此の人天才あり、後も文を以て現はるべしと、其の人は則ち今の黑岩涙香なりと、

▲東京市の燒打ち騷動は誠に空前の珍事、政府は暴徒の背後に有力なる張本人あるを猜し、之を得て甘心せんと物色甚だ急なり、而して終に得ず、或者は曰く、某樞密顧問官なり、或者は曰く否某の長官なり、渠れ政界の大山師にして野心勃々、常に亂を好み、亂に乘じて機を摑まんとす、殊に多額の機密費を有す、必ず渠れなりと揣摩臆測、噂さは噂きを傳へ來て毫も知るを得ず、或人當日の旗頭山田寡南（喜之助）に向て曰く、費用は幾ら、かゝつたかと尊南曰く、二萬圓計り費ッた、其の金は誰が出した、山喜曰く、大竹の寄附じや、問者嘲て曰く、馬鹿云へ、大竹は春畫を購ふには百圓を投じて惜まざる男、然かも公義の爲には鐚一文も出す男じやない、大竹の先は誰が出したか、尊南曰く、誰でもエーじやない、ヒッコク問ふ勿れと、而して政府の知らんと欲する所は實に此の出金者の誰れなるに在りと。



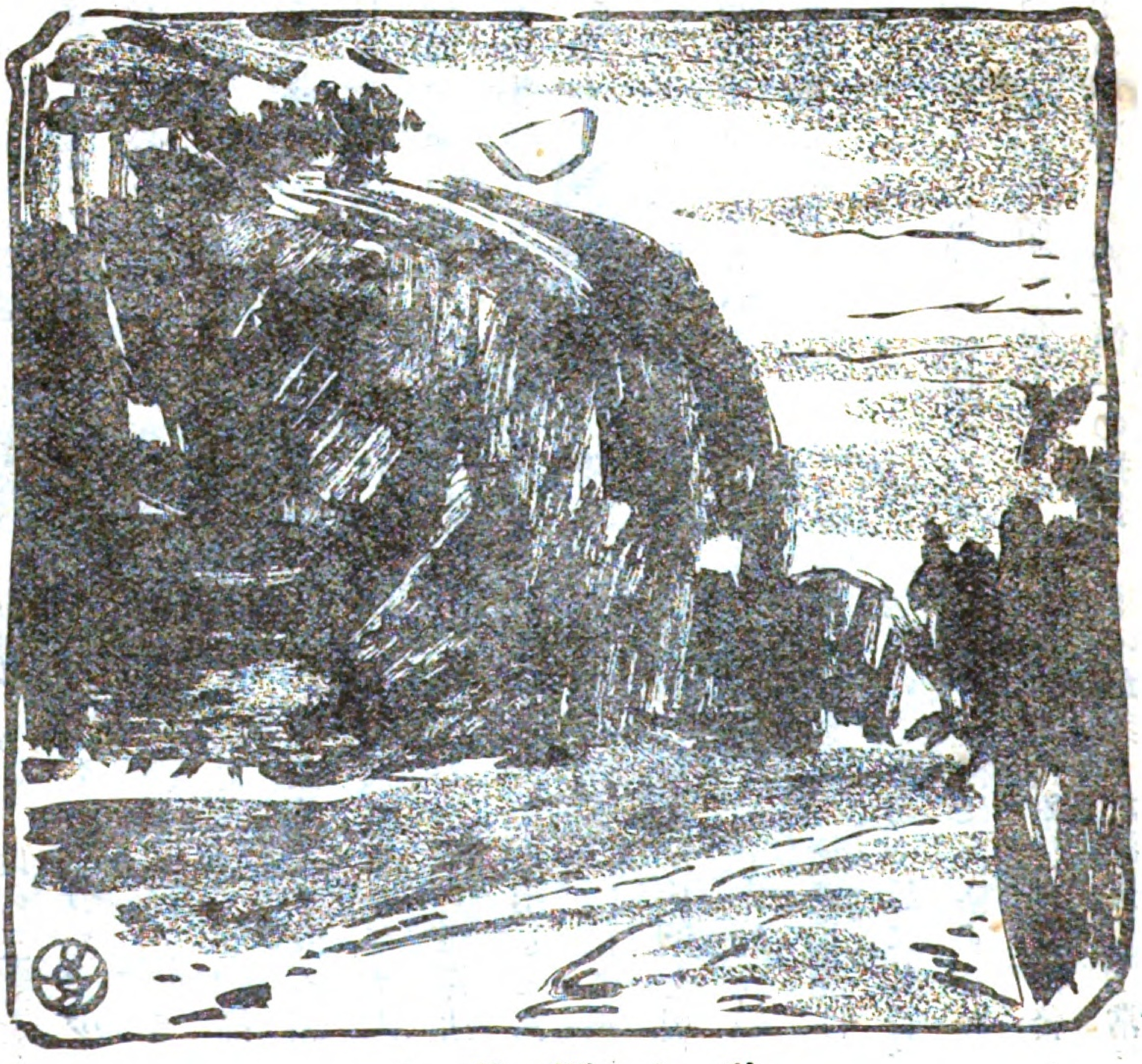
芝公園（下）

二葉生

魔窟の解剖

公園の伏魔殿とは何處なるか、大魔窟とか何處なるか、われは知らねど、世間では紅葉館を伏魔殿なり魔窟なりと云つて居る。それが果して事實であらうか、其判斷になると何とも斷言する事が出來ない。實は紅葉館といふ處を精細に知らぬから、猶更斷案を下すに困難である。而して世間で噂する處を直筆すると、何だか故意に攻撃でもするやうに聞えて誠に心苦しい、われは元來他人を攻撃したり、又秘密を曝露させたりする事は好まないが、社會の裏面に潜伏する惡魔の媚

動に乗せられて、種々の方面に風俗壞亂的の分子が繁殖して、知らず識らず惡いバチルスを蔓延させて居るのを、成るだけ驅除し度と思ふ一念より、意外の怨恨を意外の處に得ることがある。紅葉館は正々堂々たる株式會社、貴顯紳士の集會所、其樣な惡い空氣があの清潔に掃除の届いて居る處にあらう筈もあるまい。有るべき道理も無い筈であるのだ。牡丹餅大の印を眞面目で逆さに捺印するに躊躇しない。之れだけ熱心に辨護の勞を執つて置いたら、如何なる人も此處に稱する處の魔窟なるものを紅葉館とする人もあるまい。然り、紅葉館で無いのである。只だ空氣の作用で、空中樓閣が突然浮いた、其空中樓閣が甚しい魔窟だ、魔窟中に出入するは大魔である小魔である、眉毛に唾をつけて誑されぬ用心が肝要だテ。襤褸の錦といふ物は結構なものであるが、其裏を返して見ると表と雲泥の差がある。空中樓閣も外見からは壯嚴美麗であるが、室内に鬖髿する空氣は妖氣氛々鼻持のならぬものがある。其空氣を吸ふて生息するときは、顏形の鑄型さへ滿足であれば、乍ち天外の乙女



秋十題其八

となり、綾羅の羽衣翩々として白龍氣取りの剛の者を、只だ見る一痕圓に投じ去りて、萬丈の深さに財寶を埋めしめる通力を得るのである。世間の遊蕩子は藝妓の爲めに弗箱を空ふし、娼婦の爲めに倉庫に雨漏りを生ずるが、前者も弗箱を空にせしむるが其業である、後者も倉庫を丸呑みにするが其業であると、金看板を揚げるものに對しては、一旦その罠に罹るゝとも、巧みに其罠を脱しさへすると後腹を痛める憂ひがない。處で、此魔窟に入り天津乙女の腭に兩足を突き込むと、容易に脱し得られるものでなく、黐桶へ落ちた蜻蛉の如く、足にべつたり翅にベッたり、强て脱せんとするには黃金の堤を築いて防禦するより道がないのである。實に魔窟である。高等魔窟である。

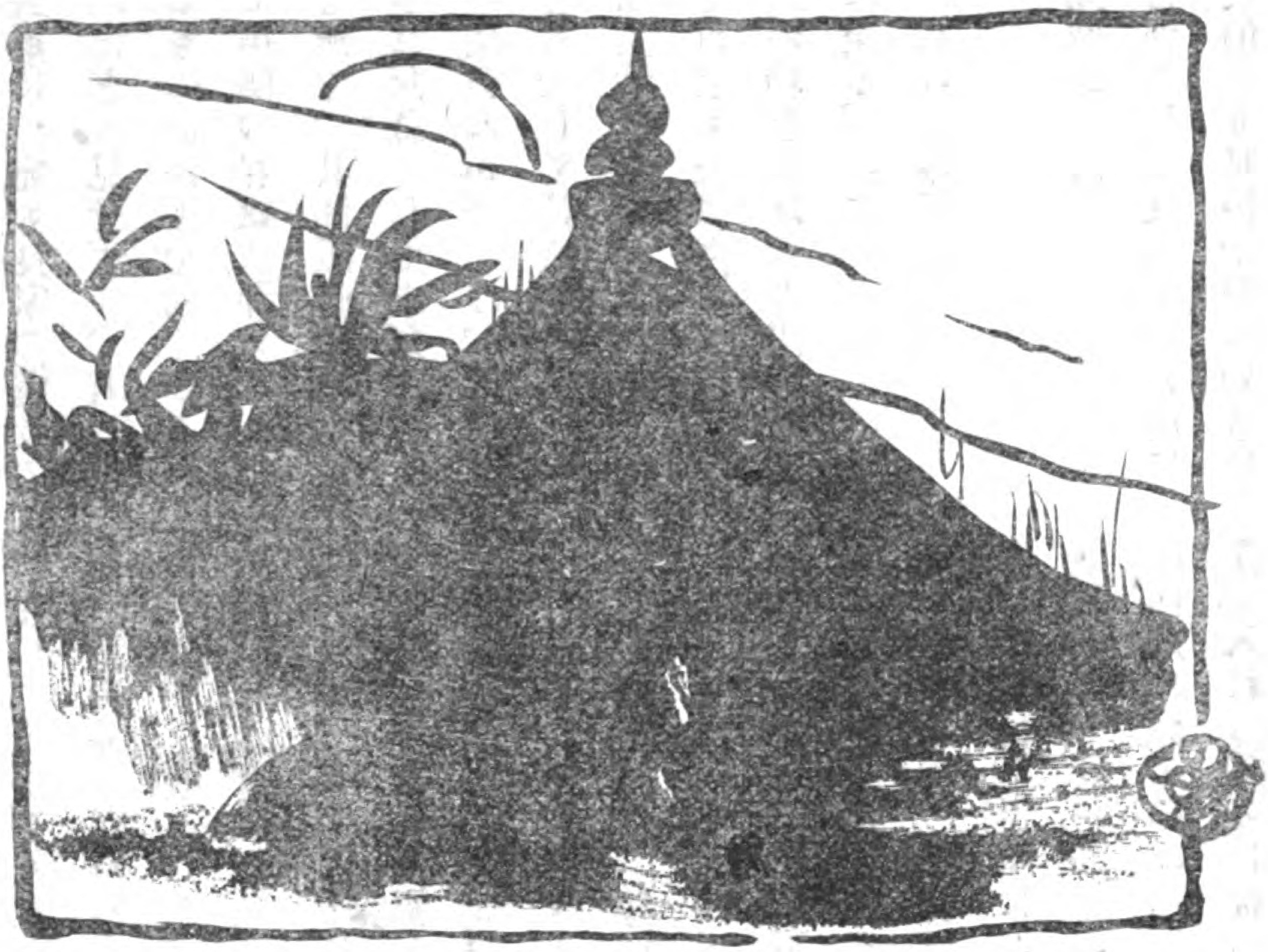
美人魔の資格

空中樓閣中に在る處の美人魔は、如何に撰擇されて此處に來て居るのであらうか、解剖の第一着手として、先づ是等の部分から刀を下さねばならぬ。第一の撰擇が眼鼻だちの勝れたもの、第二は愛嬌あつて柔順ならずとも、京都式越後式の心得あるもの、第三に體質の强健なもの、此の三點を具備すると美人魔たるの資格は稍や完全であつて、少々盛りの過ぎたるものでも歡迎される。次に三點のうちに缺ける處があつても、外面に上品を裝ひ、茶、挿花或は音曲の心得等あるに於ては、又登用——或る點から云へば——され得る機會がある。何れにしても人を魅するだけの天才を備へるを要するのだ。其撰擇法に就ても表面の規則には、隨分嚴格な注文を出してあるが、お勝手元から窃と窺ふと是はしたり、嚴格は正に嚴格であるけれど、嚴格なる方面に於て反比例を現じ、不可思議の現象を映射して居るが、即ち大魔窟の大魔窟たる所以て、到底一樣の凡眼を以て鑑別し能はぬ秘密を、巧妙に包み隱して居るのである。故に其資格なるものにも表裏あつて、表面の資格に合格するもの多々益々あれど、如何にせん裏面の資格を言外に發露して、魔王のお眼鏡に止るものが多くないから、常に斡旋者に不足を感じ居る傾向がある。近者は女に種々の職業が出來て、頭を抑へ

らるゝ事なく獨立獨行し得られるので、甚だ拂底てあるとの口實は唱ふもの丶、其口實は果して是か將た非か、此に至つて只た口を噤むの外なきに至るのてある。是より以上に資格撰擇法を詳細に說くは好まず、强て說かんとする時は、カイゼル髭を捻る檢閱掛の伯父さんが眼を剝き、累を八方に及す恐れがあるから：：。まア言ぬが花よ、知る人ぞ知る。

來者に對する態度

虎穴に入らずんば虎の兒は獲難して、魔窟に捕はれざれば美人魔の本性は知り



（秋十題其九）

難してある。既に魔窟といふ、室內備後疊を敷詰めたる處に、深さ數千丈の大なる陷穽(おとしあな)もある。天目を目八分に捧げ峻儼犯すべからざる間に、毒爪のちら／＼閃くものも見える。是れが空中樓閣中の名物奇々怪々なる光景であつて、兎に角美人魔の資格を有するものどもの、此處に來れる人々に對する無限の馳走振、否な自己の藥籠中へ投げ入れる道行てある。

斯くの如くして自己の藥籠中へ、五尺の軀(むくろ)を自由自在に投ぜさするには、何れも同じ酒色が先づ寄り來れ

る煩惱の亡者を濟度する媒介である。之れに對する彼等は極めて柔順に、極めて嚴肅に、宛も良家の處女の如く、輕躁なる振舞は瓜の垢ほども見せずに、若し戯ふるゝものあれば、不義はお家の御法度を固く守るが如き擧動、頗ぶる巧妙にして揚柳の春風に弄らるゝの姿、靡くでもなく靡かぬでも無く、其間曖昧の言葉態度を以て惱殺せんと試む、事甚だ急にして未だそのものを純金か將た鍍金か鑑定の屆かぬ場合には、方便を設けて一時を逃がる、けれども決して臂鐵砲を喰せ、失望落膽を爲さしめざる策略玄妙にして、何處までも愛嬌を溢さゞる手腕、中々それ者も及ばざるものありと、蓋し習練は常に講究研磨の功を積み、專門的營業者をして後に瞠若せしむるに至る。玆に於て彼等の手腕、即ち魔力の應用を實現せしむるのである。

美人魔と出入客

如上の有樣であるから　此魔窟へ出入する――普通宴席に列する爲めでなく、特別として取扱はるゝ側になるもの――多くの某侯、某伯より某紳士等の如きになると、何れも美人魔との關係がある。彼等が此魔窟に在つて行儀よく上品を衒ひつゝある所以ものは、某侯、某伯等の有爵富有の徒、なにがし紳士それがし紳商の懷中を覘ふこと、掏兒よりも鋭敏なる手段を用ひ、承諾の上に掴取する靈腕を自在に揮ふ爲めであるのだ。見よ、彼等の中にて、所謂美人魔の資格を具備して、魔窟中兎に角幅を利かし居るもの、又は幅を利かすまでに至らずとも、誰さんの名を呼ばるゝ程のものならば、如何に手腕の無きものにても、一人や二人と特別交際を結び、特別の理由の下に特別の重寳なものを占領して居る。其手腕があると同人間に推さるゝものに至つては、四人五人の特別的交際を貴顯紳士と結ばざるは無しだ。其多くを知るは難いとしても、少なくも窟中人物の半數以上は、誰れは何某を生捕れり、誰れは某伯を手玉に取れり位の調査は屆き居る。先頃某新聞にも其一部分の名は相合傘に唄はれたが、それは僅かに數名のみ、何ぞ夫ればかりに止らんやである。深く入れば入るに從つて怖ろしきは此魔窟なりだ。

習練の模様

魔力の修業に二様あり、一は實地の經驗上より得たる智識の應用、一は先輩よりの教授に因つて得たる智識の活用である。前者は所謂古狐的の化粧の者であるから、臨機應變の奇策を弄する事巧みにして、端倪すべからざるものある斯道の卒業生、後者は將に經驗を積みつゝある生徒。われは此談話を聞きしときは信じなかつた、如何に淫風が吹き荒んで居やうとも、如何に世間で云ふ如き魔窟であらうとも、彼等の上品なる、彼等の優美なる折目正しき擧動に馴れたるものが、斯くの如き下層界に於ける妓樓に髣髴たる事をするとは。然れど、われは大に笑はれた、大きな眼球(めだま)は



(秋十題其十)

節穴であるか、社會の裏面に分け入りて消息を聽きつゝある双耳は、人間の印に飾られてあるかと。侮辱されたが殘念さに、多少注意を拂ふと愕然として、開いた口の閉がらぬ事のみが多い。それから綜合して見ると某々等の談必らずしも噓でない事と信を措くに至つた。其狎客に對する魔力の應用を聽くに至つて、ます〳〵娼婦のそれに異ならざる點を發見した。

一日清潔なる或る會合の爲めに、魔窟に足を容れ、便所へ赴きたる折であつた。一隅に密談するものがある。素より立聞して罪を造る意志は更になかつたが、其處を通らざれば便所へ行かれず、然りとて生擒られゐる紳士は隣席に居た人、心なく其場へ髯面を出して彼等を驚かすも心なき業であると、此處柄になきとんだ粹人となつて息を殺し、薄暗き室より出るにも出兼、去るにも去兼て居ると、美人魔は絹のハンカチーフに面を蔽ひつゝ、時々洟汁を啜り……貴郎のやうな方はありません、妾は……いゝえ知りません、そんな事を仰しやいましても、ちやんと知つて居ります る、お〇〇さんへ帶を買つてお上なさると仰しやッたぢやありませんか……いゝえ知つて居りますよ。

怨言百出、その言葉に依つて察すると、這中の消息は畧ぼ推測するに足るものあるにあらずやてある。其嬌態、其艶姿、媚ぶるが如く恨むが如く、餘情綿々として悚然たるものがあつた。而もその美人魔は魔窟中に於ける妙齡なる者、年齡より推すときは經驗も積ぬものたるは明かにして、未だ修業中にあるものゝ如し。それにして猶且つ然り、經驗に富むものに至つては、恐らく是れに幾倍の奇智を弄するかと思ひ、恐怖の念いよ〳〵加はる。

●●●●●● 美人魔の平生

事々物々必らず表裏はあるもの、表なく裏なく圓玉の何れの部面にも變る事なきは、尤も有數である。彼等に於ても多少の表裏はあるべき筈であるが、小笠原式の行儀に仕込まれ、人に對して謹愼更に禮を缺かぬ擧動から察すると、其休息する時でも、朋輩どもとの談話でも、最も優美に温柔であらうと岡目八目では想

像されやう。處が、其想像は見事横へ反れて、優美の化裝を脫いて、生地を無遠慮に剝ぎ出す光景は、又格段の驚きを與へるものがある。いよ〳〵以て魔窟の純帳を切つて落した赤裸々の模様を窺知される。が、即ち彼等の平生！彼等の素行!!

假りに彼等の口吻を借り、彼等の遠慮なく喋々喃々するの狀を、讀者に紹介したならば、左の如き賑やかな消息を漏すことか出來やう。

甲『お松さん、昨日あの方がいらッしてねえ、お樂しみ。………何か驕らないと素破拔くよ。』

乙『あら否ですよ。連中だから駄目だわ。』

甲『さうは拔けさせませんわ。………ねえ皆さんお松さんに驕つて貰はうぢやありませんか。』

丙『さう、いらッしたの。妾ちつとも知らなかつたわ、眞個に後生樂ねえ。』

乙『お梅さん、お前さんだッて………ホヽホヽ、御前と……ねえ、最う何んてせう。』

丙『よしておくんなさいよ。御前は踊の方にばかし身が這入ッてゝ始末に往けないわ、那樣氣の多い方は無くッてよ。』

甲『丁度いゝてせう。餘まりヤレコレされたら困らうと思つて………。お前さんの方か餘ッぽど氣が多いわ。』

丙『お賴み申します、那樣なハイカラは眞ッ平ですわ。お金を出せばこそねえお松さん、些とは優しくしないと冥利が惡いからさ。妾なんかは正直にして居るが、お竹さんを御覽な。岸の御前に那樣にして貰つてながら、ホヽホヽホ、、酷いわねえ。』

甲『そりや駄目、何も此方から惚れて下さいと賴んだのぢやあるまいしねえ、先て何の箇のと獨合點してるンだから、仕方が無からうぢやないか……。』

斯くの如き噂は毎日の事である。て、彼等の特別交際に依つて得る處の收入は、優に中等以上の生活をして猶餘りある程はあると云ふてはないか。其の收入は殘らず彼等の手に置いて貯蓄されて居るか、將た其の身を飾る處の綾羅綿繡となり居るか。彼等の中に於て貯

金を爲して居るもの幾人かある、收入の全部を身を裝ふ爲めに消費するものは幾人かある。然らば其收入は何に消散するであらうか、自分の親へ送るもののみであらうか、決して左樣でない。此處へ來り居るもの丶實家は、必らず斯くの如き貧乏人はないと云ふ事てある。多少は親へ貢ぐものもあらうが、收入の全部を貢ぐものは恐く無い。扨て斯うなると消費の途を探すことが出來ぬ、朋輩同士の交際に要るか、交際費なるものが一日に何圓と消費するとも受取れぬ。驕侈に耽る爲めか、外出も自由ならぬ身て、斯く消費高の多くか丶る理由を認められないではないか。此間には魔所の魔所たる原因を備へて居るのだ、之れを露骨に言換へると、曰く道樂！彼等は之れを浩然の氣を養ふと云ふさうてある。

紅葉館

紅葉館は府下第一の貴顯紳士の集會所てある、明治十四年の新築て、元金地院の境內てあつて古木蔚蒼たる間に、紅梁翼甍の華美を極めた處てある。此處に居る美人は新柳二橋のそれにも勝る、始めて玄關に俥を横付したものは、嗚呼この美人と先づ魂を天外に朝せしめる。廣間は十五疊二間、十八疊一間、別に十疊一間あつて、三間四枚の絹張の襖には楓葉を金銀にて散らし、引手釘隱しに至るまで楓葉ならぬはなく、殊に欄間に描けるもみじ葉は故是眞翁の筆として貴まれてゐる。又二階は十五疊二間、十八疊一間より成る、欄間の透し彫は伏見桃山御殿に在りしものと云ふ。此館に就ての毀譽褒貶の如きは、言はずもがなであらう。此處にある五十餘人の美人は、常に何事をか爲しつ丶ある、酌をするもの、給仕をするもの、舞を舞ふもの、是れ表面か裏面かわれは知らぬのだ。嗚呼紅葉館！嗚呼紅葉館の女ども!!!

（そはり）

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲御氣を附け遊はせ　　日本橋　尻馬

此頃の二〇三高地髷とか廂髮とか云ふ髮は、前髮に許り意匠を凝らして

後ろはぐる〳〵卷の拳固卷、いやはや滅茶苦茶だ、鼻の先にさへ白粉を附ければ耳の後ろは垢で黒く成て居ても美人になれると思てる人は、兎に角、少しは男にても惚れて貰ひたい位の考を持る女は、ちと後ろの方にも氣を附けて今少し見られる樣なものにしたら如何です。

▲のろけちん　荏原郡　自稱色男

下世話に惚け賃を出せと云ふ事を云ふが、之は道德上からも、法律上からも一點の難ずべき箇所のない合理的の事である、自分一人では詰らないので必ず他人を捕へて惚けを云ては他人の迷惑をも顧みず、いゝ氣に成て獨て樂んで居る、即ち自分が快樂を求めんか爲めに他人を使用したのだから、使用料として若干の報酬、即ち又の名のろけちんを出すのは正當の理である。

▲上等が間拔け　本鄉　拔作

あの人の服裝は下品だとか、趣味が低いとか云はれる人のは大低五分の隙もないのが多く、それに反して趣味が高尙だとか、嗜好が優れて居るとか云ふ人の服裝は氣か利かないで、釣合はないで、間が拔けてるのが多い、之等が所謂氣は利いてるが間が拔けてると云ふのだらふ。

▲侮辱的の賞賛　神田區　ピント生

大抵の人が他人の寫眞を賞めるに善く寫てると云ふが、之は大に其人を侮辱してるのではあるまいか、善く寫てる即ち本人よりは寫眞の方がよいといふ譯で、語を換ゆれば君は寫眞よりまづい顔だと云ふ意味になる、かゝる侮辱的の言を眞面目に他人へ云ふ奴も云ふ奴、賞められて嬉しがつてる奴も奴だ。



汽車百景論

浩々歌客

われ石を愛す、初めて遊ぶ處にては必ずその地の片石を拾ひて後の紀念とす、一盆の小煙霞、此石とも磊塊として自然の面影をしのばしむ。

月華蟲聲の石山、曉風殘月の明石、嚴島の蟹跡波痕、博多灣頭名島の晴沙貝石、辨慶岩の磯の石は、三角灣の風景を留め、呼猿洞の苔の石は、寒霞西溪の奇趣を存す、皆わが年前の遊蹤を縮めたるもの、感興の印象自から深し。

此等自然の小照に對する毎に、われは旅行の樂を思ふ、必ずしも遠きを欲せず、また必ずしも淹留を欲せず、況して名勝舊跡の有無をや。

避暑避寒に別荘を有し、樂まんために旅行し得る人はさて措き、忙しき活動の巷よりまた活動の巷に至らんとて旅行する人にありては、旅行は或は一種の苦痛たる場合無きにあらず、われはかゝる旅行者のために、汽車百景論を唱へんと欲す。

名は實の符號なり、しかも名所がその實の美なるよりも寧ろ名の美のために人を惹くこと多し、こは具象の美が抽象に依りて更に美を添ふるためならんか、松島の美は東北地方にありてその勝を擅にし天下に冠たるの名を得たり、天下松島より美なる所、必ずしも無きに非ざらんも、なほ松島はその名に於て何れの相似たる處にも優れたり、近江八景も、今は堅田に落雁見えず、粟津の晴嵐、矢橋の歸帆の如き、江山は依然たるも景物は自から變じ、自然の名勝といはんよりは、古蹟と名けん方適當となりて、風景の美なる處は、寧ろ八景外に見るべきもの少からずなれるも、琵琶湖上の風光は八景なほ獨り美名を存して人心を惹き、他は無名の英雄とかくれて注意せらるゝこと少し、此等の理由は、主として其實の符號を有すると有せざるとに存し、隨つて其地に人事を加へざるが爲に、所謂歴史美無きに由る、われ年前、山陽九州兩鐵道を通じ直行して肥の三角灣頭に至りし時、長途の車中、殊に此感を切にしたり、そは車中より見たる風景の美眞に人を動かすの實ありて、わが所謂符號たる定名無きがために、自然美を抽象してこれを人心に印せしむる弱きこと是なり。

例せば山陽に於ける玖波邊の煙嵐、大戸の瀬戸の激潮尾道邊の海岸を初め、田園村落に於ても或は一軒茅屋或は孤松或は長林、相配せる美の一寰區乏しからず、九州に於ける大村灣、諫早の隧道、千代の松原、名島の鐵橋、寶滿山邊の一望の櫨紅葉の如き、阪鶴に於ける生瀬、三田間なる武庫川流の絶壁奇岩樹容岩姿の美觀の如き、其他南海線に於ても關西線に於ても、美景

の實ありて定名の美無きの地決して少からず、此等の名勝は、唯だ旅客の眉目に、刹那の美を映ずるに止まりて、未だ一箇符號を有する名勝として遇せられざるがために、多くは雲煙過眼美觀を困臥の夢中に逸し去り、随つて旅行の樂を享くべしとて受けざるの憾あり。

汽車百景論は即ち此等の好風光に名を命ずるに在り名を命じて人の注意を惹くに在り、人の注意を惹いて觀賞せしめ其車中の羇心を慰むるに在り、旅行の快樂を增加するに在り、しかもまた自然の福音を人事の上に宣傳すべき一法ならずや。

鐵道會社は須らくその沿道の風景に對し相副ふべき符號(即ち名)を附し、之を旅客に標榜することなほ現今諸驛に於ける名勝舊蹟の案內標に同じくすべし、旅客は須らく各注意して此等名勝を發見し、自然のためにその美を宣傳すべし、蓋し鐵道は自然の風光を破壞すとの汚名曾てこれあり、若し汽車百景論にして行はれんか、此汚名はやがて轉じて自然保護の美名を負ふべきなり。

汽車百景論にして成ることあらんか、なほその觀月列車回進列車の如く、足地を踏まず、單に汽車中にして自然の美景に、一切の塵事を忘るゝの便もまた生ぜん、獨り活動の巷より活動の巷に往復する旅行者のためのみならむや。汽車を運用する當事者また大に利せん。

以上はわが曾て人に對して說きたる所なり、此頃事ありて東行し、歸途靜岡夜半發の列車に歸阪の途上、常にはあまり江山の美を感ぜざりし江洲、米原驛邊に於て曉の風景を觀取するに會し、黃雲十里の村、遠近山影の出沒等が瞬烟搖曳して或は生じ或は消ゆるの間に自然の風光を活描し、變幻の美をして、此の如き處も此の如き時には、此の如き妙趣奇景を呈せしめ、われをして殊にこれが一瞬に風光を變化さする汽車中の自然美に對する特色なるを思はしめたり。

さればわが汽車百景論は、平凡の景も時と場合とに依りて美となるの理由を添へて、更に生面を拓くべき

か、今はなほ仔細の觀察に乏しきも、江湖若し同好の士あらんには、まさにわが感ぜし所を一層啓發するものあるべきなり、時まさに紅葉黃花の節に會す、記して有志の士に質す。（十月二十一日）

藝名を改めよ

二尺草野人

世の人は多く知らないのだらう、將た知つてゐてもいふ價値のない事と思つてゐるのか、今まで誰もいつた者もないやうだ。今市中の塵の中に讀るビラを見る、その藝名の苦々しいのが多く當今の講釋師及び落語家の藝名だ、第一彼れ等は昔の文學家の名を、洒蛙々々しく平氣で名乘つて、得意としてゐる輩が多いのは、如何にも文界の爲に悲しむべき事ではあるまいか、苟しくも文士である、たとへ現に生存してゐないにしても、甚だもつて不埒なことだ。左に古の文士の名を圖々しくも名乘つてゐる輩の眼にとまつたのを擧げれば

寳井馬琴、松園舍京傳、常陸坊京山、

以上は講談師で

柳亭左樂、燕六、翁家三馬、

が落語家だ。

かういふ輩がまだ澤山ゐるのは甚だ苦々しい事であらうと思ふ。

地體講談師や落語家などといふ者は、自己を顧みないから矢鱈な藝名をなんぞ用ゐて平氣でゐるのだ。彼等は何と心得て京傳、馬琴、三馬、柳亭、京山などの名を犯してゐるのであるか、思ふにこれは彼れ等が心づかないからであらう。京傳といふ人が居たか、馬琴と呼ぶ人が何んてあつたか、三馬と云つた人がゐたやら、柳亭と名乘つてゐた人が居たのを知らぬといへば恕すべしてあるが、甚だうかつな事と云はねばならない。彼れ等講談師や落語家なんといふ者は、知らぬと云ふことはない、たとへば何を話しても、まるで見て來たやうな事を喋つて、己れ獨りだと云つたやうな顏をしてゐる。その者等が馬琴や三馬、京傳、柳亭などを知らぬことはあるまい、然らば知り乍らその人の今居ないからと云つて名乘つてゐるか、若しさうであれば不都合も甚だしい事である。馬琴の八犬傳及び弓張月、京傳の稻妻表紙、本朝醉菩薩、三馬の浮世床、浮世風呂、柳亭の田舍源氏、京山の鶴鷄八繭、梅若松若竹取物語、といへば大方は頷くものである、まして八犬傳、田舍源氏といへば知らぬ者は無いと云つてもよいくらゐであるのに、その作者の誰人たるを知らないとは云へまい、必ず知つてゐるのだ、知つて居乍ら名乘つてゐるは不穩當なことと云はねばならぬ。

それも講談師落語家が一人とか二人とかならまだしもだが、都下何百と

いふ多くの頭數の中で馬琴も知らず三馬も知らないといふ事はある筈がないのに、一人として其の非なるを注意しないのが不思議だ。

尙女義太夫には竹本朗洲と名乘る輩があり、更に子女の一笑を迎ふべき馬鹿〳〵しい二和歌界に鶴屋朗十郎といふ輩もゐる。

要するにかゝる手合は、自己の藝の拙劣なるをも恥ぢずして、嗚呼がましくも徒らに名ばかりの有名な人のを犯してゐるのである。

かへす〳〵もその根性の淺間しいのは哀れむべく、その腹の圖々しいのは憎むべく、其の慮(おもんぱか)りの無きは笑ふべきである。

その他尙古人であつて不幸にして其の名を今日まで遺さなかつた人もある、その人々の名を用ひてゐるのは恕すべしてあらう、けれど歷然として今日までその名の殘つてゐる馬琴、京傳、三馬、柳亭、京山などの名を用ふるのは不都合である。

多少の心あるものはよろしく顧みて、その藝名を改めるところを望むのである。

新刊批評

▲吾輩は猫である

夏目漱石著
大倉服部書店發行

今日に於て事々しく此書を紹介するのは野暮の骨頂である。今年一月のホトヽギス誌上に初めてあらはれてから、月を重ぬること十、回を重ぬること五、(第六回は已に十月のホトヽギスに出た)苟も文學を談ずるもの丶話頭に上らざることなき此有名の猫を捉へて珍らし相に云々するのは餘程時勢に後れた人のすることゝ思ふ。今日若し「吾輩は猫である」を知らぬものあらば確かに一種の耻辱である。若し外國などであつたら交際社會に入る資格がないと目せらるゝに違ひない。で吾輩は其內容、其價値、其滑稽、其諷刺、其趣味、其文字等の分析的批評等に就ては今は語ることを避けんと欲する。何となれば多數の文學好の人はホトヽギス誌上で一讀、再讀、熟讀したことを信ずるからである。たゞ一言したいのは一冊の本に出來上つて見ると又格別に美術的趣味の加はつたことである。不折の奇拔なる挿畫六葉、五葉の斬新なる意匠畫數種已に美術的趣味あるものゝ目を奪ふに足るのに加へて、白き鳥子の表紙に金字の標題朱色の猫。ギルト、トップで縁はわざと截らず、中は行間明き天地明いて非常に讀み易く、飾て奇麗で、見て心地よい。若し「吾輩は猫である」を熟讀翫味、よき句を諳んじ、面白い文を記憶して居る人であつても此書は買ふべき充分の價値あることを信ずる。況んや未だ此書の內容さへ充分に知らぬ人にあつては其の懷具稱を質に入れても是非一本を購はんことを勸告する。(定價九十五錢。)

▲間一髮

須藤南翠著
金尾文明堂發行

十年間小說に筆を絕てる南翠氏が故情尙忘じ難しとて十年後の今日再び筆をとつて書けるは此書である。吾人は忌憚なくいふ。此小說には文學的價値はない、又何となく時勢に後れて居る。其敍述は古風で其趣向は

陳腐て、到底新趣味新思想を追求する人の渇望を充たすに足らぬ、然しながら世の需要は必ずしも天才の傑作に限る譯てはない。講談が甚だ盛んに行はれ、弦齊の小說が未だに賣れ行がよい。蓋し此小說も弦齋を喜ぶ讀者には或は喜ばれるかも知れぬ。內容は右の如くてあるが製本は實に奇麗だ、殊に表紙は靑色のクロースに白色の絹地をはり、金の緣をとり金文字の標題を書けるなど製本は實に立派なものてある。婦女子の讀み物として、婦女子の床飾りとしては購ふに足る價値がある。(定價七十五錢、哲生)

▲教訓歌集

大江榮人編
國谷書店發行

目次を神祇、國體、敎育、文學、武勇、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、修身、志操の十二項に分ち、遠くは紀記、萬葉より近くは現在の人まで專ら德敎に益あるものを載錄せり、明倫歌集の稍々進步したるものなり。中には純文學的の歌少からず、讀んで面白きものも多けれど、教訓歌集といふ名のために却て人に忌憚せらるゝ傾あるは惜しむべし。(定價四十五錢)

▲スマイルス著勤儉論

若月文學士譯述
內外出版協會發行

スマイルス著勤儉論の一部を譯述したるものなり。原著の價値は今更喋々するを須ゐず、此書一度び出てゝ英國の勤儉貯蓄の法令發布せられたる如くなれば、我邦人にとつても實に一大教訓となるを疑はず、譯文亦流麗にして晦澁の跟少なきは喜ぶべし。嚮きには職分論の譯あり、今又此書の發行を見る、譯者及び發行者の効績少からざるを覺ゆ。(定價四十錢)

▲國文學全史(平安朝編)

文學士　藤岡作太郞著
東京　開成館發行

國文學史と云はんよりは寧ろ國文學書解題といふべく、尙適切にいへば國文學書の評論といふを當れりとす、近年日本文學史の發兌さるゝもの頗る數多きが如し、然も槪ね文學史の骨を組み立てたるのみ、いまだ血と肉とを有するものなし、本書は實に此血と肉とを有する空前の文學史といふべし、其研究の如何に精細を極むるやは、單に平安朝編のみにて他の日本文學全史と同じ以上の紙數を有するにても知るを得べし、吾人は此書を見て初めて稍完全に近き文學史の我國に出來すべきを思ひ、著者に向つて多大の感謝を表すもの也、而も鎌倉、室町を經て德川時代に至り、更らに明治現代に及ばんには尙數十年の研究を費さゞるべからざらん、然らば此大事業到底藤岡氏一人に委すべからず、何人か氏と研究を共にし氏と力を併せて此大事業の完成を速かならしむる人なかるべからず、吾人は斯の如く學に志ある人士の續々輩出せんことを希望し、併せて藤岡氏が第二の研究の一日も早く世に出てんことを希望して止まず、二東三文の書籍の出販多き折柄、吾人は此書の如き價値ある著作を世に紹介するを光榮とす、定價二圓五十錢、表紙は中村不折の彩筆、釘裝頗る美麗なり。(覺生)

▲紺風流線

▲種の起原

右二書の批評は頁の都合により次號に讓す

渡邊修二郎撰

英語作文便覽

定價金五拾錢＊郵稅四錢

英米文學大家の手に成れる適切なる材料を選擇し簡明にして親切なる文章の軌範とすべき妙文を纂輯し解說を加へ難語難句を註釋し學ぶに更も困難なるイヂオムを詳解しシヤルとウイルの別幷に冠詞の用法を示し普通に誤り易き文語を擧げて解答案を揭げ試驗問題となるべき文題及び其作例を載するなど英語作文の秘訣皆此書に在り

●初學獨習英語速成 定價四拾錢 郵稅四錢

●英和書翰文例 價參拾五錢 郵稅四錢

●英和日用會話 定價四拾錢 郵稅四錢

家庭之友

定價郵稅共金六錢一年分十二冊前金六拾錢

第三卷第七號

日本の家庭に對する希望
(其一)ハリス博士
(其二)ウエストン孃
(其三)グリーン夫人

三笠を弔ふ(英詩) ハリス博士夫人

小兒の食物に就いて 侍醫 加藤照麿氏

西洋戸棚(口繪)○家屋間取圖○家政育兒問答○諸國名物料理○海邊の生活○膽振の農園外數項

故陸軍步兵中尉功四級 工學士市川紀元二著

應用骨相學

(定價金廿五錢郵稅四錢)

骨相學を人事に應用するの道を說きて親切丁寧を極め且つ多くの圖書を挿入して言の及はざる所を補ふ職業選擇配偶選擇生存競爭より催眠術兒童教育文學繪畫精神矯正法に及ぶ著者は此研究の結果が己の戰死して世に傳はらざらんことを恐れ出征に臨みて其出版を本會に遺囑せられたるもの也著者が勳功赫々奥司令官より全軍に布告せらるゝの名譽を得られたる事は天下萬衆の夙に能く知る所也

博士スマイルス原著 文學士若月保治譯述

勤儉論

定價四拾錢郵稅四錢

勤儉貯蓄の必要を說きて實例を擧げ方法を示し一家經濟の秘訣に及ぶ此書發行以來英國貯蓄銀行の預金額爲めに著しく增加せり戰後國民の必讀書なり

同じ著譯者の 職分論(全四冊) 定價郵稅共一圓五十錢

(販元) 東京本鄉駒込西片町十番地 內外出版協會

慰問號

卯杖

文學―俳諧―美術

社會―風俗―家庭

第三卷第十號

十月十五日發行定價金二十六錢

本號は我征露の軍に從ひて傷を負ひ或は病を得て陸海諸病院の床上に沈吟せる陸海軍人たる同胞の慰籍たらんとし特に紙數を平素に倍加し極めて無邪氣なる內容を以て世に現はれたり、本號は普通挿畫の外軍人としての我が同志數人の肖像を載せたり本號に掲載すべき目次左の如し

●武人の文、文人の武●心の闇●俳人長所短所●仲秋の夜●麥穗がくれ●鈴虫●遊女●星布女短評●俳諧浮世床●片輪車●俳諧落し話●旅行中の馬●松尾芭蕉●餘情と理屈●漁村の家庭●抱一とよし原●卯杖とホトトギス●蝎●花屋日記は僞書に非ざるか●詩歟非歟●劍●青木大機關士●戰爭と謠曲●馬鹿噺と樂隊●伺ひ石●にごし釣●靈犬バーリー●電光一閃●自衞夜聲●蕪村と一茶●硯賦●隨筆淺草海苔●月夜よし●陣中の名月●慰問●責自適●旅日記●無題錄●植物園の秋●薄●小園日記●可都里●芭蕉句集講義●俳諧人名辭書●ふしの一夜●生命から／＼記●今昔の感●無名草●其他三十餘篇

本號の執筆者は秋聲會同人硯友社一派及び十千万堂門の諸名家を始めとし新進青年文士等約八十家今一々其名を署するの餘地なし

本號を發刊するに及び我同人は勿論平素本誌を輔翼せらるゝ文界の諸名家は此擧を賛して文に話に說に書に筆を本號に執られたり、其如何に名士を網羅したる、如何に趣味津々たる、如何に材料の淸新なるかは一度本誌を手にして其實を證せられたし

慰問號

慰問號

慰問號

東京市神田區錦町壹丁目二番地
發行所　秋聲會出版部

九卷二號（十一月十日發行）要目

賣家　坂本四方太
蠟燭　高濱虛子
四夜の月　同
不平　野村傳四
老梅居雜話　內藤鳴雪
蕪村遺稿講義　鳴雪、碧梧桐、虛子

秋の園生（ペン畫、口繪）　中村不折
鹿（三度刷、裏繪）　淺井默語
ヴァイオリン、尺八、飴屋　谷朱冠
星と古井、公園の楓、芭蕉と雨蛙　庄野宗之助
其他寫生文、募集句、地方俳句界等

定價拾五錢　郵稅一錢

東京市麴町區富士見町四丁目八番地
俳書堂雜誌部

▲定價改正

▲但し十月卅一日迄に前金拂込の讀者に對しては前金の切れる迄從前の定價表に從ふ

▲尚本二百號は倍號につき御拂込の前金は一ヶ月分繰り上げ候事

中央公論　定價表

一冊	前金拾五錢	郵稅共
六冊	前金八拾五錢	
十二冊	前金壹圓六十五錢	

●但海外（淸國は本邦郵便局所在地を除く）は一部稅六錢を要す

中央公論　廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

▲本號定價三十錢

郵稅共

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵券代用の場合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の塲合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

京橋銀座四　東海堂

本鄕四丁目　文明堂

明治三十八年十月廿七日印刷
明治三十八年十一月一日發行

發行兼編輯人　武田[illegible]松
印刷人　淸水金右衞門

發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市本鄕區駒込西片町十番地

印刷所　秀英舍第一工塲
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



MADE IN JAPAN